

浜松市民文芸

61



浜 松 市

平成28年度 浜松文芸館の催事と講座

(内容等については一部変更されることがありますので、浜松文芸館にご確認ください)

●講座

講座名	講師	開催時	受講料円
文学講座(春) -『雨月物語』を読む-	松平和久	4/6,13,20,27, 5/4,11 毎週水曜日(全6回) 9:30～11:30	3000 <small>(別途テキスト代300+税)</small>
文章教室Ⅰ -文章の書き方を書きながら学びます-(大人向け)	たかはたけいこ	4/17,5/15,6/19,7/17 第3日曜日(全4回) ①13:00～14:30 ②15:00～16:30	2000
川柳入門講座 -あなたも川柳を始めてみませんか-	今田久帆	4/24, 5/22,6/26,7/24,8/28 第4日曜日(全5回) 9:30～11:30	2500
短歌入門講座 -あなたも短歌を始めてみませんか-	村松建彦	6/4,11,18,25,7/2 毎週土曜日(全5回) 13:30～15:30	2500
俳句入門講座(前期) -あなたも俳句を始めてみませんか-	九鬼あきゑ	6/11,18,7/2,9,16 毎週土曜日(6/25除く全5回) 9:30～11:30	2500
声であらわす文学作品 -短詩から随筆まで-	堤腰和余	6/13,7/11,8/9,12,10/10,11/14 第2月曜日(全6回)	3000 10:00～12:00
夏休み絵本づくり講座 -簡単にできる絵本- 3～6年生対象 付添不要	井口恭子	7/30(土)	500 13:30～16:00
10歳からの少年少女俳句入門講座 4～6年生対象 付添不要	九鬼あきゑ	8/2(火),4(木),5(金) (全3回)	500 10:00～11:30
文章教室Ⅱ -文章の書き方を書きながら学びます-(大人向け)	たかはたけいこ	8/21,9/18,10/16,11/20 第3日曜日(全4回) ①13:00～14:30 ②15:00～16:30	2000
文学講座(秋) -『雨月物語』を読む-	松平和久	9/2,9,16,23,30,10/7 毎週金曜日(全6回) 9:30～11:30	3000 <small>(別途テキスト代800+税)</small>
俳句入門講座(後期) -あなたも俳句を始めてみませんか-	鈴木裕之	9/10,17,24,10/1,8 毎週土曜日(全5回) 13:30～15:30	2500
文学と歴史講座 -樋口一葉の世界-	折金紀男	9/11,18,25,10/2,9 毎週日曜日(全5回) 9:30～11:30	2500
自由律俳句入門講座 -放哉・山頭火の世界-	鶴田育久	10/5,12,19 毎週水曜日(全3回) 9:30～11:30	1500
文章教室Ⅲ -文章の書き方を書きながら学びます-(大人向け)	たかはたけいこ	12/18,1/15,2/19,3/19 第3日曜日(全4回) ①13:00～14:30 ②15:00～16:30	2000

●収蔵展 企画展

企画展「文と絵で伝える地域の歴史-浜松今昔物語-」 2月1日(月)～4月24日(日)

収蔵展「浜松ゆかりの文人たち」 5月1日(日)～7月24日(日)

以降については計画中

●講演会

小説に描かれた井伊直虎-梓澤要「女にこそあれ次郎法師」- 和久田雅之

8月28日(日)13:30～15:30 500円

●朗読会

「樋口一葉を読む」 堤腰和余

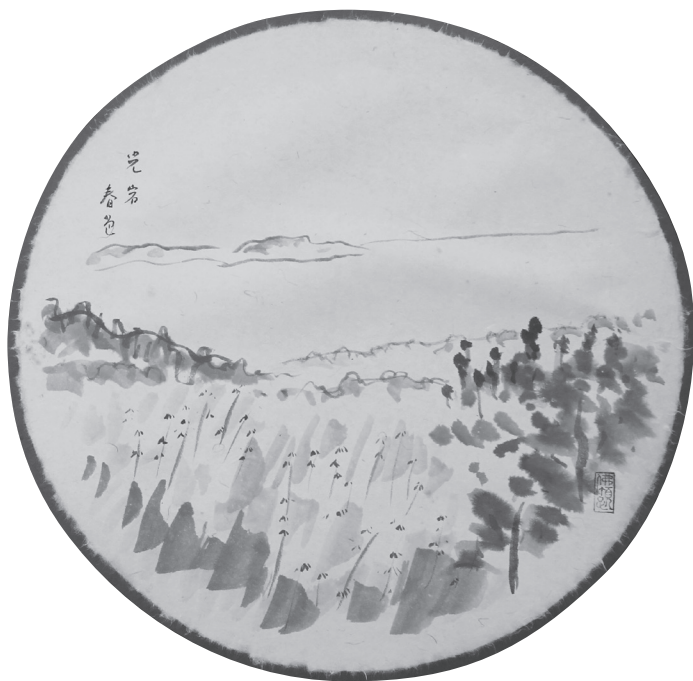
10月23日(日)14:00～15:00 500円

「賢治さんを読む」 やたべ駿

12月25日(日)14:00～15:30 500円

浜松市民文芸

第 61 集



(山根七郎治 画)

浜 松 市

川柳	自由律俳句	定型俳句	短歌	詩歌	随筆	評論	児童文学	小説	選者
今田久帆	鶴田育久	九鬼あきゑ	村木道彦	埋田昇二	たかはたけいこ	中西美沙子	那須田稔	柳本宗春	竹腰幸夫

☆ 表紙絵

大場 晴 奈

平成27年度 浜松市芸術祭「第63回市展」

芸術祭大賞受賞作品 絵画部門

題「しじま」

タイトル「しじま」にあるように、静かな空間をイメージして制作しました。

高校の卒業制作であるこの作品は、私が三年間制作してきた作品を、現在の自分と共に画面に収めることで集大成を表しています。

「浜松市民文芸」第61集 市民文芸賞受賞者

部門	受賞者
小 説 児童文学 随 評 筆 論 詩 短 歌	馬場純平 白井聖郎 金指芙美代 宮島ひでこ 生崎美雪 磯貝心進 山根詠子 白井聖郎 犬塚賢治郎 竹内としみ 花信栖 白井聖郎 内山文久 岡部政治 石原新一郎 石井泰子 高畑かづ子 川島恵子
部門	受賞者
定 型 俳 句 自 由 律 俳 句 川 柳	袴田吉一 杉本たつ子 宮澤秀子 石橋朝子 吉野民子 佐藤政晴 右崎容子 鈴木由紀子 澤木幸子 辻村榮子 佐藤悦子 周東利信 伊藤有美 山田とく子 堀内まさ江 伊熊保子 伊熊靖子

目次

小説

市民文芸賞

海の幸	馬場 純平	10
貴い陽のしたで	白井 聖郎	27

入選

顔	水野 昭	45
いつかきつといい時がくる	恩田 恭子	61
住吉の森語り	鈴木 啓之	79
みかんの花の咲く頃には	名倉 民子	93
先生の辞書	鈴木 文孝	108

選評

選評	竹腰 幸夫	124
選評	柳本 宗春	125

児童文学

市民文芸賞

虹子さんのまわりはみんなハッピー	金指美美代	126
山のおまつり	宮島ひでこ	134
幸せのくるところ	生崎 美雪	142

入選

幻の楼閣	橘 すす音	152
選評	那須田 稔	163

評論

市民文芸賞

挫折に学ぶ	磯貝 心進	164
-------	-------	-----

入選

キリシタン大名 高山右近	中谷 節三	171
日本国憲法について	滝澤 幸一	179
選評	中西美沙子	188

随筆

市民文芸賞

祖母と電話とカープ	山根 詠子	190
貴い陽のしたで	白井 聖郎	192
縁側	犬塚賢治郎	194

入選

覆水盆に返らず	西尾 わさ	195
二足のわらじ	周東 利信	197
愛する自転車	サルルンカムイ	199
バスに乗って	吉岡 良子	200
母の一張羅	中津川久子	202
朝顔との葛藤	白石 清亮	203
生きてさえいれば	松田 健	206
鉄の恩義	一木 一郎	208
私と夫とパソコン通信	田中喜栄子	210
雀時刻(すずめどき)	のぶ 恵	212
選評	たかはたけいこ	214

詩

市民文芸賞

音連れ……………竹下としみ……………
 悲しみを閉じこめて……………花 信 栖……………
 貴い陽のしたで……………白井 聖郎……………
 218 217 216

入選

戦国夢街道に吹く風……………石黒 實……………220
 悲しみは空に喜びは土に……………遠藤 ゆき……………221
 留守番電話……………大庭 拓郎……………222
 性格の分類……………高柳 龍夫……………223
 本のなかの本……………竹原 孝子……………224
 響く……………橘 すぐ音……………225
 弟……………長浜フミ子……………226
 輪廻転生……………早川奈美江……………227
 綿虫……………松本 重延……………227
 SHADE(陰)……………水川亜輝羅……………228
 選評……………埋田 昇二……………230

短歌

市民文芸賞

内山 文久……………岡部 政治……………石原新一郎……………
 石井 泰子……………高畑かづ子……………川島 恵子……………

入選

飯尾八重子……………伊ヶ崎智世枝……………岩城 悦子……………
 鵜原 伸代……………太田 静子……………恩田 利子……………

恩田 恭子……………河合 和子……………柴田千賀子……………
 清水 紫津……………新谷三江水……………杉山 勝治……………
 鈴木 壽子……………鈴木 芳子……………高橋 紘一……………
 高橋 幸……………滝澤 幸一……………橘 すぐ音……………
 知久とみゑ……………土屋香代子……………寺田 久子……………
 中村 淳子……………中村 弘枝……………中山 和……………
 堀内 独行……………松浦ふみ子……………松島 良一……………
 宮澤 秀子……………八木 若代……………柳 光子……………
 山本 勝彦……………米澤寿鶴子……………赤堀 進……………
 渥美 進……………あひる……………安藤 圭子……………
 飯田 裕子……………伊藤 友治……………伊藤 美代……………
 井浪マリエ……………犬塚賢治郎……………今駒 隆次……………
 内田 一郎……………青海 まち……………太田あき子……………
 太田 初恵……………大庭 拓郎……………小笠原靖子……………
 岡本 久栄……………織田 恵子……………加賀の人……………
 花 信 栖……………河合 秀雄……………川上 とよ……………
 川島百合子……………倉見 藤子……………幸田健太郎……………
 近藤 茂樹……………寒風澤 毅……………清水 孜郎……………
 白井 忠宏……………白井 聖郎……………鈴木 和子……………
 鈴木 利定……………高山 紀恵……………橋 蜻蛉……………
 手塚 みよ……………遠山 長春……………鶴多 健……………
 戸田田鶴子……………富永さか江……………長浜フミ子……………
 新田えいみ……………野中 睦己……………袴田 成子……………
 橋本まさや……………浜 美乃里……………坂東 茂子……………
 飛天 女……………平井 要子……………平野 旭……………

定型俳句

市民文芸賞

選評

和久田俊文
.....
村木 道彦.....
246

梅原 栄子	伊藤 久子	池谷 和廣	鈴木 利久	松本 賢蔵	渡辺きぬ代	佐久間優子	岩城 悦子	辻村 榮市	右崎 容子	石橋 朝子	袴田 吉一	袴田 吉一	石橋 朝子	右崎 容子	辻村 榮市	袴田 吉一	石橋 朝子	右崎 容子	辻村 榮市
大田 勝子	岩崎 陽子	石川 染	安立由美子	池谷 俊枝	梶村 初代	伊藤サト江	伊藤 斉	山本ふさ子	鈴木由紀子	吉野 民子	杉本たつ子	杉本たつ子	吉野 民子	鈴木由紀子	宮澤 秀子	宮澤 秀子	佐藤 政晴	澤木 幸子	澤木 幸子
太田沙知子	岩崎 芳子	伊藤 倭夫	池田 智子	伴 周子	柴田ミドリ	中村 瑞枝	中津川久子	清水よ志江	澤木 幸子	佐藤 政晴	宮澤 秀子	宮澤 秀子	佐藤 政晴	澤木 幸子	澤木 幸子	澤木 幸子	佐藤 政晴	澤木 幸子	澤木 幸子

池谷 静子	飯尾八重子	渥美 進	和田 有彦	横田 照	山崎 暁子	水川 放鮎	堀川千代子	平野 道子	能勢亜沙里	西尾 わさ	戸田田鶴子	寺田 久子	土屋香代子	田中ハツエ	竹平 和枝	高橋 紘一	鈴木 千寿	新村ふみ子	佐野 朋旦	倉見 藤子	加茂 桂一	金田 みき	小楠恵津子	大村千鶴子
石井 泰子	飯田 裕子	あ ひ る	赤堀 進	和久田雅広	山田 知明	森 明子	松本憲資郎	藤田 節子	浜 美乃里	二橋 記久	鳥井美代子	天 竜 子	坪井いち子	田中美保子	た け や	竹内 定八	鈴木 智子	新村 幸	佐原智洲子	斉藤三重子	川島 泰子	金取ミチ子	刑部 末松	岡本 久栄
石塚 茂雄	伊熊 保子	安間あい子	浅井 裕子	和久田りつ子	山本晏規子	山口 久江	松本みつ子	藤本 幸子	林田 昭子	野嶋 薫子	中村 弘枝	徳増 貴子	鶴見 佳子	田中 安夫	竹山すず子	竹田たみ子	曾布川石木	鈴木 節子	白井 宜子	坂田 松枝	川瀬 慶子	神谷知恵子	加藤 新恵	小川 恵子

伊藤アツ子
 伊藤 美代
 岩崎 良一
 大屋 智代
 小野田みさ子
 加藤 鎮毅
 河合 秀雄
 川島百合子
 切畠 正子
 コルプス
 清水 康成
 新村八千代
 鈴木 恵子
 鈴木 嘉子
 高林 佑治
 高山 紀恵
 竹下 勝子
 手塚 みよ
 徳田 五男
 鳥羽山すみゑ
 永田 恵子
 名倉 太郎
 西尾 淳子
 野末 初江
 橋本まさや
 伊藤しずゑ
 井浪マリエ
 大木たけの
 岡本 蓉子
 影山 ふみ
 加藤 政子
 川合 泰子
 河村あさゑ
 久野 悦郎
 小 百 合
 白井 忠宏
 鈴木 章子
 鈴木彦次郎
 平 幸子
 高林よ志子
 滝澤 幸一
 竹田 道廣
 鴛多 健
 利徳 春花
 内藤 雅子
 長浜フミ子
 名倉みつゑ
 西村 允雄
 野田 眞弓
 長谷川絹代
 伊藤清太郎
 今駒 隆次
 太田 静子
 小楠 達司
 勝田 洋子
 金子眞美子
 川上 とよ
 北村 友秀
 畔柳 晴康
 清水 孜郎
 不 知 火
 鈴木きぬえ
 鈴木まさ美
 高橋 久子
 高柳とき子
 竹内オリエ
 田中 貞夫
 時久シヅ子
 戸田 幸良
 永井 眞澄
 中村 寿
 西尾虹之助
 野末 法子
 野中美美子
 原田かつゑ

飛 天 女
 松本 緑
 宮本 恵司
 矢野 重夫
 山下 宏
 山下 眞二
 和久田しづ江
 カナユ一
 山下 静子
 平野 旭
 馬淵 文夫
 八木 裕子
 山上アサ子
 山下 昌代
 山中 伸夫
 和久田俊文
 錦織 祥山
 藤田八重子
 美 智 子
 八木 若代
 山口 英男
 山下美恵子
 横井弥一郎
 荒石由記美
 浜名湖人

自由律俳句
市民文芸賞
入 選

佐藤 悦子
 生田 基行
 伊藤 重雄
 木俣 史朗
 戸田 幸良
 中津川久子
 飯田 邦弘
 井手賀代子
 大道 邦夫
 河村かずみ
 鈴木 好
 周東 利信
 伊藤 有美
 伊藤千代子
 伊藤 有美
 木俣とき子
 外山喜代子
 中村 淳子
 飯田 裕子
 岩城 悦子
 小笠原靖子
 倉見 藤子
 竹内オリエ
 伊藤 有美
 藤本ち江子
 河合 文子
 鈴木 章子
 中谷 則子
 宮本 卓郎
 石田 珠柳
 岩本多津子
 嘉山 春夫
 畔柳 晴康
 戸田田鶴子



川柳	市民文芸賞	入選	内藤 雅子	錦織 祥山	橋本まさや
	山田とく子		浜 美乃里	水川 彰	宮川 淑恵
	伊熊 靖子		宮司 もと	石塚 自森	太田 静子
	浅井 常義		大庭 拓郎	花 信 栖	加藤 鎮毅
	有本 千明		佐藤 悦子	白井 忠宏	鈴木あい子
	戸田田鶴子		周東 利信	高鳥 謙三	竹田 道廣
	石田 珠柳		手塚 全代	寺澤 純	嶋多 健
	畔柳 晴康		長浜フミ子	浜名湖人	原川 泰弘
	鈴木すみ子		美 智 子	山内久美子	山下 好子
	田中 恵子		渡辺 憲三		
	中村 禎次		選 評	鶴田 育久	291
			堀内まさ江		
			木村 民江		
			伊熊 靖子		
			馬測 征稍		
			大庭 拓郎		
			小島 松太		
			竹内オリエ		
			鶴見美佐子		
			沼田 壽美		
			鈴木千代見		
			高橋 博		
			伊熊 保子		
			岡本 蓉子		
			斉藤三重子		
			竹山恵一郎		
			中津川久子		
			馬塚 五朗		

選 評	宮澤 秀子	山田とく子	金子眞美子
	河村 幸	佐野つとめ	鈴木 覚
	高柳 龍夫	高山 紀恵	滝澤 幸一
	竹平 和枝	為永 義郎	寺田喜代子
	寺田 久子	戸田 幸良	戸塚 忠道
	仲川 昌一	長浜フミ子	中村 雅俊
	平野 旭	堀内まさ江	馬測よし子
	宮崎 和子	渥美 進	荒沢 博
	飯田 裕子	岩城 悦子	鶴原 伸代
	太田 静子	太田 初恵	恩田 利子
	影山 京一	花 信 栖	加藤貴代美
	加藤 鎮毅	加藤 典男	金取ミチ子
	河島いづみ	北村 友秀	恭 子
	久保 静子	柴田 良治	白井 忠宏
	鈴木 均	高橋 紘一	高山 功
	竹川美智子	竹田 道廣	辻村 榮市
	土屋香代子	手塚 美誉	嶋多 健
	内藤 雅子	永井 眞澄	中村 弘枝
	名倉 太郎	野末 法子	橋本まさや
	浜 美乃里	山下 宏	和久田俊文
	選 評	今田 久帆	



「浜松市民文芸」第62集作品募集要項・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 305

作品掲載については、清書原稿のままを原則としました。
 掲載順については、市民文芸賞受賞作品は選考順、入選作
 品は選考順または五十音順としました。

第61集の作品応募状況

部門	作品点数	部門	作品点数
小説	一三	短歌	五二七
児童文学	四	定型俳句	一、〇三二
評論	四	自由律俳句	三〇八
随筆	三一	川柳	四三一
計	二六	計	二、三七六

小説

「市民文芸賞」

海の幸

九州の西に浮かぶその島は、数万年前の火山の噴火でできたのだと言われている。中央の最も小高い丘が噴火の中心らしく、そこから四方に流れ出た溶岩が海に達し、島全体がいびつなヒトデの形をしている。ツカサは社会の時間に地図帳を開き、授業はそつちのけでその島の形を見つめながら、入り江の荒い曲線や噴火口のなごりである海岸に迫った断崖を想像するのが好きだった。そして、島の輪郭だけしか読み取ることでできない地図では決して分からない、この島に関するいろいろな秘密を知っていることが誇りだった。

満ち潮に乗って無数のボラの群れが、口を水面に出し餌を求めて行ったり来たりする。波打ち際で水の中をのぞくと、長さが二センチにも足りないフグの稚魚が太陽の光を受けて緑色に輝いている。台風が過ぎた浜辺には沢山の海藻が打ち上げられ、その中にはタツノオトシゴが絡まっている。磯に

馬場純平

注ぎ込む小川の底の砂を掘ると、直径が一ミリにも満たないウナギの稚魚が泳ぎだす。

ツカサは海が好きだった。そして、この島が好きだった。その日も学校の帰りに道を外れ、溶岩の断崖に挟まれた狭い砂浜に立ち寄って、砂に潜ったウシノシタを捕まえようと思っていた。それがだめなら、岩場にもぐってサザエやウニを捕ればいい。

だからいつものように松の木の林の中を通過して、初夏の木漏れ日を浴びながら分厚く積もった落ち葉を踏みしめて海辺に向かった。海から吹き上げる風が斜面を駆け上がると、針葉樹の匂いがむせるようにこの薄暗い空間を満たした。あと数十メートル、柔らかな茶色い松の落ち葉を踏みしめて進めば浜辺が見える。この狭い浜は、もちろん土地の人間には知られているが、海水浴とか娯楽に興味がある人間はいないの

で、誰も訪れることはない。

しかし、ツカサは知っている。太ももまで水につかかって歩くと、ときどき硬いすべすべの石ころが足の裏に触れる。しかし、それは石ころではなくて、パイと言う茶色い斑点が入った貝であり、集めて海の水で湯がくと強烈な潮の香りを放つ生き物であるということ。そして、潮が満ち始めると、砂の中に隠れていたウシノシタが次々と命を吹き返して海水の中に泳ぎだしていくことを。

松林を抜け、浜を見下ろす。すると、波打ち際の水がこれまで見たことのないピンクに染まっているのを目を奪われる。それは、数メートルの幅で、水際に沿って五十メートルは続いている。この島の水は透明度が高く、薄いオレンジの砂が透けて見えていて、深みを増すにつれて濃紺へと変わっていく。しかし、水際のそのピンクの帯は透明な明るい色の濃淡を作りながら砂浜に打ちつけて前後に揺れ動いている。

焦って転げないように、足下に気をつけながら浜辺に続く崖を下り、乾いた砂の上に靴を脱ぎ、ランドセルを置いてピンク色に染まった水の中に足を踏み入れる。最初の波が足首に当たると、それがいつもの水ではない事がすぐに分かる。足首に電気のようなものを感じ、ツカサは「ひっ」と小さく叫んだ。クラゲに刺されたのだと思つて右足を持ち上げたが、痛みはなかった。そして、水に入ったままの左足の足首あたりには何かが次々とぶつかり続けていた。

波で揺れ動く水の中に目を凝らすと、薄紅色の海水の中

を、無数の黒い何かが、あらゆる方向に、不規則に、矢のように飛び回っていた。ツカサはしゃがみ込み、両手でピンク色の水をすくい、手のひらをゆつくりと閉じた。すると、目には見えないほどの無数の小さな何かが、プチプチとつぶれて、命を失っていくのが感じられた。

見回すと、穏やかな波が寄せては引いていく波打ち際で、産卵の真っ最中であるらしい小魚が、いたるところで飛び跳ねていた。こんなにも無数の魚たちが、誰にも気づかれない事なく、大昔から続けてきた営みを繰り返しているという驚きと、その営みの中に入れてもらえた喜びでツカサは震えた。そして狩猟欲も湧いた。この無数の魚を持ち帰って、食べてみたいと思つた。

それは簡単なことだった。魚の多くは水を飛び出して砂の上で跳ねていたからだ。ツカサは、きらきらと光りながら跳ね回る小魚を、手づかみにして半ズボンのポケットに押し込んだ。もうこれ以上入らないというほど詰め込んで、砂浜を覆う魚は少しも減つてはいなかった。ツカサはランドセルの中からテキストや筆箱を取り出して砂の上に並べた。そして、波打ち際に戻って、つかみ放題の魚を一杯に詰め込んだ。匂いが移るのは分かっていたが、それよりも魚を持ち帰ることの方がずっと大事に思えた。あつというまにランドセルは魚でいっぱいになった。魚はひしめき合い、元気に跳ねていた。砂浜ではまだ無数の魚が飛び跳ねていたが、ツカサは満足していた。父ちゃんと母ちゃんはきつと褒めてくれるに違

いない。自分は父ちゃんと同じくらいの仕事をしたのだから。

ツカサは魚がこぼれないように両足でしゃがみ込み、用心しながらランドセルを背負い、テキストと筆箱を胸に抱き、ズボンのポケットを膨らませて、松林への崖を登り、へたくそで音でない口笛をすーすー言わせながら、漁師長屋の一軒である家に向かった。

階段を上り、車道を渡り、神社の境内を通り、漁師集落の狭い路地を抜けるときも、嬉しさに満たされていた。早く帰ろうと前屈みになり、ランドセルの肩ベルトを押さえて小走りになると、時々魚がこぼれ落ちた。

漁師長屋は集落の一番端っこにあった。船着き場から道を隔てて平行に二列に並んでいて、それぞれに五件の家があり海からの風に耐えるために壁は黒いタールで塗り固められていた。ツカサの家は海に近い側の真ん中だった。

海とは反対側に入り口があって、横開きのガラス戸の格子に手をかけて開こうとしたが、力を入れようとしたその時に、その向こう側にいるはずの母親の顔が浮かんだ。ツカサは錆び付いたコロがなるべく大きな音を出さないように、そろそろと開けた。それでもがたがた、ざりざりと神経を失らせる音は防ぎようがなく、思わず首をすくめた。

家の中は真つ暗で、人の気配がないことにツカサはほっとした。沢山魚を捕って家に持って帰ったら、父親も母親も喜んでくれると、もしかしたら家の中を明るくできるかもしれないと考えた自分がいかに愚かだったのか、後悔と恐れがわ

き上がつてきた。ランドセルとズボンのポケットを何とかしなくてはならなかった。魚を船着き場まで持って行って海の中に捨てれば、カモメが群れてきてあつという間に食べてくれるだろうが、それはもったいなかった。

暗闇に慣れてくると、土間の奥の壁に、目の細かな金網を張った干物を作るための木枠が何枚か立てかけられているのが見えた。その網は、いつもそうしてそこに立てかけてあるのだが、ふだんは気にもせずとその横を通って長屋の裏手の共有の五右衛門風呂に向かっていった。

その網は二重になっていて、その間に魚を挟んで閉じると、カモメもネコも悪さができない仕組みになっていた。ツカサは裏の空き地に網を運び出し、そうするための作業台の上に広げて、まずポケットの中から小魚をつかみ出し、網の上に広げた。小さな魚だから、一匹ずつ並べると言うのではなくぶちまけたものを手のひらで広げるだけよかった。ランドセルの中に入ったものも含め、三枚の網がちようどいっぱいになった。一枚の網がいっぱいになると、まだ大人の体ではないツカサは、両手をいっぱい広げて思い切り体を後ろに反らせ、一メートルほどの高さの台の上に乗せた。三枚の網が並ぶと、既に乾燥が始まった魚の銀のうろこは鈍く光り、生き物から食べ物に変わりつつあることを教えていた。

作業場の横の水道の蛇口をひねり、緑色のホースからあふれる水でランドセルを洗った。蛇口の下にはたわしが置いてあって、ツカサはそれでごしごしと内側をこすった。ズボン

はまだ汚れたままだったが、それは何とでもなることだった。

ツカサは自分の母親に甘えた記憶がない。母親はいつも怒っていたからだ。母親は父親に対して怒り、この集落に対して怒り、島の生活を怒り、テレビのニュースに怒り、そして自分の人生にも怒っているようだった。まだ小学六年生であるツカサに詳しいことなど分かるわけもないが、母親が怒っているのは、こうであるべきだという基準が自分の中にあつて、その基準に合わないこと全てが気に食わないようだった。そして、多分、腹を立てざるを得ない自分のその狭い性格こそがもつとも許すことができないものなのだった。母親は常に苦しんでいるようだった。

母親は多分自分にも怒っているのだとツカサは思っていた。だから、なるべく母親とは目を合わせないようにしていた。父親も魚の煮付けをつつきながら、ガラスのコップに盛った焼酎をすすり、無言でテレビの歌謡番組を見て、番組が終わると自分で布団を敷いて寝た。母親は食事を作り、掃除をし、洗濯をし、それが乾くと「折目正しく」という言葉がそのためにあるかのように、皺一つなく完璧に同じ大きさに畳んだ。狭い安っぽい長屋だったが、どこもかしこもピカピカで、糸くず一つ落ちていないどころか、ほこりさえもどこにもたまっていないのだった。

姉は高校を出ると家を出ていった。ツカサもそうしようと思っている。姉が出て行ったあと、母親は姉の名前を一切口にすることはなかった。姉は同級生の男と今は博多で一一緒に

暮らしているらしい。誰かが姉の名前を出すと、母親の怒りが止まらなくなつてそれが二週間も続くから、姉はもともと存在していなかったかのように父親もツカサも振る舞った。

がらがらと戸が開く音がした。立て付けが悪いせいで、最後に引つかりがあり、そこで力を入れ損なうと逆に勢いがついて反対側の板にぶつかつてしまう。ツカサはその音が嫌いで、思わず肩をすくめたが、今回はうまく開いたようだった。

「ツカサっ。帰つとるか」

「帰つとるよ。どがんしたとね」

母親の声はどこか疲れていた。

「漁協に行つてきたとやけど、とうちゃんの船のなあ、座礁したごたると」

座礁という唐突な言葉に足は突っ張り、ついに自分の家の順番がきたという運命に腹の辺りから震えが広まった。小学生だといつても、この島では年に一度二度はその言葉を聞くからだ。それは小学校の同級生の父親であったり、集落の長老であったり、そうして命を落とした人をツカサの年齢でも数人は思い出すことができる。

「かあちゃんは今一回漁協に行つて連絡ば待つけん、お前は今日はじいちゃんの家泊まれ。よかや、悪ざするとやなかぞ」

ツカサは本当は母親と一緒に漁協に行き、刻々と入るであろう一番新しい情報を待ちたいと思つたが、母親の言葉は絶

対だった。これまで覆すことができた試しはなかったし、かえって逆上を誘った。

「ほんなこつ、ばかな人ばい。こがん風いどる日にどがんに座礁とかしたとやろか。救助の船もでたとばつてん、乗組員だけ乗り移らせて自分は船倉の魚ば守るつて、一人で残ったつちゅう話やつたと。ツカサ。お前はとうちゃんのことなるとやなかぞ。昼間つから酒飲んで、酔っぱらつたらいびきば掻いて寝て、いつもそがんけん、こがんことになるとばい」

男ならばそこで地面につばを吐くところだろう。かあちゃんば、そう言つて深くため息をついた。

浸水しているのだろうか。そうでないならば、父親はおそらく満潮を狙つて離礁しようとしているに違いない。いまごろ、その船の中で父親は何を考え、どんな気持ちで一分一分をすごしているのだろうか。お腹はすいていないのか。懐中電灯はちゃんとともるのか。もしかして、浸水が始まっていたら、船は少しずつ傾いていく。だったら父ちゃんのことだから、海に飛び込んで、岸まで泳いでくるに違いない。かあちゃんはそのことは考えないのだろうか。父ちゃんが怖い思いをしているかもしれないと思わないのだろうか。それとも、かあちゃんは大人だから、心の中ではそう思つていても、言葉にも表情にもださなただけなのだろうか。

去年の夏、台風が過ぎ去つたあとのことだった。

小さな漁船が港の入り口のコンクリートの突堤を回ると、サイレンが鳴り始めた。その音は鳴り止まないのではないかというくらいいつまでも続いた。集まつた二十人くらいの人も子供も、顔をこわばらせ、岸壁に横付けしようとする漁船を見下ろしていた。漁船の甲板は、真ん中に魚を入れるための四角い穴が開いていて、そこには段差が十センチメートルほどの蓋がしてあり、周囲より一段高くなつていて、そこに、一人の若い漁師が腰掛けていた。もう一人の漁師が船を操縦し、岸壁に横付けするときになって、若い漁師は立ち上がり、ロープを岸に投げた。大人の一人がそのロープをつかみ、鉄製の支柱に器用に数回くるくと回すと、それはしつかりと固定された。

魚を入れる穴の横には、ページジュの毛布の塊があり、おそらくはその中に、人間が横たわっているはずだった。若い漁師が毛布を払いのけるようにはがすと、やはりそれは人間で、目をつぶつたまま、動いてはいなかった。鼻の穴と口からは、カニのあぶくのような、粘つこそうな粘液が吹き出し、張り付いていた。

そのときまで、ツカサは死体というものを見たことがなかったもので、その人がまだ生きているのか、死んでいるのかさえも分からなかった。でも、鼻と口から吹き出したあぶくは、張り付いたままで動いてはいなかったから、その人は既に死体だったのだ。

岸壁と漁船の甲板には人の背丈ほどの差があった。三人の

男が甲板に飛び降りて、若い漁師と短く相談し、領きあって、そのうちの二人が、甲板で横たわっている男を抱え上げ、岸壁に持ち上げようとしたが、男の体は柔らかく、どこから抱えようとしても、二人の手からすり抜けてしまった。

男たちは、今度は、濡れきった男の体を毛布でぐるぐるに巻き、胸の部分とひざの部分にロープを数回巻きつけた。

ロープの端は岸壁に投げ上げられ、上から引き上げながら、下からも持ち上げるという手順で、やっと、毛布の塊は陸地に戻った。

その有様を人々はじつと見つめていた。だれも声を発するものはいなかった。この毛布にくるまれた男が、この島の人間なのか、たまたまこの島の近くを通りかかって遭難した他の島の人間なのか、自分に分かるわけもなかった。この島の人間だとしたら、誰か知り合いがいるはずで、きつとささやき声とか、呼びかける声が聞こえるはずだから、それが聞こえないということは、おそらく別の場所の人間なのだった。

男が持ち上げられた後の甲板は、びつしよりと濡れている。その部分の板は水を吸い込み、色が変わっていた。いつの間にか岸壁には戸板が用意されていた。毛布を解かれた男はその上に寝かされ、再び毛布がかぶせられた。四人の男が、四隅を用心深く持ち上げ、島で一つの病院に向かってゆっくりと歩き出した。それぞれの男は、重さに耐えるために体が外側に向かってかしいでいた。この島には救急車というものがないのだった。

自分の父親があのとときの男のように戸板に寄せられて、口と鼻から泡を吹いて運ばれてくる姿を想像しようとしたが、それだけで、心臓が高鳴って吐き気がしそうだった。ツカサはたまらずに息を深く吸い込んだ。

「じいちゃんとはあちゃんに迷惑ばかりかけるとやなかぞ」
母親はいつもの命令口調で念を押して、体を傾けて引き戸を開けた。そして振り返ることもなく、下駄の音を足早に鳴らして行ってしまった。

「おまえ。臭かぞ」

母親の実家はこの島一軒の酒屋だ。じいちゃんは、奥の部屋から出てきたとたん顔を歪めて蛍光灯からぶら下がった紐を引いて灯りをつけた。

「おまえは死んだ魚か。生臭さのかたまりやなかか。どぎゃんしたとや」

島でただ一軒の酒屋なのに、冷蔵庫の中を除けば、土間の端の方に十本ほどの一升瓶がさびしく並んでいるにすぎない。

「とうちゃんの船ん、座礁したってかあちゃんの言うどらした。そいけん、今日はじいちゃんの家に泊まれちち」

「登さんの船ん座礁したってや。ほんなこつか。分かった、ばあちゃんにメシば作ってもらうけん、心配すんな。そん前に風呂に入れ」

じいちゃんは、年のせいなのかあんまり動揺しているよう

には思えない。落ち着いた口調で情報を理解しようとしているように思える。

「よっちゃん。よっちゃん」

じいちゃんは振り返りもせず奥の間にいるはずのばあちゃんを呼ぶ。ばあちゃんがエプロンで手を拭きながら、暗闇の中から腰を曲げて現れる。

「ツカサちゃんやなかや。どがんしたと？」

「登さんの船の座礁したってツカサの言うところ」

ばあちゃんの微笑みはその言葉で瞬時に消える。紺色のエプロンが、濡れた手を拭いたせいでその部分だけしわとなり、濃さを増している。

「そいで、ともよはどうしとると」

「漁協」

「そうか。多分靖子さんには連絡しとらんやろけん、じいちゃん、電話ばして教えてやらんね」

じいちゃんは戸惑う。どうしようかなという表情をして、土間を見つめ、土間に並んだ一升瓶を見つめ、冷蔵庫を見つめ、天井に目をやる。

ばあちゃんが姉ちゃんのことを、自分の孫であるにもかかわらず靖子さんと呼ぶのには訳がある。ツカサも最近になって知ったことだ。狭い島だから島の人間に関わる面白そうな話はどんどん伝わっていく。大人の間を一通り巡り終わるとそれは子供に伝えられ、本人が傷つこうがどうしようがそんなことはおかまいなく、島の人間みんなが知って、新しい情

報としての価値がなくなるまで、徹底的にすみずみまで伝えられていく。姉の靖子が、実は母親であるともよの子ではなく、福岡で働いていた頃に知り合った、父親の登の連れ子であることをツカサが知ったのは、家族からではなく小学校の水飲み場でのことだった。

それからしばらく「略奪婚」という言葉が小学校で流行った。それはツカサをいじめるのが目的ではなく、ただその言葉で小学生たちはさまざまな言葉遊びや連想を楽しんでいただけだったのだが、ツカサにはみんなが自分を馬鹿にしているとしか思えなかった。だから、一人で海に行き、魚を捕まえたり、いろんな観察したりして一人きりで遊ぶようになったのだ。

「もう少し様子の分かるまで待つてみたらどうや。おいが漁協まで行つて話ば聞いてくるけん、よっちゃんは風呂ば炊いてツカサに飯ば作つてやれ」

ばあちゃんはじいちゃんの言葉を反芻している。そして、いつもとは違った鋭い視線になって、ガラス戸を開いて客が入ってくるのを迎えるかのように外の路地を見つめながら言った。

「そうかもしれないね。ばつてん、靖子さんにもなるべく早う知らせてやらんばいかんけん、すぐに帰つてこんね。よかね」
「わかっつるばい」

登のことを真剣に心配しているというよりも、面倒なこと

深く息をしてじいちゃんは草履のままで出て行った。

夕方になってもしいちゃんは帰って来なかつた。ガラス戸で土間と仕切られた居間では、蛍光灯の周りを小さな羽虫が数匹くるくる飛んでいる。そして蛍光灯の内側には、無数の羽虫が死んでいるのが黒い陰で分かる。いま飛び回っているやつらも、どこかの隙間から潜り込んで、明日の朝には死んでいるのだ。

太陽は沈みかけているらしい。ネコの声が交差した路地のどこかで聞こえる。だれかに餌をねだっているように聞こえる。そうだ、下水の側溝が海に流れ出るところには、いつものようにフグの稚魚があつまっているのだろうか。

思いついてガラス戸を開けて土間に降り、そのままスリッパを突っかけて道路に出た。側溝はすぐそこだが、背伸びをしても見えない。郵便屋が赤い自転車で目の前をすりぬけて、側溝にかかる玉砂利が浮き出た古いコンクリートのふたの上を通っていく。ツカサは我慢できなくて、ふたのところまで駆けて行き、見下ろす。数センチから十センチくらいのフグが十匹ほど、上流に顔を向けて、何か食べられるものが流れてくるのを待つてしつぽをひらひらさせている。薄暗くなって見にくくなった水の中をウナギがするりと抜けていく。小さなエイまでもが水の底に張り付くように、ゆっくりと移動していく。

満ち潮が始まっているのだ。だから魚たちは活発に動き回っている。父ちゃんの乗った船は満ち潮を待つて離礁するの

だという。でも、船倉が魚でぎっしりと詰まった状態ではそれが困難であることはツカサにだって分かる。

まだ潮が上がっていない側溝の上流に、スイカの皮が捨てられていて、食べ残した赤い部分が闇の中で輝いているように見える。潮が完全に満ちれば、あの食べかすでさえも、小魚だか虫だかがたかつて、いつの間になくなってしまおうだろう。

「ツカサあ。さあ、戻って来んね。風呂の沸いたけん」
「ちよつと待つとつてえ。家に帰って服ばとつてくる」

それは言い訳だ。本当は干してある魚が心配になったのだ。いずれにしても夜になる前に家の中に取り込まなくてはならない。ツカサは赤ちゃんの返事を待たずに駆け出した。

家までは三百メートルくらいしかないが、父親が心配なのと、そして姉ちゃんが出て行ったときと同じくらいに家族がまたぐちゃぐちゃになるのではないかと、考えたくなくてもそういう思いがつのつて、それで胸が苦しくなつてめちゃくちゃに走つた。だから、本当に苦しくて、家の裏の干場についたときすぐに水道の蛇口をひねつて、緑のホースを口に突っ込んだ。

魚はまだ半乾きで、食べられる状態ではなかつた。だから、木枠ごと一枚ずつ家の中に運んで、土間の上に重ねた。そして完璧に折り畳まれた着替えの下着と半ズボンをタンスの中から取り出し、くるくると丸めて棒のようにして右手に握りしめ、駆け出した。

「五右衛門風呂の丸い板をバランスを取って沈めていく。イカ漁に出て行く船のエンジンの音が続いている。海は静からしく、波の音も聞こえない。とうちゃんは今頃座礁した船の甲板に横になって、きつと星を見ている。とうちゃんは時々夜になるとツカサを連れ出して船に乗せ、港に係留されたまま、甲板にごろんと横になって星を見つめた。頭が板に当たって痛かった。とうちゃんを見ると片手を頭の下に通し、その上に後頭部を乗っけていたから、ツカサもまねをしてみたが、すぐにしびれてしまった。

風呂から上がってはあちゃんの炊き込みご飯を食べた。カシワとひじきと人参の炊き込みご飯で、おかずなんていらなかったが、ばあちゃんはイサキも焼いてくれた。

「テレビは見るか？」

ばあちゃんは気を遣って聞いてくれたが、ツカサは首を横に振った。時々聞こえている漁船の音や、風の音を聞いていたかった。すると、じいちゃんがスリッパを引きずりながら近づいて来るのが聞こえた。家の横の路地を通り、店の入り口に回っていくのさえも聞こえるほど港を囲む集落は静かなのだった。

ガラス戸がガラガラと開いてそして締めまり、内側から真鍮の鍵をくるくると回して閉める、金属が擦れる音が聞こえた。じいちゃんは土間から段差のある居間のガラス戸を開いて言った。

「登さんは今夜も船に残るらしかよ。満ち潮でも離礁はでき

んかったらしか」

そしてスリッパを脱ぎ、畳に上がってあぐらをかいた。

「明日が大潮で最後のチャンスやけん、それに賭けるらしかよ」

「そがん言うたつちゃ、あと一日もしたら、氷で冷やしちよるにしても魚が駄目になるやろが」

「頑固な人やけんね。これ以上島の衆に後ろ指ばさされんごとしとらすとやなかやろか」

そしてばあちゃんとじいちゃんは口をつぐんだが、多分二人とも同じことを考えていた。そしてそれは、ツカサが考えていることと同じなのだった。

この島で漁師をするということは、常にフカに襲われる危険との背中合わせだということを意味する。銭湯に行けば片脚のない男たちが必ず何人かいて、海に投げ出されたり、偶然に網にかかったフカを何とか網から外そうとして食いちぎられてしまった脚の、肉が盛り上がった傷口をいたわるように洗っているのだ。

フカの稚魚は普通にな網にかかるらしく、魚を陸に揚げたあとの船着き場には、五十センチくらい、形だけは一人前に立派なサメが何匹も捨ててあって、コンクリートの上で乾涸らびながら、カモメにさえも見放されていた。また、学校では、自分の父親が乗った船の網に四メートルを超える巨大なフカがかかったと、自慢げに話す生徒はざらにいた。

「ツカサあ、そろそろ寝ろ」

じいちゃんは焼酎を飲みながら、横目で指図する。あの具合ではずいぶんと酔いが回っているから、じいちゃんも眠いんだ。

ツカサは赤ちゃんが奥の部屋に敷いてくれた布団に潜り込む。すぐに眠くなると思っていたじいちゃんは、いつまでたっても起きていて、ばあちゃんとなにかひそひそと話し込んでいる。ツカサだって、いつもより二時間も早く布団に入ったから眠いわけがない。だから自然とじいちゃんとは赤ちゃんの会話に耳をそばだてるが、断片的に単語が聞こえてくるに過ぎない。

座礁、靖子さん、島、とにかく、そのとおりはい、魚、台風、イサキ、座礁、そして、どこか遠くで、漁船のエンジンの音が長く響く。

ある日、台風が接近してきたという無線を受けて、島から数百キロのところまで漁をしていた船は、慌てて船首を島に向け、全速力で波をかき分ける。だんだんと激しくなる風と波の中を、乗組員は狭い船室に身をくぐもらせて、港に着くまでの時間を耐えている。ついに島が見える。たれ込めた雲とどす黒い海の間、低く地面が横たわっている。まだ数キロ先なのに、岩に打ち付ける白い波が左右に伸びる線となって見えている。

島がだんだんと近づき、雨がはげしく真横から打ち付け

る。かっぱを着た漁師たちはばらばらと音を立てる雨の雫に不安を駆り立てられながら、異常な潮の流れがないか海面に目を凝らす。あの岬を回り込みさえしたら、集落が見えるはずだ。みんなは祈る思いで船にしがみつき、右に左に揺られながら白波が渦巻く海に折る。

しかし、そのとき船が岬の岩に乗り上げる。五メートルはあるだろう波の谷間に挟まったと思ったら、バンときた。そして、がりがりがりと続いた。スクリューがだめになった。方向舵は多分九十度に折れ曲がっている。操舵管が回らない。「死にとうなかぞ」と誰かが叫ぶ。

島の断崖は五十メートルの目の前だ。あそこまでいけば陸に登れる。でも、荒れ狂う波は、一メートルも進ませてくれないだろう。

船が傾く。波が打ち付けるたびに、引き波にあわせて沖に向かって傾いていく。

「どぎゃんするや。船長」
「どぎゃんもどぎゃんもなかやろが」

四十五度は傾いってしまった船の甲板で、困憊し、しがみつけるものにしがみついているが、次の波が来たらその衝撃に耐える腕の力はもう残ってはいない。

「おい。お前ら、浮き輪につかまって飛び込め」

「船長はどぎゃんする」
「おいは、船と獲物ば守らんといかん」

「ばかなことば言うな。みんなで飛び込もうやなかや」

船長は知っているのだ。浮き輪の数が一つ足りないことを。

「浮き輪ば抱えて、いつ落ちてもよかごとしとけ」

船底が破れ、積み荷の魚たちが海流に吸い込まれる。乗組員たちも、同じ流れに引き込まれ、ぐるぐるの渦のなかに巻き込まれ、海底に吸い込まれていく。船乗りたちはもうどちらが上で、しがみついた浮き輪がどちらの方向に自分を引っぱっていかうとしているのかさえも分からない。あまりにも激しい海流のせいで、ぐるぐるときりもみにされ、あらゆる判断の力は失われて、自分が呼吸をしていない事さえも忘れていた。なぜ自分が苦しいのか、なぜ自分もがいているのか、なにを怖がっているのかさえ分からない。

すでに男たちの腕の筋肉は限界を超え、浮き輪は自由の身になって勝手に海面まで上昇し、吹きすさぶ風に吹かれてあつというまに沖に流れていく。男たちの心臓はまだかろうじて動いてはいるが、意識はほぼ消えかけている。閉じておくよりも開いておく方が力が要らないから、目は見開かれていく。そして、最後にその消えかけた視野に入ってきたものは、流れ出した膨大な数の魚の匂いに引き寄せられた、四メートルを超えるフカの群れだった。何匹いるのだろう。暗い海水にとけ込むような漆黒の流線型は、獲物に噛み付く機会を狙って男たちの周りを回り始める。男たちは、足を食いちぎられ、はらわたを引きちぎられるよりも早く、自分の意識がなくなってしまうことを祈り始める。しかし、目を凝らすと、視野のなかには数十匹の巨体が、水という粘性を持った流体

のなかを動いているとは思えない軽さで右に左に、上に下にと漁師たちの周りを舞っている。

「ツカサ、起きんや。お日んの照つとらすばい」

恐ろしい夢がまだ続いているように思えて、ツカサは布団の上に座ったまま呆然としていた。思い出したいはなかったが、父親たちが真っ黒い水の中でサメに囲まれて沈んでいくイメージが目の前でまだ続いていた。

「ごはんば食うて学校に行かんや」

「そいばってん、とうちゃんの……」

ばあちゃんはちゃぶ台にごはんとみそ汁と卵焼きと漬け物を、ツカサのために一人分だけ並べて立ち上がりながら言った。

「心配しとるとはみんないっしょたい。何かあつたら、すぐ学校までじいちゃんに知らせにいつてもらうけん」

起きたばかりでもあつたし、夢のイメージもあつて食欲はなかった。とうちゃんは今頃どうしているのだろうと、波が白く寄せる岩と岩の間に挟まれた漁船を思い浮かべていたら、ばあちゃんが言った。

「心配せんでよか。登さんは立派な漁師やけん、何ばどうすればよかか一番よう知つとらす。ツカサは心配せんでよか。ほら、はよう食つて、学校に行かんば遅刻するぞ」

ツカサはみそ汁の中にご飯をぶちこんで、汁をすするようにならば食べた。ばあちゃんのみそ汁の出汁は小さないりこでとつ

であって、いりこが入ったままだから、飲み込んでのどに刺さらないように注意しながらすすった。砂糖だけで味付けした卵焼きは少し焦げていて、そしてお菓子のように甘かったが、みそ汁の中につけてご飯と一緒に掻っ込むと、不思議とおいしかった。

ツカサは自宅に走った。息を切らせながら、干してあったランドセルに教科書を詰め、魚を干す網を外に出そうと探したが、昨日重ねておいた土間は、薄暗い中で黒光りしているだけだった。

家の裏に出て干場を見ると、すでに朝日の中で小魚たちは乾燥を始めていた。母親が帰ってきているに違いないと長屋を一回りしてみるが人の気配はない。この長屋も半分は、漁師ではもう食っていけないと都会に出て行った人たちが残した空き家なのだ。島の人口もどんどん減っているらしい。かあちゃんはまた漁協に行ってしまったのだろうと、ランドセルを背負い家を出ようとすると、目の前に、母親が眉間に皺を寄せて立っていた。

「ほんなこつ、この島の人間は、ゼーんぶ役に立たんもんばかりたい」

母親は疲れからか、いつもより目の下の隈が目立っている。そして、島の人間にしては色白の肌が、いつもの張りを失ってくすんでいるように見える。

「だいたいお前の父ちゃんは何ば考えとらすとやろか。魚なんか捨てて船ば降りればよかやなかや。あがん、頑固に船に

のこつておらすけん、漁協の人も迷惑しておらすとばい。漁協の役員も役員たい。組合員の命ば守るとが、あん人たちの一番の務めではなかとや」

断定的な語尾の詰め方に母親の怒りが滲んでいる。

「あなたに言うたつちやしかなかとばってん、大体この島の人間はみんなどうかしとる。うちの知らんところでこそこそ動き回って。お前はあぎゃん大人になつたらいかんぞ」

口から飛び出してくる言葉とは裏腹に、母親の表情にうろたえが浮かんでいるのがその視線の向け方からわかる。いつも怒っていないながらも、いろんな色合いの怒り方があるのをツカサは知っている。うろたえの原因はすぐに分かった。

「靖子のお、きょうの船で帰ってくるらしか。お前は学校に行け。何もなかったふりばしとくとぞ」

十分ほど遅刻してしまつた。一時間目の授業はもう始まつていて、教室のうしろのドアを開けるとみんなが振り返つた。この島に赴任してまだ日の浅い、エネルギーいっぱい先生も、大きな三角定規で黒板に図形を描きながら振り返ろうとしたが、定規を黒板に押さえつけたままだったので肩越しにちらつと見ただけだった。

その日は一日何もなく過ぎていった。皆が気を遣っていたのか、どう声をかけていいのか分からずに戸惑っていたのか、それはわからない。でもきつと、ツカサがいないところでは、空想まじりのうわさ話を、満ち潮に乗って上がってき

てはばくばくと水面で餌をあさるボラの群れのように、無心に語り合っていたに違いない。それが、島の人間の習性なのだ。

姉が帰って来るといふ事実をどう受け止めればいいのかと、意識して考えていたわけではない。ただ、丘の途中の小学校から下るコンクリートの道で、車に轢かれて乾涸びたひきがえるの亡骸を靴のつま先ではがしながら、なぜ自分はこのももやもやした気持ちなのだろうか、質問がわからないのに答えを出そうとしているような、いらいらした不安感にツカサは満たされていた。

いつもは追い越していくはずの生徒たちに今日は追い越されながら、ぶらぶらと集落に下っていく。久しぶりの姉に会いたいはずなのに素直に喜ぶことができない。一番大きな理由は、ツカサが姉を見て嬉しそうな表情を見ると、それを母親がどうとらえるか予想がつかないからだ。そして、ツカサ自身もどうしても姉に会いたいというわけではない。小さなころから一緒に楽しく遊んだという記憶もなく、姉がどういう性格なのかもよく知らない。ツカサの家族は、家族でありながら、心の中をさらけ出すことのない、いつも自分の一番本当の部分は隠しておいて、怒りだけをぶつけてきたような、ツカサはそれが家族なのだと思勝手に思ってきたのだが、最近になって、何かがおかしいと思わざるを得ない、そんなよそよそしい共同体なのだ。

集落に入り、漁師長屋までの細い路地を抜ける。両側の家

は静まり返り、ネコの鳴き声さえ聞こえない。ここまで来たのだから、家の中に入らないわけにはいかないという、たった夏休みの宿題を目の前にしたときよりも、ずっとずっと重い気持ちで引き戸に手をかける。半分くらいまで開けて、体を斜めにして入った途端、激しい声がある。

「うちは鬼じゃなかとよ」

「そがんことは言うたらんです」

「わたしはね、自分の腹ば痛めた子じゃなから、いい加減な育て方ばしたつち言われとうなかけん、きちんきちんとなんたば躰けてきただけばい」

「あたしはお母さんのごと、ちゃんとした人間じゃなかけん、そいが辛かったとです」

「それはあんたの責任やろが。わたしは親としてできる限りのことばしたし、他人にどがんことば言われても、自分がどが辛うても、信念通り生きてきたと」

「私が出て行ってはっとされたとでしよ」

「そこで話ば変えるとじゃなかと」

「本当はそうじゃなかとやなかですか。うちがおらんごとなつて、嬉しかったとやなかですか。そいけん、うちがこうして父さんのことが心配で帰つてきるとに、やさしか言葉もかけてくださらん」

こういいういさかいをこれまで何度聞かされただろうか。血がつながっていないということは所詮こういいうことなのか。もう少し優しい気持ちでお互いを見つめれば、許し合うこと

もできるだろうに。この二人はいつも攻撃し合って、結局は自分を取り返しのつかないほどに傷つけている。そして、いまでは心の芯の部分までえぐり合って、それでも飽き足らずにお互いの息の根を止めようとしている。

ツカサはこっそりと土間を通って家の裏に抜ける。二日間日光を浴びた小魚はさらに小さく縮こまってしつとりと乾いていた。いりこほどにかりかりではなく、そのまま焼いて食べればちょうどいい堅さのようだった。家の裏の壁には直径が六十センチくらいの丸い竹のざるがかけてあって、ツカサはそのなかに干し上がった魚をあげていく。何百匹かの乾いたその魚はざるの半分ほどになった。鼻を近づけて匂いをかいてみるが、潮の清々しい香りだけが芳醇に漂って、生臭さとは無縁だった。

なぜ母親と姉はあそこまで言いあわなければいけないのかツカサには理解ができない。ツカサは争いが嫌いだ。人間同士が触れ合えばかならずいつかどこかでぎくしゃくしたことになるかと分かっている。傷つきたくはないし、人を傷つけたくもない。だから、一人で自然のなかで遊ぶようになった。海にいと、誰にも気遣うことなく、好きなだけ魚を追いかけられていることができる。

姉は母の子供ではない。でもあの二人が憎み合っているのは、本当にそれだけの理由なのだろうか。二人とも、自分にも責めがあり、相手を許すことはつまり自分が許されることであり、そうすれば自分を縛っている憎しみの力から解放さ

れて本当に自由になれるだろうに。でも、小学生である自分がそうやって考えているのは実はとても幼稚な考えであって、自分もある年齢を超えると自分というものが出来上がり、それに反するものがあればそれはもう絶対に許せなくなってしまうのだろうか。それは、とてつもなく悲しいことだとツカサは思って、干し上がった魚たちの銀色と黒に近い青の鈍い輝きに目を向ける。

そのとき、港から、サイレンの音がする。それは、長く続き、港を取り囲む低い丘に何度も反射して、そのために、この島を覆う白い雲と青い空がこの島の住人たちにメッセージを送っているように、厳かな、パイプオルガンの響きですべてを包んだ。

ツカサは走り出した。大きめの運動靴のなかで足が滑る。小さな漁船が二十艘ほど並んだ船着き場に沿ったコンクリートの道をはたばたと音を立てて駆けていく。ツカサのあとからは母と姉が並んで、駆けてくる。母は肘を曲げて体に押し付けている。姉は伸ばしたまま、腕を前後に大きく振っている。サイレンは鳴り止まない。

船着き場を過ぎ、漁船から魚を降ろす中の広いコンクリートの建物を過ぎるともうそこは漁協の三階建ての建物で、その屋上のスピーカーからサイレンは流れ続けている。三人が玄関から駆け込むのに合わせたようにサイレンが止まる。廊下にはジャージ姿の漁協の職員がポケットに手を突っ込んで立っている。

「どがんなった？」

息を切らせて母が尋ねる。

「こっちに向かっとらすごたる」

男は廊下の壁に向けて顎をしゃくる。その壁の向こうには港の入り口があつて、両側からせり出した防波堤の間から水平線が見える。でも、海全体を見渡すには防波堤の先端まで行かなくてはならない。そこまでは数百メートルあるから戻ってくるのがまた大変だが、三人はたまらずに駆け出す。

息を切らしながら先端に立つと、まっすぐに続く水平線に大小いくつかの島が並んでいる。かつては人が住んでいた島もあるが、いまは全て無人島だ。そのうちのどこかの瀬で父親の船は座礁したのだと探るように目を上げる。しかし、父親の乗った船は既に目の前に近づいていた。自分の駆ける足音と荒い息の音にかき消されて、船のエンジンの音が聞こえていなかったのだ。

父親の船は、別の船に横付けされて防波堤の先端の、ツカサたちからわずか三十メートルくらいのところを回っている。エンジンは故障したが、浸水はしていないらしい。父親の船は向こう側で、もう一艘の船に操縦を任せてあるから、父親は甲板に立っていて、こちらに手を振っている。表情は硬いが、笑っている。ツカサも母親も姉もできるだけ大きく手を振って、おーい、おかえりーと、何度も叫ぶ。それにこたえて父親も手を振り続ける。

船が過ぎていくと三人は手を下ろし、お互いの顔を見つめ

合うが、母と姉からは笑顔が消えている。

いざ父親の元氣な姿を見ると、それはもともと決定されたものであり、命の心配をしたことと自分が異常なことのようにも思える。サイレンも鳴り止んでいるし、見渡す風景はいつもと同じだ。一瞬のうちに、全てが元に戻ってしまった。そういう風に自分は感じているし、母と姉もきつとそうなのだろう。肩を並べて歩くことと自分が恥ずかしいこともあるかのように二人は俯いて、逃げ去っていくフナムシや、捨てられて乾涸びてころがったフグの死体を見ながら歩いている。

じいちゃんを持つてきた、じいちゃんの店では最高級の酒を、父ちゃんは一升瓶からコップに注いで一気に飲んだ。久しぶりに風呂に入ったこと、魚を守るという責任を果たしたこと、そして命拾いしたこと、父親はほつとしていた。あまり感情を読み取ることができないいつもの表情とほとんど変わらないのに、どこかが微妙に違っていて、父親が心から安堵していることが伝わってくる。

「因縁のついた魚やけん、買ったたかれたつちやなかとね」
こんな時にそんな言い方をしなくてもいいのに。母の声からは、心配しているのか、責めているのか、励ましているのかかわからない。もう少し上手に気持ちを言葉に乗せることができれば望んでいない摩擦を減らすことができるだろうに。

「よかじゃなかですか。船も沈まんやつたし、お父さんも戻

つてこらしたけん。それでよかじゃなかですか。お母さんは、なぜいつも悪かほうに悪かほうに物事は考えられるとですか」

姉は自分の気持ちがあるまま言葉に出るただだから、その分反発も大きい。

「あんた、ほんな、人んことば悪人になるとがうまかね。うちはただ心配しとるだけやろが。あんたこそ人の善意ば悪かほうに悪かほうに勝手に解釈する癖ば昔から持つとったばつてん、鳥ば出て行つてもいつちよん変わつたらん」

父親はコップ酒を三杯飲み干して、目が据わっていた。顔は既に真っ赤で、両目はギラギラした失った輝きで鬼の面を思い出させた。

「もうよか。おまえら女同士でどんだけ喧嘩ば繰り返せば気の済むとや。やりたかならば外でやつてこい。そこまで憎たらしかなら、殺し合いでましたらよかやなかや」

そして、酒をもう一杯一升瓶から注ぐ。

「けつ。おいがどれだけ辛かめばしとったか分からんとか。

お前たちは顔ばみれば喧嘩ばしよつて。分かつとるとや。おいは命ばかけて魚と船ば守つたとぞ」

「ふん。元はといえは操縦ば間違こうたあんたのせいやろが。甘か言葉に乗つて一緒になつたうちがばかだつたとよ」

ツカサは腹の中がぐつぐつと煮えている。母親に叱られて皮肉を言われるたびにそれは自分のせいだと思つてきた。でも、だんだんと大人に近づいてきて、そうではないかもしれ

ないという疑いが浮かんできていた。そして、今、その確信は強くなつた。もし自分が中学三年生か高校生ならば、包丁を持つてきてみんなを刺し殺すか、自分の腹をえぐるかもしれないと思つた。今、自分では押さえることのできない嫌悪感をこの大人たちに持つているとツカサは気付いた。

「ふん。もうどぎやんでもよか。おいは、あのまま海に沈んでフカに食われた方が幸せだったかもしれんな」

物事つて、こうして坂を下つていって、あつという間に全てが終わるのかもしれない。

「お前たちの顔はもう見とうなか。出て行け」

酒の勢いだけではない父親の声が、長屋のぼろい部屋に響く。

「出て行くくんはあんたの方やろ。娘つれてどこにでも行きたかところに行つて二度と帰つてこんでくれんね」

父親は浴衣の裾をはだけて立ち上がり、ふらふらする足で母親を蹴ろうとするがちやぶ台が邪魔になつて前に進めない。何を思つたのか、酔つた勢いなのか父親はちやぶ台の縁を思い切り蹴つてしまった。その痛みに顔をしかめる父親を母親は薄ら笑いで見上げた。酒の入つたコップは空を舞い、腕を組んで怖いものも何にもないというふううに唇を結んだ姉の顔に、ごつんと音を立ててあたり、酒が服に染みた。

次はどのような言葉を浴びせようかと思惑に取り付かれた父と母と姉の飛び出すほどに見開かれた目と額の皺に、ツカサは怒りを通り越した、大人の人間の滑稽さへの哀れみと同

情を感じた。逆上した母親と父親と姉をまとめるのは自分しかいないのではないかと、一瞬前には思いもしていなかった。考えが浮かんだ。

ツカサは土間に降り、プロパンコンロの上に魚を焼く網を乗せ、スイッチを九十度回転させて火をつけた。しばらく待つと、網は赤い光を放ち、それはだんだんと白い色に変わっていった。ツカサが作った小魚の干物はほんとに細くて小さいから、すぐに火が通ってしまうだろう。でも、小さいくせに油がたっぷり乗っているから、ものすごくいい香りが家中に漂うはずだ。魚が焼ける匂いを嗅いで気持ちの休まらない漁師の家族がいるだろうか。

ツカサは土間に置いた丸い竹のざるから一掴み魚を取り出して、それを焼けた網の上の一つずつ並べていった。魚はあつという間にじりじりと音を立てながら油をしたたらせ、その焦げた煙が濃く薄く、何本もの線になってのぼって天井に沿って広がっていった。家族たちはその匂いに気付き、激しい言葉のやり取りをひととき中断して、煙を肺の奥まで吸い込んで、自分が少しだけ、冷静になっていくのを感じた。

(愛知県知立市)

貴い陽のしたで

白井聖郎

真つ暗な、部屋だった。

部屋は生温かい水のような物で満たされ、僕はそこに一人で閉じ込められていた。

ときおり、部屋の外側から振動があった。目いっぱい力で壁を押したり蹴るのだが、少しでも動いてすぐに、また元の形に戻ってしまう。壁には一本だけ管があり、それに繋がっていた。出口の場所はわかっているが、開け方がわからずにいた。そして固く閉ざされているのだった。

「中心から円の縁へ、そして円の縁から中心へと一つの丸い壺に入った水は、外を、あるいは中を打たれたかに応じて動いていく」

真つ暗な部屋なのに、真つ白に光る輪のようなものが見えては、そんな言葉が聞こえてきた。それは理解の及ばぬ厳かな響きをたたえている。

長い間閉じ込められているが、この部屋からいつ出してもらえるのかは、わからなかった。手足を伸ばすと、壁にあたる。以前はそんなことはなかったのだが、今では体を丸めて眠るしかない。窮屈ではあったが、不思議と居心地はいい。それでも、体全体は少しだるかった。

女の人の声だけが、毎日聞こえていた。部屋の管理責任者は、この女の人のようだ。話しかけられることもあったが、響くその声色には、祈りのような優しさもあった。

穏やかな、時間と空間。いつ出られるかわからないが、出てからはやるべきことがたくさんあるとも言われている。

「実は皆、至高天を美しく飾っています。そして永遠の愛を感じながら、さまざまに異なる清らかな生を送っています」
遠い場所からまた、そんなことを言う澄んだ声が聞こえた。この部屋にいるときから時おり聞こえていた。部屋の責

任者の声ではなく、部屋の外からでもない。遠いが、すぐ耳元で響いているようにも感じられた。

罪悪感が、ないわけではなかった。

数か月前に仕事で大失敗をして遮二無二働かなくてはならないはずの隆市は、仕事を辞めてしまい、残っている一週間の有給休暇を使っているところだった。

劣悪と化した人間関係は、ただ個人の問題では済まされずに、周囲を巻き込んでいた。それとは別に、体重は一年半で二十キログラムも減っていた。病院には幾つも通っているが、退職をしてからは減っていくのだろう。

実咲を迎えに、幼稚園へ足を運んだ。明日から夏休みになる。仕事を辞めたことで、夏休み期間中の実咲の世話を、誰がどうするかといったやりくりをしなくて済みそうだ。癖になっっている、片足を上げて嬉しそうに跳ねる実咲の姿を見ると、罪悪感はいくらか緩む。海や動物園など、夏休みにはたくさん遊びに連れて行けるのだ。

家に着くと、隆市は幼稚園の連絡ノートを開いた。今までは真央がやっていたのだが、この一か月は隆市が家事育児の全てを担っている。予定では、この状況が秋までは続くはずだったが、そうは言っていられない状態かもしれない。真央が転院をしたのだ。

ふいに衝撃が来たので、僕は身構えた。

出口ではない場所から、鱗が入ってきたのだった。明らか

に外側から何者がやって来て、部屋をこじ開けようとしていた。敵意がないことだけは、なんとなく伝わってくる。逃げることも抗うこともできないので、この者たちに身を委ねるしかなさそうだ。助けに来てくれたのかもしれない。

そして光が、目に飛び込んできた。明るさに慣れるまでには時間がかかりそうだ。しばらくの間、目を閉じておこうと思つた。

居心地のいい、真つ暗な部屋から連れ出されたあと、僕は何か白い柔らかな物の上に置かれた。そして口に何かを、二度突つ込まれた。しばらくしてから、腕にも細い物を刺された。恐ろしかった。何人もの人が、慌ただしく動いているようだ。何なのだろうか。そう思ったが、目はまだ開けられなかった。ゆっくりと過ごせた部屋の中とは違い、この新しい部屋は騒がしい。

「聖なる光に包まれた生命は、すでに彼を満たすあの太陽に向いていた、あらゆる事物を満たすに足るあの善であるがゆえに」

どこからか、また声が響いてきた。部屋から出されたのだが、部屋の外にいる人たちの声ではないのだろう。それは、僕にとつては確信に等しい。理解が及ばないが、なにか崇高な現象や言葉なのかもしれない。

ゆっくりと、眠りたかった。

安堵と不安。あるいは、喜びと畏怖。

隆市の頭から背筋に、冷たい電気が流れたかのようにだった。それでも目頭は熱いまだ。

隆市は医師から手渡された入院診療計画書に、目を落としていた。幾つかの病名が並ぶ。治療上、輸血も行われるようだ。救命が困難なこともある、生命に危険を及ぼすこともある、などとも書かれていた。

真央には、順番通りに説明するしかなさそうだった。受け入れざるを得ない症状とはいえ、なかなか覚悟は決められないだろう。それは隆市も同じだった。

入院は三か月かそれとも半年くらいか。隆市は目の前で眠る赤子を見た。管が二本、口に入れてある。一本は人工呼吸器だ。両手にも点滴の注射が刺さっている。痛々しい姿だったが、それでも隆市には愛しく見えている。

また明日来る。目を閉じたままの赤子にそう呟き、隆市は真央のいる病室へ戻った。真央はまだ起きていた。実咲はすでに眠っている。

「いろいろと、覚悟はいるのかもしれない」

隆市は、医師に言われたことや渡された書面の内容を、真央に簡単に伝えた。

真央の表情にも陰りが差す。六時間前に緊急帝王切開をしたばかりだ。子の誕生を素直に喜びたい中で、衝撃的な内容ではあった。

「実咲にはなかなか会えそうにないのね」

NICU（新生児集中治療室）への入室には制約があり、

十六歳未満は入れないようだ。実咲が赤子と会えるのは、退院時になる。

真央が母子手帳を手にとった。

真央はひと月以上前から遠州病院で入院をしていて、さらに数日前から聖隷浜松病院へと転院をしていた。出産予定は十月だったのだが、三か月も早く子は産まれてきた。

「小さかったでしょ」

ベッドに寝転ぶ真央が微笑んでくる。真央はトイレや洗面以外は、ほとんどベッドで寝たきりの生活をしていた。点滴も、ひと月以上もの間二十四時間ずっと打っていたため、腕には鍼の跡が何カ所も残っている。

「うん」

隆市は実咲の頬を撫でながら答えた。赤子の体重は七六四グラム、超低出生体重児だ。

「病気もこれからどうなっていくのかね」

「私たちには、何ができるのかなあ」

真央が、胎児のいなくなつたお腹をさすっている。梅雨明けと同時に四人家族になつたというのに、隆市たちには、想像もつかない将来への不安が立ちこめる。

「でも僕は、妻と子が生きているだけで、正直ほっとしているよ。病気だろうがなんだろうが、我が子だから、どんな姿でも愛おしい」

頷きながら、真央が微笑んでいた。

僕は、宿題のことをふと思ひ出した。

皆から「かみさま」と呼ばれていた人が、僕に宿題を出していた。しかし、その宿題が何なのかを、すっかり忘れてしまったのだ。

たびたび白い光のような物を感じては、言葉が脳裏にこだまする。それは真つ暗な部屋にいるときから繰り返されていった。響く言葉は、いつも違っていた。おぼろげな光に包まれて見えはしないが、かみさまと呼ばれている人が来るときもあった。他にも背中に翼を持った人が囁くときもある。

「あなたの父母を楽しませ、あなたを産んだ母を喜ばせよ」
そんな言葉が聞こえたと同時に、誰かの気配を感じた。

言いようのない安心感が、身を包む。聞きなれた声が聞こえる。この人だ。この女の人こそが、かつての部屋の管理責任者だ。僕にははつきりとわかった。この人こそ、母なる人だ。目を開けようと思ったが、まだ開くことができなかった。手足を動かそうとしたが、思うように動いてはいない。

もう一つ、まだ聞きなれない低い声もした。おそらく、父なる人なのだろう。僕は嬉しくなった。二人の匂いからは、他に変わることでできない温もりが感じられた。

子の名前を貴陽たかはると決めた。「貴い命が、太陽のように周囲を照らし、光り輝くように」との願いを込めていた。思い煩うことは大きいが、それでもやはり誕生の喜びが勝っている。貴陽の退院や、家族四人で出かける姿を想像しては、目

尻が下がるのだった。

子が産まれて一週間が経ち、真央が退院をすることになった。実咲が片足を上げて跳ねている。一か月以上もの入院の間、実咲は「お父さんがいるから大丈夫」と日常生活での母親不在の寂しさに耐えていた。病室から出ると早速、真央の手を握りしめていた。

主治医から貴陽の状態の説明を受けた。

貴陽の体に悪い影響を与えている病気が主に三点あるようだった。一つ目は脳室内出血で、今現在の重症度は四段階中二番目で、出血の拡大傾向は見られないらしい。

二つ目は動脈管閉存症と呼ばれるもので、大動脈から肺動脈へと血液が流入してしまっているようだった。全身に流れるべき血液の一部が、流れずにただ心臓内で循環しているのだという。薬による治療で一端は治癒したかに見えたが、再発をしまつてしまっているようだ。それは心臓や肺への負担が大きいこととさらに血液不足から腎臓、腸、脳への悪影響がある。その治療のために、窒素を吸入することも伝えられた。酸素濃度を減らし肺動脈を締め、肺血流量を制限するらしい。治らない場合は、心臓の手術が必要になるそうだ。

話はそこで一息ついた。隆市は何度も深呼吸をした。思いのほか状態は良くないのかもしれない。努めて冷静に聞いてはいたが、動揺は抑えられない。それは真央も同じだろう。

そして三つ目の説明が始まった。生後すぐに受け取った入院診療計画書に書かれていた病気だった。非常に都合の悪い

ことに、動脈管開存症と同じ悪影響を及ぼす心臓病を、持病として同時に患っているというのだ。冠動静脈えんどうみゃくもしくは大動脈肺動脈窓まどのどちらかのようなのだが、現段階では断定できないらしい。手術は避けられないようだが、未熟児の状態で手術を行うのは非常に困難だと言われた。心臓が小さすぎるのだ。動脈管開存症とは別に、どのみち心臓の手術は不可避な状態だ。

余りにも小さい心臓のため、その二つの病が貴陽の体にとれほどの悪さをしていくのかは、注視していくことになりそうだ。

希望が先行していた気持ちをも、打ち砕かれたような思いだった。真央が教えてくれて、早産で産んだ母と子の、幾つかのブログや本を少しづつ読んでいて知っている内容もあったが、持病でも心臓を患っていると聞かされ、隆市は必死に涙をこらえた。

主治医からの説明を聞き終え、貴陽の所へと向かった。皮と骨だけしかないような小さな体に触れると、視界が揺れだして思うように見えなかった。七種類の点滴の他に、輸血もしているようだった。

僕を呼ぶ声は、二十種類以上ある。声によって呼ばれ方も違うようだった。つじくん、つじさん、つーじー、たかくん、たかはるくん。いろいろと呼ばれているが、どれもが僕のことなのだろう。

二人が入って来るのがわかった。

母なる人と父なる人だ。その二人が部屋に入って来るときだけは、呼ばれなくても触られなくてもわかるようになった。匂いだとか雰囲気だとかでわかる。間違ったことはない。その二人には「たかはる」と呼ばれる。

まだ会ったことはないが、「おねえちゃん」という人がいるようだ。どうやら僕にとっては特別な人らしい。会えるのが楽しみで仕方がなかった。

(ママ、パパ)

目を開けて体を動かすと、目の前にいる二人が大喜びをしたら。僕も笑った。口には管が入っていて声も出ないので、うまく笑えないのかもしれないが、それでも、二人には伝わっているような気がした。母なる人の手が、僕が寝転がっている入れ物の中に入ってきた。大きな指が手に触れる。力いっぱい握ってみた。この手が、一番好きだった。この匂い、この温もり、この優しさ。かけてくれる言葉の一つ一つが、喜びだった。

そのあと、父なる人の手も入ってきた。さらに大きな手で、この指先だけに触れるので精いっぱいだ。力強く温かい。この人は必ず頭を撫でてくれる。それが、好きだった。僕は大きくなったら、この人のようになりたいと、いつも思っていた。

二人が帰り、僕は眠りについた。本当はずっと側にいてほしいのだが、そういうわけにもいかないのだろう。

まどろんでいると、頭の中で薔薇の花のような白い光が輝いていた。僕はこの景色が好きだった。光の中で翼を持った人が口を開く。

「神は、その人が耐えることのできない試練を与えない」

僕には、かみさまと呼ばれる人がどこにいるのかはわからなかった。ただ、どこかにいるらしい。試練というものも、何かはよくわからなかった。

体の中が痛みだして目覚めた。もともと違和感があったのだが、何か、非常に不愉快だった。青の服を着た男の人が真剣な表情をして何かを見ている。そばにいる白の服を着た女の子と、ただならぬ雰囲気をもっとしている。鈍い痛みが続いたが、しばらくすると和らいでいった。薬を体の中に入れてられたのかもしれない。

(ママ、パパ)

僕はひとり言のように呟いた。

(早く、会いたい)

女の子がすぐに、そばに来てくれた。

朝食を済ませて隆市は食器を洗っていると、真央の携帯電話が鳴った。

「主人もいるので、一緒に行きます」

話をしている真央のその言葉が聞こえたときに、隆市は思わず手にしていた皿を落としてしまった。いい話であるはずがなかった。

貴陽の心臓の手術が、急遽午後に行われることになった。そのための説明を、午前中にしたいそうだった。まだ産まれて十日しか経っていない。本来、まだ胎内にいるときなら、ようやく骨格が整い始めるころのはずだ。

主治医から説明を受けた。大動脈と肺動脈をつないでいる細い血管を縛るといふ。胎児期には誰しも持っている血管で、出生後は自然と閉じるのだが、未熟児として産まれた貴陽の場合は、自力では閉じなかった。一度は薬で治療していたが、再び血流が認められていることは、三日前の説明で聞いていた。あらゆる内科的治療を駆使していたが、改善を望める状態ではないのだという。循環器科と心臓血管外科の医師と検討し、手術が最良の判断だと結論づいたようだ。

真央の体が震えているのが伝わってきた。

「前回もお話ししましたが」

主治医の説明が続く。今回の手術で動脈管を閉じたとしても、もう一つの心臓の病は残るのだという。同時には手術ができないようで、また、その病は全身が未熟な状態での手術にはリスクが大きすぎると、再度言われた。

主治医に続いて、手術を実施する心臓血管外科部長からの説明もあった。

隆市の背筋に、一筋の汗がじわりと流れた。帰りが何時になるのかわからなかったのも、実咲の面倒は母親に頼んだ。

貴陽や医師たちと、外科手術を行う病棟へと向かった。貴陽は眠っているように見えた。貴陽に声をかけたあと、隆市

は医師や看護師たちに頭を下げた。

貴陽に対して何かしてやりたいが、見舞いに行くこと以外に何もしてやれない現状が、非常にもどかしかった。手術を待つ間、祈ることしかできなかったが、真央が隣にいることで、押し潰されそうな気持ちを持ち堪えた。

デイルームと呼ばれる、NICUには入れない人のための大きな部屋があり、隆市と真央はそこで貴陽の心臓の手術が終えるのを待っていた。隆市は時計を何度も見ていた。結婚指輪を何度もはめ直したり、無為に歩き回ることもあり、デイルームにいる他の人からは、胡乱うらんな人に見えていたのかもしれない。

無意識の中でも必死に生きようとする貴陽の前に、隆市はただただ命の貴さ、不思議さ、力強さなどを感じていた。そして、涙ぐんでいた。現実から目を背けずに、受け入れていくことは真央と話していた。どんな状態だろうと、かけがえない子なのだ。そして、実咲へも、変わらぬ愛情で接していくのだ。

数時間して、手術が無事に済んだことを、医師から直接伝えられた。退院まで、あと幾つの山を乗り越えていくのだろう。そんなことを思いながら、隆市は脱力してしまった。そしてまた涙ぐむのだった。

気だるかった。左の胸が痛む。父なる人と母なる人が、目を真っ赤にしながら側にいてくれたので、安心して眠ること

ができた。

長く眠ったあと、体は少し楽になっていた。ただそれでも、何かが溜まっているような、滞っているような感覚は残っていた。

僕が自分の中で何か異変を感じると、必ず青か緑の服を着た男の人が来る。他にもかすかな違和感でさえ、白の服を着た女の人が来る。だから僕はいつも、安心して眠ることができるのだった。

目がうまく開かなかった。腫れぼったい感覚がある。左の目しか開かなかった。

苦しいとき、寂しいときによく、父なる人や母なる人が来てくれる。

寝る、起きる。口に何か母なる人の匂いのするものを含まれる。たまに体を拭かれる。その繰り返しだった。来てくれる白の服を着た女の人は、たくさんいる。目が覚めると違う人がいたりする。男の人は限られていて、何となくだが覚えた。

目が覚めているときに母なる人たちが来ると、気持ちが高まってくるし、目覚めたときに側にいると、嬉しくて仕方がなかった。

三、四時間に一度、真央は毎日搾乳をしていた。そしてそれを冷凍保存していた。

貴陽には一日に何回か、綿棒に浸した母乳を口に含ませる

程度だった。産まれてから一度も、腸が活動していないと聞いている。栄養は全て点滴だった。

同じ病室の他の赤子の泣き声を聞くと、真央はつらそうだった。貴陽は泣き声をあげられない。風呂に入れることも出さず、ただふたの取りつけられた保育器に手を入れるだけなのだ。そうして、貴陽に触れたり体を簡単に拭いたりするだけであった。

心臓の手術を終えていつの間にか一か月が経っていた。閉じた動脈管は予想以上に太い血管だったらしい。術後は点滴の数が大幅に減って、隆市たちは安堵していた。しかし、それは続かなかつた。期待していたほどの回復が、その後の貴陽には見られなかったのだ。もう一つの心臓の病のせいだろう。

そして八月の下旬には、さらなる容態の悪化を知らされた。胃か腸に孔が開いているようだった。胃に孔が開いている場合は、自然に閉じるか、手術が必要なのだという。腸に孔が開いている場合は手術か、最悪の場合は救命が困難だとも言われていた。

「貴陽は、ひよっとしたら実咲に会えずじまいになるのかもしれないね」

隆市は真央に、心の隅に潜む本音を言ってしまった。真央もそれは薄々とは覚悟しているようで、ただ、頷くだけであつた。

言いようのない寂しき、埋めがたい何か、日々の生活に

まわりついてくる。新聞を読むこともニュースを見ることもなくなっていた。実咲と遊び、貴陽の見舞いに行く。それだけの生活だった。そして、それ以外には、考えることもなかった。

体重が千グラムを超えたが、それからは測ることがなかった。貴陽が異様に膨れだしたからだ。体中がむくみだした。骨と皮だけだった体が、まるで風船を膨らませたかのように膨張したのだ。

腹に管を刺すことが決まった。それで、腸の中にたまったガスを取り除くようだ。そして時期をみて、胃ではなく、腸の手術をすることになった。腸のどこに孔が開いているのかを見極め、その場での対応となる。

そして主治医からは、別件の話も聞かされていた。まだ正式な話ではなく、ひとつの案だった。

栄養を吸収する腸が機能していない中、体内に直接十種類近く点滴を打っていたのだが、ある点滴のために肝臓の調子も悪いのだという。腸を手術しても腸が驚異的に回復した場合は、肝臓への負担が少なくなるが、そうならない場合も多分にある。そして、その肝臓に負担のかかる点滴はやめられないのだが、一つだけ手があると話をしてくれた。

日本では承認されていない薬を、個人輸入として海外から取り寄せ活用する。

主治医がそう提案してきた。そうなる可能性もあると。最終的に判断するのは隆市たちのようだ。ただ、病院内でも協

議が必要でさらに、未承認ゆえに煩雑な事務的手続きが必要になるため、時間がかかるという。

突然の話に呆然とする隆市たちだったが、どうにか貴陽を助けたいという主治医の気持ちも、十分すぎるほど伝わってきた。隆市たちと似たような年齢の主治医二人には、心から感謝し敬意を抱いている。

隆市は貴陽の無事を祈ってきたが、その無事という境界が、初めは健康な体への回復だった。それが、自宅療養や後遺症が残つてでも退院でさえいいとなり、そして、生きてくれさえすればいいとまで、段階が下がっていた。

隆市は誰もいない部屋で、むせび泣いた。希望は捨てきれないが、貴陽のいない未来の覚悟が、本当に必要なかもしれない。実咲には会えないのかもしれない。貴陽が太陽の光を見られるのは、いつになるのだろうか。不安というよりも、切実な希望だった。

明るい照明が目の前にある。見慣れない人たちに囲まれた。腹には太い管が刺さっていた。それで腹の中の違和感がいくらか和らいでいた。

そして今から、さらに何かが始まるのだろう。先ほどまでいた、母なる人と父なる人の顔つきが、涙ながらに強張っていた。僕はその顔を見るのがつらくて、目を閉じていた。

「耐えることのできない試験を与えない」と誰かに言われたことを思い出した。僕はまた、みんなに笑顔を見せたいの

だ。そしてみんなの笑顔も見たい。

腹に何かが刺さった。そして、腹が横に裂かれていく。薬のおかげで、痛みはなかった。男の人の息遣いが、静かに漏れた。手が、腹の中に入っていく。体が熱いのか冷たいのかわからないが、意識が少しずつ遠のいていきそうだった。

(ママ、パパ、怖いよ)

両手を顔の前で握りしめている二人の姿が浮かんだ。早く二人の元へ行きたかった。頑張ったねって、褒めてくれるのかな。僕は全身の血の気が引いていくのをはつきりと感じながら、それでも目の前の人たちの緊迫した動きに、敬虔な想いを抱いていた。

腸の手術を終えてから一週間経っても、貴陽の容態は良くはなっていないかった。

貴陽の左わきの下には心臓の手術で切った跡があり、へその上には横腹から横腹へ、一直線に腸の手術の跡が生々しくある。他にもその裂け目の下側には、へその左右にそれぞれ腹水を取るための管と、人工肛門がある。腸は上から三分の一の所で、体外へと繋がった。排泄物はそこから出ていく。

主治医からまた、説明があるのだという。隆市は、海外から薬を取り寄せる件だと思った。あらゆる手立てを駆使して貴陽を助けようとしてくれる二人に、頭の下がる思いだった。

面談室に入った。緑の服を着た物静かな主治医が話を始めた。何かあったのか、青の服のもう一人の主治医はうなだれ

ている。

話は、薬の件ではなかった。手術して残された腸に、また孔が開いたらしかった。隆市の体は、震えだしていた。話は続いた。

前回の手術では、体中の血が入れ替わるほどの出血だった。また同じ手術をすると、それ以上の出血の可能性があるという。そして手術を終えても、腸が機能するのは不透明だった。産まれて一か月半以上、腸はまだ一度も活動していない。その上、余りにも危険すぎる再手術のため、術後数日で命を落とす可能性もあるそうだった。しかしそれでも、現状は手術以外に治る可能性は残されていないのだという。出来る得る内科的治療は、すでに最大限施され続けている。

手術の後にも、悪くなってきた腎臓の処置のために、海外から薬を取り寄せるかという案件がありさらに、もう少し体が大きくなってから心臓の再手術もある。そのときの手術でも、体中の血液を体外に出すと聞いている。

うなだれていたもう一人の医師が、顔を上げた。目には涙を浮かべている。

「今日のレントゲン結果は、我々にもかなりショックな内容でした」

主治医が一度呼吸を整えた。

「貴陽君を元気に退院させることが、今まで我々の目標でした。しかし」

隆市はその後に続く言葉を、聞きたくなかった。主治医が

隆市と真央を交互に見る。

「しかし、それが、出来なくなりました」

隆市の全身の身の毛がよだった。真央の粗い呼吸が聞こえてくる。主治医が続けた。

「最悪の可能性が高い、リスクの高すぎる手術を数日内に行うか、あと、これはご両親の判断によるのですが、もう一つは看取するという方向に切り替えるか、どちらかの選択になつてしまいます」

面談室の時間が、止まった気がした。ほんの数秒だったのだろうが、長く冷たい沈黙が続いた。同席する看護師の目にも涙が浮かんでいる。鼓動が速まっている。薄々覚悟はしていた。それでも、こんなに早く、貴陽の命の幕は、閉じてしまふのか。

「看取るとしたら」

隆市は、震える声を出した。

「貴陽を、実咲に会わせてあげることが可能ですか」

「できます。他にもご要望があれば、可能な限り叶えていくつもりです」

主治医が即答した。治療の目的を、疾患の治療から緩和医療にすることで、家族がより良い時間を過ごせるようにしてくれるという。専用の部屋に移動する人手、貴陽の状態などの条件がそろえば、実咲と面会ができるようだった。段階的に様子を見て、今までできなかった抱っこや入浴もできるようだった。

この日はそれで話を終えた。
「どうして泣いているの？」

面談室から出ると、デイルームで保育士と待っていた実咲が、二人を交互に見ながら尋ねてくる。実咲に伝える時期、伝え方、どういった反応をするのか、そんなことをぼんやりと考えようとしたが、目の前に付きつけられた理不尽とさえ思える現実、隆市は体の震えが止まらなかった。実咲を抱き寄せる真央の目も、真っ赤になっている。

二十歳前後のときに、隆市は自身の父親や祖父母が相次いで病死して、さらに、火災にも遭っていた。そのときの諸々の喪失感や苦悩は、まるで、このときのため、自分の子を失うときのための、練習だったのかとさえ思えてきた。

なぜ自分の子が、という考えは、不思議と産まれてきたときからなかった。貴陽が産まれてきた直後には「産まれてきてくれてありがとう」と言い、真央には「産んでくれてありがとう」と言ったのは、本心だった。縁だとか運命だとかいった言葉で簡単に片付けて、受け入れようとしていたのかも知れない。あるいは妻の一か月の入院中に、母体や胎児の、命の営みに触れて、畏敬の念を抱いていたからかもしれない。いつまでもつのかわからないが、貴陽と一緒に、穏やかな時間を作っていこうと思った。

周りの雰囲気が変わった。

研ぎ澄まされた刃を目の前にした緊張感はなく、陽だまり

の中に寝そべっているような感覚だった。何かが、変わったのだろう。

毎日受けていた検査も減っている。目を開けると、マスクをした女の人の手が額にあてられた。この人の声も温もりも、好きだった。

何かが変わった中で一番嬉しかったのは、母なる人に抱かれるようになったことだった。優しく温かく懐かしく、その腕の中では包まれるように眠れた。この人に抱かれたくて、暗い部屋から出てきたのだと思ったのだ。この人に抱かれたくて、毎日を送っていたのだ。たくさんの女の人が接してくれていたが、やはり母なる人だけは別格だった。

そして、父なる人も抱っこをしてくれた。初めて抱っこをされたときのことを覚えている。震える大きな手、伝わってきた緊張感、そして歌を歌いだした。歌がすぐに終わってしまったので、何事かと思わず目を開いてしまったのだ。父なる人は、泣きじゃくっていた。なぜかはわからなかった。何人かの手に添えられて、背中と尻と足だけだったが生ぬるい湯につかることもあった。まるで、産まれてくる前の、母なる人の中の暗い部屋の中のように心地よかった。

眠るのが楽しくなった。起きるのも楽しい。そして何より、二人が来てくれるのが、待ち遠しいのだった。

看取る。

真央とは意見が一致していた。貴陽は文字通り命がけの手

術を二度乗り越えていた。十分に頑張ってくれた。もう、休んでもいいのではないかと思ったのだ。それに、少ない可能性に賭けて、それで命を落とすことになった場合、四人家族として過ごす十分な時間がなく、抱っこもゆつくりできなくなるのではないかという、恐れのほうが強かった。であるならば、残された時間を、精一杯悔いのないように使いたかった。

吹っ切れたわけではなかった。この判断が正しかったかどうかは、終わってみなければわからない。貴陽の体が持ち堪えられないのではなく、貴陽を心配する自分たちの心が耐えられなくなっているのかもしれないからだ。貴陽の命を、未来を、尊厳を、奪っている行為なのかもしれないのだ。

だからこそ、残された時間を、有意義に使うことが、自分たちのそして、貴陽のためにもなると思うようにした。

主治医とは、貴陽とどのように過ごしたいかを話し合っていた。一度でいいから泣き声が聞きたかったが、人工呼吸のために口に管が入っていて、それは無理だった。他には実咲との面会、抱っこ、入浴、なども伝えた。家族全員での写真撮影も可能だった。他に、一度でいいから太陽の光と風を感じさせるために、外出がしたいと希望を出した。それは一番ハードルが高く、実咲との面会以上に人手が必要になるようだった。

貴陽のためというよりも、寂しさを紛らせるための、自分たちへの慰めかのように、ハンカチやペンダントなど、家族

四人お揃いの物を作りはじめた。他にも、保育器には家族の写真や実咲が書いた絵なども飾った。

そして看取ると決めて二週間が経ち、ようやく実咲との面会が実現できる日になった。面会できると実咲に言ったときは、片足を上げて跳ね続けていた。幼稚園にもその日は休むとあらかじめ伝えていた。幼稚園には、真央の入院中から度々様子を伝えていたし、看取ると決めたときにも園長先生に報告や相談をしていて、実咲に対してそれとなく気を遣ってもらっていた。

「貴陽くんには、写真で会えるから大丈夫」といつも言っていた実咲だが、会いたくて仕方がないことは十分すぎるほど伝わってきていた。「お父さんがいるから大丈夫」と真央のひと月の入院中にも弱音を吐いてこなかった実咲だが、いざ退院すると真央の隣を一日中離れなかったことを思い出した。理解しきれているのかはわからないが、貴陽が近いうちに死ぬことはすでに知っている。

隆市はよく泣くようになった。部屋の中でも、車の運転中でも、買い物中でも、何か貴陽のことを思っては、涙を流していた。そして真央が、隆市と実咲が寝入ってから、ひとり震えているのも、知っていた。

仕方のないことだ。そしてやはり、看取ることにして良かったと思っている。貴陽のために何かしてやれないかと二人で考えたり出かけたり、話し合ったりする時間がある。もし手術に踏み切ってすぐに命を落としていたら。それを思う

と、絶対に後悔するはずだった。であるなら、看取ることではとときでもいいから穏やかな時間を持ちたかった。

面会専用の個室に、主治医や看護師たちがベッドに横たわったままの貴陽を連れて来た。実咲が、目を輝かせながら飛び跳ね続けている。貴陽が産まれて二か月以上経つての、初めての対面だ。

「貴陽くん、お姉ちゃんだよ」

緊張気味の小さな声で、隆市に抱えられベッドを覗き込みながら、実咲が貴陽を呼ぶ。頭を撫でる。夢にまで見た光景だ。隆市の目は真っ赤になっている。

小さい、かわいい、と貴陽を見てはしゃぐ実咲。何度も何度も、お姉ちゃんだよ、と言っていた。

貴陽を風呂に入れることになった。ベビーバスが用意される。入浴では常に、看護師が二人で貴陽を支える。点滴の刺さっている両腕や管の入った口が湯にあたらぬようにと、幾種類もの点滴などの管を持っていなければならない。そうした上で真央が体を拭うのだった。実咲も貴陽の足を洗っている。腹部に幾つもある傷跡をよけながら、丁寧な体を拭いた。

部屋の移動や入浴で貴陽が疲れた様子だったので、抱っこは午後になつた。点滴や心拍などのモニターは別室でもわかるようで、しばらくすると主治医や看護師も席を外した。定期的に見に来てくれるようだし、ナースコールも用意されていた。昼食を部屋の中で済ますと、実咲は塗り絵

や折り紙などで遊び始めた。貴陽に見せたいようだ。

一つの部屋に、四人だけになった。初めての、四人。念願の家族水入らずだった。

午後になり、初めに実咲に抱っこをさせることにした。人工呼吸器をつけているので、真央が抱えるときも看護師の補助はある。椅子に座る実咲、ゆっくりと貴陽が膝の上へ運ばれる。緊張した面持ちの実咲に、笑顔がこぼれる。弟を見守る姉としての表情になっていた。その後真央が抱っこをすると、実咲は隆市と一緒に貴陽に対して絵本の読み聞かせをした。毎晩隆市が実咲に歌っている子守唄を、貴陽に歌ってあげました。

真央も幸せそうな顔をしていた。この瞬間が、四人でいられるこの時が、本当に幸せなのだ、隆市は思った。

「このままの幸せの状態で、家族心中でなければいいのにね」
隆市は思わず呟いていた。真央が苦笑いをしている。本音とも冗談とも取れなかったのかも知れない。

隆市は何度も、ハンカチを取り出しては、目に押さえつけていた。

母なる人や父なる人に比べると、明らかに弱々しい腕だった。

おねえちゃんだ。

それは確認するまでもなく確信できた。僕は嬉しかった。この日を、心から夢見ていた。「お姉ちゃんにもうすぐ会え

るね」と、白の服を着た女の人たちが、いつも言っていたのだ。一つの家族になれたのだと、心から実感できた。

目を開けること。手足を少し動かすこと。それだけしか出来なかった。体が重く感じられて、それも思うように出来ない。もどかしい気持ちは常にあった。それでも、僕は力を振り絞って、みんなの喜ぶ顔を見たくて、動いていた。

おねえちゃんが、父なる人と一緒にお話を聞かせてくれたり、歌を歌ってくれた。絵も見せてくれた。歌は、父なる人が初めて抱っこをしてくれたときに聞いた歌と同じものだ。母なる人の腕の中は、とても気持ちよくて安らぐことができた。

また、四人で過ごせるのかな。楽しみなことが、ひとつ増えた。

個室に移動しても面会をしても、貴陽の容態に急変がなかったのだ、実咲との次の面会日も決まった。九月二十九日。その日に、念願の日光浴もしてくれるようだ。

看取ると決めてまだ二十日も経っていない。それでも、次々に希望を叶えてくれる主治医に、隆市たちは感謝をしていた。それと同時に、貴陽の命が長くないのかもしれないとも思っていた。家では実咲が貴陽の話をたくさんしてくる。実咲は幼稚園でも先生に貴陽の話をしているようだった。

この幸せな時間がいつまでも続けばいいのにと、隆市は思っていた。それでも、避けては通れない現実はいつか来る。

真央とは何度も話し合っていた。新生児用の小さな棺や骨壺も決めていた。葬儀会社へは資料も請求してあった。まだまだ先のことであったてほしいが、願望^{ワシ}だけではなく、しっかりと現実も受け入れていかななくてはならない。

貴陽のために出来ることは何か。それはそのまま、自分たちが悔いなく貴陽の最期を迎えるための、気持ちの整理でもあった。

他の病床の赤子の泣き声を、羨ましく感じることもありまた、妬ましく思えるときもあった。ただ、どの赤子も、必死に生きているのだ。それだけはわかるし、他の赤子や家族の幸せを素直に願うこともできた。

短い命、貴陽は幸せだったのだらうかと思いつながら、仰ぎ見る満月が少しずつ揺らいでいくのを、隆市は気にも留めずにいる。

息が、苦しくなってきた。

何をするにも、力が湧いてこない。腕を動かそうと思っても、力が入らなかつた。体に痛みはなかつた。

目を閉じると、また白い薔薇に似た光の奥から、声が聞こえてきた。

「天上で生きるためとはいえ地上において死なねばならぬこと。それを嘆く人は、その天上にある、永遠の慈雨の与える爽快さが見えてはいないのだ」

僕はまた、かみさまから言われた宿題があったことを思い

出した。ひとつだけ、何か宿題があった。ただやはり、思い出せなかった。体が動かないのに、何をやれというのだろう。僕は、いったい何なのだ。何だったのだろう。僕は、何を、求めていたのだろう。寝ても目覚めても変わらぬ景色、変わらぬ日々。僕は、何をしていただろう。

物言えぬ侘しさが、まとわりついてきた。今までそんなことはなかったが、体だけではなく気持ちも、何となく穏やかではなかった。体が寒い。眠ってしまいそうだったが、このまま眠ってはいけないような気がした。

(ママ、パパ、おねえちゃん、怖いよ)

僕はただ、三人に会いたかった。

目を開けると、ようやく白みだした外からの淡い光が、カーテンにあたっていた。

真央の携帯電話が鳴っている。病院からの電話で、貴陽の心拍が下がりましたのだという。着替えたあと、パジャマのままの実咲を抱きかかえ、急いで車に乗り込んだ。

病院へ着くと、主治医ではなく夜勤の医師から説明を受けた。夜中から数値に異変があったそうで、明け方にはもうはつきりと異常値を示したという。長くても今日一日の命だと、はつきりと伝えられた。

隆市の顔が強張った。看取ると決めたとはいえ、どこかで勝手に、十月の実咲の誕生日はまた四人で過ごすことができると、安易な希望を抱いていた。浮かれていた気持ちは、吹

き飛んでいた。

隆市は迷っていた。奇しくもこの日は、念願の日光浴の日であった。貴陽に外の空気に触れさせてやりたい。風や太陽の光を感じさせたい。しかし、それが貴陽への負担になるようなら、控えたほうがいい。命はもう長くない。今まで病院側は要望に応えてくれていて、残された唯一の要望が、今日の日の日光浴だった。叶えたいが、隆市は、躊躇していた。ただの自己満足でしかないのかもしれないのだ。やめよう。隆市は、そう思った。

緊張感とざわついた雰囲気伝わってきたが、僕はなかなか目が開けられなかった。何か重い重りが、体全体を包んでいるかのように、しばらくは動けなかった。

(ママ、苦しいよ。パパ、怖いよ。おねえちゃん、そばにいて)

意識が途切れ途切れになりそうだった。かみさまからの宿題は何だったのだろうか、僕は何度か思い出そうとしたが、うまく考えられない。少しか、朦朧としていた。

青の服を着た男が来たようだった。助けて。思わず呟いていた。それは、僕だけを助けてほしいのではなく、暗く淀んだこの周囲の雰囲気、救ってほしかった。命が尽きるのだと、僕はとうとうはつきりと自覚した。

主治医の一人が出動してきた。主治医たちは、ふた月もの

間、日々ぎりぎりのところで判断を迫られていたに違いなかつた。出来得る限りの治療を施し、様々な想定の中で考え得る最善の処置をしてきてくれたのだ。

貴陽の様子を見たあと、深刻な表情が、柔らかなものになつた。隆市に顔を向けてきた。

「やりましょう。外に、出しましょう、貴陽くんのためにも」その言葉は、躊躇して後ろ向きになつていた隆市と真央の青ざめた表情に、力をみなぎらせてくれた。

主治医や看護師たちが慌ただしく動き始めた。貴陽は保育器から移動用の大きなベッドに移されるようだが、その前に実咲に抱っこをさせた。実咲の見せる姉としての眼差し、貴陽の弟としての寝顔。隆市は、目頭を熱くしながら二人の写真を撮つた。病室内の空気も一変して明るいものになつていく。家族最期の一大イベントなのだ。

貴陽がベッドに寝かされた。点滴などの数値が現れるモニターは、そのベッドの上に置かれた。人工呼吸器には、主治医が手動で空気を送り込んでくれるようだった。普段は閉ざされている扉が開き、屋上に出ることができた。皆の顔にも、自然と笑顔が起きた。貴陽に直射日光が当たらないように、看護師が大きなパラソルを持っている。

「貴陽、太陽だよ、風だよ、空だよ」

隆市はそう言ったあと、思わず、顔を手で覆っていた。念願の、陽の光だ。そして最初に最後の、外の世界。貴陽が産まれてからというもの、笑うときにもどこか心に悲しみがあ

り、喜びの中にも憂いがあった。それでも、看取ると決めてからの念願だった、太陽の光を、こうして届けられた。名前のごとく、たった一度の貴重な太陽になつてしまつたが、隆市の想いは満たされていた。

貴陽と隆市たちのために、主治医や担当看護師の津本など、病院スタッフが七人も時間を割いていた。主治医の二人が付きつきりで貴陽の様子を看ている。駆けつけてきた真央と隆市の母親の目にも、それぞれ光るものがあった。

実咲に続いて真央が貴陽を抱く。目を赤くさせながら、それでも慈愛に満ちた、清々しい表情をしている。念願が叶つたのだ。貴陽に対してやってあげたいことは、満たされた。

主治医の二人の顔もほころんでいる。隆市は、この二人には感謝してもきれない気持ちを抱いていた。そして、目の前で涙ぐみながらも微笑んでいる津本を筆頭に、たくさんの看護師の、貴陽に対する愛情をありがたく思っていた。

おそらく、いや、間違いなく、貴陽は今日、息を引き取るはずだ。それでも、隆市も真央も、出来得る限りのことを貴陽にやってあげられたと思つていた。悔いはもう、ないのだ。

緩和医療にしてよかったのだと、隆市はようやく、はつきりと確信をもてた。産まれて二か月と十日。もつともつと生きてほしかつた。もつともつと長く、四大家族でいたかつた。それでも、それが叶わない現状の中、十分に幸せな時間を、過ごすことができた。たまたま仕事を辞めていたことも、こうした時間を、家族で共有するためだったのかもしれない。

毎日見舞いに行けた。主治医たちの話も、真央と二人で聞くことができ、受け入れていく心構えは準備をしていた。もう、思い残すことはなかった。

三人家族に戻ることを、受け入れつつもやはりどこか、拒みがつている自分がある。それは当然のことだ。これから何か月も何年も何十年も、貴陽が生きた時間よりはるかに長い年月、貴陽を意識していくのだろう。薄れゆく記憶を恐れながら、少なすぎる思い出を嘆きながら。そうしてその中に、喜びや安らぎを見出していくのだ。

撫でるような風が吹いている。風は、落莫らくもくとした秋の薫りを、密やかに孕んでいた。

暖かい。

いつもとは違う光だった。そして、顔には柔らかな風を感じていた。

(おねえちゃん)

か細い腕に、抱かれた。一度抱っこをしてもらってから、この感触を忘れはしなかった。

「生命の光が私を囲んで燦然と輝き、そして私をその大いなる輝く覆いによって包む。愛が、常にこの至高天エンピレオを静謐に保つ」

耳元でまた、囁き声が響いた。そしてふと、かみさまからの宿題を、僕は思い出した。

「人の愛を、温もりを、優しさを、学んでくること」

それが宿題だった。僕は微笑んだ。簡単な宿題だった。今まさに、そして今までもずっと、人の愛に触れていた。

母なる人に抱かれた。この人こそが、その最たる存在だった。隣には目を真っ赤にしている父なる人もいる。愛も、温もりも、優しさも、生きていくことの痛み、それは体の痛みと、胸の奥を締めつけられる痛みの両方、そして生きていく喜びも、味わえた。

(ありがとう。僕は、幸せだったよ)

声には出ない。それでも、この二人には伝わっているに違いない。

すっかり忘れていたが、もう一つ思い出したことがあった。僕はもともとかみさまには言っていた。この二人の元へ行きたいと。そのときかみさまは、ゆつくりと、頷いていた。

僕の他にもまだ、この二人の所へ行きたいと言っている子がいたような気がしたが、忘れてしまった。

「恩寵にかけてあなたに願う。究極の至福に向かってさらなる高みへと昇っていきけるほどの、大いなる力が与えられんことを。我が願いのすべてをあなたに捧げる」

遠くから聞こえる声とともに、真っ白な薔薇の眩い光が、僕を包んできた。眠たくなってきた。母なる人が、微笑みながら、抱きしめてくれている。至福の時だった。

(ごめんね)

もつともつと、こうして抱いてもらいたかった。もつともつと、生きていたかった。心残りはないと言えば、嘘にな

る。親子である時間が、短すぎた。

体が、軽くなってきた気がした。まるで遠くに見える白い雲のように、あてもなく浮いているような感覚だ。父なる人の真つ赤な目から、大量の光の粒が溢れている。

一人になるのが、急に寂しく感じられた。母なる人の腕に力が入った。温かい。この感覚を、忘れることはないだろう。美しい恵みに囲まれているような、懐かしさと温かさ。

(だけど、ありがとう。また、会えるといいな。みんなに、会えるといいな)

僕は微笑み、そうしてゆつくりと、目を、閉じた。真つ白な一輪の薔薇が、翼のような形になって、僕の元へと、舞い降りてきた。

(中区)

顔

水野 昭

目が覚めたので枕元の時計に手をのばして見たらまだ四時前だったが起きることにした。少しばかり喉の奥でかすかすとした違和感がしていたけれど、軽くえへんえへんと咳払いをして身を起こした。

四月になってから、日中は動くとき汗をかいたりするのでふとんの薄いのを一枚減らしたりしたためか、寝ているあいだ首筋が寒くて仕方がなかったのが原因かもしれない。でも今日はどうしても始発の東海道線に乗る必要があるから、心の中はおおいに熱く張り切ってなんのこれしきという気持ちの方が勝っている。しかし特別に今朝ばかりが早いということではなく、このくらいの時間に起きることはそれほど珍しいことではない。

今は何時なのかしら、まだ大丈夫でしょうと妻が寝ぼけたような変な声で、しかも顔を見れば目を閉じたまま喋っている。寝言かと思ってしまう。寝ているあいだに喉の辺りの血行が悪くなるのか、それとも寝相のせいなのか、いつも

朝は起きてからしばらくのあいだ妻はとてもおかしな声になって、まるでヘリウムガスを吸ったのではないのかと思ってしまうほどだった。ところで妻の顔ってこんなだったのかなあ？ 妻は明け方の薄明かりの下で寝ているので眼鏡をかけていないこととか、髪の毛が枕に押しつけられて顔の一部しか見えていないことや重力の法則に従って顔の皮膚が下へと引っぱられて小皺が消えてしまったりで、別人のように見えたりドキリとするほどだった。

ああ、どうせ目が覚めたのだから多少早くてもこのまま起きることにするからな、トイレに行つてからもう少し横になつていようかなと思つたりしたが、うっかりするとたちまち一時間くらい寝てしまう。でもまだ外は暗いでしょうし、それに今朝はばかに早起するじゃあないですか、なにをそんなに張り切っているのよ。薄墨桜を見に行くってこの前から言つていたじゃあないか、まさか呆けて忘れたんじゃないだろうな。

旅行会社の広告が一週間前に朝刊と一緒に入っていたが、その中で薄墨桜見物を募集していたのでなんとなく行きたくなつてしまったのだ。でもバス旅行じゃないからな、俺の性分として見ず知らずでその日限りの連中と同じバスに長時間一緒にいるのは息が詰まる感じがしていやなんだよな。金を払つてまで窮屈なバスの座席で膝を曲げ辛い思いをしての旅行はしたくないんだから。普段ならば早起きをする日中どうしても眠くなるので適当にソファアの上などでごろりと横

になるだけの呑気な生き方をしているが、そうなるも妻も心得ていてタオルケットや寒い季節であれば毛布などをそっと掛けてくれる。寝るといつてもせいぜい一時間と心がけているのは、いかに眠いといえども昼間に本気で寝てしまえば生活のリズムが乱れて調子がおかしくなるからだ。静岡の会社で退職までの十年間に、夕方から次の日の朝までという変則的な勤務が一週間に一度あり、宿直明けの朝には帰宅すると横になっていたが昼飯の時間には必ず起きるようにしていた。

仕事をやめてからも勤務時代と同じように朝の六時前には起きて近くの遊歩道を犬と散歩している。本当にあなたは気楽なものねと妻に言われながらも、水に浮かんだ木の葉のようにすべての流れに身をまかせていると言つてもいいだろう。八十を過ぎた年齢になるけれども体力的にはまだまだ自信があるので気まぐれに外出することが多くて、台所にある椅子の背にぶら下げてある肩掛けのバッグにはハンケチやポケットティッシュ、それとタオルやメモ帳などが入れてありいつでも持ちだすことができるようになっていて。財布は常に手の届く机の上に置いてあるので、そのときだけは忘れないうようにポケットに突っ込むことにしている。

五年前に車の免許証は返上してしまつたので、家に軽自動車はあるがもっぱら妻が買い物などの所用で使っている。私が遠方に用事があるときは妻の運転で自分は助手席に座っているが、それまではどこへ行くときも自分用の車を使つてい

た。

退職してからは自由になった時間を使って妻と信州方面へ行くことが多くなり、早朝に浜松の自宅を出ると上高地や白馬村、長野の善光寺から戸隠神社といった具合で宿に泊まることなく長距離ドライブを楽しんでいた。帰ってきてから友人に旅行の話をするのだがどこに泊まったんだと同じ質問をしてくるので、日帰りだよと答えるが、異口同音にほんとかいな信じられないよと驚いた顔をして、それじゃあかなり疲れただろうと言うがほとんどそれはないに等しい。これは負け惜しみではなくて事実なのだ、というのは運転をすることに少しも苦痛を感じなくとにかく楽しいのだ。

それほどに車をよく利用していたというのに、免許証を返上した理由は運転時の不安と危機感を持つたためと言つていい。買い物や別の町に住んでいる友人宅へ車で行くこうとして度々心配なことがあつたからだ。それは家を出てから目的地へと走っている途中で道がわからなくなることで、わからないとなるといつても完全にわからないのではなくて、この交差点を曲がるのだつたのかそれともうひとつ次だつたか、右折かあるいは左折かと考えながら走るようになってきていた。何年ものあいだたびたび訪れていた親友の家だというのに、頭の中に目的地へたどり着くまでの地図が描けなくなってしまうことが多くなつた。自宅からそれほどの遠方でなくほんのひとつ隣の町だというのに、電車通りの向こうだつたのかそれともこちら側だつたのか考えながら運転をすること

もあり、なぜかわからないが周りの家並みとか交差点にあつたはずの店も少し様子が変わったように思えてきた。

最近はお老人がひとり暮らしで暮らす家が増えてその人が施設に入つたり、病院に入院したり、あるいは亡くなつたりするとその家を解体してしまう場合があるようだ。親と子が別々に住むことが多くなり、自分が生まれ育ちしかも親の暮らしていた家であっても、空き家となればさつさと更地にしていつのまにか〇〇不動産管理地と書かれた看板が立っていたりで、目印にしていた家や店がなくなつて辺りの景色までもがすっかり変わってしまったと感ずるのだ。すると初めて訪れた町を走っているような気持ちになつて、特に薄暗くなつた時刻だつたりすると東西南北の方角までも自信がなくなつてしまふ。もしかして、このまま友人の家ばかりでなく自分の家にもさえも帰ることができなくなつてしまふのではないのかという不安感を抱えながらハンドルを握ることがたびたびあつたのだ。

視力が弱つたことも原因のひとつかもしれないと思つて、病院で目の検査してもらい医師から紹介してもらつた眼鏡屋で眼鏡を新調した。以前は瞬時にひとつひとつの道路標識の確認や、すれちがう対向車の運転手が男か女か、そしてどんな顔をしているのかも見るだけの余裕があつたというのに、その能力が落ちてきたようだと腹の中で感じるようになってきた。美人の運転手の顔を眺めていたら信号機や標識を見落としてドキリとしたことがある。目的の家はどちら方面

だつたのか、自転車に乗っているときなら止まつてゆっくりと考えればよいのだが走行中の車ではそうはいかない。なおかつそこが通行量の多い街道だつたりすればむやみに止まることもできなくて、余分に走つては引き返したり近所をぐるぐると回つたりもした。

そんなことでちよつとした用事でも帰宅時間が遅くなつてしまふことがあり、妻にそのときは迷走していたからという理由は話していない。帰つてきた私に対して妻は今までいったいなにをそんなに話をするがあつたのよ、それとも買ひ物でもしていたの？　と言う。訪問先の相手もそうだが私を加えてふたりともお喋りなのねと決めつけている。

信州方面へのドライブなら、いかほどに遠方で三百キロや四百キロ走つたとしても、事前に調べた地図を頭にたたき込んでおけば道路上の標識だけで目的地へたどり着くことができた。乗つていた車は少しばかり古いタイプの車だつたので、カーナビは搭載していなくて俺が動くナビなんだと妻に豪語していたというのに、たかが三十分の距離の場所であつても行くことができなく困ることが多くなり、この先自分はどうなるのだろうかと恐怖心さえ感じるようになってきた。こうした理由を妻に語らないまま思い切つて車の運転をやめることにした。これ以上妻に心配をかけたくなかつたし、自分でもおかしな状態となつた頭の中のことを仕方なく認め、心の傷が軽傷のうちには危険なことから遠ざかることにしたのだ。

新聞やテレビで高齢者による高速道路の逆走やそれが原因の事故がたびたび報道されている。たぶん運転者は目的地を捜すことに夢中となつて、自分の行動や運転方法が危険だとかルール違反で周囲の人を困惑させていることに気がついていないのだと、私の経験と照らし合わせて推測できる。車の免許証を返上してからホツとする気持ち心が心の中にあつたのは、ドライブが好きで長時間運転しても疲れ知らずだと自負していても、高齢となつてからは絶対に事故を起こしてはいけないと、かなりのプレッシャーがかかつていたのかもしれない。

妻にはかまわずに起きて、台所で食パン一枚焼いてオリオリ油を塗り、コーヒート冷蔵庫にあつたゆで玉子とバナナで腹を満たした。少し前に起きた妻は奥の部屋でござござとなにかしていたが、玄関で靴を履いていると、台所に入つて独り言なのか私に用事があるのかほそほそと喋っているのよく聞こえなかったが、家の中へ戻るのには面倒なのでそのまま無視して外へ出た。

駅までの距離の中ほどまで来て眼鏡を忘れたことに気がついていた。早朝のため少し肌寒く感じたので出る前にジャンパーの下にニットのベストを着た。そのとき眼鏡を外してテレビの横に置きそのまま忘れてしまったのだが、取りに戻つたりすれば始発列車に乗りおくれしてしまうので引き返さずに浜松駅に向かうことにした。

前日の夕方に青春きつぷを買うため駅の近くにある格安の

チケットショップへ行つた。正式には青春十八きつぷと呼ぶらしいが、略して青春きつぷと言つてしまう。これは五枚綴りなので、ひとりで使う場合は残つた四枚分をチケットショップに買い戻してもらうか、あるいは五人が集まつて一度に使う方法がある。青春きつぷは普通列車と快速列車のみに利用できるの、遠方へ出かけるときは否が応でも早起きして家を出るといふことになる。この年齢になつて青春きつぷで旅行しますなんて言つたりすると、青春の言葉になんともなくこそばゆくて妙な感じがするけれど、利用可能な期間中は早朝の列車に乗れば中高年ばかりが席を埋めて、子供のように大きな声で観光地のパンフレットや地図を広げたりして騒いでいる。

青春十八きつぷといつても年齢制限があるわけではない。列車の中では数人ずつのグループとなつているが、中には私のようにひとりだけの旅行者もいる。いずれにしろ早朝に乗りこんだ乗客たちのポケットには青春きつぷが入っていると思つても間違いがないだろう。彼らの風体からもある程度は判断がつく。男なら野球帽をかぶり、くすんだ色でポケットのたくさんあるベストを身につけ、女はつば広の帽子で首には派手な柄で明るい色のマフラーを巻いている。男女に共通しているのはウォーキングシューズを履いてザックを背負つている。彼ら彼女らのポケットには小型のデジカメが突っ込んであるはずだ。

妻を残していったん家を出ると、なにかあつた場合の連絡

は一方的となる。つまり私の方からのみということだ。というのは夫婦ともに携帯電話を持っていない。携帯電話は便利なものだねとだれもがそう言うし私もむかしはそう思っていた。そうむかしはね。しかし最近になって考えが変わった。携帯電話をポケットに入れてみると、外出中も監視されているようで束縛の中の行動しかできないのだから。口座から落ちる電話料金だつてばかにならない。通話した結果ならば致し方ないが使わなくても基本料金は毎月きちんと口座から落とされている。いざというときに役立つからと言われても、いつ必要とするかわからないものにひと月で数千円、一年間では万の単位となる。突然ベルが鳴って用事があるから早く帰ってきてよと言われることがあるけれど、外出先での行動をおいそれと止めるわけにはいかないし、緊急事態としても県外にいることだつてあるのだ。ときにはとんでもないときにとんでもない場所で突然に携帯電話のベルが鳴ることがあり、これほど心臓に悪いものはない。

携帯電話は会社に勤めているときから使い始めた。世間一般でテレビや冷蔵庫のように携帯電話を持つことは当たり前前の時代となり、本当に必要だと考えて使うようになったのはちがつて、持っていない人間が異端児だという目で見られるようになってきていたからである。初めて手にしたときはこれで世間並みの人間として扱ってもらえるのだという気分となり、まるで新調したスーツに腕を通したようにそわそわとしてしまった。

携帯電話を持つようになる必要以上にダイヤルをしている自分がいた。外出先でふと思いつ出した用件について、家に帰ってからでも間に合うというのにわざわざ電話をしていた。頼み事があつて同僚に電話をかけたとき彼が今どこにいると思う?と言った。なにを寝ぼけたこと言つてんだよ。大山町の君んちへかけたんじゃないかと答えると、実は僕のはバスの中で、いまカミサンと旅行中だよと自慢していた。友達の自宅へかけたはずの電話が自動的に転送されて北海道の釧路あたりにいる彼のもとへと繋がって驚き感心もした。

退職してからもそのままに惰性で携帯電話は使っていたし、ほんの数年前まで外出する私のポケットに必ず入っていた。ところが家に忘れたままで外出をしたことがあり、帰るまで携帯電話のことは頭になかった。帰ってから携帯電話をチェックしても着信履歴はなく、持っていないくても別に困るものではないじゃないかという思いがこの頃から次第に強くなっていった。すでに年金生活の身であるので、無駄な出費を押さえたいといつも考えていたということもあつて、ある日決心をすると契約を解除してしまつた。

自分の手元から携帯電話がなくなつたところで、その後困つたことはなにひとつとしてない。なあんだもつと早くから気がつくべきだつた。携帯電話を持っていないければ、家を出た本来の目的のために心置きなく自分の時間を費やすことができる。だれでもが携帯電話が出現するまではそれを当然の

ことだとして日々を送っていたというのに。なければいような生活を送るだけのことだと気がついた。

薄墨桜という言葉をはるかむかしに聞いたことがあった。知人の家に行ったとき袈裟を着た坊主頭の大男が客間について、薄墨桜のそばにある寺の和尚だと自己紹介した。焼津市に檀家がありそちらの家の法事への途中に寄ったのだが、春になったら一度いらっしやい、花が咲くとみごとさで圧倒されますよと言った。その日から何年経ったのだろうか。あのかすればすでにこの世にはいない年齢だが、宣伝のチラシの中に見つけた薄墨桜の文字が気になり実物を見たくなったのだ。でもひとりです。出かけるのに奥さんを誘わないのかと世間の人は言うがいつも適当に答えている。この年齢になっても私は歩き方が早いので、ゆつくりとした妻の歩調に合わせて歩くのが苦痛なのだ。歩いてはふり返り、またしばらく歩いてはふり返って後ろから来るはずの妻を待つ。背後を意識しないで歩いているとたちまちに距離が開いてしまうほどの健脚なのだ。私の年齢では夫婦の仲がよいにしても、横に並んで歩くのはどこか恥ずかしさがある気が落ちつかないと同時に、妻の歩調に合わせてゆつくり歩くとかえって疲れてしまうからだった。

今から半世紀以上前の独身時代のころ、自宅からの距離が約四キロの会社までバスに乗って通勤していた。しばらくしてギヤーが六段切り替えの自転車を経験からもらったのでそ

れからは自転車通勤になった。かなり古くなった自転車だが油をさせば、少しばかりチェーンと歯車の辺りでカリカリと音を立てながらも、軽快に走ることができた。口の悪い会社の先輩が私のことを赤い自転車に乗っていると云っていたが、赤は赤でも錆びて赤くなっていたのだが、これで通勤時間はぐっと短縮した。それまでは自宅のそばのバス停からバスに十分ほど乗って市の中心である浜松駅まで出ると別の路線バスに乗り換えて、今度は約三十分かけて会社に到着するのが私の通勤ルートだった。自転車を利用するようになり直接に会社に向かえば半分の時間ですむ。三角形の二辺をバスで利用していたのが、自転車では三角形の一边を走ればすむことになったからだ。

学校が夏休みの季節になったとき、事務所の湯沸かし室で若い娘が湯飲み茶碗を洗っている場面に出くわした。すらりと背が高く長めの髪を後ろでひとつにして、色白のきれいな襟足をしていた。会社の近くにある短大生で、アルバイトとして事務の手伝いや休憩時間のお茶の用意をするために採用された娘だった。私は美しい娘に魅せられてその場ですぐどこから通っているんですか？ と質問をした。聞いてどうなるものでもないが話をしたただけなのに、なんとしたことか彼女は私の住む町の名を言ったのだ。まだ独身の私としては興味津々となってしまう。自分の町内にこんなきれいな娘がいたなんて知らなかった。しかも聞けば我が家のすぐ近くではないか。僕もそうだよ、僕の家はね……とばかり

に、聞かれもしないのに自分の家の場所を説明していた。君はどうやってここまで来ているのかな、バスなら何時のバスに乗るのかな。通勤途上でもしかしたら出会えるかもしれないので、ふたたびバス通勤にして自転車はやめてもいいと思つたのに、彼女はあたし家から歩いて通つていますという返事だつた。なんと四キロほどの道を徒歩で通つているということなので、え、歩いてと驚きの声を出してしまつた。あたしは子供のころからよく病気をしたりしてからだがあまり丈夫ではないので、歩くことで鍛えるようにと親から言われていたのですから。

これを聞いてここで発憤しなければ男でないときばかりは真面目に考え、さつそく次の日から自転車通勤をやめてしまつた。朝の通勤時間帯は車の排気ガスが臭いので、おそらく彼女もそうだろうと考えて裏通りを選んで歩くことにした。どこかで彼女と出会えるかもしれない。あの娘の脚は長かつた。あの脚でもしかしたらもうかなり先を歩いていくかもしれないと考えて自然と早足になつた。ついに会社までやって来たが、途中の道で彼女の姿は見られなかつた。七月の中旬で、家を出るころはまだ朝の涼しさを感じられていたし歩いているあいだはそれほど気にはならなかつたが、必死で歩いたせいか会社に入つたとたん汗が一度に噴きだしてきた。学校の夏休みが始まつたばかりだが日増しに暑くなるのは当然のことで、休憩室の扇風機の前に立つていても背中をつると汗が流れて、ズボンのベルトで止まるのが

わかつた。暖房装置はあつても冷房装置はまだ取りつけてない昭和の時代だったので、大量の汗が気持ち悪くてタオルを持つと急いでトイレ横の洗面台へと直行して上半身裸になつた。筋肉もりのりの遅しいからだではなく、白くひよろりとしてあばら骨の浮き出た男が鏡の中にいた。タオルにたつぷりと水を含ませると背中にぺたりと当て、しばらく力道山のように仁王立ちのポーズをとつてじつとしていた。冷たさに思わず眼を閉じてほっとするひとときだつた。

この一途な思いは夏休みが終わるとそれきりとなり、美しい娘の姿は会社から消えた。だが変なところで凝り性の私はその後も四キロの道を徒歩で通い続け、会社に着けば相変わらず大汗をかいて、そのたびに洗面所へ行つていたが歩くことは苦痛でなくなつてきたのだつた。

五月一日のメーデー集会へ会社の組合から指名されて参加することがあつた。市内にある会社や工場の労働組合員が、和地山町にある戦時中は練兵場だつた広場に集合する日だつた。広場までの五キロの道を自宅から歩き、大会後には浜松市の中心まで四、五キロほどを組合旗やプラカードを持つて行進し、浜松駅前で自然解散となつてからなおも自宅までの二キロを歩き通したが、疲れを感じなかつた。そのためというかそのおかげで、中年過ぎになつて一般の人とのちがいが自然とからだのなかでできあがつていた。それを医師はスポーツ心臓だと教えてくれた。人間ドックで訪れた病院によると一般の人は心臓の鼓動が平均で六十から七十くらいらしい

が、私の場合は五十以下だった。これは各自が勝手に器械のスイッチを入れ血圧や脈拍を測る装置で、その場にいた連中が私の異常とも思える測定値を見てみんな集まり、心臓の調子が悪くてうまく動いていないんじゃないかと脅されたが、気休めに器械の故障だろうと言う者もいた。念のために二度、三度と測定してみたが、やはり十人ほどの男の中で私だけ脈拍数がかけ離れた数字でおおいに心配となり、とたんに脈拍が上がった。

私にとって歩き方の早いことは自然の成り行きで、のろのろしていると疲れてしまうのだ。結婚したころは我慢してなるべく妻と歩調を合わせるように努力していたが、いつまでもたっても対等に妻は歩くことができない。どうしても一歩遅れ二歩遅れそのうちに数メートル離れてしまい、路地で曲がったりすると姿を見失って私を慌てさせる。わざとでなくても妻にとってみればおいてさほり食らうことで怒りが湧いてくると同時に、どうしてそれほどむやみに速く歩くのかしらと不満が募る。弱者中心にしなければと思うとかえって気持ちばかりでなく太ももまでもひどく疲れてしまうので、結局のところ特別のことがない限りひとりでの外出が多くなり、妻は自宅待機となってしまうのだ。自分だけなら家を一步出れば速く歩こうがゆっくりとしようが思いのままだから我が世の春となり、ひとりという気楽さを満喫できるのだ。

薄墨桜は岐阜県の山深い根尾村にある。はるかむかしにま

だ元氣だった父が、町内の友人と桜見物に行つたときの写真を見た記憶がある。そのころの父の年齢をすでに過ぎている。父は定年まで国鉄に勤めていたが、退職してからは交通公社で観光客を引き連れて添乗員をやっていたので名所旧跡については詳しかった。そんな父が一度友人を誘って訪れたことがあり、とても印象に残っていたのだろう。帰ってから次の年、そしてまた次の年と季節が巡ってくる折々に、薄墨桜の事を樂しげに話していた。父がこの世を去つてからすでに二十年以上は経過している。父が感動したと同じものが、今の私の年齢であればこそ味わうことのできるなにかがあるような氣がしていた。

大垣の駅で東海道線から降りてみたけれど、その先の目的とする乗りかえの列車がわからない。眼鏡を忘れてしまったので案内の掲示板の文字がはつきりしなくて、ホームの上でうろろうのそのそしていると、周囲にいた乗客はいつのまにかみんなどこかへ行ってしまった。駅が大きいから、あちらのホームにもこちらのホームにも行き先のちがう列車が停車しているの、あれかなこれかなと探していると、若い駅員が寄ってきてどちらまで行かれるのですかと聞いてきた。私の年齢からしてホームの上でうろろうしているこの爺さんは、もしかして痴呆による徘徊ではないだろうかと心配したのだろう。自分では足取りはしっかりしているつもりでも若者から見ればとてもぶつそう、そのうちに転んだりして線路に落ちて怪我でもされたら大変だと思つたのかもしれない

い。

家を出る前は大垣で乗り換える路線名や目的の駅の名まで調べて頭の中に記憶してきたつもりだというのに、馴染みのない地名なので一晩経ったらすっかり忘れてしまった。これは単なる記憶力の低下か、もしかして痴呆の初期症状ではという言葉が頭を横切る。メモにして持ってくればよかつたのだが後の祭り、若い駅員に行き先を聞かれても「薄墨」という言葉さえ出てこなかった。とっさの返事として、どぎまぎしながらかすれた声で桜を見に……とだけ答えると、場所柄それで意味が通じた。あ、根尾村の薄墨桜ですね、それではあちらのあの列車にお乗り下さいと、離れた別のホームにいるかなり派手な彩色をした列車を指さした。もうあと五分ほどで発車しますからお急ぎ下さいね、移動は階段ですから特にお気をつけて下さいとつけ加えたのは別のホームへと長い階段を上り下りすることへの心配から、自然と出た思いやりの言葉だろう。しかしたとえ八十になったとしても、これしきの階段でつまずいたり転げおちたりすることなど絶対にありえないと自信はあったので、わざと駅員の目の前で階段を一段飛びに駆け上がり、彼から見えなくなつたところで乱れた息を整えると、大きな足音を立て転びそうになりながら隣のホームへと駆けおりた。少しばかりくるぶしの辺りがつってしまつたが、駅員の視線を背後に感じていたので我慢してさり気なく列車に乗り込んだ。

車内はほぼ満席で、乗客のほとんどが鮮やかで明るい春の

衣装を着た女性たちだった。ぱちんぱちんと風船が破裂するように甲高い笑い声で、騒がしく賑やかで、朝だということにこれは酒席で盛りあがった宴会の真っ最中ではと思つてしまふほどだった。単独行動の私はすっかり怖じ気づき勇気が萎えて、車内に入るとすぐ左側にあつた二人がげの椅子に座ることにした。背負つていたザックを肩から外して網棚に乗せようとしながら車内の様子をきよるきよる眺めていると、私をじつと見つめている視線に気がついた。それは女だが、眼鏡を忘れ視力の弱つた者の悲しさで彼女の顔を確認できなくて、素知らぬふりですぐに座つた。しかし気になつて仕方がなかつたのもう一度立ちあがり、喉は渴いていなかったがザックの中からペットボトルのお茶を取り出して、わざとゆつくりとした動作でザックをまた網棚に乗せた。老人に相応しくのろのろと座りながら先ほどの女の方をもう一度窺うと、やはりまだこちらに視線を送っている。短い時間に見ただけなのではつきりとわからないが、四人席で行動を共にしているうちのひとり、彼女たちも青春きつぷを利用した旅行だろうと想像できる。女たちはひとりがつ持っている紙袋に代わる代わる手をつ込んで口に運んでいる。その女は黄色のウインドブレーカーを着ているが、だれだろうだれだろうと頭をフル回転させてみたが、眼の悪いのも一因でなんとなく見たことのあるのにわからない。

一分もしないうちに車内放送があり、列車が動きだして規則的な振動に包まれたとたん気がゆるみ、早起きしたせい

もあつて眠気に全身が包まれ、外の景色を見ているうちに頭が前にかくんと落ちるのを感じた。学生時代や会社の研修中に睡魔に襲われたときの快感と同じだと思つて、ほんやりとした頭でうつらうつらしているのを横に誰かが来て立ち止まり、頭上からトイレにでも行つていたの？ なかなか乗つてこないから心配していたのよと声をかけられた。驚いて見あげると、やはりこちらを窺つていた黄色のウインドブレーカーの女だった。さつきから合図していたのにわざと知らない振りをしていたんじゃないでしょうね、とうつすら笑いを浮かべている。この横の席は空いているのよね？ とりあえずここに座らせてねとなれなれしくびたりとからだを寄せたので、慌てて窓際へと移動して女とのあいだに空間を作つた。ほんのりとした化粧の匂いと、女の口から今まで食べていたらしいピーナツの匂いが漂つてきた。

女は真横に座っているので顔がよくわからない。テレビの中で、マイクを向けられた通行人が、からだをくの字にして身構え意見を述べている。私も同じようだからだをよじらせて女を見つめたが、どこかで会つたようでもあり、むかしの映画に出演していた女優に似ているようでもあり、一向に見当がつかない。年齢は推測で六十代の中ごろではないかと思うが、もう少し行つて七十代になっているかもしれない。このくらいの女の年齢となると化粧でいくらでもごまかすことができるが、それでも若いころはかなりの美人と言われているだろう。どちらさんでしたか、歳のせいかな最近は何も忘れが

ひどくなつたので失礼しています。それに眼鏡がないのでよく顔が見えなくてすみませんな、とごまかしながらも必死になつてなおも考える。あたしですよ。むかし同じ会社にいたあたしよ。同じ会社と言うだけで女は名乗らず、なおかつ私を知っているのです、こちらとしては知っている振りをするしかない。あ、ごめん久しぶりだよな。ああそうだった、思い出したよ、あいかわらずきれいだ。全然変わらない若いころのままだな。あれから何年になるだろうか……と、前置きをなるべくゆつくりと喋ることで時間稼ぎをして思い出そうとする。

静岡へ転勤してしばらくしたころ別の部署から異動してきた女がいた。三十人ほどの課の職員の四分の一は女性だったが、その中で一位か二位の位置にいるきれいな顔の女だった。座席が離れていたのが職場に一日いたとしてもほとんど口を聞く機会はなかったが、半年ほどしたころ偶然にも山の仲間と八ヶ岳を登山中に彼女に遭遇したことがあつて、趣味が同じ登山だということを知つた。たくさんの山愛好家が百名山などを目指しているが、それ以上に低山であっても人気の山々が各地にある。何百とある山の中のひとつで出会い、私たちは不思議な縁を感じた。その日を境にどちらともなく誘いあうと、昼休みに会社の近くのレストランで食事をした。喫茶店へコーヒーを飲みに行つたりということが多くなつた。パスタが好きな女で、静岡の中心にいろいろなお店を教えてもらいながら、昼休みの時間いっぱいまで他愛もな

い会話を楽しんでいた。

三年ほどして突然彼女は会社から姿を消した。その少し前から二人で酒を飲んでいるところを社内の方に女性に見られていた。それも一度や二度ではなかったし、あのあやしい雰囲気は女のほうから仕掛けたか言い寄ったのであり、男の私が騙されているのだろうという妙な噂が職場の女性たちのあいだに広がっていた。美人である彼女の周囲には、常に男性社員がまつわりついていたので、女性達からはいつも嫉妬と反感の心が渦巻く中心にさらされていたことは確かだった。反対に私は年齢も彼女より一回り上で、顔も目印についている程度で魅力がないと自分でも鏡を見るたびに思っていたし、中肉中背の初老の目立たない存在で、新鋭のパソコンにも強い若手の蔭に埋もれている男だと認識していた。そんな私をからかいの対象として声をかけ、暇つぶしに彼女は遊んでいるのだと陰口をたたかれていたようだった。悪意のある噂で会社にいることがつらくなりやめたとしても真意を探りたかったのだが、ほかの女性社員に聞くことができなく月日が流れていった。しばらくしてから、彼女は離婚して実家のある三重県鈴鹿市へ帰ったという話を職場の女性たちが囁きあっているのを耳にした。

あれから二十五年以上経過しているから顔も体型も変わっているだろうと思いつつ、横目で女の顔を窺ったが、過去の姿と重なるようなところがあるようでもあり、ないようでもあり、わからない。それに女の名前が口から出てこない。私もそう

だが職場ではだれでもが彼女のことを名字で呼んでいた。

ところがある日仕事で帰りが遅くなり、夕食を兼ねてふたりのことを沙和子と呼んでよと言われてから、互いに名前で呼び合うようになった。彼女の名前を口にするときはもちろんだが、彼女の口から私の名前が呼ばれるときはそれ以上にこそばゆい感じがして頬の辺りがやけに緩んでいるような気がしていたが、このことはふたりだけの小さな秘密となっていた。そうだった、思い出したよ、あんなの名前は沙和子さんだろうと言うと、すかさず、その沙和子さんというのはどのだれなのよ、と口元に手を当ててすすくと笑って背中をひどく打たれてしまった。あたしは千代子だよ、千代紙の千代に子供の子なのはどうしたのよ。

東京に行く新幹線の中で、久しぶりですね、沙和子です、覚えてるわよね、と寄ってきた女がいた。彼女が言うのには、主人の母親が癌だとわかって驚きのあまりだれにも理由を告げないまま退職してしまったのだけれど、それ以来義母が痴呆症になって八十八歳で死ぬまで世話をしていたの。でも義母が死んでからすっかり気力が抜けて、主人ともうまくいかなくなって結局別れて、その後は磐田市にいる娘夫婦の近くで一人暮らしをしているの。実家というのは僕の記憶では三重県の鈴鹿市の方だったかなと言うと、彼女は口元を手で押さえてすすくと笑った。それはだれのことなの、ほんとうになにもかも忘れてしまったみたいだけれど、あたしを

笑わそうとしてとぼけているんじゃないでしょうね。そのとばけた感じはむかしと同じで変わっていないけど。そこがあたしは好きだったのよ。会社の中で面白いことを言っていたしを笑わそうとした男の人は多かつたけれど、みんな男女の上品なことばかり並べたてて気をひこうとしていたからね。でも清水さんはわざとではなく、なんとなく自然に笑えてしまう話をいろいろとしてくれたから、ほっとする気持ちにさせられていたの。あたしの実家は鈴鹿ではなくて、郡上八幡のすぐそばの小さな町だって何度も言ったでしょう。実家に帰ったときはアユの形をした甘いお菓子の土産をあなたにあげたことがあるけれど、それも忘れたの？ お盆になって街中でやる郡上踊りの十種類ぜんぶ踊ることができるとか知ら。頭で考えなくてもお囃子が聞こえてくれば自然に手足が動いて、気がつけば踊っているのよ。去年は面白かったわよ。お盆で帰っても実家にはもう両親がなくて、兄夫婦と甥っ子の家族があるのでホテルに泊まっていたんだけど、ホテルの前庭でやっている踊りに加わったら、従業員や他の客から、奥さんは踊りがうまいですわねって誉められちゃった。地元の生まれだということは黙っていたから、踊りの輪の中にいた人の反応が面白くて、好きで毎年来ているから覚えちゃったのよって答えたの。

会社勤務時代の話題に移ると、彼女の言っていることは間違いなくむかしの職場のことなので、私は頭が混乱して自分のことがわからなくなってきた。過去の記憶の一部

分が別の記憶と入れ替わってしまうなどということがあるだろうか。たとえば読んだ小説の内容が脳ミソの中に刷り込まれたり、他人から聞いた話が、いつのまにか自分の体験として記憶素子に組み込まれたりしてしまったのか。沙和子といえど近所にいる可愛い娘と同じ名前だが、その娘と話の身話が混同してしまっているのだろうか。女と話すほどに会話が嘔みあわなくなっていくのがつらかった。あれもやはりまだらボケのせいだったのだろうか。彼女と遇ったあの日は去年なのか、もっと前だったのか、東京へ行った目的はなんだったのか、思い出そうとしてもわからなくなっている。現実にあつたはずなのにもかかわらず夢だったかもしれないと思ってしまう。

最近になって、妻が怪訝な顔をしてじっと私を見つめていることがたびたびある。庭で草取りをしたり木の枝を切ったりしているとき、ふと強い視線を感じて見回すと、家の中からガラス戸越しに妻がこちらを凝視していることがある。視線が合うと慌てたようにして、お茶にしましよるかとか疲れたでしよからひと休みしませんかと言葉をかけてくるが、あれはごまかしであって、実は私の行動を監視していたのではないのか。もしかして自分ではわからないがすでに痴呆の症状が表れ、それを妻とか他人が感知し始めているのではないのかと急に心配になりだした。

車で友人宅やスーパーマーケットへの買い物で外出したとき

し、自分では意識していなくても、奇妙なことを喋ったり行動したりしているのかもしれないと考えてしまう。テレビ番組の最後に出る出演者や番組制作者の名前があまりにも早く画面から消えてしまつて、タイトル以外は俳優の顔を知つてもだれなのかわからないままいつも終わつてしまう。

頭の回転が遅くなつて、あらゆるものに追いつくための思考力や視力の衰えによる危うさだけではないのかもしれない。どこかで聞いたまだらばけという言葉が現実味を帯びてきて、自分にそんなことが起きるとは思いたくないし信じたくないが絶対にないとは言ひ切れなしいし、悔しいがその現象が当てはまつているのかもしれない。このところ記憶の途切れが多くなつているのを感じているし、肝心要のなにを忘れたのかさえ忘れてる状況が見られる。

なにをぼんやり考えているのよ、あ、言わなくていいわよあたしが当てるから。あれっ、もしかして半分眠つているのかしら。ぼんやりだなんて、これでも年齢の割にしつかりしているつもりだが……。

車内の乗客同士の会話や笑い声が普段より大きく感じるが、これは遊びの目的としているものが桜という春を象徴する花ということで、だれでもが華やいだ気持ちを持つているからだろう。そう言えば沙和子と一緒に休みを取つて桜を見に出かけたことがあつたな。そこは浜名湖の下に見る小さな山の上であり、車を降りてから雑木林の中の遊歩道を互いの手を繋いで歩いた。冷たくて柔らかな手だった。五分ほど歩

いて丸い団子のような形の丘の上に出ると、公園や学校に植えられたソメイヨシノは散つてしまつていたが、この山の中心にあつたのは大きな八重桜の木で、満開となつてふたりを迎えてくれた。すぐそばに木のベンチがあつたので、肩を抱き寄せびたりとくつついて、互いの体温を感じながらしばらく座つていた。退職前の男と中年の女が、まるで二十歳の若者と同じ気分と同じ空気を吸い同じ景色を眺めていたことは、夢の中の出来事のようなひとときだった。

あその公園の木が枯れてしまつたので最近になつて別の木が植えられたつていう記事を新聞で読んだが、まだ苗木で大きくなるまで十年以上はかかるらしいよと話すと、なんのことかわからないんだけど女はきよとんと話していた。ほら二人でデートしたこと、僕は大切な思い出しているがまさか忘れたのじゃあないだろう。それについてのことなの？もちろん何度もデートしたよね、数え切れないくらい。子供が結婚して家を出てから、リュックを背負つて美ヶ原へ行つたことが最初だったけれど、まさかそのことまで忘れたとは言わせないわよ。美ヶ原のホテルでランチしてから、土産にきみにあげるからつて美ヶ原のラベルが貼つてあるワインをもらつたけれど、あたしがいないとき半分以上飲まれてしまつてがっかりしたことを、今でもはつきりと覚えてるわよ。小びんだつたから中身を飲んでからピアノのそばに置いて一輪挿しにしていたけれど、少し細長いビンだつたから庭の花よりも川の堤防から取つてきた草花の方が似合つていた

わね。あれを床に落として割ってしまったのもあなたただだよ。え、そんなことがあったなんて全く記憶がないけれどもなあ。もし女が言うように美ヶ原へ行くとなれば、日帰りならかなり早起きをしなければいけないし、一泊するにしても妻に言い訳をするためにはかなり苦慮するだろうがその記憶はどこにも残っていない。妻と美ヶ原へ行ったことはあるが、女と美ヶ原のホテルで食事したとかワインを買ったことは覚えていない。秋の紅葉の季節で、急勾配の坂道を右に左にとハンドルを切って、赤や黄色に染まった山肌には歓声を上げた。新緑のころにも来たいわねと言って、たびたび山に行くきっかけになった。

ではこの女は俺の妻？ いろいろな過去の記憶がごちゃ混ぜとなつていてみたいだ。話の内容はあれもこれもと符合することがあるが、全く忘れてしまったのか知らないことがらもある。記憶の刻まれた過去へと延びている時間の帯が、よじれたまま俺の脳味噌の中を浮遊しているのだろうか。

しつかりしてよと肩を叩かれて、はっと気がついた。列車の振動で気持ちがよくなくて、もしかして寝ていたのか、それともなにか考え事をしていたのか、ぼんやりとして重みのある痛みを頭の奥に感じて生唾が出る。みんなと一緒のところへ行かない？ どうもお互い人違いをしているように思えてしまうのだけれどと言うと、女は私の背中を音がするほどにひどく叩いて、さっきもそうだけあなたなを寝ぼけているのよ、朝早く起きすぎたせいじゃないの。あたしは千代

子ですからね。ほんとうにだれなのよ、その沙和子というのは。まさかどこかで好きだった女の名前じゃあないでしょうね？ それとも夢の中で沙和子さんとかいう女の人と楽しいお話でもしていたのかしら。

そういうえば妻の名前をここ数年は呼んだことはなかった。妻が買物で留守にでもならない限り常に身近にいるから、頼みごとがあれば「おい」とか「ちよつと」で用件はすませている。そんな呼ばれかたをしていても妻は不満がある様子はなく、どこにいても「はい、なんですか」とすぐに返事をする。自然と口に出た沙和子とは、どこのだれだったのか思いつけなくなっていた。どこか遠くのほうでそんな名前を口にしたことがあるような懐かしさに包まれるので、むかし読んだ小説の中に登場する女だったのかもしれない。そうするとあなたはやはり千代子ということになるのかなとじつくり眺めてみた。千代子、そう千代子というのが妻の名前だった。

女は眉を歪めて悲しそうな顔を見ると、でもいいのよ無理して思い出さなくても、あたしはいつでもあなたのそばにいるから大丈夫よ、心配しなくてもいいからねと私の手を掴む。柔らかくて温かな手だ。さああちらへ行きましょうよ、みんなのいる方へ。青春きつぷは五人で一枚の切符を使うんだからばらばらになると困るのよと、網棚の上にあった私のザックを掴んで女の仲間のいる席へと誘った。向かい合わせの座席にいた三人の女はいっせいに立ちあがるとちよつと狭いけれど三人がけと二人がけになって一緒になつていまして

うねとからだをずらしてくれましたので、二人の女のあいだに座って周りを見回すと笑顔がすべてこちらに注がれていた。

あたしたちは俳句の会のメンバーで、ご主人とはこれで四回目の青春きつぷになるかしら。きょうの吟行よろしくね。

うむ、まるでハーレムの王様になったようだな。この歳になつてこんなにたくさんの美人に囲まれてしまうなんて予想もしなかったことだとなにげなく言うとき笑い声ははじけ飛んだ。ほんとうに旦那さんは真面目な顔をしていつも面白いことを言うんだから、家にいるときもこんな感じなの？ いつもつまらないダジャレや下品な話をしなくてもあたしを笑わせているから毎日が楽しいわよ。それが千代子さんの気持ちと和ませているのよね。以前もそんなことを言っていたけれど、それっておのろけよね？ すぐ前にいる女がにこにこしながら相づちを打っているが、この女がだれなのか見当もつかない。女たちは私と旅行に行くのは四回目というが、四回とも青春きつぷの旅で一日中顔をつきあわせていたということになるのだろうか思い出せない。この年齢の女たちは顔になにかを塗って口紅つけると、みんな綺麗になつて同じ顔に見える。

社会人になつてからなぜか人の顔を、特に眼を見て会話をするとということが苦手で、それは妻に対してでもあり他人となればなおのこと、いつも視線を反らすようにして話をしてきた。そのためなのか職場でもそうだったが、人の顔と名前を覚えるのが苦手だったし、妻の顔も結婚以来はたしてじつ

くりと見たことがあつただろうか。千代子は家の中にいるから当然この女は妻だと判断して今の今まで暮らしてきたが、別の女と入れ替わっても気がつかないでいるかもしれない。今朝の妻の寝顔も少しばかりちがつて見えていたのはどうしてだろうか。最近は何所でもなんとなく見覚えのある人物に出会うと、知り合いなのかそれとも偶然に似ているだけなのかわからなくて、失礼があつてはいけないからとりあえず挨拶をしているが、怪訝な顔をされることが多くなつたような気がする。

周りの女たちは私の話を否定しないで会話の流れをそのまま受け取ってくれているように感じるのは、好意なのかそれとも哀れみのたぐいだろうかとつい疑つてしまう。そうよね、ご主人と一緒にいるとよくみんなを笑わせているけれど、ごく普通に話しているだけなのになんとなく面白いのよね。それに知らない振りしていてもいろいろとよく知っているからすごいよね。きょう行く根尾村の薄墨桜のことだつてあたしは知らなかつたから、それにご主人は駅まで若者みたいに早足でさっさと歩いてきたときには驚いたわよ。でもね、青春きつぷはいつも五人で行動しないとね。大垣駅で乗り換えのときに発車時間ギリギリまで姿を見せなかつたからみんなで心配していたんですよ。

浜松駅では賑やかな女たちに囲まれるようにして改札口を通つたが、あのときの女たちが目の前にいる連中だったのか。ひとりひとりの顔を見るとなんとなく誰かの視線がこち

らに向けられているのを感じる。正面にいる女が紙袋を目の前に差し出した。確かこれはご主人の好物でしたよねと言った。袋の中を覗くと、殻つきのピーナッツが入っている。殻のまま炒ったピーナッツが一番うまいんだぞと死んだ父親が言っていた。父が酒を飲むときは刺身などの生のものをつまみにすることはなく、もっぱらピーナッツや塩センベイと一切れのチーズだった。塩センベイを両手で碎いて小さくしたかけらを、口の中でぱりぱりと音を立てて食べていた。落花生は殻を割るときに手が滑って、テーブルの下に転がっていた。父の仕草ひとつひとつまでも目の前に浮かぶ。まだまだ記憶は確かじゃないか。物忘れがひどいといっても三十年以上も前のことを事細かく覚えていなのだ。だからなにも心配することは無いのだと腹の中で自信を持った。

この落花生は家庭菜園で千代子さんのご主人が作ってくれて収穫したもので、今まさに地産地消をあたしたちしているんだよねと窓際の女が言うと、いつせいに彼女たちは笑った。

しばらく妻の名を口にしたことがないけれど、忘れかけていた千代子というのがほんとうにそうだったのか試みに千代子、千代子と口の中で呟くと、頭の中にある薄い幕を手で押し広げたように明るくなり懐かしく感じた。そのとき、横の女の顔がこちらを向いた。え、なんですか？ あたしの名前を呼ぶなんてずいぶん久しぶりのことよね。いつでも「おい」のひと言なんだから。周りの女たちが笑う。つられて自分も

笑いの中に溶けこんでみたが、心の底ではなにか違和感があり服の上から痒いところをまさぐっているようだった。笑っている女の中からときどき研ぎすまされた強い眼の光を感じるからだだった。

数日前突然妻がいら立った声で、あたしのどこかが変わったのに気がつかないの？ と食事の席で言った。ここ数日顔を覗きこむようにして私の表情を窺っていた。もしかして妻の気に障ることを言ってしまったかなと呟くと、あたしの頭をよく見てちょうだいとぐいとばかりに近づいてきた。呆気に取られてきよんとしている、ほら髪の毛よ。これからは暑くなるからと思ってカットしたんだけど気づかないの？ そう言えば美容院に行くからと半日ほど留守にしていた日があった。それまでは肩にまでかかる髪をゴムで留めたり頭の上に巻き上げたりしていたようだったが、そう言われればそうかなという程度にしかこちらとしては気にしていなかった。そうか、旅行の日のためにおしゃれをしたのだ。女の髪の毛が長いとか短いと言われても自分としては関心事の領域外のことで、男とはそのような動物なのだと思っていたが、どうもそれでは連れ合いに対して無頓着すぎるという言葉で非難の対象となるらしかった。

今朝は家を出てから駅まで歩いてきた。退職するまでの十年間を静岡へ通うために自宅からJRの浜松駅まで歩いたので、眠くてぼんやりしていても、あるいはひどく酔っぱらっている、頭ではなくからだの方が方向を覚えているので道を間

違えることはない。衰えたといつてもまだまだ足に自信がある。今朝は駅に着いても休むことなく改札口へと向かった。青春きつぷをポケットのどこに入れただろうかとあちこちさぐっているときに、数人の賑やかな女たちに背後から押されてそのまま改札口を通過しエスカレーターに乗ってホームへ出てしまった。きつぷがないままこんなこととしていいのだろうかと思つたが駅員はなにも言わなかつた。

歩いていると自転車に乗つた数人の女が次々と追い抜きながら、みんな一様に笑いを含んだ声で、お先に行つて駅で待っていますからねと声をかけられた。最後の女が、駅までなら仕事で毎日通つたのだから大丈夫よねとも言つた。目の前で笑っているのがあの自転車の女たちであり、最後に声をかけたのが妻だつたのか。うんそうだ。なんとなくそんな気がしてきた。今朝は早く起きてしまつて今まで完全に頭から眠気が抜けていなかったのだから。

妻が立ちあがると網棚にあつた紙袋を下ろして中から小さなプラスチックの容器をとり出し、これは自家製の二十日大根のぬか漬けて主人が家庭菜園で作つたものよ、食べてちようだいと爪楊枝をひとりひとり手に渡した。それを口に入れると、最高においしいわね、熱い緑茶がほしくなつちやつたと火花が飛びちるような賑やかな声で、見知らぬ顔の女たちは歓声をあげた。

(中区)

「入選」

いつかきつといい時がくる

恩田恭子

昭和十八年秋、この頃より梅沢の家は坂を転がるように貧しさのどん底へと落ちていった。

当時、梅沢の家は真面目で実直を絵にかいたような父惣次郎そうじろうと働きの母ミツ、小学六年生の貞夫さだおと二年生の恭子、五歳の和わの五人暮らしだった。山奥の村で、おだいさまの山仕事をさせてもらいながら四反歩の畑を耕す生活だった。娘二人はすでに嫁ぎ、三女マキは姉の嫁ぎ先から高等科へ通っていた。

ミツは無学の自分を思い、せめて子どもは人並みに学校へ出したいと考えていたらしい。しかし、それもついに夢と終わる日があった。

運命の日

その日は向かいの山へ沈んだ夕陽がオレンジ色に輝いてきれいな空だった。水はとても冷たく風も肌を刺すような夕方、ミツが

「兄ちゃんは、ばかに遅いなあ」と心配していた。

夕飯のための芋洗いは、塩煮の好きな貞夫が自分の仕事にして毎日やっていた。貞夫は時間を計ったように毎日帰ってくるのだが、その日は帰ってこないで、ミツは傍らに恭子と和を連れながら桶に水を入れて里芋を洗い始めた。

すると、下のほうから和田の司くんが、こだますような大声を出してのぼってきた。

「貞夫くんが橋から落ちて怪我をした。家の人を呼んで来いって」と泣いたことのない司くんが大声で泣きだした。

ミツは司くんに

「心配せんでいいよ。泣かんでもいいよ。大丈夫だであ」

そう言い、二人の子どもたちを近所の人に頼んで、とるものもとりにあえず駆け下りていった。

大きな怪我

途中で出会った人たちから話を聞き、次第にいろいろなことが分ってきた。

「あーした、てんきになーあれ」と草履を投げて、天気占いをしていたところ、その草履が橋の下へ落ち、それを拾いに行ったところへ上から石が落ちてきて貞夫の足の上に乗って怪我をしたらしい。近所の人が貞夫の泣き声を聞きつけて、とりあえず茶工場に運び一緒にいた司くんが家まで知らせに来たという。

ミツが茶工場につくと貞夫は板の間に寝かされ、時折

「痛いよおー」と叫び、ぐったりしていた。貞夫の足には白い包帯が幾重にも巻かれ、血がにじんでいた。

「貞夫、痛いか？ お父ちゃんもお母ちゃんもいるぞ。大丈夫だであ、元気を出せよ」

重藤医師に往診してもらったが

「俺にはどうすることもできん、すぐに大きい病院に行つて手術をするのがよい」という診断だった。

祭りが過ぎた晩秋の夜はしんしんと冷え込んでくる。その夜は惣次郎とミツは貞夫の傍で夜を明かすことにした。

家では冷たい隙間風が敗れ障子の間から吹き込み、四十ワットの電灯の下、不安に震える三人の子どもたちの前でちよろちよろ燃える囲炉裏の火に焼いた里芋が転がっていた。

翌朝になると、親戚や村の人たちが茶工場に駆けつけてきた。これから先のことを相談して決めなければならぬ。

二日目、重藤医師の診断では

「今すぐ、手術をすれば足首だけ切ればよいが」というものだった。

入院、手術となれば費用も莫大である。惣次郎もミツも無言のうちにもそのことが頭にあつた。しかし、貞夫の命だけはなんとしても助けたい。泣くにも泣けなかつた。医師の言葉はわかるものの、なんとかならないかという思いもあつた。貞夫の熱は上がり、怪我はどんどん悪化していく。組長が仲立ちをして、とにかく病院へ運ぶよう手配をした。

その手配も並大抵のものではない。村の人たちは各自で作った弁当を持ち、戸板で作った担架に貞夫を乗せ、人目につかない朝暗いうちに四時間かけて交代で運ぶことになった。

「山道を行けば近いが、貞夫に負担がかかる。広い道を行くことにしよう」

ミツと惣次郎は家に戻り一切の入院の準備をした。布団、炭、鍋、米、みそ、コンロに至るまで生活できるすべてを持っていかなければならない。何を考える暇もなかった。ミツは次々と必要な物を出し、惣次郎がまとめ、背負子に荷物をつけた。後のことはすべて呼び戻した三女マキに任せ、急いで出掛けた。二人は無言のまま近道を急いだ。この時マキとてまだ十二歳である。

夜が明ける頃、貞夫たちよりも先に惣次郎とミツは下泉の駅に着いた。一両丸ごと借りた貨車が停まっていた。扉を開けてもらい、荷物を積み込んだ。用意した筵むしろと一枚の毛布を敷いて貞夫の到着を待った。

貨車に一時間乗り、そのあとはまた長い時間かけてようやく病院についた。

「小学校六年生の子が橋の下に落ちて大怪我をした」

村じゅうが大騒ぎになった。

時代背景

この頃は戦争中で、お国のため兵隊さんのため家族のために働くこと、親孝行をすることは当たり前。そういう教育だったので、子どもも普通に働いた。

「欲しがりません勝つまでは」その合言葉のもとに暮らした時代。食べる物も着る物もなく、母親や祖母が嫁ぐ時に着てきた帯をほどこきズボンに仕立て、着物を洋服に仕立て、み

んな当たり前にぼろをまもっていた。そして木の実草の実食べられる物を必死に探し、むしり取って食べた時代だった。

入院するということは、病院の中で暮らすということ。食事の支度はもちろん、寝具から暖房あらゆるものを持ち込まなければならぬ。しかも治療費は百パーセント自己負担である。惣次郎とミツがすぐに病院へと動けなかったのも無理なからぬことである。この時、ミツ四十八歳、惣次郎六十六歳であった。

入院

貞夫を病室に運び入れ、村の人たちが帰った。ありがたい思いと同時に、村の人たちには一生頭が上がりないうという思いが惣次郎とミツにずっしりとのしかかった。

貞夫を布団に寝かせ二人は床に座った。

「お父さん大変でした。御苦労様でした」

「ありがとう。お前もな」

翌朝、医師が回診に来た時、惣次郎とミツはひざまづき

「先生、どうかこの子の命を助けてください」ひたすら頼んだ。

「わたしも医者です。できる限りの力を尽くしましょう。お約束します」

医療切符と寝巻

ミツは島田の町通りを西へ向かって急いで歩いてきた。そして一軒の店へ駆け込んだ。

「ごめんください」

「はい、いらっしやいませ」そう言つて出てきたのは品のいいおばあちゃんだった。

「奥さん、あなた、草履と下駄がびっこですよ」

「ええっ」足元を見て焦つた。ミツはほとほと困つてこの店に飛び込んできたのであった。どうしたらいいのか思案に暮れてそこへべたんと座り込んでしまった。

「申し訳ありません。いろいろと事情がございまして、お宅さんへ助けを求めにまいりました」

「助けを求めらるつて、私はあなたのことを何にも知りませんけど、どうしたのでしょうか。では少し事情をお聞かせくださいませんか」

そう言つて部屋の隅へ案内してくれた。

「黙つていたんではわかりませんよ。事情を話してみなさい。私にあなたを助けることができるかどうか、少し考えてみましょう」

ミツは入院に至るまでのすべてを話した。

「そうですね。大変でしたねえ。今は医療切符の時代でなんにも横に流すことはできませんから、家の息子の寝巻用の布の半反を分けてあげましょう」そう言つてくれた。

昨晩は明日をも知れぬ貞夫の命を思い、夫とともに眠れぬ一夜を過ごしたのだった。この血がいつぱいついた寝巻を何とかしてあげたいと、自分の履物がびっこなことにも気づかずこの店に飛び込んだのだった。

「ありがとうございます」しかし、ミツの懐には一銭のお金

もなかった。

「大変お困りのようですね。いいですからここに半反を持つてお行きなさい。代金はまた後でいただければいいのですから」そう言つて半反の布を持たせてくれた。

ミツは早速寝巻を作つて仕上げた。ようやく貞夫の血がついた寝巻をきれいな物に替えてあげられる、それが何よりうれしかった。夫と二人で痛がる息子の手を優しく抱きながら寝巻を着せることができた。

借金

しかし、十日たてば支払いをしなければならぬ。病院でのお金の猶子は許されないのだ。ミツはほとほと困つてしまつた。

「お父さん、どうしたものかいねえ」

「そうだなあ」

二人は途方に暮れた。そして一夜明けた朝

「医者との話し合いもあるから俺が病院に残るで、ミツ、お前が上の娘の家へ行つて、頭をさげて百円貸してくださいませんか頼んできてくれんかなあ」

翌朝早くミツは金谷の駅から三時間かかつてようやくたどり着いた。

娘の姑であるおばあさんの前に正座をし

「必ずお返ししますので百円貸してください」そう言つて頭をさげた。

姑様はびっくりして

「ひゃあくえん」そう言ったきり声も出なかった。そこへ娘の夫がきて

「どうだね、貞夫の体の具合は」と尋ねた。

「まだまだ海の物とも山の物ともわかりません。申し訳ありませんが、貞夫を助けると思つて百円貸してください。病院の支払いやなにかでどうしても百円が必要なのです」

「そうだなあ、百円は大金だ。しかし、金なしでは病人も治らない。家じゅうの金を探しても五十円にも満たないだろうが、よそへ行つてなんとか俺が頭をさげて借りてくる。親のためだ。弟のためだ。せいじゃあ近所どおりをかけたまわつて来るで、待つていてくれよ」そう言つて出掛けていった。

しかし二時間待つても三時間待つても戻らなかつた。途方に暮れて縁側に出てみた。夕陽が西に沈むころ娘の夫が帰つてきた。

「本当にすみません」とミツは頭を畳に擦り付けた。

「なあ、お袋、そんなことをしていても始まらない。二軒で貸してくれられた。これでどうやら百円耳がそろつた。今から帰つて親父を喜ばせてやつてくれよ」

大きな借金だつた。おいそれとは返せる金額ではなかつた。病院へ戻ると泣き声が聞こえた。胸が締め付けられる。何でこんなことになつたのだろう。ミツは急いで貞夫のそばへ駆け寄つた。

「熱が高いで、静かにしといてやれよ。ところで、どうだつた」惣次郎が静かに言つた。

「何とか都合がついたよ。とりあえず、この前の寝巻の分を返してこようかねえ」

「そうだなあ、そうしてくれよ」

貞夫の高い熱はなかなか下がらなかつた。親とて水枕を当てたり手ぬぐいを絞つて頭にのせたりしてやるくらいのことしかできなかった。翌日は店屋へ行き

「ほんとうにありがとうございます」とお金と医療切符のすべてを差し出した。

「割合早かつたね。工面はできたのかね」

「はい、昨日一日駆けずり回つてどうにかになりました。ありがとうございます」そう言つて頭を丁寧に下げた。

やがて貞夫の熱も下がり容体も少し安定してきた。ミツは家のことも気になり、帰つてみた。家では十二歳のマキを頭に子ども三人で留守番をしている。入院する時に取り上げをしておくようにとだけ言つてきたが。村は猫の手も借りたいほどの忙しい取り入れの時期だ。村の人が助けてくれると言つても限度がある。マキは里芋を掘り、大豆を取り上げよく働いていた。恭子も学校から帰ると和を畑で遊ばせながら、サツマイモをかごでしよつて運んでいた。

小田のおじさんがきて

「マキや、地起こしをしておけば村のみんなが来て、麦を蒔いてくれるでなあ」と励ましてくれたという。

「しっかり頑張つて頼むでなあ。元気になつた兄ちゃんを連れてくるからな」

ミツは後追いをする子どもたちを振り切つて病院へトンポ
 帰りをしたのだった。

お金は水の泡のように消えていく。これからどうなるんだ
 ろう、あれこれ考えて眠れない夜を過ごした。

次第に貞夫の容体も落ち着いてきて、惣次郎がおぶつて外
 へ出られるようになった。

もう一枚寝巻がほしい。ミツは意を決してこの前の店屋に
 行った。

「きょうは何ですか」

奥からおばあちゃんの声が出た。

「すみません、もう一度寝巻をほしいと思います。なんとか
 分けていただけませんか」

縫い物をしていたおばあちゃんは物差しを持つて奥から出
 てきた。

「あなたは、なんて言った。一枚でいい、一枚でいいから分
 けてくれたって言ったじゃないか。それだから私はうちの息子
 の寝巻の半反を譲つてやったのに。それをまたもう一枚くれ
 とはなんとということだ。出て行つてくれ」ものさしを振り上
 げてそう言った。

ミツは急いで店を出た。ああ、なんて情けない。ミツは歯
 を食いしばった。

わら草履

病院の周りで稲刈りが始まった。ミツは、はたと手を打ち
 病室へ駆け込んだ。

「お父さん、いいことを思いついたよ」
 「どうした、そんなにあわてて」

「今、稲刈りが始まっているだよ。その百姓家へ行つて藁
 を分けてもらつて病院の先生の草履を作つてやったらいいと
 思つてね」

「さあ、先生はなんて言うかな。まあ、貞夫もだいたいよくな
 つてきているようだし。お前が作っている間は俺が貞夫の面
 倒を見ているから。ミツの思うようにやってみろ」

それからミツは百姓家へ行つて話をした。
 「お金はないけれど、この藁を分けてほしいけれど、くれん
 かねえ」

すると
 「お金がないのに分けてやるわけはないわねえ。この藁はた
 んばへ返すし、欲しい人には牛や馬のエサにもなるしねえ」
 確かにそのとおりである。しかしこのまま引きさがるわけ
 にはいかない。

「実は息子がこの近くの病院に入院していて夫と二人で付き
 添っています。あなたがた家族のわら草履を一切私が引き受
 けて作りますので、それでその時の作り賃としてこの藁を分
 けてくれませんかねえ」

「そういうことなら私も忙しいから喜んで協力しましょう。
 それじゃあ家の者にこの藁を病院まで運ばせましょう」

「ありがとうございます」
 交渉成立である。

病室の裏は非常に暖かく、飛び石が敷かれている。そこで薬をコツコツ叩くことにし、病院の先生にその話をする。「ああいいね。ゆつくりやりなさいよ」と許可をくれた。

それから夜は寝る間も惜しんで薬を叩き草履をたくさん作った。

「先生、夜遅くまでやかましくて申し訳ありません。この草履を使ってください」そう言って十足差し出した。

先生はとても喜んで

「これは助かる。ありがとう。薬価代として引いておくことにしよう。ここはほかの病棟とは離れているから安心して作りなさい」

ミツには先生が神さまにも思えた。

「お前の体も心配だ。看病とわら草履作りを交代でやることにしよう」

それから二人は毎日病院でわら草履を作り、百姓家へ持って行った。よその家へも売り、薬価代の足しくらいにはなつた。

「家の方も心配だかち、一度家へ戻って子どもたちの様子を見てみようかねえ」

「そうだねえ、子どもたちも大変だろうけど、もうひと頑張りだ。貞夫は俺が見るからね。手術をしなくてすめばいいのだが」

そんな思いとは裏腹に貞夫の病気は簡単にはいかなかった。先生が

「この足はどんどん腐っていく。破傷風だからなあ。足の下の方で切れるならいいが、熱があまり高かったので何とも言えないが」

そう言ったのち手術の日は決まった。

その知らせをもちながら、ミツは家へ帰っていった。親戚へも寄った。そして、貞夫の手術の日が決まったことを伝えた。

手術

親戚や村の人が病院へ来てくれた。そして、貞夫の寝ている姿を見て涙をのんだ。貞夫に足をとることをどう伝えようか、みんなで相談をしたが、解決はつかない。誰もが黙りこくってしまう。しばらくして惣次郎が

「隣の国くにさ言ってもらうか」そう言った。

しかし、まだまだ小さい貞夫に、お前の足は明日なくなる、そんな酷なことは誰が言えようか。しかし時間は刻々と過ぎていく。このままではいけない。

「国さ、なんとかよろしく頼まい」

国さは貞夫の布団の横に座り

「貞夫、よく頑張ったなあ。だがなあ、貞夫の足はこのままおいておくとどんどん悪くなる。手術をするしかないって医者言うだよ。わかるか？」

貞夫はこつくりとうなずいた。そして

「僕もあの人みたいになるんだね」

這っている患者を見てそう言った。誰も答えることができ

なかつた。

そして、いよいよ手術の日がきた。ミツと惣次郎はひたすら神に祈つた。

長い時間だった。大腿骨切断。なんとか手術は終わった。

重なる借金

貞夫の熱は上がったり下がったりしていたが次第に落ち着いてきた。

「この分ならもうしばらくすれば退院できるでしょう」

先生がそう言った。

回復は早かつた。だが、ミツの心は気が気ではなかつた。もうとつくにあの借りてきたお金はなくなつてしまつていた。次の支払いをどうしようか、そればかりが頭にあつた。

惣次郎も同じだった。ミツは時間が許す限りわらじやわら草履を作つた。何とかしなくてはならない。惣次郎が

「貞夫もだいぶよくなつたから、今度は俺が重太じゅうたさんの所(資産家)へ行って頼んでみるとするか」

「お父さん、すまんねえ」

「お前が行くのも俺が行くのも同じことだ。子どもの命に最後の力をかけてみよう」そう言つて惣次郎は出掛けていった。

夜になつて惣次郎は帰つてきた。

「偉かつたねえ、お父さんどうだったね」

惣次郎は首を横に振つた。

「百円という大金を一度やそこらで貸してくれる家がどこにある、そう言われたよ」

「お父さん、つらかつたねえ。そうだよねえ。半年働いても百円にはならないものねえ。もう少し病院の費用が安ければねえ」

二人はため息をついた。

ミツはその夜もただだた藁を打つた。わら草履はどれだけでも売れた。みんな喜んでくれた。そうしながらも頭は休まらなかつた。

「お父さん、今度は私が頼みに行つてこようか」

「そうしてくれるか。駄目でもともとだが、何とかしなければならんからなあ」そう言つて惣次郎はミツを見送つてくれた。

ミツも惣次郎も一生懸命であつた。

ミツは昼過ぎには重太さんの家に着いた。

「なんだ、ミツちゃんじゃあないかね。今どこから来ただよ」

「島田から来ただよ」

「大変だつたねえ。まあ、お茶でも飲んでいきなよ」

「お茶はいいだけど、相談があるんですよ。お父さんかおじいちゃんはいるかいいえ」

「まだ、お昼を食べたばかりだでそこらにいると思うよ。呼んでこつたかねえ」と常代つねよさんが探しに行つてくれた。

ミツは膝が薄くなつた着物をさちんと整えて待つた。

「なんだ。また金を借りにきたか」

外から戻つてきた龍太りゅうたさんのさげすんだ口調にミツは歯を食いしばつた。

「お願いします」ミツはひたすら頼んだ。

「どうか、貞夫の命を救ってやってください。お願いします。百円貸してください。お願いします。百円あれば貞夫の命は助かるかもしれません。まだ手術をした後で一進一退ですけど必ずよくなると信じています」

ミツはあがり端に座ったまま、ただお願いするしかなかつた。その時奥の部屋からこの家の御主人の重太さんが出てきた。

「こつちへ寄つて火にあたらんかね。お茶でも飲んでいきなさいよ」

思いもよらない優しい言葉であった。常代さんはお茶を出してくれ、蒸かしたサツマイモを一つ出してくれた。

ああ、夕べからなんにも食べていなかつたんだ。喉から手が出るほどほしかった。

「さあ、あがつてお茶を飲んで体を休めてくださいよ」
「ありがとうございます」

でも手を出すことも部屋へ上がることもできなかった。重太さんが

「ミツちゃん、あんたもこうして家へ金を借りに来たということはお腹をしつかり据えてきたと思う。ここに百円耳をそろえて持ってきた。どうか、これを使っておくんない。この百円という大金はミツちゃんには返せる金ではないと思う。私たちは相談して、ミツちゃんにあげることにした。このお金で貞夫の命を救ってやりなさい。お金は返さなくてもいい

からな」そう言って百円のお金を封筒に入れてくれた。

思いがけない言葉であった。蹴飛ばされるか投げ出されるか、そんな思いでやってきたのに。さっそく風呂敷に包み腰にしつかりと撒いて重太さんの家を後にした。

退院

二か月の入院生活を終えて軽くなった貞夫をおぶつて、惣次郎とミツは家に帰ってきた。

足を失った代わりに右大腿骨切断という名前の身体障害者手帳が残った。

世話になった村人たちが帰り、子どもたちが寝静まった。惣次郎とミツは一番にしなければならぬことを夜遅くまで話し合った。

翌朝、惣次郎はミツに、表から出ると人目につくから裏から出ると言つて出掛けた。ちようどその時、恭子が小屋の中の薪を片付けていた。裏木戸が開いて父が出てきた。父の手には昨日大事そうに持ってきたセメント袋に入った大きな荷物があつた。

「それじゃあ、お父さん頼むね」と母の小さな声がぼそそと聞こえた。

「お母ちゃん、お父ちゃんはどこへ行つたの」

「お墓参りに行つただよ」

恭子は見てもならないものを見てしまったような気がした。そして、なぜかわからないけれども、これは人に話してはならないことだと思つた。

冷たい風が吹く中、坂を下っていく惣次郎を見送りながらミツはわが子の足を墓へ納める夫の胸の内を思うといいようのない苦しさと切なさを覚えた。ミツはそのまま山へ行つた。少し歩いてへなへなと座り込んでしまった。誰にも言えない思いが胸を突き上げてきて思い切り泣いた。

「……ああ、貞夫の足が、足が……」そう言つたきり顔を覆つて泣いた。

帰ってくる

「お母ちゃん」と恭子が飛びついてきた。

「待つててくれた？」

「うん」

ミツは恭子を思い切り抱きしめた。

村の人は物珍しげにいろいろな噂をしたり見に来たりした。これから先の貞夫の心を思うとどうしたらいいのか。いたずら盛りの子どもであったが、本当に優しい子であった。だが言葉も少なく、おとなしい子になってしまった。夜どれほど惣次郎とミツは二人で話をしたことか。これからどうしたらいいだろうか。こんな不自由な子にさせてしまった。これから先はどれほど過酷な道を歩まなければならぬのであろうか。それを思うと胸が張り裂けそうであった。

退院して十日たつが、立つこともできないのだ。

ほしい物を持ちに行くこともできないのだ。

近所の人たちの中には優しい人もいた。隣のおじいさん金サンは

「貞公まこと、これを使って立つてみよ」と松葉杖を二本持つてきてくれた。貞夫が入院している間に一生懸命作つてくれたのだ。

貞夫は病院でもそういう人たちの姿を見ていたから、それがどういふものかはわかつていた。ただ頭をさげた。もう話すことさえ嫌になつてしまつていた。そうはいつても小さい自分の体に合わせて作つてくれたのだ。心の中では感謝していた。

金サンが帰つてから貞夫はその杖を持つてみた。立てるだろうか、不安は大きい。大変だったが少しずつ歩行ができるようになった。

十メートル歩き、坂を上り、だんだん慣れ自信がついてきた。その自信が貞夫に大きな喜びを与えてくれた。貞夫はその杖を使って歩き、隣の家まで行くことができた。

「おじさん、杖をありがとう。少しずつ歩けるようになったよ」

「よかつた、よかつた。だんだん慣れていけばいい。焦らんようにな」

校長先生

ミツは惣次郎と二人で考えに考えた末、校長先生のもとを訪ねた。

「校長先生、私の子どもは先生も御存知のように片足のない不自由な子になりました。先生、貞夫は一生を戦つていかなければならないのですが、どういう職業についたらいいとお

考えてしょうか。何をしたらいいのでしょうか。教えてくださいませ」ミツはする思いで頭をさげた。

校長先生は黙っていたが、やがて重々しく口を開いた。

「本当に大変な思いをされましたね。まず、御両親がしつかりしなくてはいけません。親たちが落ち込んでいたのでは子どもは立ち直れないのですから。まだ六年生です。まず、日常生活になじんで、それから学校を卒業してゆっくり考えたいでしょう。」

都会へ出て働こうにもなかなかさううまくはいかないと思います。親の保護のもとに子どもの才能を伸ばしていくような仕事、そういうものを考えることが賢明ではないでしょうか。貞夫くんはまれに見る器用な子どもです。学校でも工作は抜群にうまい。みんなが舌を巻くほどの作品が出てきます。しかしそうかといってそれがすぐ職業に結びつくものではありませんが、田舎では仕事も限られます。これから覚えるとしても大工とか、かご職人とかはどうでしょう。大工は高い所に上らなければならぬから大変かもしれません。かご職人なら家において農家のかごを作って、少しずつでもみんなに買ってもらうって生活できるかもしれません。いい知恵も浮かばないけれど、どんなものでしょうね」

「かご屋、かご屋ねえ。ありがとうございます。先生のお言葉を聞いて私は心に力がつきました。親子ともに頑張りますます」

「お力になれるかどうかわかりませんが、いつでも相談に来

てください。頑張ってください。そうそうお母さん、まださすがは無理でしょうが、また貞夫くんが学校へ来れるように頑張ってくださいね」

新しい道へ

家へ帰ってミツは家族に校長先生から聞いたことを話した。

「俺も校長先生の言うことは正しいと思う。俺たちが年をとるまでに、自分で立ち立ちできる仕事を探してやらなければならぬ」

「まあ、とりあえず私たちもどこかで仕事を手伝わせてもらって、貞夫と共に考えていくかねえ」

貞夫は一生懸命歩く練習をした。そして、学校へ行く決心をした。健常な子どもでも学校へ行くのに四十五分は歩かなくてはならない距離だ。それでも貞夫は学校へ行った。しかし、学校へ行ってもさうさう思うようにはいかなかった。以前のように友達と一緒に行動できないことを痛感した。失望した貞夫は、それから学校へ行くことをやめてしまった。悲しい思いをもちながらも勇気を出して学校へ行ったのに、さらに悲しみが追い打ちをかけてくる。もう駄目だ、そんな気もした。

ある日、惣次郎は鋸と鉋を買ってきた。

「貞夫、お前はこれからかご屋をやってみたらどうかかな。かごを作るのは大変だけど、この部屋と庭を使って、竹を割ったり編んだりしてかごを作ってみなさい。お百姓さんはまず

茶摘みかごが必要だし、湯取りや箕も使う。それを作つてみたらどうだね」と渡した。

貞夫は何にも言わなかつた。ただ黙つて鉦と鋸を受け取つた。

しばらくして貞夫は金サンを訪ねた。

「おじさん、僕に竹を一本ください」

貞夫は鉦と鋸を腰にしつかりつけていた。

「竹をほしい？」

「はい、竹をください。できるかどうかわからないけど何か作つてみたいと思います」

「好いたの、取つていけばいい」半ば、何を生意気なことを言うだというような顔をして、顎で竹藪の方をしゃくつた。

歯を食いしばりながら竹藪へ行つた。そして座つて竹藪を眺めた。しばらくして一本の竹を切り倒した。大きな音がして竹が倒れた。その音を聞いて金サンは

「貞公の奴、何ができるもんか。生意気に、一番いい竹を切りやがつた」と舌打ちをした。

貞夫はたくさんの枝をはたき、長さを切りそろえて竹藪の隅に上手に片付けておいた。

ミツはそれを惣次郎と一緒に遠くから見ている。自分なりに考えたんだなあ、そう思った。そして、惣次郎はそのまま竹藪へと歩いていった。貞夫によくやったねと声をかけ竹を家まで運んでやつた。

夕方になつても貞夫はその竹を割つたり切つたりしていた

が夜遅くになつて、できた箕を持つて金サンの所に行つた。「さっきの竹がこれになりました」

すると金サンは

「これ、お前が作つたのか？」

「うん、ようやくできたよ。古い箕を見ながら見様見真似で作りました」

金サンはなんとも言わなかつた。だが、数日後ミツに会つた時に

「貞公の後ろには神様がついていゝぞ。俺は見ただ。第一この小僧が竹一つ割りえるわけはないのに、夜になつたら箕を持つてきやがつた。俺はどうにも震えが止まらなかつた。神様がついていゝるとしか思えないだ。あの背の低つくい小僧の子がこれを作つたとあつちやあ、俺もちつと考えにやあいかん。このままじゃあ俺としても恥ずかしい」そう言つた。

学校へ行けなかつたから卒業証書はもらえなかつたけれども、それでいい。貞夫はくじけなかつた。卒業写真がなんだ、僕がかご屋になる。それに決めた。年の古いお父さんを助けたいかなければならない。みんなの力を借りてかごを作つて生活することに決めるんだ。固い決心だつたが、そんなに簡単に道は開けるものではなかつた。

惣次郎は明治十年、ミツは明治二十八年生まれである。二人が子どもの頃にはまだ教育制度が整つていゝなかつた。ミツが一人の時には回覧がきても読むことができず、隣の人に「何か家に用のあることが書いてあるかねえ」と聞かなければ

ばならなかった。しかし、それはミツにとつては大変な苦痛であった。数字とカタカナは読めたのだが、あまり効果はなかった。せめて息子だけは学校へ出したい、そう願う怪我をする前に高等科へ進む手続きを済ませていた。思うようにいかないもので、子どもの教育も夢と消えた。

おだいさまという言葉がある。おだいさまとは資産家のこと、山の本を売れば生活には困らず、子どもたちも次々と高等科へ進学していった。ミツは本当におだいさまがうらやましいと思った。夫惣次郎は真面目な人間で、酒も飲まないシタバコも吸わない、家族のために一生懸命働く人であった。ミツにはそんな惣次郎の大きな自慢話があり、子どもたちには時折話して聞かせた。

金原明善は治山事業に貢献している高名な人である。惣次郎はその金原明善のもとで仕事をした。その時に

「惣次郎さんに任せておけば何の心配もない」そう言つて仕事を任せてくれたという。

ミツは真面目な夫を尊敬していた。しかし、世の中は真面目だけでは通らない、学校を出なければならぬ。ミツはそのことが嫌というほど身に着いてしまつていた。

ミツはどうしても貞夫に学力をつけたくて高等科を卒業した人の本を借りてきた。小学校を卒業してない貞夫にとつては難しい内容だった。しかし、次第に初めて知ることもあり興味を持つことも多くなつてきた。ラジオもない、新聞ももちろんとつていない、学校の先生の言葉が唯一の情報源で

あつたから知識や情報はごく限られていた。

貞夫は足の痛みに耐えながらも夜は本を読む時間が多くなつた。この時に読んだ本が後の貞夫を支える糧となつたようであつた。

惣次郎はわが子のためには思い頑張つてきたが杖をつくようになつた。それを見てミツは、この人をどうしたら幸せにしてあげられるだろうかと思つた。年を取つてくると村の出役にも出ることが減つた。すると組長から

「付き合ひぐらいはしつかりしろよな」と言われる。

道作り、屋根替え、お祭りなど出役は数えきれないほどある。出て行つても邪魔者扱いされるが多かつた。

見晴らし峠

ミツはどうしたらいいか分からなくなつた時、見晴らし峠へやってくる。見晴らし峠からは集落がよく見える。軌道がありエンジンが時間通りに通る。荷物を背負つて通る人がいる。トロツコから降ろされた木材を馬力に積んでいくのも見える。そこにこの集落の生活がすつぽり見えるような気がする。見ていると心が晴れてくる。ミツはそこで太陽の光を浴びながらいろいろなことを考える。

貞夫が病院から帰つてきた後、鏡の中には真つ白い髪になつた自分がいた。ミツは、私もすつかりおばあさんになつてしまつたとしみじみ思つた。夫の畑での仕事ぶりを見るときもすつかり老人である。家族六人がどうして暮らしたらいいだろうか。これから寒くなる。家族の着る物も温かくしなけ

ればならない。誰か夫に破れたズボンをくれる人がいないかなあ、そんなことまで考える。毎日の食べ物にも困る。正月に餅くらいは子どもに食べさせたい。マキが杉の苗植えに行き少しずつお金を貯めている。しかし今は生活をしていくにはその娘の力を借りなくてはとうしようもない。いくら惣次郎が山へ行って日雇いの仕事をして、自分が子どもの面倒を見ながら炭俵を編んでも、生活費はあまりにもかかりすぎる。三百円に近い借金、それがミツの肩に大きくのしかかってくるのである。

ミツは思いを振りきって立ち上がると、貞夫が松葉杖をついて歩いているのが見えた。

この子の命を救いたい、ただそれだけで一生懸命だった。だが帰ってきて貞夫の歩く姿を見たとき、ミツの胸はきりきりと痛んだ。あの松葉杖は貞夫の体から一生離れないのだ。今度は貞夫の心を助けなければならない。悩んでも考えてもきりが無い。しかし、貞夫がこれから先この家を継いでいけるのだろうか。

人はいろいろな目で見る。振り払っても振り払っても後から声が追いかけてくる。

「カタワ。カタワの息子」と貞夫に言う。いたずらな子どもたちが好き勝手な呼び方をする。大人たちの中にも物珍し気に覗いたり嫌味を言ったりする人も少なくない。

貞夫はあまり表へ出なくなつた。その気持ちもわかる。でも最近では松葉杖で上手に歩けるようになり、自分でも何か考

えているようだ。惣次郎が取ってきた竹を一人で割ってみた。古い物を見ながら編んでみたりしている。

決心

貞夫が何かしていることに気付いてはいたが、ミツはただ生活に追われていた。

午前中は山へ行きカヤを刈ってくる。午後はそれを編む。夫が縄をなつてくれる。恭子が学校から帰ってきて

「きょうは学校で何か先生に褒められたか」

そう聞くのが楽しみだったが、それさえも貞夫のために控えなければならなかつた。

そんな暮らしをしている中で、ある日部屋に入ったミツはとても驚いた。

貞夫が茶摘みかごを作つて部屋に十個並べてあつた。

「お父さん、お父さん」

縄をなつている夫を呼んだ。

「どうした」

「貞夫が、貞夫が」

部屋を指さしたミツを見て、惣次郎は立ち上がった。そして部屋の中を見てびっくりした。

「ほお、こりゃあすごい」そう言つたきり惣次郎もしばらく声にならなかつた。

見れば見るほどきちんと作つてあり丁寧に磨き上げられている。

「きれいなかごだ。こりゃあすごい。こりゃあなあ、売り物

になるぞ。立派なもんだ」そう言って喜んだ惣次郎は竹を最初に貞夫にくれた金サンのところへ行った。

「なんだ、どうかしたか」

「ちょっと来てほしいんだが」

その言葉に金サンはついてきた。そして部屋へ入りそれを見た。

「おお、こりゃあすごい。こりゃあ誰にもできん上等なかごだ。お前もこれで一人前だなあ。もう大丈夫だ。これで飯が食っていけるぞ。すごいすごい」手をたたくて喜んだ。

その話はたちまち村じゅうに広がった。

「貞公がかごを作ったそう。見に行かまいか」そう言って近所の人が見に来た。

「ほお、いいかごだ」

「きれいだなあ」

柄が交互になり縞になっているのだ。

「誰にもこんなにけっこにゃあできんよ」

思えば校長先生がまれに見る器用な子だとほめてくれた。

手術後にも病室で、竹ひごをろうそくの火で曲げて羽根の長さが一メートルもあるグライダーを作ったことがあった。医者にとっても驚き、すごい才能だと感動していた。そのときにはミツたちは心に余裕もなく別に感動することもなかったが、今改めてよくできていると思う。

「俺の茶摘みかごも一つ作ってくれんかなあ」そういう人も出てきた。

注文を受けた茶摘みかごを一生懸命作った。

春になると茶摘みかごを大勢の人が持ちに来た。貞夫はその売上金を父親に見せた。

「お父さん、これだけもらいました」

「そうか、偉かったなあ。お父さんはお前のその気持ちで大事にしたい。貯金通帳を一つ作ってやるから、そこへお金を一生懸命ためなさい。お父さんかお母さんが積んでくるから。作りたい物を作ってごらん」

これで独り立ちできるようになるかもしれない。ミツも本当にうれしかった。足を失っても決して愚痴を言わない。おとなしくなっていたはずもなくなつた代わりに自分で辞書を引いてよく勉強をする。そんな姿を見るとおしくてならなかった。小学校もろくに出ず、高等科にも行かせてやれなかった貞夫が初めて握つたお金、それを惣次郎は翌日しっかりと貯金通帳に積んできた。

「これはお前の貯金通帳だ。一生懸命働いていくらでもためるんだよ」

見晴らし峠の神様がやつぱりいたんだ。貞夫が怪我をしてから幾日、見晴らし峠へ行って愚痴をこぼしてきたことか。申し訳ないと思う。これからも家族みんなで力を合わせて頑張っていこう。

社会へ

向こう山のお婆さんがやってきた。

「ああ貞夫くん、元気になったねえ。良かったねえ。何かか

「ごを作るって聞いたけど、見せてくれる」

貞夫は茶摘みかごと湯取りを出してきた。

「ええっ、これ貞夫くんが作ったの」

「うん」

「そおう、すごいじゃん。これ湯取りだね。お米洗ったり麦を洗ったりするのに便利そうね。きれいに作ったねえ。よくこんなに磨いたねえ。ふうん、おばさん一つ欲しいやあ」

「うん」

「こっちは茶摘みかご？ 貞夫くんが作ったの初めて見たやあ。記念に一つ譲ってくれんかいねえ。みんなが貞夫くんはすごいっすごいって褒めてるよ」

「ありがとう」それしか言えなかつた。

「本当にきれいな茶摘みかごだね。すごいじゃん」ほとほと感心しているようだった。

しばらくするとミツがやってきた。

「あれ、シゲちゃ、しばらくだねえ。風邪ひかんかね」

「うん、おかげさまでね。今ね、貞夫くんにかごを見せてもらったところ。この湯取りは素敵だねえ。私これ欲しいやあ」

「それはこの頃初めて作ったのだから、もっと上手になつてからの方がいいじゃない？」

「ううん、私はこれがいいよ。それからねえ、頼みがあつてきただよ」

「なんだよお、私らにできることかねえ」

「うん、春になったらいい日を見計らつて村の衆みんなに頼

んで屋根をふきたいと思うだよ。お願いします」そう言つて湯取りをかついで坂道を下つて行つた。

夜、夫と二人で話をした。

「お父さん、春になったら竹下で屋根のふき替えをやるつていうんだん、どうしたらいいもんかねえ。あの家の屋根は急だからねえ」

「そうだなあ」

年をとつた夫には危険で、屋根のふき替えにはとても行かせられない、そう試算に暮れていると、突然貞夫が

「お父さん、僕が行くよ」そう言つた。

「ええっ」

「僕が行くよ。僕が行つて一生懸命働いてみる、できることだけやればいい。屋根をふけばゴミがたくさん出る。そのゴミを片付けるのだからいいじゃん」

「そうだなあ。みんながなんて言うかねえ。まだ少し先だから考えておくよ。もしみんながいつ言つたら、頼むね」

「うん、わかつた。お父さんがよろして、もしこけたら大変だもん」

やがて春が来てきようは竹下の屋根ふきの日だ。惣次郎が金サンに話をしてあるらしく

「貞公、行くか」と誘つてくれた。

二本の松葉杖をつき金サンの後に従つた。集合場所につくと

「おはようござんす。さあ、みんな揃つたかや。きようはな

あ、梅沢の貞公が竹下の屋根ふきに行くっていうだん、これから組の付き合いもやっていかにやあならんで小僧が手伝いに来たくらいに思つて、仲間に入れてやってくれんかなあ」
みんなは黙つてうなずいた。そこから竹下までは二十分山道を歩いていった。

「貞公、どうやってやるか見ていよよ」

少し離れた所で見ていると一番上の杉皮から外した。釘を抜いてかごに入れ竹を外し、杉皮をどんどんはがしていった。新しい杉皮と交換するのだ。しばらくすると

「やい貞公、この箱をとつてくれや。上手に持たにやあだめだで」そう言つて曲がつた釘がいっぱい入つた箱が下りてきた。

「またそれを使うでこぼすじゃあないで」そういう声が飛んできた。

貞夫は曲がつた釘を金づちで一本一本丁寧に伸ばした。しばらくかかったが釘はすべてまつすぐになった。

みんなが休憩に降りてきた。そして貞夫の伸ばした釘を見て驚いた。

「これはすごい。これなら楽にやれてよいわ。また今度も頼むでなあ」

休憩に餅をもらい、再び作業が始まった。一番高い屋根の上の上つて反対側に落とし始めた。貞夫は、落ちてきた物を竹と杉皮とゴミに分け、さらに使えるものとそうでないものに仕分けた。

午後も作業は同じように続き、夕方になるときれいに片付いた。するとシゲチャが

「貞夫くん、偉かったら。釘も全部貞夫くんがやったのが使えたよ。ありがとう。ゴミもきれいになったで助かったやあ」
誰も何も言わなかつたが一生懸命やつたのは認めてもらえたようだった。

「貞夫くんもこつちへおいで」

食事の支度ができたとき、一番下の席にシゲチャが誘つてくれた。みんなにはお酒がふるまわれ、貞夫にはお菓子が置いてくれてあつた。お菓子なんてめつたに食べられないから家へ持つて帰りたいと思つたがそんな卑しいことはできない。ご飯を食べて家へ帰つた。

家では家族みんながとても心配していた。にこにこ帰つてきた貞夫を見て

「ごころうさま。えらかつたら」と言つた。

「うん。これなんだか知らんが、くれた」
開けてみると、さっきのお菓子だった。

「貞夫が頑張つたからくれただねえ」

「僕は食べたから、みんなが食べて」

家族みんなで貞夫の頑張りをねぎらつて一緒にお茶を飲んだ。

「ご苦労だつたねえ」

惣次郎もミツも貞夫も、ようやくみんなに認められた気がした。しかしまだまだこれからである。

春

時は流れ戦争も終わり、ようやく世の中が落ち着き始めた。

ミツには気になることがあった。おだいさまの賀々沢かかんざわの一郎さんが寝込んでいるらしい。

貞夫が入院したとき一郎さんには何かと力になっていた。その御恩を忘れたことはなかった。一度会ってお礼を言わなくてはと思っていた。

ミツは一升のお酒を袋に入れ賀々沢へと山の道を上つていった。

お屋敷につき、案内されて一郎さんの休んでいる部屋へ行った。

「こんにちは。お加減はいかがですか」と声をかけた。

「ああ、おミツちゃんか」一郎は閉じていた目を開けてうれしそうに見上げた。

「よく来てくれたねえ」と体を起こした。

「具合はどうですか」

「大したことはないけど横になる方が楽だもんでうとうとしていたよ」

「これ飲んで元氣を出してくださいよ」

一升瓶を出して一郎の前に置いた。

「ああ、おミツちゃん、見舞いに来てくれたのか。遠い所をすまなかつたねえ。ありがとう。おミツちゃんに見舞いに来てもらうなんて夢にも思わなかつたよ。嬉しいよ」そう言うつて涙ぐんだ。

ミツはきちんと座り直し

「貞夫が怪我をしたときには大変お世話になりました。おかげで貞夫も元氣になりました。私はあの時助けていただいたこと、温かい言葉をかけていただいたことを一日たりとも忘れたことはありません。本当にありがとうございました」そう言うつて頭を下げた。

「お前の苦勞を思えば何でもないだよ。よく頑張つたなあ。貞夫もかごを作っているんだつてな。なかなかの出来栄えだつて聞いているよ。よかつたなあ。それより俺はおミツちゃんがここへ訪ねてきてくれたことがどれだけうれしいかわからんよ。本当にありがとうなあ、これからも頑張つてくれよ」

ミツは一郎さんの温かい言葉を胸に帰路についた。

お見舞いに来てよかつた。ようやく肩の荷が下りた気がした。少し遠回りしてでも見晴らし峠に行つてみようと思つた。

しばらく来なかつたが、山はもうすっかり春だつた。貞夫もなんとかなるかもしれない。これからお父さんを中心にしっかりと元氣に頑張つていこう。ミツの心は落ち着いた。

鶯が鳴いた。久しぶりに聞く声だ。

「ああ、春だなあ」

七人の子どもを抱え、戦争を挟んで不景氣な時代を生き抜いてきたミツに貧困が容赦なく襲い続けた。長い人生、通つてきた道は常に険しかったけれども、

「いつかきつといい時がくるでなあ」
そう言い続けたミツであった。

明治、大正、昭和、平成の四つの時代を生き抜いたミツは平成元年春、満開に桜が咲いた日に四人の子どもに見守られ貞夫の手を握りながら静かに九十二年の生涯を終えた。

(天竜区)

「入選」

住吉の森語り

鈴木啓之

森語り① タツキ

浜松市の中心部からほど近い、住吉地区の高台に開発を免れ奇跡的に残った森があります。そこには円墳が鎮座し、常緑樹の森に囲まれて、浜松市立青少年の家があります。ここでは主催する事業として0才から青少年・その家族を対象に、自然・社会・文化等の体験活動など、様々な取り組みが行われています。また施設を利用した宿泊やグループの活動も盛んです。

子どもたちが、森で遊んでいます。木漏れ日が瞳に輝き、さわやかな風がほほをなでます。小鳥の声が耳に心地よく響きます。5月の空にはツバメも姿を見せ青空を切りさいて飛んでゆきました。

子どもたちの歓声はどこまでも遠く空をかけ上ります。その声に驚いた森のリスが、ゲッケイジュの枝の上でピョンと跳ね上がった、花のつぼみを落としました。枝からこぼれた

花のつぼみは、くるくると回って地面に落ちました。

子どもたちは気づかずに、花を飛び超えて土手のぼりに夢中です。草の陰からこの様子を見ていたアマガエルが、花のつぼみを手にすると、うっとり眺めました。「これはいい香りだ」と肩に担ぎ、草むらの奥にある自分の家へ持ち帰りました。

家ではちょうどお母さんが、お昼ごはんの支度をしていました。「まあ！ いい香り。花びらを一枚サラダに加えますよう。残った分は夕食の香りづけになるわ！」と大喜び。子どもの頭を撫でました。

お母さんにほめられた子どもは、嬉しくて「もつといいものを探そう！」と、丘に登って行きました。そのころには人間の子どもたちはお昼寝の時間。森はしんと静まり返っています。

丘の上からは遠くに、赤い電車が見渡せます。ガタンゴトンという車輪の音が、子守唄のように聞こえてきます。人間の子どもたちもこの音の子守唄に寝入っているのでしょうか？ かえるの子どももなんだかまぶたが重くなってきました。

どのくらいたつたのでしょうか。ほんの束の間のように思ったのだけど、気が付くと人間の子どもがじっと見つめています。その頭の上にはまだ青空が輝いています。だから眠ってしまった時間はわずかだったと思うのだけれど、もうそこまですべての子どもは伸びてきています。

その時「人間には近づいちゃダメ！」というお母さんの言葉が頭の片隅をよぎりました。だけれども、身体は人間の子どもの中です。暖かいというよりは熱い手のぬくもりがかえる子どもにも襲い掛かってきました。

「痛い！」思わず、かえるの子どもは叫びました。驚いた人間の子どもは「ごめんね」と言うと、そっとアジサイの葉に、かえるの子どもを返してくれました。

「あれ？ 今『痛い！』って言わなかった？」人間の子どもが聞いてきました。実はかえるも、子どものころには人間の言葉を話すことができるのです。けれどそれは本当にやさしい人間の子どもにだけなのです。

人間の子どもは返事も聞かずに、しゃべりはじめました。「ぼくこの『ふれあい教室』に通っている、タツキって言うんだ。樹木の樹って漢字一文字でタツキって読むんだよ！」そういうと、タツキは、幼稚園の時からいろいろな虫や、動物と話してきたこと、人間の子どもとは上手に話すことができなかったこと、大きい普通の小学校では友達が出来なかったことなど、まるでピアノを奏できるように、話し始めました。

タツキの通う『ふれあい教室』は、一般の小・中学校になじめない子どもたちのために、青少年の家の一角を借りて、運営されています。

タツキは言葉の出が遅く、幼稚園では他児に興味を示さず、ひとりで園庭のすみっこで虫を見ているような子どもで

した。広汎性発達障害と診断され、小学校入学後も集団になじみず、不登校を繰り返すようになり、母親といろいろな機関を渡り歩き、ふれあい教室にたどり着いたのです。

ちよつとかすれかけた声の、こんなに大きな少年と話すのは初めての経験なので、かえるの子どもはすこしびつくりしました。これまでかえるの子どもが話せたのは、いつも遊びに来る、近所の保育園の二歳くらいまでの子どもたちなので。

その時、腕時計を見たタツキは「もう行かなくちゃ！」と青少年の家へ駆けだしました。草を踏むスニーカーの軽やかさに、かえるの子どもはなんだか嬉しくなって、笑ってしまいました。友達になれる予感がしたのです。「今度はこちらから声を掛けてみよう！」かえるの子どもはそう思いました。

そんな風に、かえるの子どもが人間の子どものことを考えているとき、もうアジサイの木の下には、ヤマカガシがいたのです。「ヘビがいるよ！」そつと教えてくれたのは、モンキアゲハのおばさんです。かえるはヘビにいらまれたらもう動くことはできないのです。おばさんの忠告ももう間に合いません。だってもうヤマカガシはすぐそこまで迫ってきているのです。

「もうだめだ！」おとうさんやおかあさん、ともだちのダンゴ虫やチョウチョ、青少年の家のにぎわい、そういつた自分とこの森を取り巻くいろいろな物や出来事が、一瞬のうちにかえるの子どもの頭を駆け抜けました。

目の前が暗くなり、かえるの子どもは一瞬目をつぶりました。つばを飲み込む間もなくその暗さは通り過ぎ、明るい太陽の光がかえるの子どもに注ぎました。

恐る恐る目を開けてみると、そこにヤマカガシはなく、遠く、鳥の足につかまれて空を行く姿が見られました。

「サシバじゃよ！もう南の国から渡ってきたんじゃなあ、命拾いしたわい！」その鳥を見つめながら、ガマガエルのおじいさんが、目をしばたかせました。

春に南の島から渡ってきた、サシバやハチクマという鷹の仲間が日本で子育てをして、秋になるとまた暖かい南の国に冬を越すために帰っていくのです。

いろいろな事があつた一日が終わろうとしています。なかなか寝つかれないかえるの子どもは外に出てみました。森の木の間隙から街一番の背高のつぼの、アクトタワーの光が点滅して見えます。見上げたその先には、もう夏の星座たちが顔を見せ始めました。

遠くからかすかに遠州灘の海鳴りが聞こえる、とても静かな夜です。お母さんが来て隣に座ると、この森の話を聞かせてくれました。

「この森は太古から続く森でね、古代には、地域の王が埋葬され、曳馬野へ続く古道を行く旅人はここの木陰で汗を拭いたのよ。戦国の時代には武者たちが甲冑を鳴らして駆け抜け、この間の戦争では地下に防空壕が掘られ、機銃や高射砲が据え付けられて敵の船や飛行機を狙ったの。焼け落ちる浜

松の町並みを、じつと見つめていたのもこの森の木々たちなのよ」「この国や地域の歴史をそっくり受け入れて、やせても凜と立っているのがこの森なの」お母さんは静かに話してくれました。

見上げるとくすの木じいちゃんが、霧のように銀の雫をほとばしらせ、かぐわしい香りを漂わせています。この森一番の巨木、コジイは葉を震わせて、その精を森の隅々にまで広げています。それはかえるの子どもにもお母さんの上にも降り注ぎ、血管をつたって体の隅々まで送られます。

「今、私たちはこの森の精、太古からの森の息吹に力をもらったのよ」母ガエルが胸にそっと手を当てました。

こうして初夏の森は、太陽と水に恵まれ植物と生き物の数を増やしていきました。

街のビルが夏の暑さに揺らいで見える日も、森の中には涼しい風が吹き抜けます。夏休みも近づいたある日、桜の老木の下でタツキが「ボランティア研修に参加する」と打ち明けたのです。青少年の家で行われる、中学生向けのボランティア研修会です。

このころにはもうかえるの子どもとタツキはすっかり仲良しになって、何でも話す友達でした。

今日のタツキは目に力があります。日に焼けて肌も黒く、ずいぶん逞しく見えます。かえるの子どもに、うまく人と話せないことや、「空気が読めない」と友だちに言われ続けたことなどを話す中で、時間をかけ、自分なりの付き合い方や、

周りとの距離の置き方を見つけてきたのでしょいか。

タツキの視線はかえるの子ども目のずっと遠くを見ています。やさしいまなざしです。「ひまりちゃんも一緒なんだ」とタツキの口から、青少年の家の活動にボランティアで参加している、同じ年の女の子の名前が飛び出しました。

青少年の家にはボランティアとしてたくさんの人たちが関わっています。その中の一人とタツキはいつの間にか話すようになり、一緒に共感できる何かをこの夏に成し遂げたいと思うようになったのです。幸いなことにひまりちゃんも同じ思いのようです。

夏は草も木も鳥も虫も人も、たくましく大きく育ててくれます。

タツキは青少年の家で行われる、三日間の講義やボランティア実習に生き生きと参加しました。ときどき一緒に活動している仲間と楽しそうに話す姿も見られるようになりました。そんな姿を見ているとかえるの子ども胸は、夕立の前の空気のように少しざわつきました。

夏も終わり、森にも秋の気配が色濃く感じられるようになりました。今年の森は豊作です。そこかしこにどんぐりが実り、リスたちは夢中でほほ袋を膨らましています。南へ帰るアサギマダラが、オミナエシの花の上で羽を休めています。子どもたちもかまどを使った野外炊飯に歓声を上げています。

秋も深まり、どこまでも青く澄んだ空に赤とんぼが、一本

道の飛行線を交錯させています。そんな秋の空気の中でかえるの子どもの瞳だけが揺れています。もうかえるの子どもには人間の子どもの声が聞き取りづらくなってきたのです。かえるも成長し大人になると、人とはコミュニケーションが取れなくなるのです。

落ち葉が重なり、そこにどんぐりや松ぼっくりが静かにぽつん、ぽつんと、誰にも知られずに落ちては転がります。十一月、青少年の家祭りの日、紫香楽焼の狸によく似た所長さんのあいさつで家の祭りが始まりました。タツキとひまりちゃんはボランティアとして、楽しそうにポップコーンを販売しています。

「もう大丈夫」かえるの子どもは、寒さでうまく動かなくなってきた体をセンリヨウの木にあずけてつぶやきました。もうすぐカエルやトカゲ・ヤモリたちは冬眠に入らなければなりません。森の虫たちもすっかり姿を減らしました。リスやタヌキは冬に向けて、どんぐりや柿などの森の恵みで体につぶりの脂肪をつけました。

かえるの子どもは家族で、一番太いかしの木の皮の裏側に引越しを済ませました。これから来る長い冬をかしの木の甘皮のベッドで過ごします。来年の春にこのベッドから起きだすころには、かえるの子どもは大人になり、もう人間と話すことはできません。タツキだって同じです。春にはかすれていた声がかっきりとした大人の声に変わります。友達も少しずつ増えてきて、もうかえるの子どもと話す必要もなくな

ることでしょう。

うすらいでゆく意識の中で、かえるの子どもは春の花々や、タツキとの出会い、こわかった台風やへびとの出会い、夜空に輝く夏の大三角形、お母さんのぬくもり、青少年の家の主催事業に沸く子どもたちの歓声など、子どもだった自分が大人になっていく過程と合わせて、ぼんやりと思いついていました。

とその時、「春になったらまた会おうね」タツキの声が聞こえました。

かえるの子どもは冬の眠りについていました。外では北風がタクトを振り、森の木々がシンフォニーを奏でています。その音に混じって時々、ピザ釜からかぐわしいピザの焼けるにおいが漂ってきます。餅をつく音も、冬の森に彩りを与えています。青少年の家では、野外料理やキャンプが行われているのです。かえるの子どもは眠りながらもそんな外の営みを感じていました。

そんなある日。ボワン、ボワンという音とともに甘い一筋の香りがかえるの子どもの鼻を捕らえました。かえるの子どもは我慢ができずに、外をのぞいてみました。なんとそこには薄ピンクの花が咲き、ヒヨドリやメジロが飛び交って花の蜜を吸っています。あのボワンという耳に心地よい音は、桜の花が開花する音だったのです。

すぐに森の斜面は桜の花に覆われ、夜には電燈もともされ桜まつりも開催されました。大勢の人波の中にかえるの子ど

もはタツキの姿を探しました。もう話せないことは分かっているけどどうしても探さずにはいられません。ふと少年の家の窓ガラスに映った自分の姿を見つけて、かえるの子どもはビツクリしました。そこに映った姿はもう子どもではなく、立派な大人だったからです。冬眠の間にかえるの子どもは成長して、大人になっていたのです。

もうすぐ恋をして、父親になるのです。

桜の花びらが散り始めたころ大人になったかえるの子は、やっとタツキと会うことができました。中学二年になったタツキは、一層たくましくなつてまぶしいくらいです。「タツキ！」かえるは呼びかけましたが、タツキは気づかずにせんだん草の小道を歩いていきます。コゲラの枯れ木をつつく音に気を取られているようです。

もうかえるの声はタツキには届きません。野外調理用のかまどの上で、雨に打たれた花びらのように、カエルの心はしておれています。足取りも重くブルーベリーの道を歩いていると、和室から声が聞こえてきました。「愛おしく思う心、伝えよう、聞き、感じ取ろうとする気持ちが大切なの！」その人は、小さい子どもを抱えたお母さんに、やさしく声を掛けていました。

青少年の家ではさまざまなサークル活動が行われているのですが、その時かえるが聞いた声は、「親子サイン・グーチヨキパー」という、聴覚にハンディキャップを持つ子どもや乳幼児のコミュニケーションに、手話の技法を取り入れて成

果を上げている、畑さんという主幹の声だったのです。

かえるの心が晴れました。つぼみを膨らませているハナミズキのように、かえるの胸も膨らみました。「いつかタツキと話せるようになるんだ」かえるに希望が湧きあがってきました。

それから、かえるは毎日青少年の家の入口にあるネズミモチの葉の上でタツキを待ちました。ちょうどタツキと初めて出会った、ハナミズキの花の咲くころ、タツキがかえるに気づき、顔を寄せてきました。もう昨年のように震える瞳ではありません。かえるは心からタツキに呼びかけました。自然に体も動いて手が胸元で重なりました。しばらく見つめあっていると、タツキの口から「久しぶり」という声がかぼれましました。タツキの手も胸の前で固く結ばれています。笑顔の口元にはうつつすらとうぶ毛も濃さを増しています。

それからの二人、いや一人と一匹には言葉の障害はありませんでした。タツキが一番たくさん伝えたことは、ひまりのことでした。クリスマススのデートやお正月の初もうで、二人で参加した「長いトンネルを抜けると……冬」という、青少年の家のスキーイベントのことなど。

かえるから伝えることは多くはありませんでしたが、タツキの白い歯、しなやかな体の動きを見ているだけで、かえるにはタツキの気持ちや考えが手に取るようにわかり、楽しくて時のたつのも忘れしました。

そんなある日、遠い田んぼの方からの水と土のにおいがか

えるの鼻をくすぐりました。するともうタツキの姿がぼんやりと遠のいてしまうのです。南から帰ってきたツバメたちが巢作りの土を田んぼから運んで、その匂いは日増しに強くなります。

「タツキ、ばく行かなくちゃ」そう告げると、かえるはヤツデの葉を滑り降りて竹林に向かいました。竹林の下には湧水が出ていて、小さな沼を作っています。この秘密の場所が森のかえるたちの恋の水辺、子育てのゆりかごなのです。

何日も姿を見せないかえるにタツキの心は、揺らぎました。だけど竹林の下から聞こえてくるかえるたちの鳴き声の中に、確かにあのかえるの凜々しい声を聞き取りほっとしたのです。

梅雨の終わりの雨が激しくほうの木の大きな葉をたたいています。こんな雨の中でもピロティーの軒先にタツキの姿があります。タツキがひまりから外国への転校を告げられたのは、一週間前の事です。父親の転勤でひまりはジャカルタの日本人学校に転校することになったのです。

タツキの目は梅雨空の雲より暗く沈んでいます。ここで働く八木さんが雨しぶきに濡れながらピロティーを掃いています。「八木さん、ほくどうしたらいいんだろう？」八木さんは答えてはくれません。首をかしげてうなずくばかりです。

ハンディキャップを持ちながらも、ちゃんと仕事を持ち、社会に自分の居場所を確保している八木さんを見て、「依存」という言葉がふと、タツキの脳裏をよぎりました。「八木さ

んは多くの人に助けられながらも自立している」「誰かに頼ってその人に寄りかかってはいない」「一人になっても生きて行ける」そんなとりとめのない言葉が、頭の中をぐるぐる回って、タツキの目には光が戻ってきました。

見上げると梅雨の雲の隙間から夏の空が顔をのぞかせています。その光を浴びて輝くマユミの葉先にあのかえるが座っていました。体には他のオスと戦った傷跡を残しています。堂々とした父親の風格です。葉影から子どもたちが次々と顔を見せました。どの瞳も好奇心に満ちて輝いています。

「こんにちは」タツキの耳にはつきりとかわいい声が届きました。手足を不器用に動かしながら現れた七ひきの子どもは、去年出会った時のかえるよりずっと小さかったけど、確かな存在感で森に溶け込んでいます。

タツキの目から涙がこぼれました。悲しみの涙ではありません。この梅雨空の下で、人も草木も動物もみんなたくましく、けなげに生き、成長している。身近な場所にそんな姿を発見して、タツキはくよくよ悩む自分と決別できる気がしたのです。

八木さんとの言葉少ない会話、かえるの子どもたちの屈託のない笑顔、梅雨明けの入道雲、森を取り巻くすべてが、タツキの心と体に栄養を与えてくれたようです。

タツキは夏休み、ジャカルタまで旅をしました。前半はバイトをして、計画も一人でたてました。心配するお母さんを、説得してくれたのはおじいちゃんです。パスポートも旅券も

一人で取りました。そして「見送る」という母親やおじいちゃんには浜松駅までにしてもらいました。

ヒグラシの声が森に響き渡り、秋の風を呼び込もうとされています。もう森の虫はすっかり秋の虫に代わって、鳴き声も涼やかです。

日増しに涼しさを増す森の中で、かえるたちは、蚊や小バエなどの虫をいっぱい食べて冬の準備に余念がありません。昨年冬を越したかしの皮の隙間にあるウロも整備が進んでいきます。

いつの間にか森の木の葉が色づき始めて、青少年の家では「家祭り」の準備が進められている頃、かえるはとちの木の実に腰を下ろして、タツキに話し始めました。

「タツキ、君とはもうすぐお別れなんだよ」タツキは息をのみました。二度目の冬を迎える前に、かえるはみんな死んでしまうのです。

もう冬のおとずれはすぐそこです。タツキの胸はふるえています。今まで身近な人の死に接したことのなかつたタツキは、この事実をどう受け入れたらいいのか見当もつきません。「大切な友達、何でも話せた仲間、心を通わせた友がもうすぐいなくなってしまうなんて……」

奇跡を起こせないかと、森のコジイにも頼んでみました。だけど、森の木々は葉を落とすことを止めてくれません。

家祭りの日、青少年の家は、小春日和の一日を祭りの出し物や展示、出店で楽しもうという人でにぎやかです。喧騒を

逃れた森の一角、とちの木の下にかえると子どもたち、タツキの姿があります。

かえるは静かに息をしています。かえるの子どももタツキも一言もしゃべりません。カエデの葉が静かに舞い落ち、降り積もっています。とちの木の実がポトリと音をたてて落ち、かえるの息も止まりました。

タツキは涙でかすむ目で、かえるの手に取るとヤツデの葉でその体を包み、そっと落ち葉の上に寝かしました。

その時です。草むらから小動物が躍り出ると、かえるをくわえて藪に逃げ込みました。嘩然としたタツキがあわてて追いかけようと、子がえるを見ると、子がえるたちは静かに、小動物の行方を見つめています。くすの木も、コジイもそこに凜と立ったままで、葉の一枚も動かしません。

「なぜ？」とタツキ一人が身をよじっても、周りに動きはなく、ただ静かに厳粛に時が流れていきました。

自然はありのままを受け止めているのです。死んだ者はそのすべてを自然の循環にゆだねるのです。それは悲しいことでもつらいことでもないのです。

どれだけ時間がたつたでしょう。祭りの喧騒が再び耳に戻ってきたとき、タツキはそれを悟りました。

すつくと立ち上がった顔にもう涙はありません。ジョウビタキがしつぽを振って踊り、コジイが笑うように葉をゆすりました。

「さようなら」そう告げると、タツキは祭りの喧騒の中に戻

つて行きました。

森語り② さと

男は公園のベンチに寝転がって、空を見上げていた。空にはトンビがのんびりと輪を描いて、風は涼しく絵にかいたような穏やかで平和な日だ。しかし男の胸には行き場を失った怒りがこごり、悪臭を放っていた。思い出しただけで胸の悪くなるような数か月間だった。

男は地元浜松の自動車関連の会社員だった。面白くもない工場の二交替の仕事を必死に頑張り、郊外にやっと小さな一軒家を手に入れ、家族三人でささやかな毎日を送っていた。ところが工場の海外移転を理由に突然のリストラだ。昨年のボーナスをもつての出勤停止は事実上のクビで、男の気持ちは一気に萎え、途方に暮れ、そのみじめな気持ちが怒りに変わった。怒りは会社や上司、生き残った同僚に向かい、やがて家族に行き着き、暴力にエスカレートした。

酒とギャンブルに逃げ、前を向く気にもなれなかった。その拳句の離婚。まあよくある話だ。そんな訳で男は今、まだ昨夜の深酒の残る頭でベンチに寝転がっている。

この公園に来たことに訳がないこともない。この公園に隣接した青少年の家には、息子の樹（タツキ）が通うふれあい教室がある。一般の小中学校になじまない子どもたちの教育施設だ。公園に隣接した市立青少年の家の一角を借りて運営

されている。

樹は風変わりな子どもだった。言葉が出ないばかりか、友だちや親にさえ、打ち解けようとしない。気に入らないとパニックを起こしてあばれる。まあかわいげのない子であった。

案の定、小学校から不登校になり、家に引きこもった。妻のみのりは発達相談を受けたり、同じような症状の子を持つ親の会に入った。また遠くまで講演を聞きに行ったり、学習会を組織したりと、まさに東奔西走して、やっとふれあい教室にたどり着いたわけだ。男は仕事にかまけてそんな母子を遠眼に見ていた。

離婚にあたって親権は妻に渡ったが、それ程悔しくもなかった。そんな男だったが、今日はなぜか樹の顔が心に浮かび、この公園に足が向いた。まだ午前の授業は終わらず、したがって子どもの姿は見当たらない。

あくびのついでに目のはしが、近くの小山の巨大な木をとらえた。大きな森の木々を背景に青少年の家に近接して、小山がある。

「よっこらしよ」と腰を上げ、近づいてみると。なるほどでかい木だ。幹回りが男の広げた手の数倍はある、天を突くように枝葉を広げた姿がまがまがしいほどのヤマモモの古木だ。小山の下には看板が立っていて、どうやらこれは古墳時代中期の前方後円墳らしい。だが、ヤマモモの木についての説明はない。

男は笹藪を分けて木の根元に近づいた。真下から見えてみる

と、幹は二つに分かれて横にも縦にも枝を伸ばし、小山を覆い尽くす勢いだ。横に伸びた幹は、大人がゆつたりと横になるほどだ。

男はどっかりと根元に腰を下ろした。心地良い日差しが男の荒れた肌にもしみ入るようだ。日頃の不摂生がたたってか、男のまぶたはすぐに重いカーテンのように閉じられた。

年老いた女のしゃがれた声が聞こえた。声は呼びかけてきた。「ずいぶん長い間待つておったぞ。わしは、お前が今、枕にしているヤマモモの木じゃ。お前の先祖とわしの話をしようかのう」

男は意識を現実に取り戻そうとするのだが、この得体のしない声から逃れることができない。

声は勝手に話し続けた。「わしの生まれたのはもう四百年も前じゃ」その声は男の意識に語りかけた。

「その前の年はひどい日照りでのう。米どころかヒエやアワさえも取れなかった。食べ物はずぐに底をつき、この辺の百姓の子どもたちは、ワラビやクズの根を掘ったり、ドングリやシイの実を拾ったりして飢えをしのいでおった。この森はもつと広大だったのじゃが、そんな訳で、あらかたの木の実を拾われ、草もまばらになってしまった。

そんな中、一人の娘が森にやつてきた。名前はさといくんじゃが、荒れ果てた森で、それでも木の実を落ちていないかと、落ち葉の下をあさっているうちにわしを見つけたんじや。わしは、森のリスに落ち葉の下に隠され、忘れられてい

るうちにコジイの木陰で芽を出しかけておったのじゃ。

コジイの日陰で成長もみこめないわしを、さとはふぶんに思ったのじゃなあ。自分が生きてゆくのをさえおぼつかないのに、わざわざここに運んで埋めてくれたのじゃ。この森で一番見晴らしのいい場所で、わしは気に入った。

それからさとは弟のしんきちを背負っては、よくここへ来て、草をむしったり水をかけてくれた。わしは、まだひよろひよろのひよつこで、さとは木の実を落としてやることも、日陰を作ってやることもできなかった。

空が高くなって、曳馬野の大地に夕日の沈むのが早くなってきた頃じゃ、さとは暗い顔をしてやつてきた。聞くと、口減らしのために奉公に出されることじゃ。奉公先は鴨江じゃ。この辺のもんなら鴨江と言えば遊郭じゃとすぐに分かる。何年か下働きをした後は女郎として苦界に身を投げるのじゃ。近所の姉やが、気がふれて鴨江から帰ってきたのはついこの間のことじゃ。

「どうしても行くのは嫌じゃ」とさとは泣いた。親の苦境が解かるだけに一層つらいのじゃ。

寒さに震えながらさとは一晩泣きつづけた。そして「逃げる」と決心したのじゃ。わしら植物は地下の水脈を通じて、情報の伝達ができる。いわゆるネットワークというやつじや。だけどそれも天竜川水系だけじゃがな。分水嶺や峠を越えらるともうだめじゃ。その情報を基にわしは「北へ逃げよ」「北には大きな寺や神社がある。そこで施しを受けよ」と、

さとに伝わるように念じた。

わしの声が聞こえたかどうかは分からんが、さとはとにかく北へ向かった。食べ物もなく着の身着のままじゃ、ちびたわら草履は有玉のあたりでもう擦り切れてしまった。畑で拾った大根をかじりながら、裸足で馬込川をさかのぼった。

その日たどり着いたのは、岩水寺という寺じゃ。その坊主はアワのにぎりめしを一つくれたが、泊まれとは言ってくれなかった。さとは近くの田村麻呂神社の軒下に潜り込んだ。暗くて寒くて、近くにはけもののが心配もして、さとは震えながらうとうとと夜を過ごした。

空腹と渇きで目が覚めたさとは、葉っぱについた夜露で渇きをいやした。お堂の裏にマツタケを見つけてむさぼるように食べた。さとはマツタケを神様の情けのように感じて、お堂に手を合わせた。参道で拾ったわら草履を足に巻きつけさとは歩き出した。

天竜川をさかのぼり、山に踏み入り、正一位秋葉神社や古刹山住神社の門もたたいた。どこもうっそうと檜や杉の生い茂る、霊験あらたかな神社だったが、「神を恐れ敬え」と諭すだけで、さとを救ってくれることはなかった。

信濃の国との境に近い麻布山の山頂にある寺院の宿坊が、さとの旅の最後だった。女人禁制のこの寺で入場を断られ、さとの精も根もついに尽きようとしていた。家を出て十日がたっていた。ほんの少しの施しと、木イチゴやイナゴ、野菜の切れ端で、やっと飢えをしのいできたのだが、十才の娘が

生きることへの救いを求めた逃避行は、救われることなく終わろうとしていた。誰もが自分が生きることで精いっぱい時代に、子どもが飢え、死ぬことは珍しいことでもなかったのだ。

だから人々は、来世の安寧を求めて神社仏閣を信仰した。その神社仏閣とて現世で人々を救うことは困難であった。

意識ももうろうとして仏閣の門前の石畳に横たわるさとに、声を掛ける者があった。その者はさとを抱き上げると、背負い籠に入れ、さらなる山の奥へとさとを背負って歩き出した。

もうろうとした意識の中で、さとは背中揺れに身を任せていた。小さな沢を渡る時その男はさとを降ろし、フキの葉に水を汲んで飲ませた。ふところの布袋からきな粉の塊のような固形物を出すと、一つをさとの口に含ませた。それは大豆や魚の味が混じっていて、さとがはじめて口にするものであったが、身体に力が湧いてくるような気がした。

男は寡黙であった。さとの年や名前を聞いただけで、それ以上の質問はなかった。自分の名前もかすけとしか名乗らなかった。その夜、イワナや山菜、きのこなどのたっぷり入った鍋を食べさせてもらった。さとはこれまでに経験のない味わいで、鍋底まで舐めとってしまいたいほどのうまさであった。焚き火の母親の懐のような温かさに包まれて、さとはその夜、泥のように眠った。

翌朝はまた固形物を食べて、夜明けとともに野宿の河原を

出発した。さとの身体にはもう力がみなぎっていた。かすけは腰に巻いた獣の皮で、さとに靴を作ってくれた。それから一晩と二日杣道を歩いてその集落についた。

赤石山脈の深い山懐に抱かれた、その三家族だけの集落は、何年か前の大凶作で百姓を捨てた者たちの隠れ住み家であったが、さとにはそんなことは知る由もなかった。そこには男が三人、女房が二人、おばあが一人、さとよりは三つばかり年上の男の子と、同じ年くらいの女の子二人、それから弟のしんきちと同じぐらいの赤ん坊の三家族が暮らしていた。

大人たちは寄り合ってしばらく話をしていたが、おばあがさとのそばにやっていると、「里にやあ飢饉で死んだ子や捨てられた子どもが山のようにいるだ。お前も帰るところがない。だったらここで暮らすか？」と聞いてきた。さとには選択する余地はなかった。その小さなあごをコックリすると、「じゃあお前は、ばあと暮らすだ」と、さとの肩を抱いて粗末な杉皮ぶき屋根の家へ案内した。土間と、むしろ敷きの囲炉裏が切られた部屋が一間の小さな家だが、さととは狭苦しい家には慣れていた。

その晩からさとはその集団の一員となった。ここは里から遠く離れた山奥の谷あいなので、田んぼはもちろん畑さえも満足に耕せない。男たちは川魚を捕ったり、遠出をして獣を畏にかけたりした。女たちはわずかばかりの畑にソバやヒエを植えたり、山野草やきのこ、木の実などを採集した。薬草

も見つけては干して乾燥させた。天気の良い日はかすけの家に集まって、竹や山づるで籠を編んだり、椀や鉢を削った。それがたまると、何日もかけて山を下り、米や布、油などと交換しては暮しを立てていた。

ここでの暮らしは、さとにとつて楽しいものであった。山は豊かで飢える心配はなかった。薬草や食べられる山野草、きのこの種類、ざるや籠の編み方、川魚や獣のさばき方。知らないことを覚えるのに、さとには夢中になった。

さとが助けられたとき食べさせてもらった固形物が、きな粉や魚粉、薬草などを混ぜて固めた、杣人の非常食であることも教えられた。

また山全体を埋め尽くす紅葉は、息をのむほどの美しさだった。いろいろ端でおばあに抱かれて眠る時、幸福感で肩がきゅんとつぼまった。時々はおかあやおとう、弟のしんきちのことも思い出した。とり分けまだ乳飲み子であるしんきちのことは気にかかった。しかし現在のさととは、「一人食い扶持が減ったのだから……」と自分に言い聞かすよりしかたなかった。

冬の山には雪が降り積もった。ひざ上までの雪をかき分けることも、沢のつららを折って口に含むことも、さとには初めての経験で楽しかった。雪に残されたウサギの足跡を追って仲間と遠出もした。

小屋の中でおばあに縫物や籠の編み方を教わった。雪が去り沢に水芭蕉の咲くころには、さとには立派な働き手に成長し

ていた。山がぼんやりと薄い桜色や、木の芽の赤や緑に包まれて春がおとずれ、すぐに赤石の一万尺の山の上に入道雲が輝き、しばらくすると山が燃えるようにゆらぎ、雪が舞った。山の移ろいは早く、鮮明だった。

こうしてあつという間に三年が過ぎた。さとは十三才になつて、カモシカのようなしなやかな身体と、朝霧のような澄んだ瞳の美しい少女になっていた。また集落の子どもたちもそれぞれに成長し、赤ん坊だったんがもうその辺を走り回つては、母親にしかられていた。さと同じ年のはると妹のそらも全身から、若木のようなみずみずしさを放っていた。

取り分け年長のいわおはたくましい青年になり、漁りも猟の腕も大人顔負けであった。父のかすけに似て、寡黙ではあつたが思慮深く勇敢で、大人たちからも信頼されていた。

遠く山の峰が色づき始めたころ、さとはきのこを探りに峰を超えた隣の沢に来ていた。柚道はずれて沢ぞいをたどり、竹かごにしまじやくりたけ、なめこなどがいっぱいになったころ、突然、木漏れ日が消え、見上げると空が黒雲に覆われていた。あわてて踵を返したさだったが、すぐに大粒の雨がほほを打った。ようやくブナの大きな洞を見つけて駆け込んだ時には、早くもさとに寒さが襲い始めていた。

遠くで鳴っていた雷が近くのかやの木をへし折り、雨脚は衰えることなく降り続いた。寒さと恐怖に震えるさとの耳に、沢の上からごろごろと岩を転がすような音が聞こえたかと思うと、濁流が滝のように降り注ぎ、乱暴にさとを洞から

引きずり出し、激流へと巻き込んだ。

さとの身体は恐怖にしばらく動かすことはできなかったのだが、本能的に手だけは水面に伸ばされた。その手に何がふれた感触はあつたのだが、さとの意識はそこで途切れた。

焚き火のほだ木がはぜる音でさとは目が覚めた。気づくとさとの横にはいわおが横たわっていた。二人とも裸でいわおの腕はしっかりとさとの肩を抱いていた。さとの目覚めに気づくと、いわおは焚火のそばにかけられたさとの着物を取つてよこした。それは暖かく、香ばしい香りがして、さとの恐怖をいやした。

「ありがたい」さとは娘らしい恥じらいで瞳を伏せて声を出した。「うん」と応えたきり、いわおは黙りこんだが、さとはいわおの裸の肩がとてもたくましく思えた。

一晚をその岩穴で過ごした二人が集落に帰ると、全員が喜んで二人を迎えた。おばあはおいとおを上げて泣きくずれた。豪雨が降り始め、心配したいわおが蓑を持って飛び出したきり帰らないので、みんな心配していたのだ。

死を間際にした恐怖は、さとの心に傷を残すことはなかった。いわおの暖かい肌の感触や、間近に見た笑顔は、むしろさとの気持ち湧き立たせ、甘酸っぱい感傷を与えた。その後いわおはよく歯を見せて笑うようになったし、さともいわおの後については山懐を歩き回った。

そんな二人が結ばれるのに時間はかからなかった。さとは十五、いわおが十八の時、二人は集落のみんなに祝福されて

結婚をした。その夜はどぶろくがふるまわれ、山に伝わる踊りに一晩中沸いた。

二人はおおあの家を建て増しし、そこに暮らした。子どもも生まれ集落は世帯も、人も増えにぎやかになった。

その頃には飢饉の傷も癒えて、街道を往来する人の数も増えた。いわおとさとは里に下りる決心をした。集落が大きくなり、猟につかう鉄砲を新しく買ったたり、夜を照らす油の量も増えて、籠や箕を売るだけでは暮らしがたち行かなくなっていた。なによりもさとは二人の子どもを寺子屋に通わせたかったのだ。

里の寺で読み書きが教えられていることを知り、さとはどうしてもそこで二人の子どもを学ばせたかった。山の暮らしで学べることはたくさんあったが、文字で綴られた賢人の教えや、何千年もの人々の暮らしの知恵は、子どもたちに新しい生き方や考え方を教えてくれると思った。

遠州と信州を結ぶ街道沿いの町、水窪に、籠やざる、わんや鉢の他、わらじや箕を売る小さな店を出した。柚人に対する差別や偏見もあったが、さとはたちは腰を低くして、粘り強く誠意をもって里人と接した。そうして数年たつと二人の店は、里の人にも旅人にも重宝がられて、繁盛するようになった。山奥の集落からは定期的に品物が運ばれてきて、収入は集落も潤した。

さとはこの地で山と里を歩き来しながら暮らした。あんなにたくましかったいわおは、流行病であっけなくあの世の人

となったが、女手一つでりっぱに二人の子どもを育てあげた。

子どもが巣立った後、さとは一度だけ住吉をたずねたが、もうさとの生家にはなかった。古墳の森を訪ねると、りっぱに育ったヤマモモの木が風に揺れていた。「ありがとう」とさとはそつと木の幹に触れた。その手はあの時のみずみずしいふつくらした手ではなく、節くれだった年寄りの手であった。応えるようにヤマモモの木は木全体を震わせた。時が流れ、水窪の街道を維新の志士たちが隠れるように行き来し、そして明治政府とやらができて、徴兵制が惹かれるようになる、山の者は、山奥へばかり引つ込んでいられんようになった。その時に山の人を里に受入れ、暮らしの立つように面倒を見たのが、いわおとさとの子孫だった。

「お前のひい爺様は長野県との県境の町、水窪の出じゃろう」その頃には男はすっかり目覚めていたが、ヤマモモの木の声は男の心に直接語りかけてくる。

「そうじゃ、わしをここに植えてくれた、やさしい心の娘、さとの末裔がお前なのじゃ。わしはさとがこの地を去ってからもずっと行く末を案じて、この地から見守っておった。さとは立派に生き延び、子をなし、安らかに死んでいったのじゃ」

「なあ男よ、お前の足は、裸足で川をさかのぼった時のさとの足より、ずいぶん大きくなりましたよ」

そう言い終わると、ヤマモモの木は口を閉ざした。青空いつばいに緑の葉が広がり、シジウウカラがツーンと鳴いて

飛んで行った。青少年の家から午前の授業の終えた子どもたちが出てきた。
男は立ち上がった。その目からはもう、うつろな陰りは消えていた。

(東区)

「入選」

みかんの花の咲く頃には

名倉民子

一

五月になると、どこからともなく甘い香りが漂ってくる。それがみかんの花の香りだと気づいたのは、浜松に移り住んで五年ぐらい経った時だった。引越した際に植えたみかんの木に、初めて花が咲いたのである。それは白く小さく、たった三つだけで、葉っぱの陰に隠れて殆んど気づかないぐらいだったが、それでも充分あたりに甘い香りを漂わせていた。

その香りは、私がかつて夫と二人で訪れたバリ島のジャスマインの香りによく似ていた。みかんの花が咲く頃になると、私はいつもバリ島をなつかしく思い出す。

今年になって、家からそれ程遠くない所に、アジアンスターのカフェ「ドロップ」を見つけた。バリ島の海岸通りに並んでいるようなこじんまりとした店である。

二月のはじめ、私は思いきってそこへ出かけた。どこかへ出かけるといことは、その頃の私にとって、大変勇気のいることだった。その頃、私の頭は少しおかしくなりかかって

いた。

一月の中頃、私は生まれて初めてインフルエンザにかかってしまった。全ては、そこから始まったのだった。

そのあと、「ドロップ」に行きつく迄の二か月余りを、私は苦しみながら過ごしていた。あとになって考えると何でもないことだったのに、その時、私は孤独という大きな渦にまきこまれてしまっていた。なすすべもなく中心をぐるぐる回り続け、そこから容易に抜け出すことはできなかつた。しかし、今それは、去年の秋、草をとりながらふいに思い出した青春時代の失恋の記憶のように、すでに深い霧に包まれかすみになりつつあるのだけけれど。

二

その日、いつものように、

「じゃ、行ってくるからな」

と言って、夫は会社に出かけて行つた。

私は駐車場にとめてある車に乗りこむ夫の姿を、レースのカーテン越しに見送つた。

転勤族だった私達は、夫の定年後浜松に戻り、夫は週三回、知り合いの会社で技術指導に当たっている。

私はいつものように新聞を読もうと、こたつのある居間にもどつた。こたつには淡いピンクのカバーがかかり、そこに冬の日ざしが暖かくふり注いでいた。こたつに足を入れたらたん、私は妙な感覚におそわれた。部屋の中が、何故かゆら

ゆら揺れてみえたのである。変だなと思ひ、額に手を当てる
と確かに熱い。私は、こたつに入ったまま身体をよじつて、
すぐ横にある低いタンスの下の引き出しから、もう何年も
使つたことのない体温計を、ゴソゴソと取り出した。我家に
体温計は一本しか無い。昔ながらの目盛のついたものでは
る。計ってみると、何と四十度近くもあつた。二度計つてみ
たが、二度とも同じだつた。私は九時になるのを待つて、タ
クシーを呼び、かかりつけの多々見クリニクに行つた。

そこは家から車で五、六分の坂の途中にある。待合室が広
く、西側が低い崖のようになっていて、そちら側のソファア
に掛けると、ほんの少しだけ宙に浮いたような感じがして気
持がいい。私はいつもそこに掛けることにしていた。

その日、待合室に入ると、まだ九時過ぎだというのに、中
はすでに患者であふれかえつていた。殆んどの人がマスクを
かけている。私は受付で体温計を受けとり、かろうじて空い
ている入口近くの椅子に腰をかけた。丁度インフルエンザが
はやつている時だつた。熱は三十九度もあつたが、看護婦は
驚いた様子もなく、

「もう少しお待ち下さいね」

と言つた。

名前を呼ばれたのは、かれこれ一時間ぐらい過ぎてからだ
つた。診察室に入ると、

「お待たせしました」

と、多々見医師がくるりと私の方に向き、やさしく言つた。

念の為とすることで検査をすると、やはり私もインフルエンザにかかっていた。

「インフル……Aです……」

そう告げた医師の表情は、疲れて絶望的に見えた。聞こえるか聞こえない程の小さな声だった。しかし、すぐいつものやさしい表情をとり戻し、

「インフルエンザは、三日過ぎれば家の人につすことはありませんからね」

と言った。

三日というのは、その時の私にとって微妙な期間だった。

あのう……と言いかけて、私はその言葉をのみこんだ。実は四日後に、歌の舞台の予定が入っていたのである。私には、五年前にレコーディングをしたオリジナル曲があり、たまにはあるが、地元の「歌謡ショー」に出演したり、東京からの有名歌手の前座をつとめたりすることもある。

今回は、チャリティーの為の歌謡ショーで、プログラムに名前が印刷されている。しかし、この発表会に私が欠場しても、特に誰かに迷惑がかかるというものではない。私は迷ったが、当日の朝になって出場することに決めた。体調がいいのか悪いのか、正直自分でもよく分からなかった。舞台上に立てば、わずか三分間の勝負である。何とかなる……と、軽い気持ちで会場へ向かった。会の主催者にも、他の出演者にも、私は自分がインフルエンザにかかったことを話さなかった。

控室に入ると、いつもながらの光景が広がっていた。部屋

の片側は全面鏡になっていて、その前のそなえつけのカウンターでは、出演者が真剣な顔でメイクにとり組んでいる。後の壁には華やかな衣装がずらりと並び、みんなせわしく動きまわっている。ドレスを着ようとしている人、すでに歌い終わった人は、紅潮した顔で少しは落ちついてドレスを脱ぎ始めている。それはお互いに助け合いながら、ガヤガヤとした声となって部屋中に響きわたる。

「私、喘息気味で困ったわ」

と、私は言いわけがましく、鏡に映った隣の人に話しかけた。

「私だって、体調良くないのよ、アレルギーがあるの。何もこんな時にね」

そんな何気ない会話で、お互いの気持ちを落ち着かせるのだ。出番が近づき、私は最後にメイクの確認をし、舞台のそでの広い会場に移動した。そこは暗く、天井がステージと同じで非常に高く、音響の機械が設置されている。音響関係者も、司会者も真剣そのものである。司会者は、曲名や名前を紹介するだけでなく、イントロが流れている間に、歌詞の紹介も自分で考えて言わなければならない。

私は赤いドレスを着たまま、軽くストレッチを始めた。前の出演者の歌が終わり、いよいよ私の出番である。マイクを手にとると同時に、イントロが流れ始めた。今回の曲は、「美しい昔」「サイゴンから来た娘」という映画の主題曲である。スポットライトに目が眩みそうになりながら、すべるように舞台に出る私。ライトは、全ての出演者の年令を見事に隠

す。

赤い地の果てに
あなたの知らない
愛がある事を
教えたのは誰……

……………

雨にさそわれて
消えてゆくあなた……

私はステージを左右に少しずつ移動しながら、声を客席の奥へ奥へと飛ばし、感情をこめて歌った。練習不足はいなめなかつたが、どうにか無事に歌い終え、私はホッと胸をなでおろした。いつもなら最後までいるところを終わるとすぐ家に帰った。気分が高揚していたからか、体調はそれ程悪く感じなかつた。インフルエンザにかかつてから四日経っていた。私はその時、すっかり治ったものと確信していた。

三

本当の苦しみが始まったのは、夜になつてからだだった。突然激しい痛みが喉をおそつたのである。それと同時に、今迄経験したことのないような悪寒が走つた。出るべきではなかつたと、その時私は初めて後悔した。インフルエンザの菌が

喉にまわつたのではないか。私はパニックに陥り洗面所に走つて何回もうがいをした。

十五年ぐらい前、一度だけインフルエンザの予防接種をしたことがあつた。接種の翌日、左脇のリンパ腺が大きくはれ上がった。それはとても重苦しい気味の悪い痛みを伴つていた。福島県にいた時だったが、担当の医師は大変驚き、「こんな例は初めてだ」と言つて、

「今まで二万人ぐらいみてきたけれど、とにかく脳にまわらなくて良かった」

その時の恐怖を私は思い出した。それ以来予防接種は一度も受けたことはない。

インフルエンザの菌が脳にまわつて障害者になつた子供のことを私は知つている。それは、夫の転勤で直江津に住んでいた頃の息子の友達のことである。まだ幼稚園前だった。お互いに転勤族で、その後会う機会が無かつたが、母親がたまたま電話をかけてくれることがあつた。受話器の向こうでは、「ワー」とか「アー」という大きな声が聞こえた。

「聞こえるでしょ。こんな状態なのよ」

と、彼女は諦めたように言う。もう何年も連絡をとりあつていないが、息子と同じ年なので、四十才になつてはいるはずである。

インフルエンザの菌が喉にまわることはあるのだろうか。こたつの中にもぐり込み、私は最悪の場合を考えた。それは、

声を失うということや、死についてなどである。

しかし、すぐにもっと重大なことを私は思い出した。マイクを介して多くの他の出演者にうつしてしまつたのではないか。恐怖と罪悪感で私の頭は押しつぶされそうになつた。それは日を追う毎に大きくなり、やがてジワジワと頭の中全体をおおいつくしていった。私はそれから何日もの間、一歩も外へ出ることができなかつた。ただ部屋の中をウロウロするばかりだつた。まるで追いつめられた犯罪者のように。

ガラス越しに見える外の景色は灰色で、たいいていの日、冷たい北風が庭の木々の小枝をザワザワ揺らしていた。たまにテレビをつけると、「イスラム国」の恐ろしいニュースが流れていた。人質の切斷した頭部を、兵士が手にぶら下げているのである。さすがにそれにはほかしがかつていたが、身の毛もよだつ映像である。そんな時、私は無意識にテレビを消した。

四

外へ出られなかつたのは、喉が痛かつたからだつたが、もちろんそれだけではない。いつも心が不安定で、頭がぼんやりしていたからである。単に体調が悪いというだけではなく、それは、身体のずつと奥の子宮のあたりがイライラし、それが心の中にひろがっていくのである。目が落ちつかず、少しまぢがえば拳動不審になりかねない状態だつた。私は、自分が正常であるかどうか確かめる為、日に何回も鏡に自分

の顔を映さなければならなかつた。化粧気のない顔は、弱々しく私を十才以上も老けさせていた。

「どうなの？」

と、心の中で問いかける。しかし、鏡の中の自分は、ただキョトンと私を見つめるばかりだつた。

元氣だつたら……と、私は家の中から庭をながめながら考えていた。歌を歌つたり、絵を描くことだつてできるし、文章を書くこともできる。ガーデニングだつて……。ただ、今は吹きすさぶ風の中、咲いているのは去年の暮れに植えたパンジーだけで、ぬかなければならない雑草さえ生えていない。草をとるといふのは孤独な作業だと思ふ。そもそも人は草をとりながら、何を考えているのだろうか。私は草とりが嫌いではない。過去の楽しかつた思い出などが、つぎつぎよみ返ってくるからである。

それは、去年の秋の初め、キンモクセイが匂つていた頃のことである。木陰で草をとつていた時、ふいに青春時代の夏の日のことを思い出したのだつた。それ迄、その頃の二、三年間について思い出したことはなかつた。思い出さなかつたことに意味など何も無い。その頃は私の人生に於て大切な時期のひとつには違いなかつたが、どういふわけかいつも深い霧の中にかすんでしまつていたのである。その前の、まだ二十才だつた時の、淡い初恋が私の心をいつも埋めつくしていたからかもしれない。

去年草とりをしながら、ふいに思い出したのは、私が失恋

をした人との夏の思い出だったが、妙になつかしく、まるで映画の一シーンのように鮮やかに蘇ってきたのだった。

その頃、私は四日市に住んでいた。その日、私と彼は、家の裏山の崖のようになった所に腰をおろしていた。崖の前の部分は茶色い砂で、昼間子供らがすべつて遊んだであろう跡が、少し白くなつてずっと下まで続いていた。うしろはうつそうと木が繁り、それは果てしなく続いているようにも感じられた。やがて日は落ち、月がリンリンとあたりを明かるく照らし始めていた。

その日、彼は私に、レイモン・ペイネのしゃれた大人の恋愛の絵本をプレゼントしてくれた。

「あなたのこと、好きになつてもいい？」

「どうしてこんなにかわいいんだろう？」

二人つきりだったので、ちよつとした出来事は起きたけれど、それ以上のことはなく、彼はとても紳士的だった。

彼との思い出はたくさんある。しかし、何故かあまり記憶に残っていない。彼は東大出のエリートで、私はいえ、地元の高校をビリで卒業し、O・Lをしていたただの田舎娘である。やがて彼が東京に転勤になり、私の恋は終わってしまったのだった。

去年、ふいに何の前ぶれもなく思い出した時、そのことが辛いことだったのか、楽しかったことなのか、自問した。どちらともいえなかった。もくもくと草をとり、ほんの少しの風に木々が揺れ、手元がかげつた瞬間に月明かりの美しい光

景がまるで他人のこのように思い出されただけだった。心身共に病んでしまった今、せめて雑草でも生えていてくれればいいのにと私は思った。

今にも雪が舞いそうな灰色の空。吹きすさぶ風。とらなければならない草もない。喉が痛く、苦しく思い出など何も浮かんでこない。

六十才を過ぎてから浜松に来た私には、同級生も近くにいなければ、ゆつくり話し会える友達もない。もつとも元気な時なら、歌を歌いに行ったり、みんなとそこで一緒に話したり、楽しいことはいっぱいあるのだけれど。もうずっと、夫以外の人と話すことがなかった。どうしてこんなにも長く喉が痛んでいるのか私には分からない。気がつくと、耳まで聞こえにくくなっていた。

そんなある日、伊勢に住んでいる同級生が電話をかけてくれた。彼女は小学生の頃から頭が良く、ずっと教師を勤めていて、七十才を過ぎた今は、不登校の生徒の指導に当たっている。私は、いつも彼女からの電話を楽しみにしている。それは、彼女も小説を書いているし、また、時々面白いことを言うからである。電話は一月に一回だったり、二月に一回だったりする。彼女が電話をかけてくる時は、たいてい彼女自身が疲れている時である。それが分かっているのに、いつも私のことはあまり話さないようにしていた。しかし今回ばかりは、

「私、ちよつと体調悪いのよ」

と言った。すると、

「あかん！」

と、彼女がいきなり言った。

「あかん、あなたがそんなこと、あなたは昔からみんなの憧れやったんよ、あかん！」

と言った。

私はそれ以上、体調のことは話さず、二人で、いつものように思い出話や、小説の話になって、

「書いたら今度こそあなたに送るわね。あなたと話せて良かった」

と彼女が言って、電話は終わった。

彼女の小説を一度だけ読ませてもらったことがある。もう二十年ぐらい前の同窓会の時である。それは、中学時代、北朝鮮の友達が急に姿を消し、先生と一緒にさがつという内容だった。

彼女の電話の話は、時々とてもユニークで面白い。会話の中で、

「私には娘が四匹おるんよ」

と言ったり、

「お父ちゃん（彼女の夫）に、私、ヤクザになってやる！

って時々言ってやるんよ」

と言ったりする。彼女の夫は元校長をしていて、とてもハンサムな人らしい。大学の同級生で、プロポーズされそうになつて、

「私、伊勢に逃げたん」

と言う。ある時などは、

「体の調子が悪くて、少しの間家に引きこもっていたんやけど、お父ちゃんが本屋に連れてってくれたんさ。そしたら童話の絵本が目に入って、もともと私の母親も絵を描いていたんで、私も描けるかなと思つて嬉しくなつてあなたに電話したんよ。お父ちゃんの手にとつと五千円にぎらせたの」などと、かわいいことを言つたりする。

彼女からの電話で、私は少し元気が出たような気がした。しかし、それも束の間だった。

五

言い表わせない不安な気持が心をおそい、すぐ苦しくなつてしまふ。そんな私の為に、夫が思いがけず大きな梨を買つてきてくれた。冬の梨は初めてだった。包丁で皮をむき始めると、むいているうちから果汁がしみ出てくる程水々しく、一口ほうばると、甘さが口いっぱいに広がった。

「どういう風に悪いんだい？」

と、夫がさりげなく聞く。私はこれまでの人生で、死にたいと思つたことなど一度もない。その時も、死にたいと思つたわけではないが、どう答えていいか分からず、

「何だか生きてるのが辛い」

と言つた。
夫は複雑な表情をした。困惑したような、驚いたような夫

の顔を、私は初めて見た。

もともと夫は家事をいっさいしない人である。例えば私の体調が悪くても、何も手伝おうとしない。結婚以来ずっとそうだった。夫は自身自分に強い人である。だから、私が「生きているのが辛い」と言ったからといって、何を手作ってくれるわけでもない。そんな夫が、私の為に梨を買ってくれたのである。夫の精いっぱい気持が、私は嬉しかった。

いくら外に出られなくても、私は食料を買出しに行かなければならなかった。

「お弁当を何日か注文した方がいいと思う」

と、私が言っても、

「どちらかが元気なら、その必要はない」

と、夫が言うからである。

マスクをかけ、自転車にとび乗る。それは必死の思いである。何を買えばいいのか考えることさえできない。手当り次第に買物カゴに品物を放りこむ。帰ってくると、冬だということに身体中汗びっしょりになっている。着がえても着がえても、すぐジワジワと汗ばみ、いつまでも止まらない。そのうちゾクゾクと寒けがおそう。そういう状態のまま、夕食の献立を考え作らなければならぬ。たまに、

「何かいる物があれば買ってくるよ」

と、夫が言ってくれても、何を頼んでいいのか分からないし、

「お弁当買ってくるけど、何がいいんだい」

と聞かれても、

「何でもいから」

と、私は答える。

夫に手作ってもらうことに慣れていないせいでもある。

私は、自分でも分かるぐらい、頭がおかしくなりかかっていた。

六

罪悪感でそうなったのか、恐怖がそのような状態にさせているのか、もはや、何も分からない。分かることは、このままでは駄目になってしまうということだった。私はあがいていた。私は焦って、どこかひとりで出かけられる場所を考えた。その時、ふと頭に浮かんだのが「ドロップ」だった。

そこは浜松学院大学の向かい側にある目立たない小さなカフェである。バスの中から見たことはあるが、私は今迄一度も出かけたことはない。

その日は、台風並みの風がビュービュー音をたてて吹き荒れていた。何度か迷ったあげく、マスクをし、長めのコートをおつて飛び出すように外へ出た。そんな私に、これでもかと容赦なく冷たい風が吹きつける。道端のフェンスの中では、大きな木がバサッバサッと上下に激しく揺れていた。「ドロップ」までの道は私は背を丸め、何度もヨロヨロよろけながら歩いた。やっとたどり着いた時、髪は前も後も分からない程ボサボサに乱れていた。私はそれを手でなでつけ「ドロップ」の小さな門を入った。入ると左手がガーデンテラスに

なっていて、かすれた白いテーブルと、白い椅子が無雑作に置いてある。

木わくのドアを開けたとたん、南国的な暖かい空気がふつと私を包みこんだ。

「どこか好きな所にかけて下さい」

カウンターの越しにマスターが言った。

私はそつと窓際に行き、藤の椅子に腰を下ろした。椅子の横にある背の高いスタンドからの光が、店の中を燈色に照らしていた。奥にはテーブルが三つあり、若い女性が三人、コーヒーを飲みながら楽しげに話している。手作り風のメニューを見ると、コーヒーの種類が驚く程多い。他に、カクテルやトムヤンクンなどもある。マスターおすすめのコーヒーはミルクがたくさん入っている為、ミルクの苦手な私はそれを断り、普通のコーヒーを注文した。コーヒーが来る迄、ぼんやり外を眺めていた。

……どうしてこうなつてしまったのだろう……考えているうちに心が暗くなつていった。シヨッキンクなどで私が私をおそつたわけでも何でもない。インフルエンザにかかった後の、普通の生活の中で自然にこうなつてしまったのである。ジワジワと、あるいはこっそりと、得体のしれないものがないの間に心の中にしのび込んでしまったのだった。

七

苦しい日々の中で、私はこれまでの生き方について考えた

こともある。私は中学生の頃から「赤毛のアン」が好きだった。愛と希望と、何よりもどんな困難にも立ち向かう力を与えてくれたのではなかったか。「赤毛のアン」からいったい何を学んでいたのだろうか。もつと違う本、例えば、夏目漱石など読んでいた方が良かったのではないか。そういえば、伊勢の友達も、夫も、私に通っている「NHK文章講座」の近江木の実先生も夏目漱石が好きである。

ある日、文章講座で私は先生に質問をしたことがある。「漱石を読むということ、どんなことが人生にプラスになるのでしょうか」

即答ではなかったが、

「牛のように歩む……」

と、先生は答えた。その時、私は、それはしつかりした生き方をするのだと、理解したのであった。

また、まるで、まだ元気だった頃の記憶をとり戻そうとするかのよう、こたつの上に「星の王子さま」や、「パ리지エンヌ流おしゃれライフ」という本を並べてみたこともある。キツチンの出窓に、紫色がかかったピンクの美しいレースのカーテンがかかっている。その前に並べられているワインの美しい空ビン。元気だった頃の記憶を私はとり戻したかった。

また早咲きの水仙を庭から摘んで、その独特のきついい香りを胸いっぱいすいこんでみたこともある。いろいろ努力をしたものの、結局、全ては空しくからまわりするだけで、何

の役にも立たなかった。一度おかしくなりかかった頭は、簡単には元にもどらない。

私は耳鼻科にも行った。多々見クリニクにも行った。喉が激しく痛んでいるにもかかわらず、どこも悪い所はないと言う。

「今、少し繊細になっていようだから」と、多々見医師がポツリと言った。

私は顔を上げ、思わずその白すぎる横顔を見た。医師はカルテに目をやっていた。神経質ではなく繊細……。何とやさしい響きだろう。繊細という言葉が、まるで水晶のような透明な光を放って弱りきつた心に染みこんでいった。そんな何気ないことばにさえすがりつきたい程、大変な状態だった。その時処方されたのは、気持を安定させる為の漢方薬だったが、私はそれを真面目に飲んではいなかった。飲み忘れたり、例え思い出して飲もうとしても、「生理不順」とか「更年期障害」という文字に抵抗を感じたからだった。七十二才、どう考えてみても年をとりすぎている……。

その日、私は「ドロップ」で、いろいろなことを思い出しながら熱いコーヒーを両手で包むようにして、ゆっくり口に運んだ。コーヒーの中に自分の顔が茶色く沈んでいる。あの部分がいびつに広がって見えた。「ドロップ」にとつて私は初めての客である。少し頭がおかしくなりかかっている客。マスターにさとられないよう、私は大きく息をすった。私が落ちつける場所は、今こしかなない。「ドロップ」の飾

り気のない雰囲気があった。

八

二週間ぐらいの間をおいて、私はその後も何回か「ドロップ」に出かけた。初めて来た時より少しは良くなったような気はするが、まだ殆んど悪い状態だった。

頭がすっきりするかもしれないという、かすかな期待をこめ、カクテルを注文しようと心に決めて私は家を出た。

その日、「ドロップ」のドアを開けると、中には若い女性二人と、珍らしくまだヨチヨチ歩きの小さな男の子が、おもちゃを持って歩きまわっていた。女性二人は友達のようにだったが、そのうちの一人が、注文をとり私に私の所にやって来た。

「カクテルいただきたいんですけど……」

と、私は下を向いたまま小声で言った。男の子がいくらか警戒しながら私のそばに近づいてきた。

「すいません、ザワザワしていて、裏が住まいになっているんで」

と、マスターが言った。

「何がいいでしょうねえ」

と、女性が少しがんでメニューに目をやった。私と二人で選んでいるという感じである。

「私、よく分からないので……」

と私が言った時、

「あ、チビちゃんちよっと」

と、もう一人の女性が言った。私は、てつきりチビちゃんを子供のことかと思っていると、

「あ、すいませんね」

と言つて、彼女は私のそばから離れた。

「こちらで任せてもらつていいですか」

マスターがすかさず言った。チビちゃんと呼ばれた女性は、マスターの奥さんのようである。とても感じが良く、女優の杏さんあんを小柄にしたような顔立ちで、声が落ちついてはつきりしていた。

「ドロップ」の床には、花柄の温かそうな毛布のようなやわらかい布が、少しシワになって敷きつめられている。その上を子供がヨチヨチ歩きまわっている。その日そこはカフェのようではなくリビングのようで、心地良かった。

テーブルに置かれたカクテルは意外にも普通のガラスコップに入っていて、それは、私を驚かせた。色はルミナスピンクで、とても美しかった。一口飲むと、甘い柑橘類の味がした。残りをグツと一気に飲みこんだ。一瞬、頭がクラツとしたが、ただそれだけだった。気持が明るくなりそうになかった。

私は、来た時と同じ不安な気持のまま外へ出た。西の空はほんのり茜色で、そのまわりを灰色の雲がおおっていた。ふと、涙が出そうになった。このまま治らないのではないか。絶望感が、ずしりずしりと心いっぱいに広がっていった。その時、なぜかあの失恋した頃のことを再び思い出した。それ

はただ美しいだけでなく、その時の孤独感や、悲しい気持ちがひしひしと胸に迫ってきたのだった。テレビからは「ラブユー東京」の歌が流れていた。

「ドロップ」から家迄の道を、私はトボトボ歩きながら、何度も何度も自分に言い聞かせていた。泣いてはいけない。ただやさしく生きていればいい……。

九

何日か行くうちに、マスターが私の顔を覚えていたらしく、ドアを開けると「あつ」というような表情をした。私はその頃になって、マスターがまだ三十代ぐらいで若いことに初めて気づいた。彼はひきしまった丸顔で、口のまわりに短いヒゲを生やしている。やさしさの中にも、どこかきびしく、頭がいいという印象である。

窓から見えるガーデンテラスには、直径二十センチ程の木があり、それが透明な屋根をつき破って上に伸びていること、また、まわりを囲っている白い塀に半分切ったヤシの実がぶら下がっていて、そこから緑色をしたシダの葉が出ていることなど、私は少しずつまわりに気がまわるようになっていた。

私はその後も、ナッツの香りがするコーヒーや、お酒のおいがるコーヒーなど試してみた。お酒のにおいするコーヒーを注文した時、
「アルコールは入っていないけどね」

と、ふり返ってマスターが言った。その声はとてもやさしく私の耳に響いた。コーヒーは、いつもお椀のような形をした白いカップに、すれすれに入っていた。マスターはそれをお盆にのせ、コーヒーから目をそらさず、足に力を入れ恐る恐る運んでくる。まるで素人のようだと思う、私はおかしかった。

「ドロップ」は常連客が多い。カウンターでマスターと楽しく会話をしたり、パソコンを持ちこんで来たりする人などがある。カウンターには、世界のいろいろなビールの、カラフルなビンが並べられている。珍しく客がない日があった。「カウンターに来たら」

と、マスターが声をかけてくれた。

「カクテルを……。前は柑橘類のいたただいたことあったけど……」

と私が言うと、

「そうだっけ、覚えてないな」

と、マスターが言った。

「アルコール少し強めでも大丈夫？ 少し甘い方がいいね」

私はしばらく考えてから

「どんなのでもいい」

と答えた。

今度のはルビー色で、甘みは控えめだった。

「昼間からお酒飲める人はいいいね」

と、マスターが言った。私は、その意味が分からなかった。

昼間からカクテルを飲んでいる七十過ぎの女。私は、ふとおかしくなって「ふふ」と笑った。

私は絵を描いていることや、文章講座に通っていることなど話す、

「ここにもいろんなお客さんが来ますよ。小説を書き始めたという人もいて、二週間ぐらいで書き上げて、読んで言われたけど断ったけどね、暇が無かったし」

マスターと話しているうちに、かすかではあるが、自分ももうすぐ正常に戻れるような予感がした。自分にしか分からない小さな心の震えを私は感じていた。

十

頭は少しははつきりしてきたものの、喉は相変わらず痛み続けていた。しゃべる声は完全に鼻声になり、高い山に登った時のように頭の中でボンボン響きわたる。

気がつく、もう三月になっていた。再び多々見クリニクに行った。私は多々見先生を信頼し、尊敬もしている。私は顔の左半分から胸にかけて、手で長方形を描きながら、

「何だかこのあたりが変なんですけど、精密検査をしなくても大丈夫でしょうか？」

と、聞いてみた。

医師は顔を上げ、私の目をみつめ、

「そんな必要はありません」

と、きっぱり言った。気のせいですよ、と言いたげだった。

私は納得したふりをして診察室を出た。

その夜、私が目を覚ました時、やはり喉が痛んでいた。痛んでいた為に目が覚めたのかもしれない。しかし、私は多々見先生の言った言葉を信じようと思った。

暗がりの中では、どうしようもなく孤独だった。私は思う。家族の中で誰かが病気になった時は、どんなことをしてでも、その人が良くなるよう努力しなければならぬ。一緒にあって良くなる方法を考えなければならぬ。

「どうしたら良くなるだろうねえ」

と、声をかけたり、背中をさすってみたり、私は暗やみの中で、半分眠りながらそんな事々を考えていたのだった。

十一

「ドロップ」に行くと、たまにチビちゃんが店に出ている、「あら、今日は遅いですね」と、声をかけてくれたりする。

チビちゃんは笑っている時でも、泣いているようなかわい顔をしている。「ドロップ」の向かい側が、大学なので、客は、学生らしい若者が多い。私のような年寄りは見かけない。そのことをマスターに言うところ、

「そんなことはありませんよ。夜、散歩の途中に寄ってくれる人も結構多くて、カウンターの若者に、おい、二十才すぎでんだらう、ビールぐらい飲めよと、からんでる人もいたりしてね」

と、マスターが言った。

なる程と、私は納得し、想像をふくらませる。

ある日、私がドアを開けようとした時、ガーデンテラスで缶コーラを飲んでいた若者が、

「あ、マスターいないよ」

と、気軽に声をかけてくれた。

「ずつといないの？」

「ん、どうかな。すぐ帰るって言ってたけど、あ、いるいる」と、窓ごしにのぞきこんで教えてくれたりする。私は中に入ってコーヒーを飲みながら、私にもあんな若い時があったと、なつかしく思い出す。いつも思い出すのは、初恋の思い出である。O・Lをしていた私は、夜、英会話教室に通っていた。その建物は、JR四日市駅近くにあり、シヨッキンダブルーで、一階がクラブハウスになっていた。

——英会話仲間のはじめちゃんがピアノを弾いている。はじめちゃんは母ひとり子ひとりで、ジェームス・デイーンに似ていた。私は女友達四人と、ココアや、ホットジュースを飲みながら、思いっきりおしゃべりをしている。向こう側のテーブルに初恋の人と、古川くんがいる。初恋の人と時々目が合う。初恋の人は赤いブレザーを着ていて、それは、白い顔によく似合っていた。

そこは、とても暖かく、幸せに満ちていた。私達四人組の二人は、大変なお嬢様だった。しかし、その後の人生で、彼女達は、必ず幸せだったとは言えない。もう、長く会って

ないけれど――。

コーヒーの香りと共に、思い出が揺れながら流れていく。

ふと我に返ると、いつの間にかカウンターに若い男性がいて、マスターと話をしていた。

「絵を描いている人だよ」

と、マスターが私を紹介してくれた。

「え、ほんとう？」

と、男性が驚いたようにふり向いた。

「僕はイラストを勉強していて、明日から外国に行くつもりなんだ」

「すごい、外国？」

「うん」

彼は若くて、白い顔をして、先のとがった帽子をかぶっている。

「どこ？」

「さあ、まだ決めてない。どこがいいかな」

「私、あまり外国に行ったことないから……バリ島と、プーケット島しかね。あ、ここにも、トムヤンクンあるわね」

「そうだよ」

と、マスターが言った。

マスターは三十代、そして彼はおそらく二十代。「ドロップ」は、私にとって確かにどこよりも居心地のいい不思議な空間である。

十二

日ざしがやわらかくなり、庭のあちこちに、ポツポツと花が つぼみをつけ始めた。それに伴って、あれ程痛んでいた喉もそんなに気にならなくなった。本当に気のせいだったのか、私には分からない。

私はすぐガーデンングの準備にとりかからなくてはならなかった。近くの花屋で真っ赤なゼラニウムを買った。それをピンクの鉢に今日植えかえたばかりだ。赤い花とピンクの鉢が妙にピッタリ合っていて、それは、私にすぐにでも描かなければならない絵のことを思い出させてくれた。私は、「国際美術大賞展」の委員及び「秋耕会」の会員なので、東京都美術館と国立新美術館に出品しなければならない義務がある。

一月にインフルエンザにかかってから、一度も絵筆をとることができなかった。

私は、ウッドデッキの椅子に腰をおろした。そこは日当たりが良く暖かかった。キンポウジュの木陰には、すでに雑草が生え始めている。それらは、今はまだやわらかい薄緑だけど。もう一週間も経てば、草とりという孤独な作業を始めなければならぬ。それは、私にとってむしろ楽しいことなだけだ。

ふと、今迄のことが頭をかすめた。危うく孤独について考えるところだった。私はそれをふり払うように何回も首を横にふった。私はしばらく行っていない「ドロップ」に出かけ

ようと思った。少しだけおしゃれをして。初めて「ドロップ」に行った時のように。

——どうしてこんな風になってしまったのだろうか——

などとは、決して考えない。苦しかった日々を思い出したりしない。孤独について考えてはいけない。考えないということとは、今の私にとってそれ程むずかしいことではない。夫以外の誰にも、もちろん「ドロップ」のマスターにさえ気づかれることなく、私の辛く苦しい日々はひっそりと終わりを告げていた。

その頃「ドロップ」のことを、私は夫に少しは話していた。夫は、インフルエンザにかかったあと私の体調の悪さを、それ程理解していなかったと思う。しかし、それは仕方のないことである。

夫が、私の好きなピザ屋に連れて行ってくれた時のこと、私はまだ本当に悪い状態だったが、アンチョビーのピザと、白のグラスワインを注文し、「もうすつかり良くなったみたい」と、元気なふりをしていただけだから。

私は、正直に自分の辛い状態を説明していなかった。心配をかけたくないという気持が強かった。

もうすぐ五月。みかんの花の甘い香りが漂い始める。私は今年もきつと夫と訪れたバリ島を思い出すだろう。

今年、「ドロップ」のいつもの窓際の椅子で、バリ島の思い出だけでなく、自分の人生をふり返っているかもしれない

い。初恋のこと、そして、失恋をした彼との夏の思い出など。そして、それらはやがてやさしさというボールにそっと包まれていく。

みかんの花の甘い香りが漂う頃には……。

(中区)

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

「入選」

先生の辞書

鈴木文孝

嘘を吐き続けるということは、あまり良い気分のものじゃない。早い時期に訂正する方が良い。自分の言葉から出た嘘なら聞かされた人を騙して、本当らしく振舞うのは詐欺というものだ。神道の人は閻魔様には無関係だから、舌を抜かれることもあるまいが、こうして霊前でありがたいお経を聞いていると、これでやっと嘘を通し切ったという安堵感が浮かんだ。それはもちろん後ろめたさを伴った罪悪感が消えたからといって、本来の正しさを告白によって取り戻したわけではなかったけれど、もう辻褃あわせの言い逃れに始終することもないのだから、心は軽くなるというものだった。

父親はわずか三か月前までは元気に普段どおり近所を散歩していた。健康づくりにはそれが一番だと、楽器工場の定期を告げるオルガンの調べのように朝夕二回を日課としていた。人工透析を受けている母親と、出戻り長女と三人暮しの気楽な毎日だった。その父の散歩姿がゲーゲルのストリートビューに撮影されていると親戚の人の指摘で、ネットを検索

したことがあった。かなりはつきりと、いつものコース上の銀行へ行く途中、交通量も少ない田舎道に、その姿はモノクロの画面上に金色のビールの宣伝のように確認された。全世界の人がしみじみとじいちゃんの姿を毎日見るんだね、と一時話題になったものだった。

父はあつという間にこの世を去ったけれど、七年もの間暢気に隠居生活を楽しんだ。自分の代で、引き継いで来た家業を閉ざしてしまったことに最後まで後悔があった様子ではあったが、それでもその判断は決して間違っただけではなかったと、三日目の精進落しを痛みながら、同業のN老人が言っていたのだから、正しい選択だったと思う。

七年の間、流砂に転落したような売り上げに落胆したり、生き残るために、あれこれ苦心をしなければならぬ社長としての勤めから実質的に解放されたのだから、自分の代で家業を閉ざしたという引け目がチラチラと頭の片隅に明滅したとしても、それは杞憂というものだ。投機的に個人資産を赤字の会社につき込むなどという善良さと誠実さ、真正直と素直さが災いして、無意味な方策を少なからず始めていた父の保全を考えれば、あの半ば強制的な引退に追いこまれて体を置きなおしたこともあながち間違っただけではなかったと僕は思っていた。

いつかは家業を継ごうという義務感とは別に、一旗上げる機会もあるかと東京に出て、化学染料製造会社に勤めていたが、そこが破綻して、解雇された後はやはり父の会社で拾

って貰った。当時会社には伯父が居て、バリバリと活躍していたので僕の影は薄かったけれど、その伯父が秋風が立つように一足先がんでこの世を去ってからは、何か新しいことに挑戦するという気風も消えて、伯父が生前望んでいたように廃業の道を取ったのだった。工場には巨大な重機が入り、ポイラーもタンクもみな撤去されて、草野球が出来るような空き地になった。僕は後始末が終わるまで会社に残っていたが、友人の温情で同業の会社に拾って貰ったのである。父は慣れ親しんだ業界への小さなそして唯一の窓口として、僕を通して、その世界と最後まで繋がっていることを望んでいた。

僕はかつて結婚に失敗をして、湖の岸辺の団地に建てた小さな家で、口論ばかり続けた妻と娘が遠い関西へ帰った後も一人で暮らしていたので、新しい勤め先の帰宅途中に実家に立ち寄っては、父に業界の話題を提供したのである。

けれど、定年も間近になって、風船が萎むように体力も気力にも少し衰えを感じてきた僕は、機械がするべき単純な肉体労働を、旧態依然と自分の生身の筋肉に頼る作業に嫌気がして、体が衰えてもなんとか続けることの出来る仕事はないかと考えた。それが落剥らくはくの身の、せめてもの夢に違いないと結論づけて、少しでも別の世界に飛び込もうと退職をして、日本語教師を養成する学校に通い始めた。けれど、そのことを父に告げる勇氣はなかった。父はいまでも失われた会社の社長であったから、自分の生きてきた世界と唯一繋がっている僕が、その扉を閉ざしてしまうなどということに心安く同

意するとは思えなかったのだ。退社してから一年、僕は嘘を通し続けた。

父に嘘を吐くということは、同時に母にも嘘を吐くということだった。そして一日おきに母を病院へ連れて行く妹に対しても嘘を吐くことになった。なぜなら、どこから本当のこと、不行跡が父の耳に伝わるか分らない不安があったからである。もちろん昔の従業員の方や組合の同僚達が年始の挨拶に遣って来る正月は、針の筵のように本当にハラハラとしてしまう状況ではあったが、幸か不幸か若干の認知症を発症している父はここ二、三年物忘れが酷くなったので、何かと事実との不適合をごまかすことが出来るだろうと思っていたし、結果もその通りであった。

僕は実家に立ち寄るたびに近頃の業界の状況を報告した。けれどそれはみんな嘘の話である。いやすべてが嘘ではないけれど、公明正大か？といわれれば違うと答えるしかなかった。父は心のどこかで自分の代で実業を廃したことに後ろめたさがあつて、いつも自分の実行した行為が正しかったかどうか訝しく思っていたようだった。そこで僕は下り坂の業界の趨勢を幾分誇張して父に語った。そして最後には、父が「ああ、会社を片付けたのは本当にやむをえないことであつた」と自身で納得したように呟くのを待って、遣る瀬無く帰宅するのだった。

そのような不真面目な状態が一体何時まで続くのか、僕には分らなかつたけど、しかし、そんな遠い先までという思い

はなかつた。そのうち、父は訳が分らない老人になり、僕もまた濡れ落ち葉らしい後継者になる予定だったからだ。

僕は一年以上も嘘を吐いている呵責から、ずうっと性格として嘘つきだったよな気になってしまふ。物心ついたときから、僕はずうっと空惚けた調子で嘘を吐いて来たのかもしれない。

日本語教師になるには四百二十時間の講習を受けなくてはならない。学校は二つ向こうの街に在った。海岸通りと「港のある街」を迂回するバイパスが繋がり、「丘のある街」までのアクセスが容易になったばかりの年のことで、これなら僕は車で通えると思ひ真つ赤な電気自動車を買った。美しいティアドロップ型に見せられて、僕は車に「流星号」と名付けた。他の色では少しも魅力を發しない形状が不思議であつた。

友達を始め三人出来た。けれど半年過ぎには一人だけとなつた。苛められて居るような思ひで、最後は一人も居なくなつた。未婚の女性は四人居たが友人扱いをしてくれたのはただ一人だった。一番若い娘は美しい顔をしていた。眉は特別細く、柔らかに弓張りしていて、二重瞼なのに時々一重に見える程幅がない。澄んだ眼差しで微笑んだが、鼻はそれ程高くもなく、小鼻は葡萄の房の様に大人しい。唇は薄くて、意思の強さを表している。耳はいつもショートカットの黒髪に隠されていて、めつたにみることは出来ないが、彼女は正面からも十分端正な造りであつたし、横顔は見飽きることはな

かつた。額は富士山のように頂きに小さな弧を持っていて、時にはそれが房のようにみえ、サザエさんの髪型を思い出させた。肌は緻密で白く輝き、非の打ち所はなかつた。僕は彼女をケリーと命名した。銀幕の女優からモノコの王妃になつた、あのグレースケリーの面影が浮かんだからだ。彼女は午前の授業を終えると、別会社の事務員に飛ぶように変身して、忙しい毎日も若さで乗り切っていたようだ。もう一人、足の美しい娘がいた。そして彼女と同級の、大人しく目立たない純朴な娘も居た。この三人とは当たり障りのない世間話をする事が出来た。

既婚者は皆すでに、子供や社会環境、待遇が似ていたのか急速にグループ化して、丸く団子のように固まつてしまつたから、会話に口を挟む隙もなかつた。僕は一人ぼっちだったが、唯一残された中国語が堪能な女性だけが僕と弁当を使う間柄だつた

本当を言えば、僕の視線は美しい女の足によいようにもてあそばされたので、結果的には残念な学園生活となる運命だったが、だからといってその足の美しい女がまつたく悪意のある性格の女だつたというわけではなかつた。後から考えてみると、彼女には幾らかの羞恥を示すこともない無心な清冽さといったものがあつて、逆に僕の陋しい嗜欲に煽られたという所だつたのだから、彼女を非難するのは当たらない。彼女を表す適当な言葉を探すとするならば、僕は彼女を少し倦怠をこめてマリリンと呼ぼう。地下鉄の風がロングスカートを巻

き上げるあの一瞬が目には浮かんだからだ。言葉は途絶していた。木霊が返ってくるはずなのに、いつかは響いてくれるようにと毎日願っていたのだから余計に抒情がそそられた。そういう意味で名を付けたのだ。

そして唯一の友達の名前は、彼女が得意だった中国語をイメージしてシンシアとしよう。彼女は地味な女であったが非情に聡明で、心の優しい女だった。あの二人は今頃幸福になつただろうか？

漂渺とした湖の傍の忘れられた一軒家から二つ向こうの街まで、車で片道二時間かけて僕は週三回通っていた。あまり思い出したくない毎日だったけれど、それ以前の無味乾燥した生活に比べれば、張りのある生活だった。前日に充電して、片道百キロ程走り、授業の後でカーディーラーに立ち寄り、三十分の急速充電をする。明るいシヨールームの片隅に席を取り、飲み物のサービスを受けながら、僕は自習をして、再び二時間をかけて宙ぶらりんな気持ちのまま、誰も居ない自宅に帰った。

湖はおよそその表情を変えたりはしない。強て云えば灰色の雲があたり一面にカーテンを引いたように、一羽の鷗も飛ばないような閉ざされた雨模様の日、湖面も一面灰色に輝いて、湖北の低い山々も鼠色に落ち着いてみえる。昔は雨の日が憂鬱だった。けれど初めてすべてがモノトーンの世界になることで風景に賛同できた気がする。風がめくる湖の景色から道は一時離れて、砂地に植えられたタマネギ畑の中を進

むと、松涛の漣が耳元に広がる松林の間のバイパスを一本のリボンのように切り開いて西に続いている。

湖を渡る大橋はスキージャンプ台のように空に伸び上がって、風がビュンビュンと助手席から吹き込んでいる間、僕はコブクロの「ここにしか咲かない花」という曲を何度も繰り返し返している。この曲はシンシアが僕の前から立ち去って、二度とあんなに楽しいお喋りの時間が戻ってこない毎日、遣り場のない気持ちで嘆いて歌う歌になっていた。

思えば、マリリンの目もくらむような美しく長い素足の太ももよりも、シンシアの優しい言葉の方が僕には大事だと気が付いたその時から、僕はこの曲の語る彼女が居た思い出のラウンジが執拗に恋しくて歌をリプレイしていたのだ。

その時代時代にはそれなりの雰囲気がある。わくわくしながらみんなが楽しげに暮らす、のぼり調子の古き良き時代もあれば、一人一人がどんん力失って、社会がいつのまにか小さく収縮してしまい、それに伴った鷹揚な、今までなら笑って見逃してくれるようなことが小さな事なのに目くじらを立てられ、興奮した群集に吊るし上げられるような世知がらみ時代もある。男たちは特に追い込まれてしまう場合が多いように思う。目こぼしをしてくれるという社会は、もう随分昔になってしまった。遠く海峡に向かって海を渡る鷹は、いつもこんな景色を見ているのだろうか？ 電気自動車の加速能力を唯一の取りえに、不機嫌なトレーラーに弾き飛ばされないように、僕は毎日ハイウェイを飛ばした。カマボコ型

の体育館やリゾート施設の大観覧車を横手に、バイパスを突き抜けて走っていく。

僕はあてどなく考える。

男たちは何時ごろか、簡単に短絡的に極端な責任の取り方をしようになった。え？ そんなことで自殺してしまうの？ といった新聞記事がよく見受けられる。本位ではなくて、ほんの過失でつい他人を傷付けてしまったけれど、だからといって自死することはないだろう？ そう思うような出来事がポツポツと現れる。頑張つて罪を償つて、長い時間を冷たい世間の視線に耐えてまで生きててもつまらないと言ふのだろうか？ きつと生きていることはあまりにもつまらないとそんな風に彼らは思つて、けれどもなんとか生きて来たのに、予期せぬ出来事が起こるとさっさとあの世へ逃げてしまふほうがよほど良いと考える人が多くなつてくるのは確かだと思ふ。

バイパスは「港のある街」の郊外で途切れて、聳え立つ稜線に遮られて温泉のある海辺に続くのか、高速道路の取り付け口方面に分かれる。その日の気分だけれど僕は海辺が好きだった。ハンドルを握りながらまた、他愛もないことを考えている。

今は仕事をするにしても、ひとりで完結するという仕事がない。共有される仕事が高度に複雑に複雑になって、個性は減びて、益々完全なものを欲求されるので、自分が仕事のほんの一部分しか扱えないようなシステムになつてきている。

全体を作り出す人はほんの一部のエリートで、多くの人は仕事の中の回転している独楽のような部品である。アニメーションも映画も、エンディングロールに流れる膨大な製作協力者のリストに、ちよこんと名が出ていることを喜べる人はまだいい方で、どんな個人が作品の中に埋没されていくような世界だ。先進医療も科学技術も巨大な組織が生み出すもので、それらを作り上げ独自の発想を形にした、ほんのひとりにぎりの人達がすべてのものを手に入れるという世界らしい。時代が下るほど新しい仕事を生み出すのは困難になつていく。音楽も文学もテレビの娯楽番組さえ、膨大な過去のアーカイブスが巨人のように立ち塞がつて、それを越える新しい価値や発想を手に入れるには足が竦み、闘う前から負けてしまいそうになる。今はまるでシングルマザーが当然で、DVや幼児虐待報道は増殖していくのだろう。それに比べて、猛々しさに溢れる外国から来た若者たちは、みな新鮮で挑戦的に写つてくる。彼らはなんと澁刺しぶさなことか。

秋には夕日が落ちると、リゾートホテルの大観覧車が美しくイルミネーションを光らせて、冬が来ると、海峡大橋の上から白い富士山が大きく見えた。

講習が始まった。吹き抜けの広いガラス張りのエントランスを入つた中央に、二階に登る小さな踊り場付きの階段があつて、それを登るとテラス状の渡り廊下が左右に伸びて、正面奥にはエレベータと自販機。右手を取ると教室に行くことができた。教室は一番広い201号で、前半分が使用会場と

なっている。室内はコの字型にテーブルが組まれ、南側に広く窓が設けられていて、十分な採光が計られている。ホワイトボードは西側に平行に置かれていたので、生徒は教壇を一边とした四角形の中で自由に席を選ぶことが出来た。長机に二脚の椅子が用意されていて、席次が決められていたわけではなかった。場所取りは早い者順だったのである。僕は比較的早めに登校していたから、自由に席を選べたが、講習が始まって思わぬ災難が振りかかることになった。毎朝、一番遅くに、それこそ遅刻寸前に入室して行くマリリンの座る場所の反対側に席を取りたいというあまりにも素直な感情が産まれたから、迂闊にも狐鼠狐鼠と場所取りに心無い時間を費やした。その日の席を決めるのが非常に困難になったのだった。

その原因は馬鹿馬鹿しいに尽きるが、一つには、彼女は背が高く、まだ若く、そして自分が美しい足を持っているのを自覚していたので、いつもその足を十分に世間に明示するように短めのスカートやショーパンを着用してきた。二つには、机は下半身を視線から遮る前面用の覆いがないシンブルな物だったから、彼女の足は全員の注視を浴びることになる。といっても男は二人しか居ないのだから、女性陣には黙殺されたが、僕は目のやり場に困る毎日だった。軽い媚ではなく浮腫んだような刺激であった。担当講師は女性で、先生は彼女に名指しを避けながらも、囁んで含めるように足元を注意するような服装を奨励したが、それでも若い娘はともすれば美しい足を回覧していた。

実際美しい足も整った顔も、それが備わっている娘にとっではどんな恩恵をもたらすのかと考えるみると、もしかすれば有り難迷惑と思われているかも知れない。ケリーは懇親会で「相変わらず美しいね」と無遠慮に言われても、いつもの台詞と判断してか、さほど嬉しそうな顔もしない。模擬授業で教壇に立った時、明け透けにデートを申し込むことが礼儀だとするような、外国の風習があるのかと思える青年が、不適當な間合いで口を挟んだ時、白絹のような頬に必要以上の敵意を表して、その端正な微笑みも陰鬱に震えた。彼女にとって、美しい顔も時には邪魔と思える気がするのだろう。ましてや美しい足を持っているとしても、自分はいつも姿見で見ているわけではない。座っている時は上から腿しか見えないうし、見られているという視線は感じて、そのことばかりに気を留めて生活しているわけではないのだ。それはただ見せられる男にだけ、罪深く悩ましい存在というわけである。

講習は中休みを挟んで午前中一杯行なわれた。放課後、僕は充電スタンドに立ち寄る必要が毎日発生したので、エントランスのあるロビーの両脇に設置された学生用のラウンジで、弁当を使ってから帰ることにした。そして同じような理由から遠方より通学している生徒の内、ふたりの女性が弁当持参であった。残りの生徒は自宅が近いか、外食をするのかに別れ、その人たちはおのずと下校していたので、当初は三人の弁当持参者が同じテーブルで丸くなって昼食を取る習慣となった。おかげで僕はクラスメイトの名前を二人、覚える

ことが出来た。当初三人という人数はとでもありがたかった。何一つ意想外なことは起こらず、相手を選ばず話が出来たのである。しかし長続きはしなかった。主婦であるIさんが、同じ主婦仲間の外食派に吸収されて、早々に下校するようになり、結局、弁当派は二人だけになった。彼女が僕の唯一の友人、シンシアであった。彼女は取り立てて容姿が目立つ女ではなかった。

「北京のPM2.5は酷いみたいだね。それでもあの国に行くの？」

「尖閣諸島で衝突はあるのだろうか？」

「爆買いってすごいね」

話題はいつもそんな風だ。

背の高さはマリリンと同等にクラスの中で抜きん出て高く、大柄でがつしりしていたので、その機敏な動作と共に如何にもクラス委員として颯爽としていた。その知性や知識ばかりが目立ってしまい、逆に顔立ちにはそれ程注意は引かれなかったが、瞳はいつも前向きに輝いていた。彼女は全体的に大造りではあったが、ずうっと相對しても、疲れることも厭きることもなく、その広い肩幅に並んで肩を寄せるときは、手放しの安心に凭れ続けたいと思う陶醉感があった。

彼女は未婚のアラサーだったけれど、物怖じしないサッパリとした気性で、どちらからというとも男友達に近い印象であった。

対照的にマリリンという人は不思議な人で、始めの頃はた

とえ相手が年寄りでもどんな人間か興味を持ったのだろう、弁当を食べるわけでもないのに、放課後居残って僕の前で自主的に勉強していくことがあった。聞くと、俯きがちな彼女は夜間のバイトに出るまでの間、少し時間に余裕があるというのであったが、なぜか決して昼食を取るといふことはなかった。僕はよくシンシアやIさんが居る席から離れて彼女の前に移り、おおよそ、口が重い彼女から少しづつ掘り出し物をするように話を聞きだしていたが、彼女の美しい足の秘密に迂闊にも仄かに魅入られて、充電スタンドに早く出掛けようとは思わなかった。

彼女は黒髪が両肩に届く程の長さが好みの方であった。少し縦長の耳は程よい大きさで、いつも小髻が解れて魅力的であった。額は広く、瞳や眉がしらも濃く大きかったので、鼻の先が少し瓜の様に光を弾いても、逆に小鼻が小さくても違和感はなかった。横から見ると顎が引かれた感じで、口も小さい。唇は厚くもなく、見る者は自然とその輝く瞳に強い興味を引き付けられた。男達はその美しい足にまず引き付けられたが、容姿も十分に美形であった。

おおよそ僕に興味のないはずの彼女が、なぜ僕の携帯にLINEを自ら設定してくれて、自分の待ち受け画面を表示させるようにしたのか？ 後から考えると、利用価値を測定しようとしたわけでもない。微妙な操作でも浅はかな計算でもなく、意外に雑駁な性格かもしれない。ただの気まぐれで、その証拠に金輪際彼女からメールが届いたことはなかった。

れど、長い間僕はそれが不思議で仕方なかった。ただ時々彼女の待ち受け画面には、明らかに絵文字が小さく表示され、しばしば変更された。それが彼女が見つけた外国人の恋人に対する返事に違いないのに、自分に対する伶俐な問い掛けのようで、紛らわしくて不快だった。

不快ということを用いるなら、半年位たった後で、彼女が外国人の彼氏をわざわざみせびらかしに学校に連れて来て、玄関前で同級生達にお披露目をした事である。僕は戸惑い、胸を刺すような痛みに苛められているように思った。彼の名前は知らないが、僕は彼をケンと名付けた。昔、ケンとメリーとかいうCMがあった。僕はいつものように前面ガラス張りのこちら側で食事をしていたから、仲睦まじく若い二人の遊戯の不真面目さと見識のなさに嘆息するばかりで、ガラス越しに見せられて閉口したものであった。相手は彼女の美しいミニスカートにびったり会うような若い外国人であった。思いがけない辱めを受けたようにこめかみが痛んだ。

それ以降、彼女の待ち受け画面は、ケンとのツーショット写真になっていた。心の均衡を破られたかのような僕は削除しようと思ったが、そうしたこと逆に判つてしまった場合、なぜか下心いっぱいのおっさんが焼き餅を焼いているぞと思われるのが嫌で、たとえ事実がそうであっても、胸がポツカリと虚無に陥つたようで何もせずに放っておくことにした。

秋になった。今考えれば必要もなかったけれど、ほとんど

クラス全員が外部の統一資格試験を受験したことがあった。合格すれば就職に強いといわれたからだ、「どんなものだろう」と興味があつて挑戦したのである。試験真近は兎に角一応は勉強した。僕はマリリンの見せびらかし事件から、焦燥と燃えるような嫉ましきで、体調も均衡を失っていた。一人で試験会場に行く元気がなく、誰か途中の駅から待ち合せて、一緒に行つてくれないかと重荷を託けるように、Iさんに事前に声を掛けたが、隣の彼女からは断られた。彼女はもうすっかり主婦連合の中に入り込んで、昔一緒に弁当を使っていた事すら忘れていたようであった。

僕は已む無く、頃合いの時間に電車に乗ったのはあったが、名古屋行きの快速の中でクラスの数人と出会い、行動を共にすることができた。特にシンシアと同行できたのは本当に助かった。会場への道筋を僕は知らなかったのだ。試験が終わつて帰る時、僕はなんとか一人で帰ることが出来るだろうと思つたし、道連れは居ないだろうと諦念していたので、切実に必要だとは思わなかったが、たまたま同じ会場の教室にシンシアが居た。彼女に労わりの情を込めて声を掛けようとして入り口で待っていたら、いかにも彼女はほっとした様子で、朝とはまるで違うこだわりのない穏やかな感じで僕を受け止めた。

階段を人混みに紛れて並ぶように下りた時、「ちよつとトイレへ」と彼女が言ったので、一緒に帰るから少し待っていてくれると言われたような気持ちで少し嬉しくなった。

ロビーで待っていると、彼女がお待たせと言って出てきた。僕は会場から地下鉄まで、彼女に遅れないよう連れ立って歩いた。

「私が一緒だと回り道になるかもしれないよ」と彼女は云ったけれど、「かまわないよ。どっちみち僕は道が分らない」と答えた。

彼女は留学していた中国の話や二胡でコンサートに出演したことなどを話してくれた。彼女はさっさと歩く。僕はノロノロ進む。

「中国の一人っ子政策はどうなんだろう?」

「南沙諸島で人工島を造っているんだって」

名古屋の駅でクラスの連中と再会した。マリリンの姿もあった。シンシアはクラスのほかの仲間と連れ合うことも、受け入れようとする構えもなく、自然に僕と二人でホームに下りた。列車を待つ長い行列の最後に、マリリンと竹内さんが並んで話していたが、なぜかシンシアは二人を無視している。列車が入ってきて、車両に乗り込むと、マリリンたちは右手の先頭方向に進んだので、そちらを指そうとしたら、シンシアは解き放されたように一人で左の方に向きを変えた。彼女は僕を見ることはなく「あなたはご勝手に」という感じであった。彼女は僕を試していると感じた。一瞬、逡巡してから、僕はマリリンではなくシンシアを選んで、すでに彼女が確保してくれた空席に並んで腰を降ろした。マリリンから引き離すように僕を窓際へ座らせて、彼女は通路

側に席を占めた。皆は「丘のある街」で下車したが、僕とシンシアとマリリンの三人は次の「港のある街」まで乗り過ぎた。僕は今日が土曜日でマリリンがその街に住むケンの所にいくのだろうと思った。彼女は前方の二人掛けに一人ポツンと座っている。

「彼女、どこへ行くのかしら。ここで降りないみたい」

「彼氏の所へ行くんだよ。土曜日だから」

「へえ、良く知っているのね」

「知っているさ。あいつ、わざわざオレに見せつける為にロビーのガラス窓のまん前で、彼氏を皆に紹介したんだ。手をぎゅっと握らせたままだね、最低だよ」

「見せびらかしたの」

「本当だって。何を考えているんだろう今の世代の子は。彼女は君のような思いやりや優しさという物を持っていないのだろうか」

唐突な切り出し方に彼女は、

「私の」

と、背もたれに寄りかかりながら答えた。

「そう、君は優しい。僕がその優しさにどれだけ救われているか知りはしないんだ。本当に感謝しているんだ」と肩を押し付けた。

「中国なんか行かずに、もう少しここに居たらよいのに」

僕はシンシアと、まるで恋人のような気持ちで旅を続けた。

「年を取るの初めてのことから、解らないことが沢山あ

るんだ」

僕はそんなことを言つて反応をみたけれど、彼女は頓着せず、返事はなかった。

（君は僕のことをどう思っているんだ）と心の中で問いかけた。

冬が近づくと講座は実技に移る。僕はクラスの大多数と共に、「みんなにち（みんなの日本語）」の各課に出る新出語彙を抜き出す作業を放課後にしていたので、シンシアは先に帰るようになった。その間はひと月程だ。眩暈めまいのするような長い空白に感じた。後になって考えると、僕はその作業を放棄するべきであった。それをしなくても卒業は出来たし、彼女との大事な時間を捨てるという対価は取り返しが付かない事態となった。僕は明確に意識してはいなかったが、いつもジリジリと焦りを感じていた。年の瀬に漸く作業から開放されて、また二人で弁当を食べられると僕はほっとしていたのに、研修棟に教室が移されて、そこにある食堂は明かりがなく、あつても無駄遣いが憚られるほどの広さなので、これ見よがしの巨大な水銀灯は点けられず、暗い中で二人だけで昼食を取ることがなんとも居心地が悪かった。そこで、わざわざ元の校舎まで出張して食事を取ることにしたのだけれど、彼女に何か告げ口をした人があったのか、それとも彼女の心に変化がおこったのか、シンシアは「ふたりきりで居る」ということに不安を覚えるようになってしまっていた。自ずと手前勝手な周りの目を意識したのかもしれない。致し方な

く、味気なかった。

二人で食事をしていた頃、僕は彼女の彼氏について少し質問をした。「彼氏は君より年上かい？」と尋ねると「プライベートのことは話しません」と言葉を少し尖らせて答えた。

僕は友達というものは常識の範囲内で、ある程度まで個人的内容を共有しても良いだろうと思つていたので、ああ、彼女は僕を友達と思つていないのだと寂しく思つた。

「ごめん。話したくないことはもう聞かないよ」と答えた。

沈黙の重さを量るように、彼女は暫く箸を使つた後で、突然「私より若いわ」と遣る瀬無く答えた。ほう、答えたと思つた。

「卒業したらすぐ中国に行くのかい？」僕は無遠慮に畳み掛けた。僕は彼氏をワンさんと命名した。彼女は哀願に近い眼差しで「少しゆつくりして考えるわ。現地の勤め先を探すの」と軽く返事をした。僕は安心して「そうだね、少しゆつくりするといいいね」と答えた。彼女と別れるのは寂しかったからだ。

僕は彼女が一人娘で両親と祖父と同居していること、その祖父が最近亡くなったことを知っていた。彼女は家族を捨てて中国に嫁いでいく計画なのだ。

「どうしてそんなに中国が好きなの？」

彼女は暫く食事に集中してから答えた。

「昔の日本があるみたいなの。なぜか懐かしい風景を感じるの」と彼女は言う。

「ごめんね、私、食べるのが早いから、電車の時間もあるし、もう帰るね」とすまなそうに言った。「良いんだよ。僕のととは気にしなくてもいいんだ」と、この時初めて使った台詞が唇にすつかり定着してしまつた。今から思い出して、あの頃からずうつと僕は彼女に「僕のことは気にしなくて良いんだ」と百回は繰り返していたようだ。勿論本心なんかじゃあなかつた。歩み寄ろうという気持ちの糸が切れてしまつたのだ。

彼女は教材で膨れたバッグを手にガラス戸の向こうに逃げて去つていった。あたりは閑散となつた。以前はこんなことはなかつたのに。彼女は、マリリンが居残つた頃は、僕が彼女には早く帰つて欲しい、自由に席をマリリンの前に移させて欲しいと強烈に望むほど長い間、たとえ列車を一本先に伸ばしてまでも僕の目の前に居たのだ。試験が終わつて、一緒に列車に乗つた翌日からはとても仲良くなつて、その時には彼女は当分日本に居ると言つていた。僕は彼女と友人以上になれる可能性さえ感じていたのだ。

けれどそんな朝、事件が起こつた。始業前に教室でシンシアの携帯が鳴つて、彼女は皆のいる前で携帯に応答したのだ。大きな声で中国語が鳴り響いて、それに負けないように一層猛々しく彼女も中国語で激しく受け答へていた。その悲痛な調子はまるで口論している風で、次第に甲高くなり、常日頃でも高いトーンで響くように感じられる言葉なので、聞き耳を立てていた皆が振り返ると、彼女が飛び立つように

廊下に抜け出して逃げて行つた。多分相手はワンさんだったので。彼女が彼氏のことを暫く忘れていたのか、それとも心が揺れて、自分のことをしつかりとつないで置けよとワンさんに連絡をして、思わぬ事態に不安を抱いた彼氏から、強い調子で彼女の気持ちを確認したい連絡が入つたのだろう。僕はそう確信した。なぜなら、その日を境にシンシアは僕を避けるようになった。僕はとうとうまた一人ぼっちになつた。

一人ラウンジに座つて、悄然と弁当を食べるのが惨めになつたので、僕は早目に学校を出て、カーディーラーに寄り、充電スタンドにプラグをセットすると、車の中で昼食を取ることにした。僕は寂しかったが、孤独は僕の常態で、目新しい環境ではないから耐えられないというわけではなかつた。

春浅い季節のこと、ある朝に僕は、駐車場と同級生から呼び止められた。彼女は女性陣の中で一番年配の方で、静けさを湛えて、柔和な優雅さを帯びていた。善良な心根を思わせられた。大学の博士課程を中断して、講座に参加されている人物だつた。その頃僕が外国人の学習クラスのビジターセッション（会話の実習）に参加した際に、生徒さんの中にインドネシアから留学している方が居て、僕と現地語で簡単な会話をしているのを目撃して驚いた風であつた。僕がかつて大がかりなインドネシア語を勉強していたことを彼女に説明したことがあつたのだ。僕はその経験を生かしたいと講座を受験したと彼女に長閑に答へた。

車脇で彼女は荷物をゴンガソと取り出して、不意に彼女から手渡された封筒の中にそれは入っていた。随分と嵩張る物だったから、僕はそれが何なのか、とっさのことで理解も出さずにいたけれど、彼女の説明によると、彼女の恩師から僕宛に届けるよう手渡された本だとのことだった。中身は、その場で封筒から取り出したから、すぐに確認出来た。それは大判の図書で、しっかりと緑色のケースに入っていて、帯には見出し語が四万語、句例が八万と明示されている。カステラ程の厚みがある辞書で、懐かしい名前が著者の所に記されていた。直感が遠雷のごとく轟いた。僕は未知の自分を発見したような気さえた。その名はかつて僕の恩師で、今は亡き松浦先生がお書きになったものだった。その時の痛烈な驚きは、やがてすっかり忘れていた激しい感動に変わり、僕は狼狽するほどで、その場の気持ちを彼女に伝えるには非常に困難なことだった。宝くじが当たったらきつとこんな驚きのだろう。

不思議なのはその辞書のことなのだ。普段、書店では手に入らない専門書で、三万円近い高額だった。通販でなら購入も可能だろうが、それを蔵書にされておられる方はほんの少数ではないかと思われるのだった。またその辞書は一般に使用する現地の単語を日本語に訳すのではなく、日本語を現地の言葉に翻訳する逆引き用であったので、むしろ外国の方が日本語の意味を知る為のテキストとして、極めて専門性が高いものだった。僕はこの本を譲り、託していただいた方がど

んな方であるのか、非常に興味を持った。その日、講座の休み時間を利用して、この本が誰の蔵書であったのか、そのなれそめを彼女に聞くことにしたのだ。

彼女が語る所によると、彼女はこれから講座を卒業した後、どんな方向に進むべきかを整理のつかない気持ちで相談したいと、京都に住むという彼女の恩師を訪ねた所、恩師が彼女の話の中に出た僕に興味を持ち、学習の参考になればと手渡すように託されたとのことだった。この本が京都から来たという迷信じみた来歴がまず僕を喜ばせた。僕は大学時代の四年間を京都で過ごしたのだから。僕は早速恩師の方の住所を紙に控えて、取りも直さず御礼状を書き送った。もっと詳しい辞書の話を知りたかったのだ。

程なく、僕は返信を頂いた。それには革命の勃発のような思いも寄らない事実が書かれてあった。僕は直接先生にお会いしたことがないのでA先生と名前を書くが、先生はかつて僕の母校で講座をお持ちで、僕が教えを受けた恩師、加納先生とは旧知であり、教鞭を取っておられた期間に僕が大学に在籍していた時期と重なるので、同期の仲間には直接教えを受けた人がいるはずだった。僕はその手紙を読んで、思わぬ繋がり到大層驚いた。

それから数か月後のこと、喜怒哀楽の交差する惑乱わくごんの中、例年の同窓会の通知を受け取り、仲間の一人にA先生の話を書いた。先生が手紙の中で懐かしい教授仲間に再会したいと希望していることを相談したものであったが、電話では判断も

難しく、今回は見送りとさせていただいた。

六月の土曜日に京都は岡崎のホテルのレストランで会合は倦まず弛まず和気あいあいと始まった。あいにく文法を教えただけだった佐々木先生は不在だったが、加納先生はお元気でいらつしやう。少し酔いが回った頃、先生にA先生の名前を提示して、ご存じかどうかお尋ねした所、良く知っているとのご返事を受け、大層安心したものだ。A先生は大変レベルの高い学識経験者だ」と評価された。「学部が違うから教えを受けていないのかな、いやもしかすると教養課程で受講した者も居るだろう」「そうよ、私も受けたもの。知っているといったでしょう」と琴さんが横から言った。クラスの仲間達の中にも幾千の授業を受けた者も判明した。そこで先生に、A先生を招待するのは如何でしょうかとお尋ねした所「それは避けた方が良くはないか」と言われた。「同じテーマがある会合でなければ、居心地が良いとは言えないからね」経験上の判断とはこういうものなのだろうと自分の認識の無力を感じてしまったが、致し方ないことだと思つた。

話は松浦先生の辞書の話になつた。

「先生はお酒がお好きだったから、きつとウイスキーのグラスを、こう文机の傍らに置いて、半分酔いながら辞書の原稿を毎晩遅くまで執筆されていたに違いない。目に浮かぶようだ。私は先生に声を掛けて頂いて今の仕事に就いたが、兎に角、誠実な方だった」と呟かれた。薪水の労を億劫にもしな

いその修煉が脳裏に浮かんだ。

二次会は河原町三条通りのビヤホールだったが、僕は翌日に授業があり、後ろ髪を引かれるように途中で早退したことはとても残念なことだった。

ある日、LINEにマリリンから初めて伝言が入った。タコの日本人学校への説明会に出席しないか、と聞いていた。僕は約束の喫茶店に出かけた。彼女はテーブルの一角に美しい足を組んで待っていた。潤んだ悪戯っぽい目をして、前の席をまるで陶酔した面接官のような態度で指し示した。彼女は威厳のようなものを見せていた。携帯の待ち受け画面には大きなバスデイケイが写っていた。僕はそのことに何も頓着せず、ただ自分の連絡先を伝えるために家康君のゆるキヤラメモを持参して行つたが、彼女はそれをバスデイカードと誤解した様子で、不満げにバッグの中に放り投げていた。一年間の長期に現地で働ける人材が欲しいとのことだった。マリリンは既に渡航する決意を決めていたが、先輩の経営する日本人学校からの依頼で、もう何人かの教師を望んでいるとの話だった。僕は考えてみるといった。咄嗟に彼女と一緒に南の国で暮らすのも良いなとぼんやりと思つた。

けれど、それから数日後のある朝、「港のある街」のバイパス脇のコンビニに、彼女の派手な色の車を僕は偶然見つけた。コンビニから出てきた彼女を目撃したとき、ああ彼女はケンと一緒に暮らし始めて、彼氏の家から通っているんだと確信した。そのことがあって、僕は彼女にタイの話を通つた。

アツアツの彼氏を置き去りに一人で渡航するつもりなのか、一緒に連れて行くのか僕は知らないが、どちらにしても、僕はずうっと嫌な思いをするだろうと思つたからだ。たとえケンと離れたとしても、また誰か別の恋人でも見つけていちゃつくの僕に見せつけるだろう。情感の脆もろさが疎ましい。そんなのはごめんだ。僕はそう考えたのだ。

卒業式は思いのほか足早にやつてきた。別段特別な感慨もない。卒業式の後で簡単な謝恩会が予定されていたので、僕は車を避けて、電車で出かけた。隣の駅からシンシアが乗り込んできた。僕は彼女と会話するのも最後と思ひ、彼女が座席の前を通り過ぎた時、捨鉢な色を帯びた「お早う」と声を掛けたが、彼女は無視をしたので、少し撫然とした気持ちになつた。まあ、今日限りで、二度と会うこともあるまいと心を落ち着けたが悄然となつた。

やがて列車は「丘のある街」駅に到着し、僕は不貞腐ふてくさた気持ちで、彼女が列車から降りるのを見届けてから下車しようとしていたところ、彼女は僕の前に立ち止まると「降りないの？」と声を掛けたので、おや、今日は仲良くしても良いというモードなんだと了解した。階段も改札も通路も、僕は彼女が僕と並んで学校まで一緒に歩きたいとは思わないだろうと、遠慮して数歩後から付いていこうとしたのだが、不思議なことにノロノロした僕を、そのたびに立ち止まつて恬淡ていたんなかんじでシンシアが待つていたことは予想外だつた。

卒業式には初めて見る理事長が現れて、一人一人に受講修

了書を手渡ししてくれた。一番若く、吃驚するほどの端正なケリーが、一言挨拶をしながら感極まつて涙を流した。一般の会社に勤めながら乗り切つた彼女は、超難問の検定試験も合格した頑張り屋さんで、そのまま学校に残つて春から教師として採用された三人のうちの一人であつた。クラスの何人が学校に応募したのかは知らないが、とにかく彼女は指よりの優秀な女性であつて、模擬授業でも学生から口説かれるような美人ではあつたが、なぜか色恋沙汰に無関心な様子であつた。彼女に続いて涙腺がゆるくなつた人は多かつた。

謝恩会で僕の隣にはシンシアが嫌がりもせず座つたけれど、これといって僕は楽しくもなかつた。宙ぶらりんな気持ちのまま、乱脈な哀愁ばかり沸きあがつて来る。彼女は既に上海の日本語学校に内定していて、僕は彼女のワンさんが何処に住んでいるかなど知らないけれど、聞きたいとも思わなかつた。マリリンはタイで日本語教師をすつていた。彼女の同級生の竹内さんは、カリフォルニアの学校からオファが在つて、皆から羨ましがられた。僕はアメリカのテレビドラマを見ていたので、美しいリゾート海岸に思いをはせたが、彼女によれば全米一治安の悪い所だそうで、それを聞くと彼女が心配になつた。案の定、それから何か月かが経つて、カリフォルニアの高速道路で横転事故が在り、大破したのが日本語学校のスクールバスと報道された時はまさかと思ひ、随分心配したが、彼女は幸い巻き込まれなかつた。主婦の多くは再び家庭に戻つていった。

散会して、駐車場の暗闇の中で、皆は二次会の相談をしている様子であったが、僕は諦めと溜息に捕らわれて寂しく、そうと闇に紛れてその場を立ち去った。それは、二次会ぐっらいは付き合おうと思っていた自分としては予想外の結果だったけれど、遣り場のなさから当然といえば当然のことだったかもしれない。

それから僕はどこか遠い国に行こうと思った。いつまでも嘘を吐いて生きてるのが空しくなつて、諦めと吐息が唯一の友達のような、孤独感が切実に苦しく感じて、たとえ半年でも良いから環境を変えてみたいと思っていたのだ。ある公益財団が募集している海外ボランティアに、僕は取りあえず応募してみた。流石に大きな組織だったから、大学の卒業証明を取り寄せたり、履歴書に細かく記入したり、更には二通の推薦状が必要とのことで、日本語講師の先生にお願いをして、締め切りギリギリで郵送をした。すると、一次審査は合格しましたと通知が来て、僕はもう半分は合格したものだとか大層喜んだ。面接試験が東京で実施された。必要だということから、高い費用を掛けて健康診断書を貰い、交通費をかけて当日を迎えた。新幹線の車内で、面接で聞かれるであろうことを頭の中で想像して、資料も作成したが、個人面接ではなく、六人合同のグループ面接だった。結果は不合格で、始めから年寄りなどは要らないよといってくれば良いのにと、的外れで八つ当たりのようなグチをこぼしたりした。仕方がないので自分でネットを捜して高いコストを払って、南方用の予

防注射を二回受けて、いざ、見も知らぬ海外の日本人学校に出掛けてみようとした矢先に父が亡くなったのだった。たぶん、神様が「今は行くな」と僕をこの国に引き止めてくれたのだろう。

人生は沢山のものを与えてくれる。けれどやがてはすべての物が奪われてしまう。しかし瞳を閉じれば、胸のここには波打ち際の貝殻のような、さまざまな形をした物が幾つも残っていて、生きている間はいつまでも暖かい。

僕は昔のことをみんな忘れて、近所にある外国人支援センターという所を尋ね、係りの人がいうままに、地元NPOを紹介していただいて、そこでボランティアを始めた。

やがて父の四十九日も終わり、後片付けも一段落した頃、僕は日本語検定のN2クラスを学習している生徒さんの授業を受け持つようになって、少しづつでも本物の日本語教師になろうと務めていた。生徒さんは七人で、皆向上心に燃えている社会人であったので、授業は楽しい。七人の内の二人は、インドネシアから来日していた人だった。授業は直接法を使っていたので、僕の拙いインドネシア語を使えば、他の人の響感を買うことはわかっていた。日本語という外国語を、判りやすい簡単な日本語に翻訳するという本来の大前提は尊重しながらも、時にはその短い時間の中で、インドネシアの人から『状況』と『状態』と『条件』の違いは何ですか？』と問われたりした時は、インドネシア語で訳したほうが早く、より正確なことだったから、僕は時々下手くそなインド

ネシア語を使った。なにしろ壊れかけた記憶だから、教壇に立ちながら僕は『条件』の訳語が今ひとつ思い出せない。たしかマシヤラカット？ いやそれは『社会』だ、と頭の中は空まわる。悩んだが、その場で辞書を取り出すなどということとは決して許されない。見る目が全く変わってしまう。なぜなら辞書があれば教師は要らないと判断されかねないからだ。

帰宅してすぐに松浦先生の辞書を引いてみた。シヤアラット。そうだ、思い出した。どうしてこんな簡単な単語を忘れてしまったんだろう。僕はワードに対訳と文例を書き入れて、次回に彼に渡すことにした。先生の辞書はありがたかった。先生の四角な顔を僕は思い出した。お酒が好きで、興が乗ると、かの地の唄を踊りながら聞かせてくれた。先生の頭頂部は少し薄かったけれど、左右に流した髪は豊かで僕はよく「幸せの黄色いリボン」の中の、若かりし金八先生の風貌を思い浮かべた。辞書を引くことになんの苦も感じなかった。次の週に、NPOの理事の人がインドネシア人専用の講座を開くので、それを担当してみないかと言ってくれた。僕は思わず「ぜひさせてください」と答えていた。

時が過ぎて、何時か僕はこんな日が来れば良いなと思っている。マリリンの待ち受け画面が2ショットではなく、彼女一人だけの笑顔に戻っている日。そしてシンシアから「結婚したよお」という幸福そうなメールが届く日。僕が教壇で、かつて松浦先生がそうしたように、生徒たちに向かって大き

な声で「誰か手を上げるものはないのか？」と高らかに呼びかけるあの台詞。いつまでも僕の耳に残っているあの先生の口ぶりで、教室中に響き渡った名台詞を、この僕が嬉しそうに呼びかける時を。

「AYOH. ANGKAT TANGAN」アヨー、アンカット、タンガンと。

僕は辞書を何度も指先でなぞりながら想像してみる。先生の思い入れを。そして先生の暖かさを。僕は大きな声で問いかけよう。僕はその時、少しは先生への恩返しが出た充実感を知ることが出きるのだ。

(西区)

小説選評

柳本宗春

今年は十三作品。やや応募数は減りましたが、例年に比べて読み応えのあるものが多いと感じました。また、五十枚という制限の中で、語るのが難しい内容のものもありませんでした。選考には本当に苦勞しました。

あえて申し上げるなら、小説には、虚実のバランスが重要だということですが、ご自分の体験を基に書かれていると思われる場合も多いのですが、ドラマティックな経験は、人生の中には何回かあるものです。それをドラマとして読ませるための工夫の差が、作品としての魅力に出ていることが多いと感じました。

それでは、以下、各作品の短評です。

「顔」

独特の文体が最初は気になるが、物語が進行するにつれて内容にじっくりくるようになる。面白い小説であった。

「虹色のカオス」

重い現実が淡々と語られる散文詩を思わせる作品。括弧や棒ダツシユの使用は抑えた方が良かった。

「住吉の森語り」

童話風の物語と、舞台となる実在の施設名や行事。一つの世界として融合させるのは難しかったのではないか。

「空白の二年間」

思いは強くあふれているが、物語としての流れが断ちきら

れる所がある。構成に工夫をする必要を感じる。

「緑の風に吹かれて」

老いへの戸惑いと生きようとする決意の表れた作品。主人公のエピソードでもう少しふくらませるとさらに良いだろう。

「みかんの花の咲く頃には」

興味深いテーマだが、主人公の多様な側面、登場人物の多さが、各々の人物像をあいまいにしているのが惜しい。

「ガラスの理想」

主題のはっきりしたSF的作品。こなれない表現がある一方で、光る描写もあり、フレッシュな印象の残る文章である。「いつかきつ」といい時がくる」

実直に暮らす貧しい家の長男を襲った悲劇から一筋の光が見えるまでの心温まる物語。人物それぞれが生き生きとしている。

「海の幸」

視点のぶれがなく、主人公の紹介を兼ねた初めのエピソードから結末まで、きちんとした構成で読者を引き込む力を感じる。物語の構想と描写力のバランスがとれた佳作である。

「貰い陽のしたで」

工夫された構成が感動を高める効果を生んだ。難病の新生未熟児とその両親の思いを、きちんとした小説にしている。

「先生の辞書」

タイトルとなつていているエピソードに絞って深めてほしかった。

「夢の続き」

目に見えるもの、見えないもの。どちらを描写するのも難しいことを感じさせる。

「松竹」

炭鉱の町で育った少年の体験したエピソードそれぞれが、魅力的で面白かった。

小説 児童文学 評論 随筆 詩 短歌 定型俳句 自由律俳句 川柳

児童文学

「市民文芸賞」

紅子さんのまわりはみんなハッピー

金指芙美代

「ほーら、きょうもまた、飛行機がとんでいくわ。どこへいくのかしらねえ」

紅子さんは、リビングのまどから空をながめて、二ひきのプードルという犬のぬいぐるみに、声をかけます。

飛行機は、雲のむこうに静かにさえていきました。

紅子さんは、ことしの一月で九十八才になったおばあさんです。

シヨートカットの白いかみで、からだは細く小さいけれど、とてもげんきです。

紅子という名まえにぴったりの、まっ赤な口紅をいつもひいています。

リビングのまどぎわには、紅子さんの花がらの長イスがあります。

そのイスには、長い耳に、ピンクのリボンをつけたサクラ

と、茶色のリボンをつけたゆずるといふ、まっ白なふわふわしたからだの二ひきのプードルのぬいぐるみが、紅子さんといっしょにすわっています。

「さっきの飛行機、あなたが生れたアメリカにとんでいったのかしらね」

そうはなしかける紅子さんを、サクラとゆずるがあまえるような顔でみつめます。

「なんてかわいいの、この子たち、わたしをみてる」

「紅子さんがひとりごと。」

それは、紅子さんがまだ四十才になったばかりのことです。

そのころ、紅子さんは、からだも弱くやせていました。そんなげんきのない紅子さんをはげまそうと、ご主人は、初めてアメリカ旅行につれていきました。

アメリカで、ある町のデパートのたのしそうなオモチャ売場の前まで来たとき、紅子さんは、ふと、足をとめました。

その店のずつと奥の棚にいた、ピンクのリボンをつけたブードルのぬいぐるみを見つけると、にっこり笑って、

「なんてかわいいの、ほら、わたしをみてるわ」

紅子さんは、ピンクのリボンをつけた、そのブードルのぬいぐるみをだきあげると、ご主人に、

「このぬいぐるみがほしい」

と、おねだりし、くるりとひとまわりします。

「紅子、子どもみたいだなあ」

ご主人は、ほほえみ、まぶしそうに、紅子さんを見つめました。

紅子さんが、ピンクのリボンのぬいぐるみを持って、レジにいこうとしたとき、

「待って！ ぼくもつれてって！」

と、声がしました。ふりかえってみると、茶色のリボンをつけたブードル犬のぬいぐるみが、紅子さんを、ジッとみつめていました。

それは、ピンクのリボンのぬいぐるみとなり、寄りそうようにならんでいたブードルでした。

「わかったわ、あなたもいっしょね」

紅子さんは、茶色のリボンをつけたブードル犬のぬいぐるみをだきあげました。

こうして、二ひきのブードルのぬいぐるみは、紅子さんの

トランクに大切に入れられアメリカから、はるばる日本にきたのでした。

日本に帰ると紅子さんのトランクの中で、ちびこまっていたブードルたちは、背のびをしてとびだしました。

そして、ふしぎそうに紅子さんの部屋を、キョロキョロとみまわしています。

「おつかれさまね、さあさあ、あなたたち、これから、ここですのよ」

紅子さんは、二ひきのブードルのぬいぐるみを見、じぶん用の花がらの長イスにおくことに決めました。

「ここならちょうどいいわ、あなたたちと私で楽にすわれるわね。ならんでみて」

長イスにすわった二ひきのぬいぐるみは、うれしそうに紅子さんを見つめます。

「まあ、なんてかわいいの、わたしをみてる」

紅子さんは、そういうと、

「そうだわ、あなたたちの名まえをつけないとね」

ピンクのリボンをつけたぬいぐるみに、

「サクラって名まえ、どう？ いいでしょう？ ここは日本だものね、日本では桜の花は、みんなから、とても愛されている花よ」

と、ほほえみかけました。

て、

「あなたは、きつと男の子ね、なんという名まえがいいかしら？」

紅子さんは、だきあげたまま、その目をみつめていました。

すると、紅子さんは、

「そうだわ、ゆずるがいいわ」と、いいだします。

「ゆずるっていうのは、私が幼稚園のころ、一つ年下の大好きな男の子の名まえよ、その子、サッカーがじょうずで、黒い目がきれいな、とてもかわいい子だったの。まるであなたのようなだわ」

紅子さんは、

「サクラに、ゆずる、すてきな名まえでしょ、これからもよろしくね」

と、にっこり。

その日から毎日、毎日、紅子さんは長イスにすわりながら、長い長い年月がすぎても、サクラとゆずるに、おはなしをしました。

・テレビをみているとき、

・雨ふりのとき、

・庭の水仙すいせんの花が咲いたとき、

・せきれいが遊びに来たとき、

・本を読むとき、

・それから、庭に、いたずら子ガラスが来たとき、

いつもいつも、サクラとゆずると、おしゃべりをするのです。

紅子さんは、その日も、リビングの長イスにすわって空をみあげていました。

「あら、また飛行機よ、みてごらん、サクラにゆずる、あの飛行機、アメリカにいくのかしら？ あなたたち、アメリカから日本に来て、淋しくないかしら？」

だきあげたサクラとゆずるをやさしくみつめ、

「でも、だいじょうぶよ、わたしがそばにいるからね」

そして、紅子さんが、

「よろしくね！」

といったしゅんかん、

「よろしく」

と、かわいいハーモニーがきこえました。

おどろいた紅子さんは、ふしぎそうに、あたりをみまわしました。

すると、

「紅子さん、こんにちは」

サクラとゆずるが、声をそろえていったのです。

「まあ、あなたたちだったの？ 今、『こんにちは』っていったのは？」

「そうです」

「びっくりしたわ。あなたたち、おしゃべりできるの？」

「はい、日本に来てから、毎日、紅子さんがわたしたちには

なしかけてくれるので、おぼえてしまいました」

紅子さんは、日本にサクラとゆずるをつれて来てから、

「いっしょにコーヒーを飲みましょう」

「陽がさして、まぶしそうね、カーテンしめるわね」

「絵本を読んであげるわ。一ページずつ、物語をききながら、絵をみていると、たのしいわよ」

などと、サクラとゆずるに、いつもはなしかけていたのでした。

ある晴れた日のことです。

「きょうは、あなたたちを洗たくしてあげる」

サクラとゆずるは、紅子さんに、からだを洗ってもらい、ふんわり、まっ白になって、とても気持ちよさそうです。

「まあ、いいにおいよ、きれいになったわ」

サクラとゆずるは、青い洗たくバサミで、二階のベランダにならんでつるされました。

風にゆらゆらゆれて、たのしそうにおどっているサクラとゆずるに、

「なんてかわいいの、わたしをみてる」

紅子さんは、いつものように、そうはなしかけ、にこっとほほえみます。

ゆずるは、お日さまにあたりながら、

「ねえ、サクラちゃん、ぼく、紅子さんが、『なんてかわいいの、わたしをみてる』っていつもいうだろう、だからこの

ことば、おぼえちゃったよ。それから他にもいろいろね」

「ワァー、ゆずるくん、ことばおぼえたんだすごいわ！ わたしもね、少し、おしゃべりできるわ」

と、サクラがあまえた声でいいます。

「紅子さん、いつもぼくたちに声をかけてくれるからうれしいね」

「ほんと、紅子さん、とてもやさしいのね」

「うん、そうだね、ぼくたち、しあわせだね」

「そうね、しあわせ」

サクラとゆずるは、ベランダに干して^ほもらいながら、そんなおしゃべりをしていました。

冬の朝、きょうもとてもよく晴れて、快晴です。

サクラとゆずるは、紅子さんにいつものように、からだを洗ってもらい、ベランダに干して^ほもらっていました。

昼下り、庭の水仙の花が、たくさんの香り^{かお}をつけて咲いています。

小さなせきれいが、庭で遊んでいます。

紅子さんは、昼食をすませると、いつものようにリビングの長イスにすわり、本を読んでいます。

二階のベランダに干してあるサクラとゆずるは、青い洗たくバサミにつるされ、いい気持ちで、やさしい風に吹かれながらいねむりをしていました。

そのとき、

どこからか勢いよくサーッと、黒いものがとんで来ました。カキン！

黒くてするどい口ばしが、サクラの長い耳をはさみ、洗たくバサミからひきはなすと、むこうの森までとんでいきました。

なんてことでしょう！

まだ子どものカラスのカン助です。

カン助のはじめてのぼうけんです。

カン助は、とくいになり、つかまえてきたサクラをカラスのみんなにみせびらかせています。

カラスのなかまは、めずらしそうにサクラの耳をひつぱります。

サクラは、とつぜんのことでもできません。

耳につけてあったピンクのリボンも、ほろほろにきれてしまいました。

そのころ、ベランダでいねむりをしていたゆずるは、隣となりにならんで干してもらっていたサクラの姿すがたがみえないのに気づきました。

ゆずるは、黒い目をキョロキョロとさせ、サクラをさがしました。

どこにもいません。

「たいへんだ！ サクラがいらないよ！ 紅子さーん」

ベランダから、ゆずるのさげび声が、本を読んでいた紅子

さんの耳にとどきました。

紅子さんは、あわてて階段をのぼります。

そのとき、

ドドドドドシーン！

階段を落ちたまま、腰をおさえています。足ですべらせ、下まで落ちてしまったのです。

「あ、あゝ、いたゝい、いたゝい」

紅子さんは、倒れたまま、腰をおさえています。

大きな音と、紅子さんの悲鳴ひなめをきいたゆずるは、青い洗たくバサミからとびおけると、いちもくさんに紅子さんのところに走っていきました。

「紅子さん、だいじょうぶですか？ ぼくのとつぜんの大

にびっくりしたんですね、ごめんなさい」

紅子さんは、

「いたゝい」

と、ふりしぼるような声でいいながら、からだをおこすと、「ゆずる、さつき『たすけて！』って、いったでしょ、いったいどうしたの？」

「サクラちゃんが、あのー」

ゆずるは、フウーと深い息をはいて、胸をおさえてから、「紅子さん、サクラちゃんがなくなっちゃったんだ」

ゆずるは、今にも泣きだしそうです。

「えっ？ なんですって？ サクラがいなくなっちゃったって、い

ったい、なにがあったの？」

「ぼくにも、わからないんだ」
ゆずるは首を横にふってから、

「ぼく、おひさまにあたって、ポカポカとてもいい気持だったの、だからいねむりしてたんだ。隣のサクラちゃんも、『ああ、いい気持ね、ゆずるくん、わたし、眠くなっちゃうわ』っていつてたんだ。そのとき、空からサーッと、なにか黒いものがとんで来たのを、ぼく、みてたんだ」

「黒いもの？」
「そうなんだ、黒いものが、風のように、ぼくの前を通りすぎたんだ」

「紅子さんとゆずるが話をしているのを、まどごしで聞いていたせきれいが、
トントン、トントン、
と、まどガラスをつつきます。

気がついた紅子さんがまどをあけると、せきれいが、チュチュユーと、鳴きながら入ってきました。
せきれいは、真剣な顔で、

「紅子さん、ゆずるくんが、さつき、みたっていった黒いようなもの、それは、ガラスのことさ、あのいたずら子ガラスのカン助だよ」

「えっ？ カラスなの？ このごろよく、子どものカラスが来て、庭の野菜を食べちらかして、困ってたの、あのカラス、カン助っていうのね」

「そうなんだ、カン助のやつ、ぼくをいつも追いかけてます

いたずらっ子さ、ベランダに干してあったサクラちゃんを、あいつがぐわえていくのを、ぼく、みたんだ」

せきれいの話を聞いた紅子さんは、遠く空をみあげて、
「何とか、サクラちゃんを、つれもどせないかしら？」

というと、ゆずるとせきれいは、
「ぼくたちで、サクラちゃんをさがします。紅子さんは、いためた腰をなおしててください」
と、声をそろえています。

「じゃ、おねがいね、わたし、少し横になって静かにしているわ」
紅子さんは、そつと腰をさすりました。

そのとき、ベランダから、青い洗たくバサミが、ポトリと庭に落ちてきました。
青い洗たくバサミは、

「ぼくも、サクラちゃんを助けにいくよ、ぼくにぶらさがつてうとうとしていたサクラちゃんを、急に、カン助がぐわえて遠くにいつてしまったんだ」

と、くやしそうに空をみあげています。
ゆずるは、
「紅子さん、ぼく、せきれいくんと洗たくバサミくんと三人でサクラちゃんを助けだしてきます」

と、力強くいいました。
「みんな、ありがとう！ たのむわね」

紅子さんは、ならんで胸をはっているゆずると、せきれい

と、洗たくバサミに、握手をします。

「しつかりね！」

三人は、大きくうなずき、サクラを助けに出かけていきました。

紅子さんは、腰にしつぷをはると、ベットに静かに横になりました。

日が暮れかけたころ、せきれいは、カラスのカン助が住んでいる松林をさがしあてました。

「あそこだ、カラスがたくさんいるぞ！」

カア カア カア

カラスのしゃがれた鳴き声なぐさがきこえます。

ゆずるは、そのカラスたちの中に、ピンクのリボンをくわえ、うれしそうにしている子ガラスのカン助をみつめました。

サクラの

「わたし、ここにいろわ」

という細い声がきこえます。

せきれいが、かたい実をくわえて、真剣な顔でいました。

「ぼくが、この実を、カラスのカン助めがけて、ブーツとふきつけるよ」

洗たくバサミは、

「よし！」

と、うなずき、

「じゃ、ぼくは、せきれいくんがとばしたかたい実に、カン

助がびっくりしたすきに、カン助の口ばしをピタッと、動かさないようにはさんでやる」

と、力強くいました。

松の木のてっぺんをみあげていたゆずるは、

「せきれいくんと洗たくバサミくん、とてもいいアイディアだ、それじゃ、ぼくは、そのすきにサクラちゃんを助けだすよ」

こうして、ゆずると、せきれいと、洗たくバサミは、力を合せて、カラスのカン助からサクラをぶじに助けだしたのです。

紅子さんは、すこしよれたからだでもどって来たサクラを、

「かわいそうに、かわいそうに」

と、思いきりだきしめました。

「あの、いじめっ子のカン助め、こんど、紅子さんの庭に来たら、おい返してやるぞ！」

ゆずるがそういうと、

「そうだ、そうだ、みんなでやっつける！」

せきれいと、青い洗たくバサミは、大きな声をあげました。すると、サクラがいました。

「みんな、まって！ カン助は、そんなにわるいカラスじゃないわ」

「どうしてさ、サクラ、カン助は、いじめっ子だよ」

ゆずるがおどろいたようにいました。

「そうだよ、ほくだつて、いつもカン助に、おいかげられ、つつかれたりしたんだ、いつも、いつもだよ、あいつ、わるいカラスさ」

せきれいは、顔をまっ赤にしていました。

隣で洗たくバサミも、

「そうだ、そうだよ」

と、うなずきます。

サクラは、目にたまつたなみだをそつとふいてから、

「みんな、ちがうわ、カン助は、ただ、わたしと、あそびたかつただけなの。わたし、こんどのことでよく、わかつたの」

そういうとやさしく笑いました。

「そうかなあ？」

ゆずるもせきれいも、そして洗たくバサミも首をかしげます。

紅子さんは、よごれたサクラのからだをやさしくふき、ま新しいピンクのリボンを耳につけてだきあげ、ほおずりをしました。

「ありがとう！」

サクラは紅子さんに、笑い顔いっぱいにして、おれいをいしました。

階段から落ちてから、ときどき腰がいたむ紅子さんは、歩

くとき、つえを使うようになりました。

でも、口紅は、あいかわらず、ちゃんど、ひいていて、きれいな白いかみに、みどりのフレームのめがねが、とてもよくあいます。

今も花柄の長イスには、サクラとゆずるが紅子さんと仲よくならんですわっています。

「なんてかわいいの、わたしをみてる」

と、につこり笑うと、紅子さんはサクラとゆずるをだきあげます。

「なんてすてきな、やさしい紅子さん」

サクラとゆずるは、そう、ほほえみかえます。

まどのそとの庭には、せきれいが、チラッと、紅子さんとサクラとゆずるがたのしそうに、おしゃべりをしている姿をみながらあそんでいます。

ペランダでは、青い洗たくバサミが、風に吹かれ、気持よさそうにゆれています。

子ガラスのカン助が、隣の家の屋根から、

「ぼくも、いつかみんなのなかまに入りたいなあ」

と、小さな声で

「カア」

と、鳴きました。

そして、今日もまた、青い空にあらわれた飛行機が、白い雲のむこうにきえていくのでした。

(南区)

「市民文芸賞」

山のおまつり

宮島ひでこ

三年生のみっちゃんが、学校から家にかえると、入り口でさやちゃんが、足をぶらぶらさせてまっています。

さやちゃんは去年のおわりごろ、お父さんが、山のしごとをするので、みっちゃんが、くらししているここ屋久島の永田の村の学校に転校してきたばかりです。

「さやちゃん、どうしたの？」

「みっちゃん、おそかったね。わたし、あそぼうとおもってまっていたの」

「うん、さやちゃん、しゆくだいは？」

「ちよつとだけおわつたけど、けいさんドリルと本よみをまだやってないの。早くあそばないとすぐ夕方になって暗くなっちゃうし」

「うん、でも、わたし、しゆくだいがおわつてからあそぶって父さんと母さんに、やくそくしてるんだ」

「そうか、わたしネコのミーとあそんでるから、みっちゃん早くしゆくだいをやっちゃってよ」

さやちゃんは、くつをはいたまま、げんかんにこしかけ、ネコのミーをよびました。

「ミー、ミー、おいで」

テーブルの下でねそべっていたミーは、だいすきなさやちゃんのこえに、耳をピンとたてると、すーとおきあがりました。それからゆつたりと「ニャーオ、ニャーオ」と、なきながらさやちゃんのそばへちかづいていきます。そして、ペロペロとさやちゃんの手をなめて、ひぎの上にもちよこんとすわりこみました。

「いいなあ、ミーは、毎日しゆくだいがないから、ずーとあそんでいられるね」

さやちゃんは、ミーに話しかけながら、あたまをなんども

なんどもなでてあげました。

目をつむり、じーっとねむそうにしているミーの顔をながめているうちに、さやちゃんもいつのまにかねむたくなってきました。

三十分ぐらいたつたでしようか。

「さやちゃん、おきて、牛乳のむ？」

いつのまにかねむっていたさやちゃんは、みっちゃんのことえに目をさしました。

さやちゃんは、みっちゃんがコップに入れてくれたつめたい牛乳をごっくんとのもつと、ねむたいきもちほ、さーつとふきとんでいきました。

「しゅくだい、おわつたよ。おまたせ」

「やつと、あそべるね。みっちゃん、帰ってくるのおそかつたけど、学校でなにかあつたの？」

「ちーちゃんとね、学校から家まで何歩でかえられるか、かぞえながら歩いてたんだ。ゆうびん局の前きたときね、とつぜん、母さんの友だちのおばちゃんに、話しかけられちゃつて、こたえていたら今までかぞえていたすうじをぜんぶわすれてしまったの。八百まではおぼえていたんだけど。ちーちゃんも、わたしもがっかりよ」

「うわー、もつたいない」

「でしよう。もつたいない。あれ、もつたいないってこんなときつかうんだつたつけ」

みっちゃんは、さやちゃんにそういつてから、

「あした、らん子ちゃんもなかまに入れて、学校から家まで何歩でかえられるか四人でかぞえてみようよ。ひとりわすれもだいじようぶ。三人がおぼえているから」

みっちゃんは、外にほしてあつた洗たくものを、家の中にさつととりこみました。それから、

「いつてくるから、るすばんたのむわよ。そんなに、おそくならないから」

と、ミーに声をかけ、げんかんのかぎをしめました。

「みっちゃん、えらいね。みっちゃんのお母さんが、いつも、ミーにいつている言葉といっしょだね」

「うん、まねしてみただけ。うふっ」

ふたりは、わらいながら家のそばの小さな道を歩きはじめました。

道にそつてながれる小川は、大きな川の方へつづいていきます。川の底までみえるすみきつた小川は、それぞれの家をかこむようにながれています。そして、石がきの岩と岩とのあいだには、小さな背のひくい植物が、古いこけのあいだをぬつて、色どりよくのびています。

そのそばを、オレンジ色や、きいろの小さなカニたちが、水の中に入つたり、岩の穴に入つたかと思うと、のそのそとでてきたり、ケンカしたりしてあそんでいます。

みっちゃんとさやちゃんは、小川に両足を入れて、ほそい竹の葉つばで舟をつくり、どちらの舟が早くながれていくか、きようそうしました。

それから、しばらく小川にそって下流の方へむかって歩いていくと、ながれの早い場所につきました。

むこうにみどり色の山がみえます。いつもみなれている山ですが、とても美しくかがやいてみえます。

「きれいな山ね」

と、さやちゃんがいうと、

「うん」

と、みっちゃんがとくいそうに、

「あの山には、神さまがいるのよ」

と、いいかけると、むこうから歌がきこえてきました。

遠くの方に、畑からほりだしてきただいこんを洗いながら、歌っている女の人がいます。

「なりこ姉ちゃんだ。なりこ姉ちゃんが、歌っているのは浪曲なみくっていうんだよ。」

と、さやちゃんに、みっちゃんがいきました。

「さやちゃん、はじめてきく？ わたし、毎朝、しんせきのなりこ姉ちゃんが、外の小川でお茶わんをあらいながらうなるようなこえで歌っているから、いつのまにかだいすきになっちゃった。きいてて、ここからせりふが入るよ」

そういうと、みっちゃんは、なりこ姉ちゃんといっしょに、歌のせりふを口ずさみました。

「ときに、げんろく十五年、十二月十四日江戸の夜かぜをふるわせて……」

さやちゃんは、とつぜんうたいだしたみっちゃんの浪曲

に、おどろいて目をまるくしています。

「びっくりしたでしょう」

「びっくりしたなあ。みっちゃんが浪曲をうたいたすんだもん」

「わたしだつて、信じられないよ。いつのまにかおぼえちゃったのだから……」

みっちゃんは、なりこ姉ちゃんのそばにちかづいていきました。

「お姉ちゃん、なりこ姉ちゃん、こんど転校してきた友だちのさやちゃんに、山のおまつりのことを教えてあげて」

と、みっちゃんがいうと、浪曲に夢中になっていて、ふたりにきづかなかつたなりこ姉ちゃんは、にこにこしながら、あさつての、おまつりのことをはなしてくれました。

「みっちゃん、おまつりで何をしますの？」

と、さやちゃんがききました。

「一年生から六年生まで、村の人たちといっしょに山のちかくにある畑へいって、そこで山の神さまにありがとうとお礼をいって、おいしいみそしると、おもちをいただくんだよ」

「うわー、すてき！」

「うん、山のおまつりって、たのしいよ」

みっちゃんも、声はずませます。

すると、なりこ姉ちゃんは、にっこりして、

「毎年、みっちゃんは、おまつりにいっててからわかるよね。」

ことしもきつと山の神さまが、よろこんでみんなに元気をく

ださるよ」

と、いいました。

そして、ゴボウ、ニンジン、ダイコンをあらってきざむというのが、なりこ姉ちゃんのおまつりのときの当番だと教えてくれました。

「なりこ姉ちゃん、お姉ちゃんは、山の神さまのお顔しつてる？ 山の神さまにあつたことあるの？」

と、みっちゃんがききました。

すると、なりこ姉ちゃんはまじめな顔で、

「神さまのおすがたはみたことないけど、『お米やおやさいや、くだものや、みんなが元気でくらせるように、お恵みくださつてありがとうございます。みんなが、ずっと、しあわせでありますように……』心の中でしっかりおねがいするとね、目にはみえないけど心の中に、うれしさがわいてくる気がするのよ。」

というのです。

「おまつりたのしみにしてる。お姉ちゃんありがとう」

みっちゃんと、さやちゃんは、なりこ姉ちゃんとわかれて歩きはじめました。

しばらく歩いていると、さやちゃんのお母さんが、買い物袋をさげてお店に入っていくのがみえました。さやちゃんは、「わたしかえるね。バイバイ、またね」

といながら、さつさとお母さんをおいかけていきました。次の日のことです。

放課後、家にかえる時間です。

さやちゃんは、らん子ちゃんとちいちゃんと、みっちゃんに、みんなで、学校から家まで何歩でかえられるか、かぞえてみようとはなしました。すると、ちいちゃんは、

「わたし、きのうかぞえていやになったからやめる。ごめんね」

というと、「バイ、バイ」といって走っていきました。

「らん子ちゃんは？」

さやちゃんが、らん子ちゃんの顔をのぞきこんでたずねました。

「わたし、母さんが用があるつて。だから、早くかえらなくつちゃ」

らん子ちゃんも、そういつて、いつてしまいました。さやちゃんは、みっちゃんのそばにきて、

「みんなだめだつて。でも、わたしは、みっちゃんといつしよにかぞえるよ」

そういうと、さやちゃんは、みっちゃんの両手をひっぱりながら校門をでました。

みっちゃんは、しんけんな顔をして、自分の足をみつめながら、かずをかぞえます。

「十五、十六、十七……」

ふたりは、顔を見あわせてかずをいいます。

「どうしたの？ みっちゃん、さやちゃん」

とおりかかった同級生たちがきくので、みっちゃんは、

「家まで何歩でかえられるか、かぞえてるの」と答えて、つづきのかずをかぞえながら歩きだします。

「がんばってね、バイ、バイ」

ランドセルの音をたてながら、同級生たちは走っていつてしまいました。

みっちゃん、さやちゃんは、田んぼのあぜ道をゆつくり歩き、ひろい道にでてやつと大きな川のそばにきました。

「三百五十五、三百五十六……」

小さなこえで、かぞえていたみっちゃんは、

「つかれたね、さやちゃん」

といつて、らんかんにもたれるようにすわりこんでしまいました。

橋の上を男の子たちが、多ぜいあるいてとおりすぎていきます。

男の子たちが、角をまがっていつてしまうと、さやちゃんは、すつと立ちあがり、もじもじしながら急に走りだして、大きなこえでさげびました。

「もう、やめようよ。みっちゃん、わたし先にいくから」

みっちゃんは、びっくりして立ちどまりました。

「なによ、いつしよにかぞえるつていつていたのに、うそつきー、なんでなの」

「みっちゃん……ごめんね」

さやちゃんは、走っていつてしまいました。

「どうしたのよ。さやちゃんのばか！ 大きい。もう、ぜ

つたいあそばないから……」

みっちゃんは、自分のくつをみながら、（なんで、わたしこんなことしてるのかな。つかれてるのに）

「わたし、ぜつたいさやちゃんとは、ともだちにならないから……。もういやになった」

と、ひとりでかずをかぞえて歩いていきました。

しばらくして、小さな道にさしかかりました。

「五百八十……、五百八十一……」

もそもそと、かずをいいながら歩いているみっちゃんをみた家のちかくでくらししているおばさんが、

「あら、みっちゃん、どうしたの？ 五百八十一つてきこえただけ……」

「学校から何歩で家へかえられるか、かぞえていたの」

「まあ、えらいわね。さつき、さやちゃんがまっさおな顔をして、りよちゃんの家へ入つていつたよ」

「わたし、さやちゃん大きい」

「いつも、なかよしなのに……」

「うん、ふたりでかずをかぞえてたのに、走つていつちゃつたの」

「みっちゃん、さっちゃんはね、トイレかしていつていつたよ。ゆるしてあげなさい。おなががいたかつたのよ。さやちゃんは、むこうのつわぶきの花の道のところで、ずつとまつてるよ。そうそう、いまみっちゃんがかぞえていた、かずは五百八十一だったからね。きをつけてかえんなさい」

おばちゃんは、みっちゃんに手をふりながら、とおりすぎ
ていきました。

みっちゃんは、さやちゃんのことを心配になってきまし
た。でも、かずをかぞえて歩きます。

すると、急にねこの親子がとびだしてきました。

「あら、かわいいねこちゃんたち。おうちはどこかな？」

みっちゃんは、うっかり、ねこたちのあとを追いかけそ
うになりました。

「ああっ、かずをかぞえるのをわすれるところだった。えーと、
七百三十五、七百三十六、七百三十七……」

といいながらすすみます。

せまかった道が、広いはばの道とぶつかったところにきま
した。

四つ角をまがると、つわぶきの花の道につづきます。みっ
ちゃんは、さやちゃんがまっつるとおもうと走ってみたくな
りました。

「キーツ」

「どすーん」

「いたいよー」

自転車にのってスピードをあげてきたお姉ちゃんが、四つ
角のかけから急にとびだしてきたみっちゃんにぶつかったの
です。

「うわーっ、ごめんなさいね、いたかったでしょう。どこぶ
つたの？」

みっちゃんは、ひぎのすりきずを両手でおさえ、少しなみ
だぐんでいます。

「ごめんなさいね。いたかったね」

お姉ちゃんは、自転車を道のわきによせてみっちゃんのそ
ばについてきました。

「わたし、へいきです。ちよつといたいけど。だいじょうぶ」

みっちゃんは、（あれ！ いくつだったっけ……。かぞえ
ていたすうじをわすれちゃった。もう、やめた）そう、心の
なかでおもいながら、ピリピリするきずをがまんして歩きま
した。

いつもの道を、ゆっくり、ゆっくり歩きます。つわぶきの
花の道にでました。

つわぶきの花の葉っぱにかくれて、ずっとまっていたさや
ちゃんは、足をひきずりながら歩いてくるみっちゃんを、心
配そうにみえています。

「みっちゃん、どうしたの？ いたい？」

「自転車とぶつかっちゃった。また、せつかくかぞえていた
かずをわすれちゃった」

「ごめんね、みっちゃん。わたし、トイレにいきたくて、り
よちゃんの家へいったの。男の子たちが、みっちゃんのそば
を歩いていたらトイレっていえなかつたんだ……」

「うん、わかてる。さつき、知りあいのおばちゃんから、
さやちゃんが、急に走っていったわけをきいたよ」

「ほんとにごめんね」

「わたしだって、さつき、さやちゃんのこときらいだとおもったけど、また、すきになったから、またかずをかぞえようね」

「うん、いっしょにね」

ふたりは、ならんで歩きだしました。

「みっちゃん、みて、夕焼けだよ。西の山の上の空が真っ赤だね。うわー、トンボのはねも赤くそまつているね。さあ、おうちに帰らないとおそくなっちゃう。」

みっちゃんは、走りだしました。

さやちゃんも、あわててあとをおいかけます。小川にそって咲いているつわぶぎのさいろい小道。

「この花のことを、おこ花ともいうんだよ」

村の役場につとめている父さんにおしえてもらったつわぶぎの花の別の名前のこと。

それから父さんは、春になると、茎をタケノコといっしょに煮てたべることや、根っこは、くすりの材料につかわれることを、はなしてくれました。

みっちゃんは、父さんの言葉をおもいだし、急にたちどまると、

「さやちゃん、みて。きれいだね、おこ花」

深い緑色のおこ花の葉っぱが、いく重にも重なってつづいでいます。その葉っぱをつつむように水しぶきが、きりのように舞い、つややかに光り、夕やけ色と、とけあっています。茎の先には、小さな玉のようなつぼみが、きみどり色の光の

ようにかがやき、さいろい花びらが、ところどころにひらいています。

「みっちゃん、ほんとにおこ花きれいだね」

「さやちゃん、わたし、こんなにゆっくりおこ花たちをみたのって、はじめてのようないきがするよ」

「わたしもよ。おこ花、きつと山の神さまの友だちなのかもね」

「そうかもね、ねえ、さやちゃん、山の神さまへありがとうのおまつりのとき、おみそするなんばいたべる？」

「わたしね、三ばい」

「わたしは、三ばいとおもち三つ」

「わたし、みっちゃんよりおおくたべるとおもうよ。四こかな」

「もしもよ、さやちゃん、山の神さまが、そんなにたべてはいけませんっていったらどうする？」

「わたしね、目をあけて、こえのするほうをそーっと見てみるかも……」

「父さんだったら、びっくりだね。さやちゃんの父さん、きれいなこえをしてるから、神さまとまちがえるかもしれないよ」

「そんなはずないよ」

「神さまって、どんなお顔だろうね」

ふたりは、空を見あげています。

いつのまにか、おひさまは西の山の方へしずみかけ、だん

だんと深い青色の空になっています。

「こういう空を群青ぐんじょうの空というんだよ」

と、父さんがいつかいつかいていた色のことを、みっちゃんはおもいだしました。

遠くの方をカラスの親子が、おひさまのしずむ山の方へ列をつくりながらとんでいます。

「さやちゃん、気をつけてかえってね」

「みっちゃんも、気をつけてね。あしたの山のおまつり、たのしみね」

ふたりは、手をふりながら、それぞれの家へかえっていきましました。

(中区)

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

「市民文芸賞」

幸せのくるところ

生崎美雪

ある冬の日のことでした。学校の帰り道、恵理は、通学路の途中にある公園に行きました。なんだかまっすぐに家に帰る気持ちになれなかったのです。

公園の銀杏の木は、秋には黄色の葉っぱがとでもきれいだつたのに、冬になって、風で葉っぱが散ってしまつて、とても寒そうです。恵理は、ベンチにこしかけると、銀杏の木を見つめて、はーつとため息をつきました。恵理の頭の中に浮かんできたのは、俊君の笑顔でした。

俊君は、サッカーが得意なスポーツマン。面白くて、ちょっといたずらなところもあるけれど、優しい男の子。恵理は、中学生になって、俊君と出会い、いつのまにか俊君のことが好きになっていました。

その俊君が、転校してしまったことを、恵理は、今日学校で初めて知りました。お父さんの仕事の都合で、急に決まっ

た転校で、誰にも言わずに、遠くの街へ行ってしまったのです。

今朝、授業の前に、先生からお話を聞いた恵理は、突然のことに、頭の中が、真っ白になってしまいました。いつも俊君が座っていた席をじっと見つめていると、俊君のちよつとてれたような笑顔を思い出して、恵理の目からは、涙があふれてきました。けれど、泣いていることを誰にも知られないように、あわてて涙をふきました。

家に帰りたくなかったのは、学校でそんな悲しいことがあつたからだつたのです。

「こんなに突然にいなくなってしまうなんて。もっと俊君とお話しすればよかった」

内気な恵理は、はずかしくて、俊君とは、「おはよう」「さようなら」くらいしか言葉をかわしたことがなかったので

す。話しかける勇気のなかった自分が、くやしくてたまりません。

「俊君。もう会えないのかしら……」

恵理の目からは、また涙があふれてきました。ヒューッと冷たい風が吹きました。空から、真つ白な雪がちらちらと降ってきました。ふわふわの綿のような雪は、次々に舞い降ってきて、公園の地面は、たちまち真つ白い雪に覆われました。

銀杏の木にも、白い雪が降り積もりました。

真つ白な雪を見ると、恵理は、なんだからとても悲しくなつて、しくしくと泣き出してしまいました。

「どうしたですか？」

女の子の声がしました。恵理は、驚いて顔をあげました。銀杏の木の下に、赤い毛糸の帽子に青いコートを着た、かわいらしい女の子が立っていました。

「泣いているのですか？」

女の子は、そつと恵理のほうへ近寄つてくると、コートのポケットから白いハンカチをだして、恵理に、

「どうぞ」

と、さしだしました。

「ありがとうございます」

恵理は、女の子からハンカチを受け取ると、涙を拭きました。

「ニーハオ。こんにちは」

「こんにちは。ニーハオって、何のこと？」

「ニーハオは、中国語で、こんにちはのことです」

「ニーハオ、ニーハオ」

繰り返して言ってみると、恵理は、とても不思議な気持ちになりました。

「ハンカチ、ありがとうございます」

「どういたしまして。ありがとうございます、中国語で、シエーシエーと言います」

「シエーシエー？」

「はい。あなた、中国語の発音、とても上手ね」

女の子がにっこりと笑いました。

恵理も、その笑顔につられて、にこつと笑いました。

「私、中国から来ました。中国人です」

「中国？」

「はい」

恵理は、中国という国の名前は聞いたことがあるけれど、どんな国なのかは、まったく知りませんでした。

「中国。チョンゴ。中国人。チョンゴーレン」

女の子は、まるで電子辞書がおしゃべりしている調子で言葉話すので、恵理は、ちよつとおかしくなりました。

「私の名前はホワです。日本語の花です」

ホワという女の子は、地面に積もった白い雪に、木の棒で、『ホワ』『花』と、並べて書きました。

「ホワ。花？ かわいい名前ね」

「私は、恵理です」

恵理も、木の棒で、雪の地面に、

「えり」「恵理」と書きました。

「恵理ちゃん。中国語の読み方、ファイリーですね。ファイリー。恵理ちゃん。どうぞよろしく」

ホワが、右手をだしました。

「よろしくね」

恵理も右手をだして、二人は、にこっと笑って握手しました。

「恵理ちゃん、さつき、どうして泣いていたの？」

恵理は、うつむいて、小さな声で、

「今日、学校で悲しいことがあったの」

「悲しいこと、あったですか？」

「うん。クラスの男の子が、突然転校してしまったの」

「とつぜんって、どういう意味ですか？」

「あつ。えっと。急になってこと。何も知らなくて、今日学校に行ったら、もういなくて、遠くの街へ、行ってしまったの」

「そうですか。恵理ちゃん。その男の子のこと、好きだったのね」

恵理は、ちよつとはずかしそうにうつむくと、小さな声で、

「うん。好きだったの」

と、言いました。

「男の子、名前はなんて言いますか？」

「俊君」

「どんな字？」

恵理は、雪の上に、『俊』と書きました。

「俊。中国の読み方で、ジュン、ですね。どんな男の子ですか？」

「とってもかっこいい男の子よ」

恵理は、うれしそうに、ふふふと笑いました。でも、すぐに、悲しい顔でこう言いました。

「でも、きつと、もう会えないわ」

「恵理ちゃん、それで、悲しいですね。それで、泣いていたですね」

「うん」

恵理は、空に舞っている白い雪を、じっと見つめると、また涙がこぼれ出てきました。

「悲しいときは、泣いてもいいのよ。でもね。よくわからなければ、いつかまた俊君に会えるかもしれない。だから、そう思って、また元気に笑ってね」

一生懸命に話すホワの言葉が、恵理の心に優しく響きました。

「そうね。いつかまた会えるといいな」

「私、おばさんに頼まれて、牛乳買いにきたの。おばさん、この街で、喫茶店してます。私、学校の帰りに、ときどきお手伝いしています」

「へえ、えらいのね」

「そうだわ。恵理ちゃん。今から一緒に、おばさんのお店に

行きませんか？ おばさん、あたたかいココア、いれてくれます」

「私、ココア、大好きよ」

「よかった。おばさんの名前は、リン。日本語の鈴よ」

「鈴。リン。素敵な名前」

「お店の名前は、おばさんと同じ『鈴』ですね。さあ、行きましょう」

「私、まだ家に帰ってなくて……。でも、暗くなる前に帰ればいいかしら。少しだけなら……」

「少しだけね。あつたかいココア飲んで、すぐにお家に帰れば大丈夫ね」

ホワが、そつと、恵理の手をとって、歩き始めました。

二人は、白い雪の道を並んで歩いて行きました。少しくと、十字路が見えてきました。信号機が赤で、二人は横断歩道の前で立ち止まりました。

「この横断歩道のむこうよ」

ホワの指さすほうを見ると、小さなお店がありました。

「こんなところにお店があつたかしら？」

「小さいお店で、気がつかなかったかもしれないですね」

信号機が青に変わって、二人は、また、歩き始めました。

「さあ、つきました。ここが、リンおばさんのお店です」

お店の白い扉の上に、金色の文字で、『鈴』という名前のついた木の看板がかかっています。扉の横の窓ガラスには、綺麗な赤い花模様をついた、金色の紙がはってありました。

金色の紙の真ん中には、赤い文字で、『福』と書いてあります。

「きれいな飾り。でも、『福』の字がさかさまね」

「この飾り、『さかさ福』っていいます。福の字、わざと下さかさまにしています。幸福が来ますようにという願いがこめられているの。福は、中国語で、フーといひます」

「へえ。さかさ福。幸福」

「今日は、中国のお正月」

「お正月？ 2月なのにな？」

「はい。春節。チュンジエっていいます。新しい年を迎える日よ。中国では、家族で餃子やお餅を食べます」

「日本のお正月に、ちよつと似てるのね」

「中国の街、赤や黄色、金色の飾り、とてもきれいよ」

「へえ。そうなのね」

恵理は、さかさ福のきれいな飾りを見つめました。

「さあ、お店に入りましょう」

ホワが、お店の白い扉をあげました。

「ホワインゴーリン。いらつしやい。あらつ。ホワちゃんだったのね。お帰りなさい」

お店のカウンターから、女のひとの声がありました。

「ただいま、リンおばさん。たのまれた牛乳買ってきたよ」

「謝謝（シェーシェー）。いつもお手伝いしてくれて、ありがとう」

「どういたしまして。あのね、おばさん」

ホワは、となりで、ちよつと恥ずかしそうにしている恵理

の肩に手をおいて、

「恵理ちゃんです。さつき、お友達になったの」

「まあ。かわいらしい女の子。こんにちは。ニーハオ。恵理ちゃん」

「ニーハオ」

「中国語、知っているの？」

リンおばさんが驚いた顔をしました。

「ホワちゃんに教えてもらいました」

「そう。ホワちゃん、素敵なお友達ができたのね」

「うん」

恵理とホワは、にっこりと笑いあいました。

「雪が降ってきて、外は寒かったです。今、温かいココアをいれてあげるわね。」

リンおばさんは、カウンタートにはいると、白い陶器のカップに、温かいココアを注いで、持ってきました。

「はい、どうぞ」

「シェーシェー」と、ホワが言うのをまねして、恵理も、

「シェーシェー。ありがとうございます」

と言って、冷えた手を温かなカップにあてると、ふーっと、いきをかけて、ココアを飲みました。

「あつたかくて、とってもおいしい」

冷たかった恵理のからだは、ほんわりと温かくなって、ほつぺたが、ほんのりと桃色になりました。

「今日は、特別。さつき焼いたばかりのパウンドケーキがあ

るから、食べていってね」

おばさんは、にこにこ笑って、カウンタートから、焼き立てのフルーツパウンドケーキを持ってくると、テーブルに置きました。

「まあ、美味しそう」

「このケーキには、甘いお酒が少しと、ドライフルーツやナッツがはいっているのよ」

「おばさん、私に切らせて」

「ホワちゃん、上手に切ってね」

「うん」

ホワは、ナイフでパウンドケーキを切りました。切ったケーキと銀色のフォークを白いお皿にのせて、

「はい、恵理ちゃん。どうぞ」

と、恵理の前に置きました。

「シェーシェー。ありがとうございます」

「リンおばさんのケーキ、とっても美味しいよ」

恵理とホワは、おばさんの焼いたパウンドケーキをいただきました。

「ほんと。おいしい」

リンおばさんは、ケーキを食べている二人を、うれしそうに見ています。

「おばさんも、中国人ですか？」

恵理は、中国の人とお話するのは、今日が初めてで、聞いてみたくなりました。

「そうよ。結婚して、日本にきたの。それからずっと、この街で暮らしているのよ」

「おじさんも中国人なんですか？」

「いいえ。日本人よ。旅行で、中国に来ていたおじさんと、北京の街で、偶然に出会って、結婚したの」

「運命の人だったんですね」

「そうですね。きつとそうだったのね。少しの間は、北京と日本で、はなればなれだったけれど、手紙を書いて送っていたのよ。おじさんからも、日本の綺麗な景色の葉書が届いて。それから数年間が過ぎて、おじさんはおじさんのことをずっと忘れなかった。おじさんもおなじ気持ちだったのね」

ある日、北京へもう一度訪れて、おばさんにプロポーズしてくれたのよ。もちろん、おばさんは、プロポーズを受けて、一緒に日本で暮らすことになったの」

「素敵なお話」

「おばさんとおじさんの結婚のお話。今、初めて聞いたわ。運命の出会いなんて、ほんとに素敵ね」

ホワが言いました。

「ホワちゃんも恵理ちゃんも、きつといつか素敵な人と出会って、素敵な恋をするわよ」

「素敵な恋」

恵理の心の中には、今日転校してしまった俊君のことが浮かんできました。

「恵理ちゃんは、もう出会ったのよね」

ホワがにこっと笑いました。

「そうかな？」

「きつとそうよ。俊君にお手紙でしたらどうかしら。おばさんが、おじさんに書いたみたいに」

「手紙……。うん。私、書いてみようかしら。でも、どんなふうに書こうかな？」

「リンおばさんに教えてもらったら？」

「恵理ちゃん、好きな男の子がいるの？」

リンおばさんが恵理に聞きました。

「はい。俊君っていう男の子です。でも、転校して、遠くの街へ行ってしまったんです」

「そうなの。さみしいわね。恵理ちゃんの今の気持ちを、素直に書いて、送ってごらんなさい」

「今の気持ちを素直に……。ちよつとはずかしいけれど、私、家に帰ったら、今夜書いてみます」

「恵理ちゃんの気持ち、俊君に伝わるといいわね」

ホワが恵理に言いました。

「うん」

「まあ、窓の向こうを見てごらんなさい。雪がたくさん降ってきたわよ」

おばさんが、窓のほうを指さして言いました。

窓ガラスの向こうには、まっ白い綿のような雪が、さつきよりもたくさん、ふわふわと降っています。

恵理とホワは、窓のそばに行くと、窓から、街の景色を見

つめました。

道路や車、家の屋根や、街路の木々に、まっ白な雪が積もっています。

「雪の街……。きれい」

「中国でも雪が降るの?」

「はい。降ります。中国の冬、とても寒い。でも、雪きれいな。この街の景色、中国の冬の街、思い出します」

ホワの瞳から、涙がひとつぶ、こぼれ落ちました。

恵理は、驚いてホワに聞きました。

「ホワちゃん。中国に帰りたいの?」

「うん。でも、中国の街がなつかしいです。中国にいるお友達に会いたいわ」

そういうとホワは、涙をふきました。

「お父さん、日本でお仕事ね。お母さんと私、お父さんと一緒に日本に来ました」

「そうだったの。日本の小学校に通っているの?」

「はい。日本語、少しだけ話せます。でも、お友達や先生の言葉、全部、わかりません。教科書読むの、お勉強、とても難しいです」

「だけどホワちゃん、日本語とても上手よ。私の言葉もちゃんとわかるし」

「シエー、シエー。ありがとう。もっと、みんなと上手にお話ししたいですね」

ホワは、窓の向こうで降っている白い雪を見つめました。そんなホワを見て、恵理は、ホワちゃんを助けてあげられ

ないかしら、と思いました。

少しの間考えてから、こう言いました。

「私、学校の帰りに、このお店へようかしら。一緒にお話ししましょう。私のお母さんとお父さん、学校の先生をしているの。私も、大人になったら、学校の先生になれたらな、って思っていて。ホワちゃんのお勉強で、わからないことがあったら、教えてあげる」

「チェンダマ? (真的吗?) ほんと? うれしいわ」

「それで、ホワちゃん、さっき教えてくれたみたいに私に中国語、教えてちょうだい」

「うん」

二人の話を聞いていたおばさんが、こう言いました。

「好、好 (ハオ、ハオ)、いいね。このお店で、二人、お話の勉強会するのね。おばさん、あったかいココアと、おいしいケーキをごちそうするね」

「ありがとう、おばさん」

「あつ。もうこんな時間。私、家に帰らなきゃ。ココアもケーキも、とってもおいしかったです。ありがとうございました。シエーシエー」

「どういたしました。中国の旧正月、春節に、かわいいお客様がお店にきてくれて、うれしかったわ。さかさ福を飾っておいてよかった。さかさ福というのは、福がむこうからやってくる、という意味なのよ」

おばさんは、そういうと、恵理にほほえみました。

恵理もうれしくなって、笑うと、

「ホワちゃん。お友達になつてくれて、ありがとう。シエーシエー。私、今日は、ほんととても悲しくてさみしかったけれど、このお店に連れてきてもらつて、元氣になれました。ほんとにありがとう」

「私も恵理ちゃんに出会えて、いろいろなお話ができて、うれしかったわ。サイチェン（再見）。さようなら。また、会いましょう」

「サイチェン。また、会いに来ます」

恵理は、お店の白い扉をあけて、ホワとリンおばさんに、手をふりました。

「サイチェン。また、いらっしやいね」

ホワと、リンおばさんは、白い扉のそばで、手をふつて、恵理を見送りました。

さつきまで降っていた雪は、いつのまにかやんでいました。恵理は、白い雪の道を歩きながら、こんな風に思いました。

（ちよつと遅くなつてしまつて。お母さん、心配しているかしら。今日あつたこと、お父さんとお母さんにお話ししよう。それで、今夜、俊君にお手紙を書きましよう）

恵理は、なんだかとても楽しい気持ちになつて、雪の降る街の中へ、歩いていきました。

恵理が家に帰ると、家では、お母さんがちよつと心配した様子で待っていました。

「ただいま、お母さん」

「お帰りなさい。雪が降つてきて、心配していたのよ」
 「遅くなつてしまつて、ごめんなさい。学校の帰りに、公園で、中国人の女の子に会つたの。ホワちゃんっていう名前の、とてもかわいい女の子よ。その子がね、中国人のおばさんの喫茶店に連れて行つてくれた」

「中国人の女の子って、会つてすぐにそんなお店に行くなんて。それで、そのお店で、何かしてきたの？」

「リンおばさんが、あつたかいココアと、パウンドケーキをごちそうしてくれて。みんなと一緒に、お話をしたの。中国語もすこし、おしえてもらったのよ」

「まあ、中国語を？」

「うん。ニーハオ、シエーシエー、サイチェン。こんにちは、ありがとう、さようならの意味よ」

「ココアや、ケーキをごちそうしてもらつて、中国語も教えてもらえたなんて、ちよつと心配したけれど、いい子みたいでよかつたわ。そういえば、お母さんの勤めている小学校にも、中国人の生徒がいるわよ。中国人の支援員さんが、子供たちに、お勉強やお話のお手伝いをしてくれているわ」

「ほんと？お母さんの学校にも、中国人の子がいるのね。ホワちゃんは、お父さんの仕事の都合で、お母さんも一緒に日本にきてね、日本の小学校に通っているんだって」

「そう。どこの小学校かしら？」

「どこかな。今度会つたときに聞いてみるわ。ホワちゃん、日本語があんまり上手に話せないって言ったの。それでね、

私、学校の帰りに、喫茶店によつて、ホワちゃんに日本語を教えてあげられたらなつて思つたの。学校の勉強の教科書を讀んだり、わからないところを教えてあげたりして」

「日本語を教えるつて、難しいかもしれないけれど、いいことを思いついたわね。お母さんも賛成よ。恵理も、中学生になつたから、小学生の子のお勉強をみてあげること、きつと、できるわね。日本語も、お話ししながら、教えてあげたらどうかしら」

「うん。よかつた。お母さんにそう言つてもらつたら、なんだか私にも、できそうな気がしてきたわ。それでね。私も、ホワちゃんから、中国語を教えてもらおうと思つて」

「相互学習ね」

「そう。お互いに、言葉を教えあうこと。日本に住んでいる外国人と、日本人と一緒に言葉を教えあつて勉強をすることがほんとにあるのよ。外国から日本へきて暮らしている外国人で、日本語を覚えたいという人たちが、たくさん住んでいるからね」

「へえ。そうなのね」

「恵理にとつても、とてもよい経験になるわね」

お母さんがうれしそうにそう言つたので、恵理は、なんだかとても素敵なことが、これから待つていような、そんなわくわくした気持ちになりました。

「今夜は、お父さんは残業で帰りが遅いから、お母さんからお話ししておくわ。でも、あんまり遅くなると、帰り道が心

配だから、5時半には、家に帰つてくるようにね」

「はい」

「さあ、夕食を食べましょう。お腹がすいたでしょう」

「うん。美味しいケーキを食べたけれど、やっぱり、お腹がすいたわ。今日の夕ご飯はなあに？」

「ハンバーグと、野菜のスープよ」

「わあ、大好きよ」

恵理がニコニコ顔で言いました。

「よかつた。一緒に食べましょう」

夕食を食べ終わつた恵理は、

「ごちそうさま」

と言つと、急いで2階にあがつて、自分の部屋にいきました。

今日、ホワちゃんとリンおばさんに言われたように、転校してしまつた、俊君にお手紙を書こうと思つたのです。お母さんには、俊君のことは、話せませんでした。どうしようかと思つたけれど、言い出せなかつたのです。

机にむかうと、恵理は、引き出しの中から、便せんと封筒をだしました。デパートの文房具売り場で、選んで買ったお気に入りのレターセット。薄い水色の便せんと封筒には、白い花模様が付いています。いつか誰かにお手紙を書きたいなと思ひながら、引き出しの中にしたまま、ずっと使わずにいたのです。

「うれしいわ。この便せんにお手紙が書けるのね」

恵理は、便せんに書く前に、まず、ノートをひらきました。

「どんな風に書こうかしら」

恵理は、鉛筆をもったまま、そっと目をつむって、しばらく考えました。

教室の中で、クラスの男の子たちと、楽しそうにお話している俊君。体育の時間に、サッカーボールを追いかけて走っている俊君。授業中に手をあげて、先生に質問している俊君。そして、ときどき恵理と目が合うと、てれたように笑う俊君。いろんな俊君が、恵理の頭の中に浮かんできました。

それから、中学生になって、初めて一緒のクラスになって、一番最初にお話しした時のことも。

「俊君とお話ししたのは、その時が初めて、最後だったわ……」

恵理は、特別に意識しすぎて、そのあとには、まったく話しかけることができなかつたのです。

「もっとたくさん、お話したかったわ」

そう思って、ふっと、リンおばさんの言葉を思い出しました。

「恵理ちゃんの今の気持ちを、素直に書いてみたらどうかしら」

「今の気持ちを素直に……。そっか」

恵理は、真っ白なノートに、鉛筆で、こんなふうにも、言葉を書き始めました。

『こんにちは。俊君。お元気ですか？ 俊君が、突然転校してしまつて、とても驚きました。』

今、私は、とてもさみしい気持ちです。

もっと俊君とお話がしたかったです。

新しい中学校で、新しいお友達ができて、私たちのクラスのこと、忘れないでください。私のことも、覚えていてほしいです。

また、いつか、この町へ来ることがあったら、中学校へも来てくれたらうれしいです。きつと、みんな喜ぶと思います。私も、もう一度、俊君に会えたら、とてもうれしいです。俊君とお話しできたらいいなと思います。

新しい学校でも、勉強や運動、頑張つてね。お元気で。さようなら』

恵理は、書いた手紙をもう一度読み返してから、最後にこんな風にかきました。

『俊君の新しい学校でのこと、もしよかったら教えてください。手紙のお返事をもらえたら、とてもうれしいです。恵理』

恵理は、便せんを二つに折つて、水色の封筒にいれました。カーテンをひらくと、窓のむこうで真っ白い雪が、まだ、たくさん降っています。恵理は、次々と舞い降ってくる白い雪を見つめて、心の中で、こんな風に思いました。

（俊君のいる街でも、雪が降っているのかしら……。手紙のお返事が、くるといいな）

それから、ふっと思いついて、封筒のすみっこに、さかさまに『福』と、書きました。

「フーダオ。幸せがきますように」

（中区）

「月のかたちが変わるなら、星のかたちも変わるのか？」
 なんととはなしにカン太がつぶやいた。江霧の顔を仰ぎ見て
 いる。この子は見込みがあると、こういうとき江霧は胸の内
 でひそかに思う。

「星のかたちは分からないな」
 なんだという顔をしてカン太はあからさまにがっかりし
 た。間を置かずに次の言葉が江霧の口から繰り出される。

「星のかたちは分からないが、色や位置は変わるよ」
 パツと、カン太の顔が明るくなった。好奇心がむくむくと
 頭をもたげているのが手に取るようになった。好奇心がむくむくと

やっぱりこいつは鍛えがいがあると、江霧が心のなかで微
 笑んだ。

ふたりの家の者が夕餉だよと呼びに来るまで、江霧とカン
 太は村いちばんの巨木の上で月と星のふしぎについて話しこ
 んだ。

◆
 三年の月日が経った。

カン太は十一になった。

持ち前の好奇心で村にある伝承は片端から伝え聞き、江霧
 の仕込みで弓や矢じりの腕を磨いていた。成長するにつけ、
 カン太は頑固なところが顕れて、弓を張りはじめたら終わる

まで座を立たない。食事の時間になっても声をかけても、か
 たくなに出来上がるまでやり続ける。てこでも動かないその
 集中力と心の芯のつよさに、まわりの者はほとほと手を焼い
 ていたが、江霧と村長だけは親もふしぎがるほどカン太をか
 わいがついていた。

弓を張る手つきも大人びて一丁前だ。

江霧は笑みを浮かべながら、お前はそれでいいんだよとカ
 ン太に言った。張り方が弱いのを直させるのは忘れなかった。

「そうだ、これをおまえにやろう」

江霧が懐から布にくるんだ小刀を取り出して見せた。目を
 見開いて食い入るように見つめるカン太の手をとり指を開か
 せると、手の中に、布にくるみ直した小刀を握らせた。

きらきらと目を輝かせて小刀を見つめるカン太の頬は紅
 潮し、目もそらさない。

布から出ている柄には、江霧が彫ったのか素朴な模様が見
 える。鳥と葉と花、そして、波のような水のような文様を浮
 き彫りにした簡素なものだったが、江霧らしいなあとカン太
 は思った。

◆
 絶対にたいせつにするとカン太が言うと江霧は笑って、そ
 んなにたいしたものじゃないよとあっさりとしたものだった。

江霧は今年で十六になる。すらりと伸びた細い手足、日焼けした褐色のなめらかな肌。しなやかでつよさを感じる筋肉のつきかたをしている。背も母親が心配するほどに高く、男たちと肩を並べるほどだ。

その日も江霧は、早朝から水を汲みに家のすぐ横を流れる小川のせせらぎへ水瓶をもつて外へ出た。

薄く雲がかかり、空はまだ夜に未練を残して薄暗く、シアンから水色に変わったばかりだった。

小川にしゃがんで水を汲む。水底が透けて見える清流に手を入れた。——透明度と比例するように、水は凍えるように冷たく肌を刺す。火にあたったような刺激がぴりりと指に走る。水に人影が映った。江霧が顔を上げると、見知らぬ服装をしたふたりの男が立っていて、その背後からあご髭を生やした男が前へ、ぬつと出てきた。

「この娘だ。まちがない」
あご髭を生やした男が告げると、後ろにいたふたりの男たちは互いに目くばせしてうなずき合い、江霧に向かって歩いてきた。

それきり、江霧の姿を見たものはない。

小川のほとりに、江霧が家から持って出た水瓶が見つかった。——それきり。

◆
江霧が消息を絶つてから、十日たった。

水瓶以外の何の痕跡も残さず、手がかりひとつ見つからずじまいだった。

江霧の母親は、十日のあいだ泣いてばかりいた。姉や兄たちはそこいらを探し歩き、なかには山向こうにある隣村の、その向こうの海を渡った先にある村にまで行つた者もいた。それでも、江霧は見つからなかった。

村長が村の衆に呼びかけて、江霧をさがしにやらししたが、森の奥の湖のほとりにも、川を下った先にある旅人の多い栄えた宿場にも、江霧の姿はなかった。

◆
村長がヌシさまを祀る社にまいって巫女さまに事の次第を告げると、巫女さまは老いてしわがれた声を絞り出すようにして、年輪の刻まれた手と手を組み合わせるようにすると、思いもかけぬ言葉を発した。

「都の者かもしれん」

◆
西のクニがひどい飢饉に襲われているという話は、村長も宿場で聞いて知っていた。ヨソと行き来している村人たちの

話も聞いた。

都では、「雲の上の人たち」が策を練っているというが、西のクニの荒れようはすさまじく、道端で人が倒れて死んでいき、死んだ者はそのまま道に打ち捨てて置かれていているという。

——闇だ。日の光は差ししていても、西のクニは闇に閉ざされていている。むごいことだ。村長は、心の内で速いクニの出来事を祈るような気持ちで同情していた。

「飢饉を鎮めるために贅を捧げるつもりなのかもしれんな……」

巫女さまは、しわがれた声で話し始めた。

—— 都には古くから伝わる伝説がある。

この地上のどこかに、星が流れて落ちた子がいるという。その子からだのどこかに星のしるしをもつといい、天から降ってきた子どもには癒しの力があり、不思議な効験があるといわれている。

都の大きな社に仕える神官のなかには反発している者もあるようだ。神々を祀る者たちのあいだでひそやかに交わされる情報がある。このところ続いている飢饉や干ばつ、疫病や天災を帝の政に対する天の怒りだという巷の人々の非難が日に日に大きくなっていく。「雲の上の人々」は、天の怒りを鎮めるためには、星のしるしをもつ子を天に捧げなければ

ならないとリークしはじめた。

「ばかなっ！」

思わず口走ってしまった愚弄する言葉に、村長は思わず口を手で覆った。そんな小手先の策で深刻な問題が根本的に解決するとは到底思えなかった。

「子どもだましだ……」

そんなくだらない理由で江霧はさらわれたのか？ 思うのは勝手だ。しかし、実行してはならないとなぜ判断できない？ 人を巻き込んではいならない。それが誰であっても。

「誰か、人をやらせましょう」

村長の顔は落ち着いていた。

「江霧を救わなくてはい」

心は決まっていた。

深い皺が刻まれた巫女の顔からは表情が読めない。幡を立てかけまわした暗い部屋に老婆はいた。後ろに架けられている古い鏡に捲いた勾玉の首飾りがきらりと光った。



カン太は、江霧がいなくなつてから、ヌシさまにのぼつて山の麓を眺めていることが多くなつた。衣の袷から懐に手を入れると小刀が触れる。取り出して柄の文様を見つめる。

「江霧の手か？」

村長だった。

「うん、俺おれにくれたんだ」

「江霧は、俺にいろいろしてくれただけど、自分で作ったものをくれたのはコレだけだ」

柄の文様は、まさに江霧の女らしいところが出ている。

「いい文様だ」

村長は、真面目な顔つきをしてカン太に向き直った。

「江霧は生きているかもしれない」

カン太はパツと顔を上げた。



村長がカン太に話をしているところへ、男が息を切らしてやってきた。村長の末子の透とおや矢だった。

「オヤジ！ 火事だ……！ 村が……火の手が早くて」

長兄が取り仕切るなか、村の裏手から出た火を食い止めようとしたが、勢いは止まらず、北からの風が強く吹いて、火の粉は村のあちこちに飛んだ。

若い衆わかしゅが手を尽くしたが、村の半分が燃えてしまった。なかには江霧とカン太の家もあった。さいわい、江霧の両親もカン太の父親も無事だった。江霧の兄たちはいまだに時折、妹をさがしに行っていて難なげを逃れた。

しかし、家は焼け、村を再興するまでは親類をたよるほか

なさそうだった。

カン太は心を決めた。

翌朝、村長と、火事で半身を焼いて自力では動けなくなつた巫女さまに見送られ、カン太は早朝に村を出た。

「江霧を取り戻す」

——そのために。



都へ行くまでに、いくつもの村や宿場を通らねばならない。この山城やましろの村からはるか西の果てにある都へは、「一歩一歩、この足で歩いていかねばならないのよ」——江霧の言葉が胸むねに響く。

異郷いさきうの人々は、肌の色や顔が少しづつちがう。それとかわずカン太は異郷の風物や人々に魅みりようりようされていた。「旅人たびびと」だから、かもしれない。



「なぜ、ついてくる？」

カン太がふり返って小道の影を見つめると先ほど駟なまられていた金の髪をした男がひよろひよろ出てきた。ヘラヘラと笑

つている。

「行くところがいいんだ」

にこにこしながら、痩せた脚を棒のように交互に動かしながらカン太に近づいてきた。こうなることを見越してついできたのか、気まぐれに子犬を助けたら情をかけたと勘がいがされたらしい。



いたずらっぽい目をして、マシユマロはカン太にたずねた。

「都は雲の上にあるっていうけど、どうやって行くの？」

——なんだ、この顔は？ ……待てよ、都で政をする奴らを「雲の上の人」という。しかし、「宮」と呼ばれる建物は地上にあるはずだ。御殿に上がることのできない身分の者を「地下の人」と呼ぶのはそこからきている。

また、人づてに聞いたところによると、宮は土塀で囲まれているともいう。

——それを、マシユマロが知らないのか？

「……試したな？」

静かな怒りの焔をともしたカン太の瞳に睨まれて、マシユマロは縮み上がった。

たしかにマシユマロはカン太がどこまで分かっているかをちよつとしたいたずら心で試してみたい欲求に駆られて、気

軽にじゃれてみただけだった。しかし、カン太にしてみれば引っかけられたことになる。

カン太に指摘されて、顔を真っ赤にししながら頭を掻くマシユマロは申し訳なさそうに下を向いてモジモジした。

チツ。こいつは俺の気持ちなんかちつともわかっていやしないのだな、とカン太は苛立つ。カン太は焦っていた。他人と駆け引きを弄するような余裕なんてないのだ、こっちには。

マシユマロにはそれが理解できない。とぼけた様子のマシユマロを見て、こういうものかもしれないとカン太は思う。

他人にとっては、俺の大事なんて、別にどうってことはないものなのだ。それはそうかもしれない。冷たいと俺が感じても、俺が江霧を恋しく思っても、他人には俺の気持ちなんか伝わらないのだな……。

人は、自分のことで精いっぱいなのだ。他人のことなんて二の次なのだ……。マシユマロがマシユマロ自身のことにはか目を向けていないように。マシユマロだけではない。周りの人間なんてそんなもんだらう。

「自分が、自分が……。醜いな……」

人のことはアレコレ言うクセに。——俺は江霧と出会えて幸せだった。クスリ、と笑みを浮かべるカン太を見て、取り繕おうとあたふたしているマシユマロを構う気にもなれずに、カン太は夜空を見上げた。

江霧。どこかにいる江霧も、この同じ空を見上げているだろうか。生きて、同じ空の下で、星を眺めているだろうか。……生きている。願いにも似た確信がカン太をここまで突き動かしてきた。そうして、今日も一日が終わってしまふ。

焚き火に踊る炎に目をやりながら、感慨に耽るカン太は妙に大人びて、村を出てから年をとったように見える。人はそれを成長と呼ぶかもしれない。

「月はどつちに出ている？」
マシユマロは、うとうとと寝入っていて、カン太のつぶやきは空に散った。

◆
都にたどり着いたのは夜も更けた時間だった。高台から見下ろすと、闇の中に、ひとときわ灯火に照らされて建物の輪郭が浮き上がる場所があった。あれが、宮なのだ。

ぎゅつと、こぶしを握りしめた。夜明け前に江霧を見つけ出す。カン太はそう決めていた。

◆
宮は、柴垣で囲まれていた。土塀で囲まれているという噂はデマだったわけだ。アテにならないな、人の口というものは

は。カン太は思い知らされる。巷説の頼りなさに——ここにきて痛いほど身に染みていた。人のいうことに踊らされたりせずに、自分の目や耳で見たり聞いたりしなければ。踊らされる者にもならない。踊らせる者にもならない。——そういうことだろう、たぶん。

誰もこんなことを教えてくれはしなかった。江霧を取り戻すために村の外に出るまでは。

◆
——うるさい……。

寒々とした広大な板張りの室内に小さな声が響いた。老いてしわがれた男の声だった。

「お上、万陀羅のクニの飢饉は、もう限界にまで達しておりまして……」

「御社に詣でませ、お上」

「お上のご明察に畏み畏み参らせたまいました……」

臣たちの声が頭の中で残響のように鳴り止まず、耳鳴りの如く老人を襲っていた。

「うるさい……！」

二度、男は呟いた。

平生であれば、小さく頷くばかりで声を発することなどあり

はしない。

人払いをした金冠の間(帝の昼の御所)で、老いた男は闇に包まれた大広間に埋もれて、目に見えない何者かに憑りつかれているかのように、ひとり、孤独なたたかいを続けていた。

◆
老いた男の名は、龍陀。長い間、この西の果てにある都の中心を占める「宮(宮城)」にあつて、「帝」と崇められていた。

善政を布くと讃えられた若年のころもあつたが、やがて倦み、飽きて、政を臣下に任せて放置した。美姫に溺れ、昼夜を問わず床をともにして、周囲の目をそばだてた。その美姫が臣下に誅されると、政にのめりこみ、いとまなく新しい決まりごとを發しては民を苦しめた。拳句、天災が次々と起こりはじめ、民の心はとうに離れて関心を失つていたところに、不満が募つて、帝への非難が集中した。

◆
「やりたい放題になさつた報いというもの」

後の冷笑が浮かぶ。
先の大臣の長女で、龍陀が美姫に溺れているあいだも何も

言わず、龍陀がどうにもならずには転覆しかかった途端、このことを突き付けてきた。――後は、とうに龍陀を見放していたのだ。

◆
外は灯明で煌々と明るく照らされている。しかし、龍陀の心は広間と同じく暗い闇に沈んでいった。黒い炎が龍陀の目に燈つた。

◆
「宮」の大社の中、身の丈ほどもある大鏡の前に大きな剣が床に突き立てられ、鮮やかな緋色の絹にくるまれている。そこに、ひどく痩せた者が白い衣を着せられて括りつけられていた。――娘だ。髪は黒く長く、鳥のようにつやつやとうねつて、床に広がっていた。娘は、ふいに顔を上げて、ことを發した。

「……カン太」

剣に取り付けられていたのは、江霧だった。

山城の村の者たちが見ても、それと分らないほどに容貌はすっかりと変わってしまった。色はひどく青白く、骨が突き出て筋肉はすっかり落ちてしまっていた。両の手を後ろ手に縛られ、拘束されている。

食事など日に何度かは束縛から解かれることはあつたが、身の回りの世話をする者も一切口をきこうとはしない。たつ

たひとり、薄暗い大社に締め切られて入れられていた。

夜になると静けさはまさる。

けれど、高窓から差し込む月の光だけが、江霧を慰めていた。——カン太も、この月を眺めているだろうか。あの、大きなヌシさまの幹の上で。

江霧がそう考えていると、巨大な剣が、ほんやりと光を放ち始め、その光はだんだんと強くなっていった。



「……あそこだ！」

宮のいちばん左側、さつきまで暗かったところが強く光っている。灯明の光ではない。

カン太が指さしたところは、社の奥のあたりだった。大社かもしれないとマシユマロは言った。

マシユマロは、楽士として宮に仕えていたことがあったためか宮のことにくわしく、宮の内部のおおよその配置をカン太に話した。江霧を置くなら神々に祀る場所に近いはずだ、というのはカン太の直観にすぎなかった。

柴垣をくぐり抜けて、宮の内へ入りこむのは拍子抜けするほど容易だった。宮の警固は主に、宮の奥と右側に集中しているようだった。帝や後の居住地と重要な役所が集まって

いるからだろう。



大社のなかで意識を失っては取り戻すことを繰り返していた江霧だが、ざわついた空気に意識を取り戻していた。

大社の観音開きの扉がギシリと音を立てて開いた。外の薄明かりが差し込む。江霧が俯いていた顔を上げると、そこには男が立っていた。



江霧は、暗闇に長く閉じ込められたために視力も衰えていた。

「明日、おまえを天に奉る」

シルエットでよく見えなかったが、声でそれと分かる老いた男が、苦々しげに言った。龍陀だ。江霧は川から髭の男にさらわれて、ここにつながれてから、江霧を世話する者以外の顔を見たことがなかった。もっとも世話係の者も布で顔を覆い隠し、巫女らしい風情をしているらしいというぐらいにしか判別できなかったのだけれど。もちろん、江霧は、この老人が帝だということも知らない。

テンニタテマツル——そうか、自分は死ぬのか、と江霧は

ひとごとのようにぼんやりとした頭で思った。この老爺ろうやが何者かにも興味はない。

何の反応も見せない江霧に龍陀は苛いら立った。腰に吊つるした麗うるわしい飾り太刀に手を掛けた。父から帝位ていゐを譲ゆずられたときにいつしよに受け取ったものだった。見た目は綺麗きれいだが、切れ味は刀として正統せいとうな血を受け継いだ名刀だ。しかし、この太刀で実際に人を切ったことはない。

しかし、そんなことは関係かんけいなかった。龍陀は鞘さやから太刀を抜いた。その瞬間しゆんかん、背後はいごに人の気配けはいがして、後頭部こうちうぶをしたたかに打ちのめされた。

「カン太……？」

江霧の眩くらきが、たしかに江霧、その人だという証あかしとなつて、カン太の耳に届いた。

「やつと逢あえた……」

カン太は、思わず微笑ほほえんだ。

◆
倒たおれていた龍陀が体勢たいせいを立て直すために起き上がろうと、もがく。再び起き上がった龍陀は、今度はカン太を切ろうと、怒りいらで正気しょうきを失ったまなざしと切きつ先さきを向けてきた。

ふいに、カン太は懐なつかしさに温度を感じた。手を探り入れてみる

と、布が手に当たる。江霧からもらった小刀だ。

「……ああ、このために、これはここにあったのか」

なんとはなしにそう思って、カン太は小刀を取り出した。

小刀はほんのりとあたたかく、光を放っていた。大きな剣と呼応こおするかのようように小刀が光っている。

鞘さやをもたない小刀が抜き身みのまま、身を受け容ゆるれるところをさがしていた。まるで、そのように小刀は龍陀ろうたのからだに納おさまった。

龍陀のからだは、老爺ろうやの重さ分の音を立てて、すんと倒れた。あまりにも軽かった。

◆
後ろでなかば呆然ぼうぜんとなりゆきを見ていたマシユマロにせかされて、カン太は江霧を連れ出して宮から急いで逃げなくてはならないらしい。

江霧が村からいなくなつてから二年の歳月さいげつが経たっていた。カン太の背はすこやかに伸びて、江霧を追い越こしていた。長い間羽交うまい絞しぼめにされていた江霧の足は萎しぼえて、マシユマロよりも細くなり、立ち上がるにもよろめくほどになつてた。

力なく床ゆかにすわりこんでしまった江霧にカン太が手を伸ば

すと、江霧は一瞬ためらい、自分よりひとまわり大きくなつたカン太の手を取って、ゆつくりと立ち上がった。

◆
カン太が江霧を背負うと、三人は夜の闇に消えていった。

夜の帳は、ゆつくりと色を変えてオーロラのように天上に引き上げられていく。薄紅色や黄色、水色とつぎつぎと混じり合い、やがて陽が射すだろう。

そう、夜が明ける。

(浜北区)

那須田 稔

今年度の児童文学応募状況は、例年より少なかったがその水準は高く、楽しませてくれました。

児童文学は、いうまでもなく心身ともに成長しつづける子どもの視点で、「生きること、成長すること」のすばらしさを描き出していくものです。

ところで、今年は、戦争が終わって七十年の記念の年です。

戦争は、もともと大切な人間や自然を破壊してしまうものであり、絶対に二度と起こしてはなりません。

私は、十四歳のとき、一九四五年八月、満州（現中国東北部）のハルビン市で、ソビエト軍や中国共産党軍、国民党軍などの戦闘にまきこまれた戦争体験があります。宮沢賢治の「風の又三郎」が大好きな少年だった私は、突然、生死の境に立たされました。このときの少年体験が、私の五十年にわたる児童文学創作活動の原点になっています。平和であることとの大切さを今改めて思い起こしているところです。

さて、今年度の収穫をご紹介しておきましょう。

市民文芸賞「紅子さんのまわりはみんなハッピー」

物語の主人公は九十八歳になる紅子さん。紅子さんがまだ若いころ、今は亡き夫にアメリカで買ってもらった二匹の犬

のプードルのぬいぐるみが突然、人間の言葉を話しだし、一人ぼっちの紅子さんの心の友になります。

これは、「幸せとは何か」を描いた楽しい物語です。発想の自由さが素晴らしい。

市民文芸賞「山のおまつり」

世界自然遺産になった屋久島の小さな村を舞台にくりひろげる少女たちの楽しい日常がえがかれています。

屋久島の豊かな自然の中でのびのびと育つ友情。新鮮な感動をよびます。

市民文芸賞「幸せのくるところ」

大好きな少年が引越してしまつて淋しい思いを抱いている少女の前にあらわれた中国の少女との出会いを描いたインターナショナルな感動作品。異国の言葉にふれあうことの楽しさを描く意欲作。

入選「幻の楼閣」

これは、ある日、突然、行方不明になった頬に赤い星の痣のある少女を中心に展開する幻想的な物語。時空を超えて描きだされた不思議なメルヘン。文脈が、難解なのが残念でした。

評論

「市民文芸賞」

挫折に学ぶ

磯貝心進

「挫折」について

「挫折」の「挫」という漢字には、くだけ折れるという字義のほかに、痛めつける、相手の勢力を挫くという意味も含まれている。この言葉から推測できるのは、「自らの挫折」と「他者からの挫折」である。そこから窺えるのは、挫折は相対的な状態であるということだ。一般的に挫折とは、自らの意思で行動したことが折れることを表している。

人が生きていく上で避けられないものの一つが、「挫折」であろう。漢字の「挫折」の字義が示唆しているのは、人間は自らの意思では、挫折という事態は避けられない存在だということだ。

詩人の佐々木幹郎の詩に「壊れる『もの』すべて」がある。

「わたしは一人の人間が、たった一人で壊れた現実のかけらを拾い集める、そういう場所を好む」という一節がある。挫

折は壊れるものではなく、その挫折を丁寧な拾い上げることによって本来の意味があるといっているようだ。

不可解な挫折

先日、医師に関わる不可解な事件が起こった。医師が人工透析を受けていた患者のチューブを引き抜き、殺人未遂で逮捕されたのである。「死刑になりたかった」という理由が新聞に載っていた。医師は人の命を預かる仕事であると、私はごく自然に思っていた。その思いがあったからか、この事件は不可解を通り越して不気味でさえあった。事件を起こした医師がもらした「死にたい」という言葉と彼のとった行動には、常識では測れないものがあった。

「事件当日、医師はコンビニに立ち寄り、殺人を思い立った」と新聞が報道した。彼は警察に対して、「半年ほど仕事

が手につかなかった」と供述している。患者たちの彼に対する反応は、「優しく、熱心な先生」であった。

過重な労働、家族の不和、会社での人間関係がストレスとなって起こった事件は、いくらでもある。だが彼が社会性を壊してまでも、「死刑になりたい」と「チューブを抜いた」精神の奥には、なんらかの「挫折感」があったと思える。

医師は本来、理性と知性を持っている人と私たちは考える。それは命を預かる職業であるからだ。自分に命を預けた患者を「死刑になる」ための道具としたこと、「優しい先生」と思われていたことの乖離。そこに流れているものは、「空虚な軽さ」だったのではないか。言い換えれば「リアリテイの欠如」が、彼の不可解な行動を促したのではないかと考える。

08年に起きた「秋葉原通り魔事件」の犯人と、チューブを引き抜いた医師は非常に似ていると私は思う。「人を殺して死刑になりたかった」という供述や、犯行内容の意外性に共通点を感じた。

『二千年紀の社会と思想』という対談集で、見田宗介と大澤真幸が「秋葉原事件」への言及をしている。

見田宗介は事件を起こした加藤智大青年の心情を分析した。

「加藤青年は、リアリテイを求めていた。人を刃物で刺し、肉体の抵抗感や血しぶきが跳ね返るというリアリテイに執着していた。現代の若者は少なからず生活にリアリテイを求め

ている。その顕著な例として、最近ブランド、高級車、海外ツアーに関心がない若者が増えている一方で、ボランティアの仕事が組み込まれたツアーには多くの若者が集まってくるという現象が起きている。加藤青年はリアリテイを求めていたが、リアリテイの破綻をしまったのだ」

大澤真幸は、その言葉を受けてこう分析している。

「加藤青年は、誰かの反応を求めていた。家に帰って「ただいま」といっても、誰も返事がない。人を刺せば誰かが振り向いてくれるだろう。そんな願望を感じていた。殺すことだけが唯一のリアリテイの充実になってしまったのだ。そこにはリアリテイの極端な貧困さと、究極のリアリテイを求める二重性がある」

加藤と医師は、社会的立場や生活環境という点においては、全く正反対であった。

加藤被告は幼いころから母親にスパルタ教育をされてきた。小学一年生の頃から「○○大学○○学部に入りなさい」といわれて育ち、強制的に勉強をさせられ、県内一の進学校へ入学した。加藤自身は、「大工になりたい」「F1レーサーになりたい」といった夢を持っていたが、母親は全て反対した。高校に入った後は母親に反発し、県外の短大へ進学した。

その後職場を転々としたが友達は一人も作らず、インターネッツト掲示板の人間関係を大切にしていた。そこにはリアリテイのある生活とは程遠い、「空虚な軽さ」が広がっていたと思う。職場では、正社員へ仕事に関わる相談をしたところ「派

遣のくせに。黙っている」と返された経験もあった。

一方この医師は、患者たちからも信頼されており、一見医療者という立場で正常な生活をしてきたかのように見える。だが、実際は加藤と同じように不可解な行動に走ったのである。その行動から推測できるものは、見田宗介が加藤を分析した「リアリティの欠如」ではないか。

リアリティとは、「考えること」と「体で感じるもの」をトータルに見ることで生まれるものだ。その二つの要素がバランスを欠くと問題が起る。この医師のとった行為に感じるものは、幼稚さである。子供でも分かる善悪の判断がなされていないのだ。その原因を探ると今の時代の「空虚な軽さ」を感じる。それは価値観が一つの方向に向かっていくという思いである。多様な世界を許さないという気分が私たちを支配しているのだ。

事件を起こした医師を想像すると、医師になることへの意思や、必然性が希薄であったことが分かる。彼はどの時点で医師になるかと考えたか。私は彼が自分の意思で方向を決めたように思えない。私も学校でカリキュラムに沿って勉強をしている。だが時々、学ぶことの意味に捉われることがある。そんな時に、小さな旅に出る。目的地を決めないでバスや電車に乗るのだ。車窓から流れる風景、お年寄りや小さな子供たちの姿が見える。そうしていると山の方に行くか、海辺の町に向かいたいのが見えてくる。そんな時に「自分の場所」という感覚が生まれる。それが「安心感」となって

「今を生きている」と感じることができた。

事件を起こした医師に欠けていたものは、「自分の場所」と「安心感」ではなかったか。この「リアリティの欠如」は、家族や教育の場にも流れているのではないかと考える。

人間性は育むが、形式的な「勉強」になってしまっている傾向が、今の日本の教育にはある。良い大学という目的に向かって学ぶことが、教育となっているのではないか。目的の場所は結果に過ぎない。その目的に向かうプロセスが重要であり、その時の流れの中で屈折し発見し思考することでリアリティを獲得することができるのだ。この医師の背景には、幼いころに与えられた家族の影響があったと思える。

「勉強ができるから医者にならなさい」「親が医者だから後を継ぎなさい」。子供の時に周囲から「勉強しなさい」という圧力を与えられ、自由な生活を送れなかった。そこで本来育つはずの道徳観、感情、社会性が身に付かず、「知識」として身に付けざるを得なかったと想像する。

加藤と医師の二人は、「社会的な地位」という視点で比べると正反対であるが、共通の環境、時代の「空虚な軽さ」の中に置かれていたと考察できる。

加藤と医師は、リアリティを求める手段として、殺人を試みた。「他人を殺めれば誰かが振り向いてくれるだろう」という考えは、あまりにも短絡的である。彼らが自殺を選ばず、敢えて第三者を介して死刑を選んだことには、それなりの理由があるといえる。

二人の行動の幼さは、共通して幼少期の環境に由来すると思う。前述の通り、彼らは幼少期にリアリティの欠けた教育を受けてきた。その環境は非常に閉鎖的であったのだろう。ことに加藤の場合、異性との交遊はおろか、友達と遊ぶことすらも許されなかった。彼らの持つ幼稚さは、閉鎖的な環境の中で、他者と自分との関係を見失っていったからではないだろうか。人と人々を結ぶ関係性の喪失が、この二つの事件であったのではないか。

「誰でもいいから人を殺して死刑になりたい」という供述からは、「人生をやり直したい」という強い思いと屈折した挫折を感じる。彼らのことを「異常」「不可解な行為」と表現するのは易しい。だが事件の根にあるものを辿ることは必要だと思う。それは「空虚な軽さ」が「見えない挫折」となつて、私たちを覆っていると感じるからだ。

見えない挫折

2013年の流行語大賞に、「ブラック企業」なる言葉がノミネートされた。ブラック企業とは労働者を酷使し、使い捨てにする企業を指す。まるで人が、いつでも取り替え可能な『モノ』と化してしまったかのようだ。日本で非正規労働者が増加しているのは、こうした風潮があるからだ。

08年に、就職から約2か月で自殺した新入社員がいた。月に100時間を超える残業や、一週間にわたる深夜勤務をさせられていた。その社員はうつ病になり、生きる気力を失

ってしまった。

過労死は、わかりやすい挫折である。劣悪な労働環境が精神と肉体を拘束し、生きる希望を奪う。それは明白な挫折といえる。しかし「見えない挫折」とは、自分に明確な挫折の自覚がなく、周りの誰も気づかない挫折を指す。

『経済の成長幻想』という言葉をよく聞く。経済の拡大が良いことばかりではないと主張する人がいる。加藤典洋は著書『人類が永遠に続くのではないとしたら』で、ボードリヤールの『消費社会の神話と構造』とローマ・クラブの『成長の限界』を比較しながら、近代の産業構造の問題点を指摘している。「これまでは個人にせよ社会にせよ、過剰や余分なものを消費することが生きる喜びであった。自動車が増加して交通事故が増えたとしても、それらはすべて医療や修理の消費として記録され、経済成長と富の指数となった」と。近代の経済による偏った消費社会への批判である。しかし『成長の限界』が四十年前に出版され、地球の有限性問題が取り上げられたにもかかわらず、経済の構造は変化していない。加藤典洋は、「多くの希望、人々、現代文化が、果てしない物質的成長を前提に築かれているからだ」と分析している。限られた資源しかないこの地球で、会社の売り上げがこの先ずっと何百年間も伸びていく保障はどこにもない。加藤典洋の主張から推測されることは、永遠の経済の拡大は、幻想に過ぎないということであろう。経済発展が雇用を生み出し、一人一人が豊かになるという考えや、政府が公共事業へ

の投資を進めることも、一過性の幸せである。

神谷秀樹の『強欲資本主義ウォール街の自爆』に、経済幻想を象徴的に表現する話が載っていた。デイビッド・ギャレットはアメリカの超高級ホテルの創業者である。彼はホテルの「おもてなし」の質の低下について、次のように語っている。「高級なホテルを創るには、ウォール街の連中にはまず無理だろう。彼らの辞書にある言葉はコストカットだけだからだ」。利益を上げることが、必ず幸せになる訳ではないのだ。

しかし社会が経済の発展を目標に掲げるならば、私たちもそれに従わざるを得ないだろう。

今、多くの人が経済の幻想を見せられ、無意識のうちに経済に人生を捧げてしまっている。大多数の視点が「お金」に向けられ、まさに「金に目がくらむ」状態が生産され続けている。「経済の成長幻想」が基盤になっている現代の社会では、無意識のうちに人間の思考が湾曲させられているのだと思う。

思考の湾曲は、一種の挫折ではないだろうか。「経済が一番」という思考に染まった人々は自ら人生を制限し、生きる意味を見失っている。例えば「いい大学を出ていい会社に入る」という目標も、見方を変えれば挫折の中の目標である。自分がやりたい仕事に就くのではなく、お金を稼げる仕事に就くという発想が背景にあるからだ。社会の一般論によって知らないうちに生き方を制限されている。

思考の湾曲は目標だけではない。実生活においても湾曲に

よって生まれた挫折が存在する。日々指示された書類を作る。毎日同じ部品を作る。マニュアル通りに「ありがとうございまして」を繰り返す。管理職でないと毎日が単純作業の繰り返しである。その背景には同じ作業をさせることで生産の合理化を目指す企業の方針がある。自分が「このやり方は違う」と思っても、自分で変えることはできない。自発的な労働ではなく、強要される労働のあり方が見える。人が見えないうちに「モノ」として使用されている。

しかし自分が「モノ」とされても、ほとんどの人が反発しない。強要される労働に対してストライキやデモが起きてもいいのではないか。ではなぜ起きないのかと考えると、「無意識の諦め」が見える。「仕事はこんなものか」「そこそこの給料があればいいや」「今のままでもやりたいことができ」。『モノ』としての立場に甘んじて、自らの積極的な気持ちをいつのまにか刈り取られた人が大勢いる。彼らは見えないうちに創造性を奪われ、挫折を強いられている。

そもそも無意識のうちに人生を制限されること自体が「見えない挫折」に相当すると思う。

挫折を受け入れて

木田元は著書『反哲学入門』で、福沢諭吉の「実学」についてこう記している。「丸山真男の『福沢諭吉の哲学他六篇』の通り、福沢のすすめる『実学』とは、いわゆる啓蒙的な合理主義や功利主義や英仏の実証主義に尽きるものではない。

(中略) 日本では自然が倫理価値と離れ難く結びついているが故、自然現象の中に絶えず倫理的な価値判断が持ち込まれてしまう。ところがヨーロッパにおいて精神と自然が一は内なる主観として、一は外的なる客観として対立していたのは、明らかにルネサンス以降の最も多大な意識の革命であった」

諭吉は当時非常に画期的な考えを持っていたと、木田元や丸山真男は分析している。自らが日本の環境で生活している中で、その環境を欧米と比較することは簡単ではないはずだ。諭吉の思考が洗練されたものであったからこそ、比較できたのだと思う。

ではなぜ諭吉の思考はここまで洗練されたものであったのか。背景には諭吉が人生の中で数えきれない程繰り返し返した小さな「屈折」が見える。小さな「屈折」とは、自分の思い通りにならないこと、自分が違うと思ったり嫌悪を感じたりすることである。

諭吉は幼いころから小さな「屈折」を繰り返し返してきた。『福翁自伝』の特徴は、小さな「屈折」が数多く書かれていることだ。兄にお札を踏んだことを怒られたり、お稲荷様の祠には何かあるのかと思って中身を取り出したりした。「これは違うのではないか。これはおかしいのではないか」という思いが自伝にはある。諭吉が初めてアメリカへ行った時であった。諭吉は手放しにアメリカを「素晴らしい」とは評価しなかった。初めは日本にはない色々なものに驚いていた。その

違いに感心したり、肝を潰したりしながら諭吉なりにアメリカを吸収しようとした。明治政府のように欧米を何でも真似て、何でも取り入れようとはしなかった。「屈折」なしに吸収したら、目新しいものは全て「素晴らしい」ものに見えてしまうからである。

慶応義塾を設立した後も諭吉はやってくる「屈折」を自分のものにしていった。上野で戦争が起こり、江戸中の商店が全て閉まっていった時にも諭吉は授業を続けた。「こちらに関係がなければ怖いこともない」。この言葉に私は、社会がどのように動いていても自分には為すべきことがあるという矜持を福沢に感じた。

諭吉が「屈折」を繰り返し返してきた背景には、「違うもの」や「嫌悪」に対する感受性の豊かさがある。諭吉は身の回りに起きる出来事をいつも客観的な視野で眺めていた。それは子供の頃から身近なものへの「屈折」を繰り返し、真理を追い求めることをし続けることから生まれたものであると思う。「屈折」の繰り返しは、すなわち思考の積み重ねである。思考の積み重ねは、自分で考える力につながる。諭吉が洗練された思考を持っていたのは、小さな「屈折」の積み重ねが諭吉の敏感な感受性を磨いたからだと思う。敏感な感受性は人の洞察力や観察力を高め、より画期的な考えや独創的な思いつきへつながるのだ。

このような豊かな思考力は福沢諭吉の「実学」に大きく関わっている。諭吉の敏感な感受性が、「実学」を生み出した

からだ。日本人がヨーロッパの主體的理性を考へるには、疑問を敏感に感じ、自分なりの抵抗を持ちながら考えなくてはならない。そのためには小さな「屈折」の積み重ねが必要になる。結果として思考力が、情報から読み解く能力へとつながり、「実学」が生まれたのだと思う。

丸山真男の『「文明論之概略」を読む』には、論吉の思考を端的に表す場面がある。「故に、昔年の異端妄説は今世の通論なり、昨今の奇説は今日の常談なり。然らば則ち、今日の異端妄説も亦、必ず後年の通論常談なる可し。学者宜しく世論の喧しきを憚らず、異端妄説の誇りを恐るることなく、勇を振ひて我が思ふ所の説を吐く可し」

世間の常識や世論に流されるのではなく、自分の思考で判断するべきだという論吉の論理である。まさに論吉の思考の原点であろう。

「屈折」の積み重ねは、一種の小さな挫折である。外から入ってきたものを自分が屈折して受け取るのは、自らの意思が折られることと似ている。挫折は自分では避けることのできないものであり、一般的には意識的に避けるべきと思われる。だが論吉は自らその挫折を積極的に受け止め、吸収し、自分なりの生きる糧としていった。論吉の挫折は一見全く無かったかのようにみえるが、実は数知れない小さな挫折をたくさん繰り返していたことが分かる。

結論

挫折はどこからやってくるのか分からないものだ。加藤と医師の例に漏れず、「経済の成長幻想」の中で無意識に起こる挫折は少なくないだろう。しかし本当の挫折には、挫折をすることの意味があると思う。

私は論吉の挫折に対する姿勢から、意味のある挫折を知った。避けられない挫折を積極的に受け入れ、良いものへと転換しようとする意思には、強い人間の生き方が見える。挫折の意味とは、挫折を受容して自らのエネルギーに取り込むことではないだろうか。一般的に、挫折には消極的で「敗北」のイメージがある。しかし本当の挫折は全く反対の意味を持つ。思考することが自分の生きる糧となり、「有益」なものにさえなる。すなわち「挫折に学ぶ」とは、挫折の本質的な意味を知り、自ら思考をすることであるのだ。

《参考文献》

- 佐々木幹郎著『溶ける破片』（国文社）
- 見田宗助、大沢真幸著『二千年紀の社会と思想』（太田出版）
- 加藤典洋著『人類が永遠に続くのではないとしたら』（新潮社）
- 神谷秀樹著『強欲資本主義ウォール街の自爆』（文春新書）
- 木田元著『反哲学入門』（新潮文庫）
- 福澤諭吉著 齋藤孝編訳『現代語訳 福翁自伝（ちくま新書）』
- 丸山真男著『「文明論之概略」を読む 上』（岩波新書）

（中区）

「入選」

キリシタン大名 高山右近

中谷節三

序

今（平成二十七年）より七十年前の昭和二十年二月、「東洋の真珠」と言われていたフィリピンの首都マニラの奪還を目ざして上陸して来た米軍と、守備していた日本軍との間で、激しい戦いが行われ、マニラ市街は一面の焼野原となり、市民十万人が犠牲になったという。（平成二十七年二月二十七日付朝日新聞）

フィリピンはアメリカ合衆国の植民地であったが、それ以前はスペインが領有していた。マニラは堅固な城塞都市として整備されていた。その教会の墓地に、日本・戦国時代のキリシタン大名、高山右近の遺体が埋葬されていたが、前述の日本の戦斗のため行方不明となってしまった。日本の戦国大名が何故マニラに眠っていたのであろう。

本篇では、日付が欧米は太陽暦であるが、日本は陰暦を使っていたので異なる。日本が太陽暦になったのは明治五年である。

フランシスコ・ザビエル

今から約四百六十年前の天文十八年七月二十二日（陽暦で一五四九年八月十五日）、一隻のジャンク船が九州南端の鹿児島湾に入ってきた。ジャンク船というのは船底の浅い舟で、水路の多い中国南部で主に物質輸送などに使われていた。中国人の船長アバンの二本マストの船から降り立ったのは、初めて日本で布教するためのキリシタン神父たちの一行八名の人たちであった。上陸記念碑が鹿児島市祇園の州に建っている。

バードレ（神父）―フランシスコ・ザビエルとゴメス・デ・トルレス。イルマン（修道士）―ジョアン・フェルナンデス。三名の宣教師と案内役のアンジロウ（日本人、洗礼名パウロ・サンタフェ）と世話役の二名の日本人、従僕の中国人二名、計八名であった。

この日は、日本に初めてキリスト教（異国（西洋）の宗教）が入った記念すべき日となった。

主資格のザビエルはスペイン人で、バリのソルボンヌ大学に学び、イエズス会（耶穌会）に参加した。イエズス会は新教（プロテスタント）に対抗して旧教（カトリック）の発展を図るために結成された男子修道会であった。

天文九年（一五四〇）九月、パウロ三世法皇に公認され、清貧、禁欲、服従の誓いを立て厳格な訓練を施した。ザビエルは背が高く、顔は赤味がかかって目や髪は黒かった。いつも物思いにふけり、決して笑うことはなかった。禁厳格居士

であった。「日本人は親しみ易く、善良で悪意はありません。驚くほど名譽心が強く、大部分の人は貧しさ（食生活は魚を時々食べるが、青野菜と少量の米と麦であるが）を不名譽とは思っていません。東洋諸国民の中で、日本人は最もすぐれた人々です。礼節を尚び、長上の武士には良く服従し、知識欲が大である。」（書簡より）



聖フランシスコ・ザビエル像
（神戸市立博物館所蔵）

ろうか。（ポルトガルが日本を狙っていた。）

ザビエル来日の六年前（天文十二）種ヶ島にポルトガル船が漂着し、鉄砲が伝っていた。薩摩藩主・島津貴久はザビエルたちのキリスト教布教を許可していたが、仏教徒の反撃が強く一年も経たずに布教は禁止された。

世は戦国時代（応仁の乱—一四六七年—から、信長が足利義昭將軍を奉じて上洛した一五六八年までの約百年間の群雄割拠の動乱期）も末期に近づいていた。ザビエルは鹿児島を

印度、ジャワ、ボルネオ、フィリピン、印度支那と宣教師たちが進むにつれ、国々は植民地化されて行くのを、日本の支配者たちが果して気がつくであ

去り、平次、山口を経て京へ入ったが、戦乱で廢墟の街では布教の見込みも立たず、山口に引き返した。豊後（大分）の大友義鎮領主下が日本におけるキリシタン布教の中心となった。ザビエルの在日は二年余りで日本を去った。彼は日本語が話せなかった。

フロイス

ザビエルの後を継いだのは、ルイス・フロイスでポルトガルのリスボン生れで、イエズス会に入会して印度ゴアの聖パウロ学院で研修を積んだ。来日したのは永祿六年（一五六三）二十一才の時で、三十四年間滞日し（これは驚くべきことで日本人と変りない）、晩年は『日本史』の著述に没頭し、慶長二年（一五九八）長崎で没した。六十五才だった。本篇の主要記事はこの『日本史』を参考にした。

平凡社発行 昭和三十八年より五十三年まで 全五卷
（東洋文庫版） 柳谷武夫訳 原本はドイツ語版より

バーデレ（神父）ヴィレラは天文二十二年（一五五四）来日し、大和を中心に布教活動をしていた。永祿六年（一五六三）五月、奈良の結城山城守忠匠より「洗礼を授けて貰いたい」という書信を受取った。彼は馬と人をよこしたので、京を立つて奈良へ行った。結城氏と公郷の清原枝賢氏の両名はヴィレラから談義を聴聞し、二人共洗礼を受けた。偶々それを聞いた沢（奈良の南方）の城主、高山飛騨守回書

は奈良でデウス（天地をつくり給うた御親）のことを聴聞した。彼はそれに非常な満悦を得て、早速そこで洗礼を受けた。

「洗礼」のオラシヨ（祈祷）

われ「父と子」と聖靈の御名により汝に洗礼を授く。

飛騨守は「ダリオ」という靈名を受けた。

高山家は代々摂津の国（大阪府）三島郡清溪村高山を拠点に活躍していた。飛騨守は日本人としては長身、愛情に富み、快活、勇猛果敢、武芸に達し戦術に巧みで、馬術にもすぐれ武人として文句なかつた。

高山右近は、このような武人を父として、天文二十一年（一五五二）高山において生を受け（幼名彦五郎）、父が受洗した翌永祿七年（一五六四）十二才の時、洗礼を受け「ジュスト」と名乗った。一生をキリシタン武将として過した。しかし父とは違って、武人よりむしろ文人として生きたと思われる方が多かつた。十七才のとき結婚し四男二女のうち、二男一女を戦いの場などで幼くして亡くした。

右近が生まれたとき、彼が成人してから関係を持つようになる戦国の世の支配者たちは、信長二十才、秀吉十五才、家康十才であつた。信長、家康はそれぞれ領国があり、領主となるべき身上であつたが、秀吉のみ尾張の一百姓の倅であつた。父は愛知郡中村の百姓彌右衛門、母は同じく御器所村生れのなかの子として生まれ、幼名を日吉丸と言つた。十三才のとき奉公先を求めて家を出た。着いた所は浜松で、頭陀寺町にあつた今川氏の支配下の松下賀兵衛が出城に仕えた（現

在、公園として残っている）苦勞したのち、天文二十三年（一五五四）十七才のとき、信長に認められ、木下藤吉郎、羽柴秀吉……と実力本位の武人となつていった。

右近

戦乱時代の武將の政治的基盤は封建的土地支配にあつた。土地の農民は打続く戦乱と収奪によって「百姓耕作し得ず、田畑を捨てて乞食となる」有様となり、慢性的凶作の下、農民の逃亡が相次ぎ、武家に徴発されて一家離散の状態となり、路頭に迷うか露と消えた。

こうした暗黒の世にあつて多くの民衆は物質的且つ精神的な救いを待望し、社会的重圧からの解放を祈念していた。これらに対し、在来の神道は祭礼の時、利用するに過ぎず。伝来の仏教界は衆生を法度し、安心立命を与えるという宗教的生命力を失つていた。こうした時代に、キリシタン宗門が、ヨーロッパから印度を経て我が国に伝来してきた。

キリスト教の源泉と根柢になるのは「聖書」である。しかし聖書の邦訳はなかつたので専ら「説教」による宣教によつた。日本の教理書となつた『ドチリナ・キリシタン』は、弟子が教師に聴く形式になつていた。

高山飛騨守はその後奈良の南方沢を拠点に活動していたが、糧食と火薬が不足してきたので、この城を捨てての余儀なきに至つた。信長の援助を仰いで高槻城の攻防戦に勝利し、天正元年（一五七三）右近、高槻城主となつた。高槻は淀川に沿い、京より西国に通ずる道に沿い重要な拠点であつ

た。

右近は小児のとき、父の意により受洗していたのでその教えの意味は理解していなかった。そのため神父たち一カブラル、フロイス、ロレンソ、トルレスーが京から豊後に帰る途中に高槻城に二、三日泊つて貰つて、武士や農民たちにキリスト教の真意について説明してもらつた。

ジュスト右近は、たいそう敏活明晰なる才智と、きわめて稀な天分を備えた若者であつた。彼は異教徒たちから出されるいろいろな疑問に対して修練を積んだ説教家となり、彼らすぐれた徳によつて京地方のキリシタン教会全体の柱となつた。

広場には信者の寄るべき教会と宿舎を建て、その廻りには美しい花を植えて庭を作つた。彼は建築士でもあつた。天正九年（一五八一）二月二十二日、巡祭師ヴァリヤーノ、神父フロイス等を招いて復活祭を祝つた。

「日本最古のロザリオ出土」

安土桃山時代のキリシタン大名・高山右近が城主だつた高槻城跡で昨年出土した、十六世紀後半のキリシタン墓の木棺の中から、木製の祈りに使う数珠状の宗教具「ロザリオ」の玉一式が見つかり、十一日、高槻市立埋蔵文化財センターが発表した。（平成十一年八月十二日付静岡新聞）

ロザリオは右手首の骨に絡まるように出土し、埋祭時に装着していたらしい。フロイスの『日本史』に「右近の父飛騨守が京から挽物師ひきものしを呼んで、キリシタンたちの為にロザリオ

を作らせた」と記されている。

祭儀のとき、棺をかつぐのは聖を称する賤者の仕事であるが、高槻ではジュスト右近とダリオ飛騨守が先頭になつてかつぎ埋葬した。

どちらいなの序（キリスト教の教義）

御主おんぬし・せずせす・きりしと御在世の間御弟子達に教へを玉う事の内（略）三の事に極る也。

一には、信じ奉るべき事。

二には、頼もしく存じ奉るべき事。

三には、身持を以て勤むべき事。

（希望を持ち、信頼すること。生活態度）

信仰は人間の智慧とか直観によつてわかる事柄ではなく、神の啓示によつてのみ知ること、これに対する人間の承諾である。

分裂と暗黒の中世社会で、民衆と強く結ばれていた仏教界の状況は如何であつたらう。

「仏教では靈魂は不滅ですか」（死んだ後の魂ですか、それなら不滅です）

「では、靈魂は仏によつて最後の審判を受けますか」（最後の審判？ そんなものはありません、死後の極楽や地獄はありませんが）

「地獄に落ちた者は、もう極楽には行けないでしょう」（そんなことはありません、遺族の方が一生懸命仏の後生と願えば、極楽に行けます）

禅宗の座禅は明想が第一歩としてすぐれた修行で、無の境地になること、何も考えないことである。座禅によって到達する無の境地は大切で、キリスト教においても大切な心の状態だと考える。

仏教本来の使命は、人の魂を救うことであるが、現実には寺の運営に主力を注ぎ、救魂は二の次になり易いのが現実である。

信長

尾張の国の藩主、信長の性格は極めて烈しく、すぐれた理解力と明晰な判断力を持っていた。度量が大きく辛抱強かった。神仏の祭礼や礼拝など迷信的なものは全て否定した。僧侶、神や仏の社寺に対して異常な嫌悪を抱いていた。腐敗した仏教勢力を打倒するため、キリシタンを保護して利用する方策をとった。フロイスが来日した三年目の永禄七年（一五六四）入京したとき、京での布教を許可した。

御朱印（信長の免許状）

ばあでれ（神父）がみやこ（京）に居住することについては、彼に自由を与え、当国の他の者が義務として行なう一切の事を免許し我が領有諸国において何れの国なりとも滞在することを許し、それに対して煩累（はんるい）を受けることがないようにする。そして不法に彼を苦しめる者があれば、これに対してはつきり断固なる処置を取る。

永禄十二年四月八日

信長はバードレ（神父）に「遠い国から来たのはどういう

理由であるか」と聞いた。

「日本の人々に救済の道を教えることによって人類の救い主であるキリストの御心にかないたい、という熱望以外の何の考えもない」

信長には、羽飾りが着いたビロードの帽子、聖母の像が着いた金メタル、コルドバの革製品、高価な毛皮の外套、（砂と日）時計、ヴェネチア製のクリスタル（ガラス器）、印度産の緞子生地、その他さまざまな品を贈った。

邪宗門

われは思ふ 末世の邪宗 切支丹でうすの魔法。

黒船の加比母を、紅毛の不可思議国を

色赤きひいどろを、匂鋭き あんじやべいる

南蛮の棧留縞を、はた阿利吉、珍配の酒を

（注）①キリスト教の神 ②船長 ③ガラス ④オランダ石

竹「なでしこ科の植物花はピンク色」

⑤印度のサントメ産の綿織物

⑥蒸留酒 ⑦赤ぶどう酒

『邪宗門』は北原白秋が明治四十二年、二十五才の時の処女詩集で、その冒頭の一節である。果たして切支丹は邪宗であつたらうか。

元龜二年（一五七二）九月、信長により旧勢力の中心だった比叡山・延暦寺は全山焼打ちに会った。足利義昭は失脚し

て幕府は滅亡した。京地区の受洗者は九州地区をしのぐ程の勢力になった。これは信長による援助や右近たちキリシタン大名の尽力によるが、何よりもザビエル以来の宣教師たちの日本人の感情、文化、風習を尊重し、それへの対応策を採った結果である。

宣教師は清貧、貞潔、服従を固く守り、献身的に伝道に努めた。当時、戦乱の世の中にあつて、極めて低い宗教心しか持ち合わせなかつた一般民衆の心の中に信仰心を植えつけた。

天正十年（一五八二）六月二日、信長は出陣のため京都の本能寺に宿泊中であつた。同じく信長の命により出陣途中の明智光秀に「敵は本能寺にあり」と反逆されて、信長は火中に身を投じて落命した。備中高松城（岡山）の毛利勢を水攻めしていた秀吉は、急を聞いて毛利方と和睦し、急ぎ京へ引返した。その反転の身の早さは、永年の苦労が身を結んだ結果ならでのことで、明智光秀はあつけなく、右近の助けもあつたが討たれて、天下は秀吉のものとなつた。織田の後継者を決める「清州会議」も秀吉が主導権を取つた。

秀吉

天正十五年（一五八七）三月、関白、太政大臣・豊臣秀吉はキリシタン大名高山右近らを率いて九州平定のため、大坂を発つた。尾張中村の百姓の倅、日吉丸から位人身を極めたのは並大抵ではない。薩摩の島津義久を平定して六月初旬、九州北端の博多へ凱旋した。

七月、日本のキリシタン新副管区長となつたポルトガル人のガスバル・コエリヨとフロイスは、秀吉に謁して戦勝を祝した。その頃、平戸（九州の西北端）の沖に見事なポルトガル船が碇泊して、その船を賞讃するのを聞き、秀吉も好奇心より、コエリヨにその船を博多に廻航するように依頼した。しかし船長は廻航の危険と面倒を懸念して自ら小舟で博多に出かけ、秀吉に贈物を呈上してその困難なことを弁解した。不審さを見た秀吉は、ある日武将たちと舟遊びをしている途中不意にその大船に乗込んだ。船は鉄板で擬装され、大筒も一本あり武装は完璧であつた、船底の漕手の中に鎖でつながれた一人の日本人を見かけた。これは放つておけないと思つた。船を博多へ廻航させない理由が分つた。満足した動作で船を降りたが、これはかくされた彼の痲癩を示していた。

私は初めのザビエルの項で、宣教師が進むにつれその国は植民地化されて行くのに気が付く人はいないであろうかと疑問を投げかけたが、事実そうなりかけた日本を防ごうとしたのは秀吉であつた。コエリヨのポルトガルは出おくれでまだ植民地が無かつた（印度のゴアのみ）ので日本を狙っていた。既に長崎の一部を支配していた。

その夜、秀吉はイエズス会副管区長コエリヨに四項目の詰問状を發し、翌天正十五年六月十九日、布教は国土侵略の前提方便であることを公式文書に表明する「伴天連追放令」を發表した。（一五八七年）

ガスバル・コエリヨは（一五二七—三一年）生れのポルト

ガル人で、一五五六年印度のゴアでイエズス会に入った。日本に来たのは一五七二年（元龜三）で四十五才であった。主に九州の大村領で働き、巡察視ヴァアノが一五八一年（天正九）に日本宣教区を准官区に昇格させるや、コエリヨは最初の准官区長となった。彼は秀吉を甘く見ていたようで、一年前に大阪城に会いさつに行つた時に頼まれた朝鮮出兵のためのポルトガル船二隻の建造を、手つかずのままであった。突然の詰問状と切支丹追放令は思わざるものであった。彼は九州の有馬領の加津佐にかくれ、三年後の天正十八年（一五九〇）そこで死んだ。

伴天連追放令（現代語訳）

定

一、日本は神国であるのに、キリシタン国から邪法を伝えたのは、はなはだけしからぬ。

一、彼等が諸国の人民を帰依させ、神社、仏閣を打ち破らせたのは前代未聞のことである。領主たちは、その土地や知行を一時的に預かっているのであるから、そのつもりで天下の法律を守り、下々に至るまで勝手な振舞があつてはならぬ。

一、伴天連は、その知識を持って自由に信者を獲得してもよいと考えているが、右の通り日本の仏法を破壊するのてまことにけしからぬ。そして伴天連は日本の地に置かないから、今日から二十日のあいだに帰国すべき

である。この期間、伴天連に危害を加える者があれば処罰される。

一、黒船（南蛮貿易の船）は商売のためになるのであるから別である。今後とも長い年月貿易をやつてよい。

一、今後、仏法のさまたげをしないものは、商人でもキリシタン国から勝手にやつて来てもよいからそのつもりでおれ。

天正十五年六月十九日

以上

伴天連棄教令により、高山右近、小西行長、内藤如安、細川ガラシヤら僅かの例外を除き、殆んどのキリシタン大名たちや特権的商人たちは自らの地位を守るために信仰を棄てた。一般大名たちは政治のために信仰を利用したに過ぎなかつた。一般大衆の方が反つて信仰の高まりを見せた。

右近は秀吉の九州征討に追従していたので、秀吉は右近の宿舎に詰問の使者を出した。「右近の高槻（信長時代一四万石）、近くは明石（秀吉の六万石）の領主時代に領民をキリシタンに改宗させ、社寺を破却したことは、理不尽の至りである。今後も予に仕えんとするならば、邪宗門を棄てるべきである」と。

突然の事態に、右近は棄教して明石六万石を安堵するか、信仰を守り領国を捨てるのか、の二者選一を迫られた。小児のときより信者となり、家臣、領民たちの先行きが心配されたが、右近に迷いはなかつた。

「関白から二度目の使者が来た。茶の師匠、千利休であった。「御造作をおかけ申し訳けなく存じます」「関白の本音は、貴殿を失いたくないのじゃ。信頼のおける有能なる武士であり、茶道の先達として尊敬もしておられる。立场上、貴殿に棄教を迫り、それは他のキリシタン大名たちにも大きな影響を与え、関白の威光を浸透させるための必要な処置と考えておられる」

しかし、右近の決意は動かなかった。

利休が帰ってから、しばらくして関白の使者が来て、右近の明石改易を告げた。

右近三十五才、信長、秀吉を師として戦国の世をキリシタン武将として生きて来たことを回想し、夜一人祈った。明け方まで祈った。

オラシヨ（祈り）

はかりなき御知恵のみなもと

万時かないたもうおんあるじデウス

御一体にてましますなり

このおんあるじは

なきところより天地あめつちとそのほか

ありとあらゆるものを

つくりあらせたもう

まことのおんあるじデウス

天地あめつちをつくりたもうおん親デウス

そのおんひとり子

われらがおんあるじゼズスキリシトを

まことに信じたてまつる

アーメン

（参考図書）

・岩波（日本思想大系²⁵）キリシタン書・排耶書

・吉川弘文館、海老沢有道著（人物双書）高山右近

・（中公新書）小和田哲男著 戦国武将

・（中公文庫）日本の歴史¹⁴ 鎖国

・（ ）日本の詩歌⁹ 北原白秋

（中区）

（つづく）

日本国憲法について

滝澤 幸一

私は日本国憲法が、GHQのマッカーサーの名で、ホイットニー准将らの手によって、急遽文案が作られた事は知っているが、安倍首相の言われる『日本国憲法が、GHQに押し付けられた恥ずべき憲法』という表現は、適当ではない」ことを述べたい。

私の立ち位置を話そう。私は、ゴリゴリの護憲論者ではないから、違憲自衛隊の解散をなどというつもりは全く無い。むしろ、この憲法下に於いて、「苦勞の末によくぞ自衛隊をここまで育てて来たなあ」とさえ思っている。だが、現憲法が「GHQに押し付けられた恥ずべき憲法」だとか、静岡新聞が昨年の五月二十一日朝刊で、政治評論家の屋山太郎氏による『憲法制定時の芦田修正』と題した、『論壇』に載る「憲法案は占領軍の素人法律家が一週間ででっち上げ、それに日本の国会や占領軍の監視機関が慌てて修正を加えた。その経過は今や明らかになっている。修正は加えられたが骨格はでっち上げ、そのものだ。出来の悪い彫刻の目、鼻、口に修

正を加えても、全体の見映えがよくなるものではない。文章も素人が見ても悪文そのものだ」とする論調には納得がいかない。非常に大きい反発を感じるのである。こうした中で、書籍一冊だけでなく、歴史的事実や経過を追う事によって、現憲法の成立に至る「実態」を炙りだそうと考えるに至った。

先ず憲法制定までの過程を追ってみよう。昭和二十年八月、連合軍最高司令官マッカーサー元帥は、日本進駐直後から日本政府に対して、憲法改正について早急に検討するように求めている。東久邇宮内閣の近衛文麿氏が憲法草案作成を担当し、草案は一応作られたとされているが、GHQによる矢継ぎ早の戦後処理案、九月二日の軍需生産の全面禁止。九月十一日東条英機ら三十九人の逮捕命令。十月四日の政治的民事的宗教的自由に対する制限撤廃の覚書を日本政府に交付した。これに東久邇宮内閣は反発総辞職をした。

内閣総辞職を受けて、幣原喜重郎内閣が成立したのが十月九日。十二月六日には近衛文麿、木戸幸一ら九人に逮捕命令が出て、近衛氏は十六日に服毒自殺を遂げる。自殺前に、天皇陛下にだけは憲法草案を上奏したとも伝えられるが、その内容は私には確認出来ない。

この間の主なGHQ指令や政治の流れを追ってみよう。十月十日戦中の政治犯三千人の釈放。十月十三日に治安維持法などファシズム法規が廃止され、十一月六日に財閥解体指

令。十一月二十一日治安警察法が廃止。十二月八日農地解放指令。十二月十七日衆議院議員選挙法が改正され、婦人参政権が認められている。十月十日の政治犯釈放を受けて、十一月二日日本社会党、十五日日本自由党、十五日には日本進歩党が立党し、十二月一日には日本共産党書記長に徳田久一が就任している。以下は省略しよう。

幣原内閣に於いては、松本蒸治国務大臣を長とする憲法問題調査委員会が、憲法草案起草に従事するのだが、作業は思うようには進まなかった。甲案、乙案なる憲法草案が出来たのは、翌年昭和二十一年一月であった。

これを二月一日毎日新聞がスクープする。「憲法改正政府試案・天皇の統治権不変・内閣は議會に責任・国民に勤労権利義務」と大見出しが躍ったが、旧来の大日本帝国憲法を基盤とした保守的なものだった。世論も不満を抱いたが、マッカーサーも失望したと思われる。本来は「国民」とするべきを「臣民」天皇陛下の民と表現されていたし、民主主義と個人主義の違いが解っていないかと思うのだが、人権については「自由の制限の法律は公安保持のため必要な場合に限り之を制限するを得る」とされている。この点に於いては石破幹事長ら自民党幹部のデモ規制発言などと同等の認識であったと私は思っている。

太平洋戦争突入直前の、アメリカ合衆国の駐日大使ジョセフ・グルーは交換船で帰国すると、当初は日本の好戦性を話

したが、次第に「悪いのは軍国主義者で、日本国民も米国民と同様に、軍国主義者の犠牲者であり、国民に罪はない。天皇は開戦に否定的な意見を持っていた」とする講演を米国各地で、一年に二百五十回もするなど、日本国民には好意的であったとされる。実際、天皇陛下は「ほんとうに勝ち目はあるのか」など、お立場からすれば「精一杯の開戦を避けるご発言をされているのである。当然マッカーサーもこれを熟知していて、昭和二十年九月二十九日の天皇の訪問時には「無実」とか「言い訳」があると思っていたのだが、天皇のお言葉は「全ての責任は朕にある」であった。マッカーサーは「この人は私が護らなくてはならない」と決意したとされる。その一方で、昭和二十一年の食糧メーデーでは、松島松太郎が五月十九日に、不敬罪で捕えられると、GHQは「天皇に特別の法的保護は受けさせない」として、不敬罪の適用を廃し、名誉毀損罪を適用し、懲役八か月を科している。

マッカーサーの立場からすれば、終戦当時から昭和二十一年一月までの頃は、オーストラリアやニュージーランド等は天皇を戦犯に指名するように強固に決議書を送ってきていた。米国議会も天皇を戦犯にするのが当然の意向であった。極東諮問委員会は天皇に関することは、全てをワシントンへ報告するように通知して来ている。極東委員会の開催も迫ってきていた。ソビエトなどは独自の共和憲法案提出の情報もあつた。昭和二十一年四月十日には衆議院総選挙が予定されていた。総選挙前に憲法を制定したい。こんな思惑もあつ

た。時間が切迫していたのである。松本蒸治らの憲法問題調査委員会は、それらの事情は理解してはいなかった。それどころか近衛氏と松本蒸治氏の間では、どちらが憲法草案を起草するかで争い、昭和二十年十一月一日、GHQは近衛氏に「憲法改正の専任を託したのではない」旨の発表をしている。この他、共産党を除く各政党も憲法草案を練り、民間でも高野岩三郎たちの憲法研究会も熱心に検討していたが、憲法研究会以外の憲法草案は、民主主義の理解が出来ていなかったといわれる。こうした中で、憲法研究会の草案では、GHQと日本政府の折衝の中で、一部取り入れられた部分があった。

こうした諸事情から、マッカーサーはGHQの手で憲法草案を起草した方が、日本案の一つ一つを修正するより、早く、抵抗感も少ないと判断したと思われる。考えて見よう。「ここは駄目だ。ここはこうせよ」ほぼ全部をそう言われたら、起草者にとって気持ちが良いものだろうか。且つ、民主主義を理解していない人を前にしてである。模範案を起草して、比較させた方が効率的で、抵抗が少ないと思われぬものか。物を教える手法で、「やって見せる」がある。

マッカーサーはホイットニー准将に指示し、日本の外務省の「二月五日の予定を七日に延期したい」との申し出を、一週間の延期とした。

マッカーサーの憲法改正案に必要な骨子、三点は次のよう

になる。

①天皇は元首として世襲する。職務・権限は憲法に基づき行使され、国民の基本的意思に応える。これは、ポツダム宣言の相互の意見交換に於いて、昭和二十年八月十日付け連合軍への文書で、日本は「天皇の国家統治の大権を変更するの要求を包含し居らざる事の了解の下に受諾する」としてあった。連合国側は「日本国民の自由を表明せる意思に従い」とあるから天皇制は国民の意思による。一方で「日本人、あるいは日本民族のトップに、人間としての天皇が存在する」とする占領軍の「暗黙の了解」があった。「国民から尊敬されている天皇」の認識もあった。

②国権の発動たる戦争は廃止する。その防衛と保護を「世界を動かしつつある崇高な理想に委ねる」。一九二八年のパリ不戦条約の「戦争廃止」と国連憲章の「崇高な理想」から引用されたものと思われるが、これはミズリー艦上で九月六日のマッカーサー演説にもある。

③日本の封建制度は廃止される。貴族は皇族を除き一代限りとし、華族は政治権力を伴わない。

当時すでに進行し始めていた財閥解体、農地解放等を踏まえた実務的な指示である。

GHQの日本国憲法起草に関わる組織は、陸海軍関係の軍人十五人、民間人は男四人、女六人の二十五人から成る。憲法の専門家とはいえなかったが、立法や行政の経験者、ジャ

ーナリストなど各分野の能力を持ったメンバーが揃えられた。

各分野毎に、小委員会を設けて検討する方式を取ったが、ここで組織とその委員会名、メンバーを紹介し、政治評論家、屋山氏の言う、「素人が一週間ででっち上げた、素人が見ても悪文そのもの」は適切かを論じたい。

●マッカーサー元帥の下で、総括する役目は、ホイットニー准将Ⅱ民政局長、法学博士、弁護士。フィリピンで退役後マニラに弁護士事務所を開設。復帰後フィリピン地下ゲリラ部隊を掌握しマッカーサーの信頼を得て、ミズリー艦上の演説草案も起草している。

●運営委員会は、ホイットニー准将と各小委員会の調整をする役目を負う部門とされた。

チャールズ・L・ケーデイズ大佐Ⅱ弁護士、連邦公共事業局副法律顧問、財務省副法律顧問などを歴任。公職追放、内務省解体、警察制度改革を担当した。

ラウエル中佐Ⅱ弁護士、民政局法規課長、企業や団体の顧問弁護士を歴任。民政局法規課長として、高野岩三郎ら民間の憲法調査会メンバーやリベラルな日本側要人との交際が深く、憲法調査会の意向を吸い上げた部分があるとされている。

ハッシー海軍中佐Ⅱ弁護士、州政府職員、州最高裁会計監査員など歴任。文章家の自負を持ち、憲法前文の執筆を申し出る。この他、ルース・エマラン女史は政府機関職員、ロンドン米大使館員の経歴。

●立法権に関する小委員会は、フランク・E・ヘイズ陸軍中佐Ⅱ弁護士、『日本の内閣に影響を持った諸勢力』などの執筆あり。ケーデイズ大佐の右腕。

スウォープ海軍中佐Ⅱ会計士、税理士、銀行家、下院議員、州政府予算局長などで、立法・行政の経験豊富。

ハウギ海軍中尉Ⅱノルウエー大使館員などを経たジャーナリスト。この他に民間人のノーマン氏

●行政権に関する小委員会は、サイラス・H・ピーク氏Ⅱノースウエスタン大学、コロンビア大学に学び、日本でも教鞭をとった知日派。憲法改正に伴う諸法律の改正に関与。

エスマン陸軍中尉Ⅱ国際政治学、政治学、行政学の権威。博士号を持ち、連邦政府人事院の行政分析担当官の経歴。他、ミラ氏など。

●人権に関する小委員会は、ピーター・K・ロウスト陸軍中尉Ⅱ社会学、人類学、医学者であって法律家。経済学、国際関係論など発表した。大学では社会科学部長の経歴を持つ。

ワイルズ博士Ⅱ経済学、人文学博士。慶応大学で戦前経済学の教鞭をとった。

シロタ女史Ⅱピアニスト。山田耕作の知人。東京音楽学校の教授を十年勤め、園田高弘らを育てたレオ・シロタの娘。六ヶ国語に堪能。女性の人権について情熱を燃やした。

以下は、やや略すが、

●司法権に関する小委員会は、ラウエル陸軍中尉、ハッシー海軍少佐、ストーン氏。

● 地方行政に関する小委員会は、ティルトン陸軍少佐、マルコム海軍少佐、キーニ氏。

● 財政に関する小委員会は、リゾー陸軍大尉。

● 天皇・条約・授権に関する小委員会は、プール海軍少尉Ⅱ四代前（祖母のまた祖父）が、幕末にペリーに同行し浦賀に來た経歴を持ち、後に初代函館総領事になったエリシヤ・E・ライスに繋がる家系の人であった。とネルソン陸軍中尉が組んだ。

日本国憲法の草案作成に強い影響を与えたのは、マッカーサー・ノートとSWNCC―二二八と呼ばれる、國務・陸軍・海軍三省調整委員会の原則であった。ここには「日本国民が、その自由意思を表明し得る方法で、憲法改正または憲法を起草し、採択すること」という項目があって、日本の政治改革プログラムの中で、憲法に關してかなり詳細な記述があった。ベアテ・シロタ女史は日本に育つて、日本語も巧みであったから、ジープで走り回つて、憲法に関する各国の関連圖書を、GHQの意図が分からないように、各地の図書館を回つて集め、メンバーから重宝された。

実際のタイムスケジュールを追つてみたい所であるが、紙面の都合で省略せざるを得ないが、私には略せない部分だけを抜粋する。

● 三日目、二月五日火曜日。議會を一院制にするか二院制に

するか検討。この中で、憲法草案の起草は本来は日本政府が行うのが筋だと認識し、GHQが起草するのは最後の手段と、苦悩した痕跡が見られる。天皇を戦犯とした場合の国民の反応について触れている。

● 五日目、二月七日。司法小委員会は戦前の裁判所に権威も独立性もなかったと、違憲審査権を盛り込んだが、後に日本側でこれを削除している。もし残されておれば、安倍首相の憲法改正をせず、解釈の変更で通そうとする安保法案の歯止めになった可能性がある。

● 六日目、二月八日。行政権小委員会。「議員は政治的、地域的、経済的な代表で構成されるから、自己主張が優先し無責任になり易いから、内閣は解散権を以つて脅かすことで、責任ある政府を確保する」案と「解散権の乱用の弊害」で激論。前者は明治憲法制定に際し、岩倉具視らが諸国視察の際に、危惧した部分で、現在の弊害の現象でもある。民主党野田政権下で、消費税増税審議の際、民、自、公三党合議の上、増税案に賛成した自民党が「消費税増税がけしからん」と問責決議案に賛成している。自民党もだが、数だけが欲しい反対野党の対応にも呆れて言葉が無い。

● 八日目、二月十日。公職追放該当者の範囲を閣議決定。各政党では大混乱。対日講和、占領期間の発表が新聞紙上を賑わす。憲法草案起草では、地方自治権を検討。米國に於ける各州の権利が強すぎ、道交法さえ州によって違う点を日本では不相当とし、運営委員会でも再考すべきとし、マッカーサー

に報告。

●十日目、二月十二日。最終運営委員会開催。反逆罪廃止、公務員の憲法擁護義務が追加。夜が明けるまでタイプライターで成文。

●二月十三日(水)日本政府と一時間十分の会議が行われた。

G H Qからは、ホイットニー、ケーデイズ、ハッシー、ラウエルが出席し、日本側からは、吉田茂首相、松本蒸治國務大臣、白洲次郎終戦連絡会議次長と、通訳の長谷川元吉外務省囑託職員合計八名が、外務大臣官邸で午前十時より始まった。ホイットニー准将は太陽を背にして座した。「日本案として作成されて、松本蒸治案と格を下げられた憲法草案は、『自由と民主主義の為の文書として、最高司令官が受け入れる事が出来ないものです。しかし、最高司令官は、日本の人々が、過去に経験した不正と専制支配から守る、自由で啓発的な憲法を熱望している事を十分に理解しており、ここに持参した文書を、日本の情勢が要求している諸原理を満足させているものとして承認し、貴方がたに手交するように命じました』(アメリカ側記録より)

ホイットニー准将は「他国からの天皇戦犯論から、マッカーサー司令官は天皇を護る意思でいること。それにはこの憲法草案の採用が有効だ」との説明をした。松本蒸治は脅迫に近いものだと受け取り、G H Qに再考を促す書簡を送ったが、再考の余地なしとにもなかつた。ホイットニーは白洲次郎に書簡を送り、「この問題は遅滞を許さないもので、外

部からの別の憲法を押し付けられたら、司令官が保持できるように取り計らっている伝統と機構(天皇制のこと)も洗い流されてしまうでしょう」と丁寧な文言ながら、急を要することを述べている。返事は二月二十日を指定。こうした経過があったが、日本では三月十一日を目途に、G H Q案をベースにして、佐藤達夫法務局第一部長、入江俊郎次長らの手で、極秘のうちに、日本政府案を執筆していた。日本側では早速という認識が薄かつたようである。G H Qの催促で、三月四日、日本語のまま提出された会議では、日本語の英語訳との食い違いなどを修正して、一院制の国会は二院制とし、衆議院の優位性が織り込まれるなど、激論も繰り広げられたのである。三月五日午後四時半、全ての打ち合わせは終了した。

このように、憲法制定の過程を追っていくと、安倍首相の言うように「G H Qに押し付けられた、恥ずべき憲法」というより「日本に好意を持ち、国情に沿うよう検討された」の想いがする。日本は民主的な自主憲法を急いで制定するよう求められていたが、残念ながら、民主主義の考え方が理解出来ずに、明治憲法の理念から脱却することが出来なかつた。極東委員会の意向や諸外国の情勢にも疎く、G H Qに「急かされても、急かされても」愚図愚図していた状態が見えて来る。

言い方を変えれば、G H Qの日本国憲法草案を起草した計二十五人よりも、日本側の政府関係者や各政党の諸氏の方

が、知識も熱意にも欠けていたとしか言い得ない。

このような経過を知ると、日本国憲法は、一方的に押し付けられた憲法で、日本には憲法制定の自由がなかったかの如く物言いは、国民に誤った認識を植えつけて、憲法改正の道を「こじ開けよう」とする小細工だと見えて仕方がない。

反面、全くの無防備な日本が『世界の崇高な理想』に委ねる事が、世界平和にとつての、唯一最良の道だとも思えない。こと隣国中国の最近の動きを見れば、尖閣だけでは無い。南沙の一方的な支配を見ぬふりは出来ない。

然しだ。解釈改憲などと違法な手段を許せば、政権の代わる毎に不安定な政局を迎える事にもなりかねない。何時か来た道だけは歩んではならない。隣国を刺激せず、上手に国を護る方法は、九条を読み込めば理解される。

ここで、戦争の悲惨さを再確認しておきたい。太平洋戦争の犠牲者は、軍人軍属が二三〇万人。民間人八〇万人とするが、これでは民間人犠牲者数が余りに少ない。調べてみると、軍人軍属には勤労学徒や姫百合部隊、徴用工なども含まれている。一方で民間犠牲者数は、調べるのに相当苦勞する。明確な数字が判らないのである。諸処の調べの結果、空襲被害死者五十五万八千人、原爆被害死者は二十万人という数字が出て来たが、最近の新聞によると、原爆被害死者も空襲被害死者数に含めていられるらしい。空襲には違いはないが、馬鹿を言っではいけない。原爆被害者は今でもその後遺症に苦しま

れている方もおられる。毎年亡くなられる方があって、六十万人を超している。原爆被害死者数を終戦一年後で締め切った数字で発表されているようなのだが、私は犠牲者数を抑えるようなことは、するべきではないと考える。

国策とされた満蒙開拓団の悲劇。

沖繩地上戦における現地民間人の悲劇。

軍隊は国民を護らず、軍の存続を優先している。軍人の生命を護るのに汲々とした。

民間人を犠牲にするのは、日本だけに留まらない。フィリピンでも、連合軍の日本兵攻撃が強まると、市民も逃げ場を失い、日本軍の逃げ場と重なった。そこに米軍の猛烈な攻撃があつて、米兵犠牲者千百人、日本兵一万六千人に対して、フィリピン人の民間人十万人が犠牲になった例もある。

軍隊は国民や民間人を護るために存在するのではない。軍が護るのは人ではないのだ。

庶民の目で見れば、召集令状の赤紙一枚で働き手を失った家族の苦勞は計り知れない。戦死しても「名誉の戦死」とか言葉で讃えられても、残された家族を国は守ったか？

近所の市民がどれ程の力になったか？

そうして、こんな報道もあった。

二〇一二年八月十四日のNHK・TVは『馬塚法務官の回顧から』を放送した。英語の堪能な兵士が捕虜になれば、部

隊の情報筒抜けになると、罪を被せて軍法会議で銃殺にした事例を悔いている。彼の遺族は『非国民の親族』と非難され、住所を変え、隠れるように暮らしているが、法務局の調査は「罪を犯した事実は確認されない」。無実を肯定する態度ではあるが、県の福祉課は「無実の証明は現存しない」。無実とはしない方針でいる。

どちらも証明できないことを言っているのだが、結果は正反対になるのも怖い話である。

遺族は「このことには触れないで欲しい」と言われているそうである。軍法会議での被告人総数は全部で五五〇〇人。

「不適切な処刑は相当数あった」と元法務官は証言されていた。

現代の、中東などにおける近代戦争は、無人機からGPSと映像を使って爆撃をする。殺人に躊躇しない戦争になってきている。

戦争の経験者が減る中、こうした悲惨な事例を伝え合っで、戦争を防ぎたいものである。

戦争は、一時的には軍需産業などを盛んにするが、資材の消費は物価の高騰につながる。戦争は全ての面で、庶民を苦しめる。

最後に日本国憲法成立に関わった政権の取り組みと、その首相のエピソードなどを記すことで、この憲法を蔑む人達への反論とする。

原子爆弾投下や本土空襲など、敗戦の兆しが顕著になり、連合国からの終戦の働きかけに、これ以上の抗戦は無理だと悟った、天皇と鈴木貫太郎首相はポツダム宣言を受諾し、無条件降伏の道を探るが、軍部の抵抗もあった。玉音放送のレコードを奪わんとした近衛師団の宮内省乱入や、マッカーサーが降り立った厚木飛行場ではその前々日まで、相模原航空隊は降伏を是とせず飛行機を飛ばし続けていた。天皇は高松宮を派遣し説得。事なきを得ている。結果を先に記したが、そのような状況から、降伏を受諾した鈴木内閣は総辞職する他には無かった。

こうして東久邇宮稔彦王内閣に代わる。東久邇宮は、父久邇宮朝彦が幕末開国論を唱え、維新後広島に流され、他の皇族から差別され貧窮の生活を経験している。力量が有り、軍部の不穏の動きを制するには、この人をおいて他になかった事情があった。東久邇宮内閣では大平正芳、宮沢喜一らが秘書官など補佐している。軍部の不穏な動きを制したこの内閣は、五十四日と短命ではあったが評価しなければならぬ。

次は幣原喜重郎内閣になる。外交官や外務大臣の経験者で、親米外交を推進した。この為もあって、憲兵から脅迫を受けた経験がある。憲法第九条の「戦争の放棄」同一項の「戦力の不保持」はGHQではなく、幣原首相の考えであったとする論もある。彼は「必ず負ける軍隊では用をなさぬ。そこで強い軍隊を目指す。これが戦争の原因だ」と「軍事的為無為」を説いている。又、吉田茂の考えだとの説もある。

幣原内閣を継いだのが吉田茂内閣である。戦後初の選挙を経て、自由党が第一党になったが、党首鳩山一郎が公職追放に遭い、吉田内閣が誕生した。吉田は駐英大使などを務めた外交官である。親英米の為軍部の受けが悪く、大臣を棒に振っているが、大戦の回避に努力し、早期終戦の労を取った。が、この為憲兵に四十日間の拘束を受けている。この経歴が戦中も反軍国主義を通したと評価され、首相に就く要因にもなった。吉田茂は幣原内閣の外務大臣を途中から担当していた。

当時の日本共産党の考え方で締め括ろう。日本国憲法草案に関わることを拒否した、日本共産党は、憲法審査でも異論を放っている。野坂参三は「侵略戦争はいけないが、自国を護る戦争は正しいのであり、憲法草案に全面的な戦争放棄を入れる必要はない。単に、侵略戦争の放棄だけに留めるべきだ」と発言しているのだが、幣原喜重郎の「軍事的為無為」論に私は共感を覚えるのである。

*参考にした図書、その他
創元社刊鈴木昭典著

「日本国憲法を生んだ密室の九日間」
自由国民社刊「読める年表 日本史」

学習研究社刊「エリア教科事典・日本史」
文春文庫半藤一利著「あの戦争と日本人」

NHK出版刊大澤真幸、木村草太の対談

「憲法の条件」

祥伝社新書中野明著「戦後 日本の首相」

静岡新聞二〇一四年五月二一日 朝刊

NHK・TV二〇一二年八月四日

「戦場の軍法会議」

NHK・TV二〇一二年八月一三日か？

「マニラ市街戦の犠牲者」又は「戦死者」

中日新聞二〇一五年八月二日 日曜版

「空襲被害」

中日新聞二〇一五年八月一六日 日曜版

「戦地と戦没者」

その他、過去の月刊「文藝春秋」月刊「現代（廃刊）」などの切り抜き記事など。

(北区)

評論選評

中西美沙子

評論は、単なる印象批評であってはならないでしょう。論を為すためには、冷静な視野と思考が求められます。魅力のある評論に出会うと、「文体」と「表現者」との格闘の結果であることを意識させられます。「文体」はその人の意識表現の端的な表れですが、簡潔であり、淀みながら、掬いとり、見えないものを探り、そして一つの織物となったものの喩えではないでしょうか。

今年は4編の応募がありました。時代をみると、ブログ・ツイッターなどの発達のせいでしょうか、評論という息の長い文章は、減少傾向にあるようです。スマホが象徴する「裁断された言葉」の跋扈は、言葉の劣化でもあります。そんな時代に、評論を為す方々に敬意を感じてなりません。

「挫折に学ぶ」

作者は佐々木幹朗の詩「壊れる『もの』すべて」から論を為しています。「壊れたもの」とは私たちが失ったものであり、その現実を丁寧に取り集めることで微かな再生を図るということがこの評論の骨格になっています。

経済中心の世界が人に「挫折」を強いると筆者は論じています。その論を形成するために、様々な思想家や、社会で起こった奇矯な事件を援用して丁寧を描いています。この筆者

の視点の新しさは、「挫折」というものが、知らない間に人々の中に浸透しているというところだと思います。序論の一章を削った方が、より考えが明確になったと思われれます。

「キリストン大名 高山右近」

キリスト教を信奉していた高山右近がマニラで埋葬されていたことを、不見識な私は知りませんでした。日本にキリスト教がやって来た時代背景が、丁寧に乾いた文体で書かれています。織田信長、豊臣秀吉、利休など誰もが知っている人物とザビエルなどのキリスト者との関わりから、戦国から桃山時代に生きた人たちのダイナミズムのようなものを感じる事ができました。しかし高山右近が持っている「信じる」ということの強靱さ、ある意味で不可解な情念のようなものは、感得できませんでした。この評論の末尾に「つづく」とありましたので、高山右近の精神の行く末を知りたいと思っています。現代は何事も「信」のない時代です。その「信」を示唆するような評論を期待しています。

「日本国憲法2025」

日本国憲法を肯定する理由を客観的に文章化した部分は明快ですが、アメリカと日本の憲法学者との関わりがもう少し詳細に書かれていたら、日本国憲法の誕生とその意味がより理解されたと思います。S新聞主幹屋山太郎氏が「論壇」で書かれた「文章も素人が見ても悪文そのものだ」に作者は憤っているようです。確かに屋山氏の論は恣意的で偏見に満ち

たものです。屋山氏のような論者に惑わされないように、日本国憲法の現代的意味を書き記すべきだと考えます。小説家の池澤夏樹は、「憲法なんて知らない——というキミのための『日本の憲法』』という本で、子どもが憲法を理解できるように現代訳を試みました。彼は日本の憲法には普遍性があると称賛しています。そして日本国憲法は「美しい文章」と語る文筆家も少なからずいます。時代は人々の心を軽々と運んでいきます。再び憲法論にトライすることを期待しています。

「世界の原発事情」

原発に賛成する立場から論を為すのは容易なことではありません。筆者は「原発応援団」として世界の原発事情を描いています。現代社会はエネルギーの確保なくして成り立たないところにいます。3・11の災害以降、原発に抱えるエネルギー確保の手段に問題があることを私たちは身を持って知ることになりました。

筆者は原発容認の為に、日本の原発やフィンランドの原発状況を丁寧に描いています。ですが論が明確に見えないのはなぜでしょうか。それは論じる為の思想が弱いからと思えます。

3・11の後、思想家吉本隆明は「原発反対論」に対して「核というものを人間が所有したことで、その世界から逃れることはできない」と発言しました。多くの論者から批判ができました。開けてしまったパンドラの箱を閉めることはできません。しかし科学者や人間は宿命のようにその現実を乗り越え

なくてはならないと、吉本は示唆しているようです。その考えが正しいかは分かりませんが、そこには原発に対する真摯な姿があります。

筆者に願うことは、「論理」と「構造」だけでなく、人間として原発のあり方に向かい合う思想です。そこを描いて欲しいと思います。

随筆

「市民文芸賞」

祖母と電話とカープ

山根詠子

二〇一五年のクライマックスシリーズ

を賭けた大一番のカープ戦は、ここ浜松ではテレビ中継がなかった。広島出身で、小さな頃からカープファンの私は、試合経過が気になってまんじりともできなかった。すると広島に住む祖母から一通のメールが届いた。

「大世羅カワイソウ」

大世羅（正しくは、大瀬良である）はカープの中継ぎ投手である。その彼が大らかな場面で打たれ、マウンド上で憚りもなく大粒の涙を流した。中継を見られなかった私は、祖母からのメールで状況を知り、今シーズンの終幕を悟ったのだっ

た。

祖母は今年八十六歳になるが、時代の波に乗り遅れたくないのかスマートフォンを使う。ただ、メールにはとにかく文字が多い。しかしそれもご愛嬌で、時には解読不能のメールを読み解くのも私は楽しい。メールの話題は、祖母が丹精込めて育てた椿の写真付き解説から、今どこにいるか（祖母は一人で遠くまで出歩く）など多岐に渡るが、今年一番多かったのがカープの話題だ。祖母は、ここでもカープ女子ならぬカープおばあさんとして今年の流行に乗っていた。

祖母からメールが届くと、私は祖母に

電話をかける。浜松ではカープの話ができるファンが身近にいないので、試合の感想を話したいがためにすぐに電話をする。すると、申し訳程度にカープの話をしたあと、祖母は自身の近況報告に切り替える。しかしこれがべらぼうに長い。

まずは、祖母が今年になって八十の手習いといって通い始めた絵画教室について話し始める。教室では、小さな音でクラシックの音楽が流れて、生徒は一言もしゃべらずに絵を描いている。途中の休憩を挟んで二時間は集中して手を動かすので、時間の経つのがすごく早い。生徒同士、こんにちは、さようならの挨拶もないのが不思議だと祖母は言う。ちなみにこの絵画教室の話は、毎回同じ内容である。年寄り、同じ話を何度も繰り返す。

そして祖母の失敗談が続く。服を表裏に着てタグがビヨンと出ていたのを、近所の人に指摘されたこと。あらあら恥ずかしいとすぐに着替えに行っちゃったけれど、今度は、前後ろ反対に着てしまったということ。そして祖母の決まり文句の「わた

しも呆けてきたよ」に、私は声を出して笑う。

それだけでは祖母の話は終わらない。今度は私にはどうでもいい近所の人の噂話だ。だれそれがカラオケ大会で優勝したよ。最近は、どこに救急車が止まった。ここら辺は若い人はいなくなった。独居老人が多くて、おかずを作って持って行ってあげた。などなど。

ここまでくると、通話時間は小一時間を超えている。携帯電話の充電残量も気になってくる。私は、カープトラップにまた引つかかったと後悔を始める。カープの話かと思えば祖母の語りだったとは。そこで、適当に相槌を打つと、「あんな人は人の話を聞いていない。いいよ。もう切る」と祖母は怒り始める。だから、私は心を込めて相槌を打たなければならぬ。

以前、私が祖母と一緒に住んでいた頃、祖母は友人との長電話を切り上げた時、私に玄関のピンポンを押してこいと合図した。私がピンポンと押すと、祖母は、「あらあら、お客様です。すみま

せん。では、またね」と電話を切って舌を出して見せた。私はこのテクニクを祖母に使用してやろうかと思ったが、バレルのでやめる。こうして、為す術もなく、私は祖母の話聞き続ける。

先日、私は携帯電話を変えた。通話プランを選ぶ時、祖母の顔が浮かんだ。そして、迷わずかけ放題のプランに丸をつけた。私は、祖母以外に長電話をする相手はいない。しかし、また懲りもせず祖母のメールに釣られて電話をかけてしまうだろう。電話越しの祖母の聞き慣れた広島弁や笑い声を思い出す。

今から四年前、私は結婚を機に、知り合いがいない浜松での慣れない生活が始まった。その頃から習慣になった祖母との長電話に、どれほど私の心は支えられていたかに気づく。

祖母にこれからあと何年電話をかけられるかわからない。元気な祖母も、年相応に年々弱ってきているからだ。近い将来、長電話ができなくなる時、私は祖母とのこの長電話の時間をたまらなく懐かしく想うだろう。

(浜北区)

『市民文芸賞』

貴い陽のしたで

白井聖郎

息子が天に帰ってから、ひと月が経った。たったひと月しか経っていないのに、再び馴染んでいく日常生活に、一抹の寂しさを感じてしまう。

出産予定日より三か月早く産まれた息子は、体重が七六四グラムという超低出生体重児だった。当然入院をしていて、毎日保育器の外から眺める日々だった。

未熟児ゆえに幾つもの病気があり、そして持病として、致命的な心臓病があった。人工呼吸器や何種類もの点滴で命は保たれていた。心臓の手術を行い、腸の手術も行った。体中の血が入れ替わるほどの出血だったという。それでも息子は、それらを乗り越えていた。

一進一退を繰り返していたが、とうと

う主治医から「元気な姿での退院ができない」旨を伝えられた。それを承知の上で、命がけの腸の再手術を行うか、あるいは看取るかという選択になった。手術を行っても腸が治るかどうかはわからないこと、また危険な手術のため術後に命をなくす可能性もあることを伝えられていた。さらには数か月後には心臓の再手術も控えていた。腸は産まれて一度も機能していなかった。

心臓や腸だけではなく腎臓もかなり弱ってきていて、日本では未承認の薬を、複雑な手続きをした上で海外から取り寄せるという話もあった。

産まれてきたときは、不安と喜びがあった。暗闇の奥にはしっかりと光が見えていた。しかし、容態の悪化につれて、

希望はしぼんでいた。初めのうちは、元気に退院することを信じて疑っていなかった。それが、後遺症があったり、自宅療養でもいいから退院してくれればいいと願うようになり、いつしか、命さえあればいいと祈るようになっていたのだ。

ただ、病状は一進一退を繰り返しつつなだらかに悪化していたのだ。

左わきの下には心臓の手術をした跡、腹部には横一線に腸の手術をした跡、そしてさらに体内のガスを取り除くための管や、人工肛門も腹にはあった。

私と妻は、看取ることで一致した。息子はもう充分に頑張った。これ以上は、貴陽の体が持ち堪えられないかもしれない。いや、貴陽を心配する自分たちの心が耐えられなくなっているのかもしれない。かかった。

吹っ切れたわけではなく、迷いはあった。だからこそ、残された時間を、有意義に使うことが、自分たちのそして、息子ののためにもなるのだと思うようにした。

緩和医療に切り替えてからは、抱っこ

もでき、入浴もできた。当時四歳の娘との面会もできた。NICU（新生児集中治療室）へは衛生管理上十六歳未満は入れないのだが、緩和医療にしたことで、個室に移動しての面会が可能になった。

家族四人のお揃いのハンカチやペンダントを作り、通常通り産まれていれば揚げるはずだった浜松祭りの凧も、小さいサイズの物を買って保育器に飾った。

日光浴も希望として病院側には伝えていた。そして日光浴をする日の朝に、病院から息子の容態の悪化を告げる電話があった。私は息子の容態を気にして躊躇していたのだが、主治医の判断で、日光浴は行われた。

そしてその日、息子は息を引き取った。妻の腕に抱えられながら。

息子にしてやれることは、すべてしてやれた。それは私たち夫婦の心の中で、密やかな満足ではあった。毎日見舞いにも行つた。悔いはなかったのだ。もし再手術に踏み切つて命を落としていたら、ゆっくりと家族四人の時間を過ごせなかつたに違いない。娘との面会も、日光浴もできなかつたかもしれない。そう思うことで、私たちの判断が間違っていないかと思つていたかつた。事実、死亡後の解剖で、未熟児の上に珍しい心臓病だったために、現状助けられるものではなかつたようだった。

一晩だけ、家で息子の亡骸と一緒に寝た。いつもは家族三人で川の字になって寝ているのだが、その夜だけは、私と妻の間に娘と息子を並べて寝た。最初で最後の四人での夜だった。

親族だけで簡単な葬儀を終えて、私は脱力感に覆われていた。来る日も来る日も、酒を飲んで泣き、写真を見ては泣き、思い出しても泣き、外で赤子を抱いた見ず知らずの人を見ては泣いていた。

悔いはないとはいへ、やはり心残りはある。そして何より、記憶が薄れていくのが怖いのだ。家で一緒に暮らしたこともなく、思い出の量も絶対的に乏しい。すぐに立ち直つてしまい、そんなもの怖しさの中にうずくまっていたいのかもしれ

れない。

息子が天に昇つてから、三人で毎朝線香をあげている。娘は、私が般若心経を唱えているのを何度か聞くうちに、ひよんなどきに鼻歌で歌つたりもしている。娘は娘なりに弟の死を理解していて、産まれてきた息子と同サイズのクマの人形を、毎晩抱えて眠っている。そして星を見上げては「あの星だ」と言つてもいる。

幼稚園や家で作つた折り紙や絵を、息子の祭壇に置く姿はいじらしい。供え物のお菓子や果物を早く食べたくて、食べていいかを毎日聞いてくる姿も愛らしい。

火葬場では残された白骨は余りにも少なかつた。両手もあれば十分に収まる量だった。娘は骨だとは知らずに、「これは何？」と尋ねてきたものだ。「これはね、お星様になつたかかはるくんの、星屑のかけらだよ」と言つておいたのだが、もう少し大きくなつたら、また自分なりに弟の死を、命を、考えていくことだろう。

そしてそれは私たち夫婦も同じこと

だ。たった二か月と十日。妻の腹の中に七か月いたとはいえ、息子の命は短すぎた。これから先、一緒に過ごした命の長さよりも、はるかに長い時間を、息子を意識しながら生きねばならない。

夢なら夢でもいいので、毎晩息子には会いたいのだが、どうやら息子はあつちの世界で忙しいのだろう。一度しか会えていない。それは妻も同じらしい。

短い期間の中でも、私たちはしっかりと息子に愛情を持って接してきたと自負をしているし、幸せな時間を持てたと思っている。まだまだ引きずったり、下や後ろを向いたり、思い出すというよりもそれ以前に忘れることがないのだが、それでも日々の生活の中で妻とは他愛のない会話で冗談も言えるようになった。

あつという間だったひと夏の命。息子にすぐに会いに行くことはできないが、ゆつくりと命というものを、かみしめていきたい。

(中区)

「市民文芸賞」

縁側

十二年前、定年を機にそれまで住んだ家売り、退職金やらなにやら一切をつぎ込んで家を建てた。年金生活に入るのに無謀じゃないかと言う人もいた。親から土地を分けてもらえる身分でもないのにどこにそんなお金があつたのかと出所を怪しむ人までいた。「いらんこん」である。十五歳から働いたから中卒特例で最初から年金は全額もらえたと、とにかく定年まで勤めお世話から額は別として退職金も出た。

家について一つだけ妻が希望を言った。縁側が欲しいというのである。もう一度家を建てようとは元々妻が言い出したことであり、私には特段の考えも無かったから「それも良いね」と言った。

仕事に苦しみ、堪まらず四〇代も終わ

犬塚賢治郎

頃に辞表を出したことがある。あの時はひどく叱られた。「こんなものは要らん、君の首を切るのはオレだ。君自身では無いんだぞ。偉そうな事を言うな」と突っ返された。「一体働くということをするはどう考えているのだ。働くというのは、飯を食っていくという事じゃないのか。家族を養っていく事じゃないのか。家族を路頭に迷わせてそれでいいのか。その覚悟があるのか。何が辞表だ、偉そうに」。それで終りだった。確かにボールは向うの手の中であつた。

経営者が代った五十三歳の時、会社都合の退職金を二割増しで払うという条件で希望退職の募集があつたが、もう離職だの再就職だの面倒な事はできないし、大学に通う息子二人がいて冒険はできな

い。給料三割カットのリストラを受け入れて勤続四十一年、定年退職した。

家があり縁側が今ここにあるというのは、件の上司の説論みたいな叱責のおかげだとも言えるのだが、「働く」という言葉の重みで簡単に折れてしまった苦しい思いがまだ残っている。

五尺と二間の縁側は板敷の客間であり、客は自分たちである。妻はいつもそこで新聞を読む。私は新聞の切り抜きをする。本の書き抜きも此処でする。

柔らかい床材を張ったので、机の脚でじきに傷がついてしまったが余り気にしていない。夫婦の終の棲家の庭には手当たりしだいに花木を貰ったり買ったりして植えた。これがみんな育って少し慌てた。断捨離とか終活とかと反対の方向に來てしまった。まあその時は「誰かがなんとかしてくれるさ」と思っている。縁側からは、ひめこぶし、梅、山茶花、どうだん、キンケイに山ぼうしなど四季にわたり花見ができる。その花を突つきにメジロが現れセキレイやモズまで来る。今年は秋というのにヤマシダレザク

ラに花がついた。

夏は星見、秋はお月見、航空祭のヒコ
ーキ見も寝ながらできる。

正月は縁側で二人だけのかかるたとりをする。読み人がいないのだから交互に読む。お手つきだのなんので他愛もなく笑いあう。妻には勝てたことがない。去年から新古今集を読んでいるがこっちも妻に追いつけない。

母はこの家の上棟という前日に亡くなった。ずっと街中でひとり暮らしをしてきて、冬になると陽が当らなくて寒いつも愚痴を言っていた。もしここで暮らしたら何と言うだろうか。「こんな寂しいところは厭だ」きつとそういうに違いない。義父が遊びにきたときは座椅子にもたれて肩まで毛布を掛けて居眠りを楽しんでいた。今は私がそうしている。明日戦争が起きるかも知れないのだからあくせくしたって仕方が無い。

冬の陽がさしこむ縁側で落花生の殻むきをする。「榎山節考」の世界にどっぷり浸って日暮れを楽しんでいる。

(西区)

「入選」

覆水盆に返らず

西尾わさ

私が住んでいた町の神社の例祭は、十月十五日と十六日。毎年お赤飯を炊いて神仏にお供えしてから家族で頂いていた。しかしその年、私は体調が悪かったのでお赤飯を炊かず、町内のお店で少しだけ買うことにした。

そのお店に行くと、ひとりの女性が太巻き寿司を買っていた。女性が帰った後、私が店員さんに「最近では便利なお店がたくさんあるから家でお寿司を作らなくなったみたいね」と言うと、「家でお寿司を作るなんてバカみたい！」と店員さんが言った。

私はびつくりした。「バカですか？私はいつも家でお寿司を作っていますよ」と言いたかったが、角が立つと思っでぐっとこらえ、お赤飯だけ買って帰っ

た。なんてことを言う人だろう。そういえばこの店員さんには以前にも失礼なことを言われたことがあった。

何日か後の夕方、このお店の前を通ったら本店の奥さんがお店番をしていた。

私は思いきって先日の店員さんのことを聞いてみた。すると奥さんは「まあ、私どもの店の者が何か失礼なことを言いましたか。本当に申し訳ありません。実は他のお客様からも苦情がたくさん来てまして」と本当に困ったようすで謝ってくださいました。その店員さんはけつして悪い人ではないらしいが、つい余計な口をきいてしまい、人様の気分を悪くすることがあるのだと言う。

このことがあって、私はある言葉を思い出した。「覆水盆に返らず」。平成八年に亡くなった義兄の座右の銘である。亡くなる二年前に義兄はこの言葉を色紙に書いて私にくれた。私はそれを義兄の形見として額に入れ、掲げてある。

数十年前、義兄は姉と結婚し、実家の養子となった。その時、義兄は母親から「養子に行ったら言葉に気をつけるよう

に」と言われ、「覆水盆に返らず」と紙に書いて渡してくれたそうである。

義兄が実家に来て私が嫁に行くまでの四年間、一緒に暮らしたが、義兄は本当に無駄口をきくことはなく、父や姉と争ったことはただの一度もなかったと思う。義兄はきつと母親から貰った「覆水盆に返らず」を信条として大切にしていたのだろう。

似たような話で、ある著者の「余分、一言多い」という随筆を読んだことがある。そこにはこんなことが書かれていた。

「言ってしまった余分な言葉は、取り返しのつかないバツの悪さを感じずにはいられない。月にいちど兄弟で夕食会を開いているが、その日はあらかじめ出前を人数分注文してあった。すると一人の弟が目の不自由な娘を連れて来たので『あれ、ひとり増えたなあ』と口を滑らせてしまった。すると弟は『悪かったなあ、余分なのを連れてきて』としきりに弁解していた。その後、夕食会は何事もなかったかのように終わって帰っていったが、余計な一言で若い娘さんの心を傷つ

けてしまい本当に申し訳なかった」という内容だった。

まさに「覆水盆に返らず」である。義兄が母親から貰った座右の銘がいかに尊いか、心に残る金言かが共感できるお話だ。

そういえば私自身も両親から貰った言葉がある。幼い頃、「親の意見となすびの花は千にひとつの無駄がない」「親の意見と冷酒は後で効く」などの言葉を聞かされ、大家族の夫の家に嫁いでからはずいぶんと役立ってきたように回想するのである。

私は今年の八月で米寿を迎えた。いましみじみ顧みて思うことは、親として三人の子供たちにどんな戒めを残してあげられるだろうかということである。

私は六十五歳までずっと家で洋裁の仕事をしてきた。子供たちは、むかし私が徹夜でミシンを踏んでいる姿を見るたびに「けつして悪いことをしてはいけない」と思った」と言ってくれる。どうやら心に響く後ろ姿は残せたらしい。

しかしできれば何か言葉を残してあげ

たい。紙に書いて渡してあげられる「素敵な言葉」を。それは何だろう。「覆水盆に返らず」か。いえそれは義兄のもの。やはり私の人生経験からにじみ出る、私自身の言葉がいい。

頭をひねってもいまずぐには思いつかないが、まあいいではないか。人生の幕引きまでまだ十年以上あるとして、それまでにゆつくり考えてみよう。百歳まで生きれば、「何か素晴らしい金言」が自然に湧いてくるものと信じて。

(西区)

「入選」

二足のわらじ

周東利信

私は新聞配達をしながら、劇団活動をしている。いわゆる二足のわらじをはいている。劇団の名前は劇団「松ぼっくり」浜松。知名度がないので、ジャンパーやTシャツに名前を貼りつけて、宣伝の為にそれを着て配達している。

皆さんが読む朝刊は、個人差はあるが、午前三時頃から配り始める。出勤する前に読んでもらう為に急ぐ。月や星が出ている日ばかりではない。当然暗い。つま先も見えない暗闇の中の配達になる。闇は人を創る。誤配不配のないように、集中力は維持していなければならぬが雑念が入る。むしろ雑念の方が多い。この状況は、私が永平寺で参禅した時に似ている。配達禅ともいえるだろう。暗いのでなにも見えないが、そんな

中でも見えるものがある。それは自分だ。己れというものが見えてくる。自分との対話で己れを知ることとは、暗闇は、自分を写す鏡といえるだろう。

毎日、朝刊と夕刊を配達しているのでその間の昼間を利用して公演している。

公演の内容は、「山頭火その世界」と題して、山頭火の人生を辿りながら、山頭火の残した自由律俳句を、知らない人達に知ってもらう為の初級入門編。一人語り風朗読劇という形で進めてゆく。基本四十五分だが、希望に応じて、三十分迄短縮している。

山頭火という人は、五十八歳で、四国松山の一草庵で脳溢血で倒れ他界している。熊本の禅寺で出家した後、曹洞宗の雲水姿で、行乞の旅に出ている。

旅の中で創った句で、七冊の句集を出した後、七冊をまとめた一代句集「草本塔」を出して、それを俳句仲間へ届ける旅が最後の旅になった。人生の大部分を旅で過ごしている。

私の好きな句に「うしろの姿のしぐれてゆくか」濁れる水の流れつつ澄む」ま

「つすぐな道でさみしい」などがある。どれも人の生き方を示唆しているようで、人生哲学を感じる。

劇団を立ち上げて良かった事がある。それは、新聞配達をしているだけでは、決して知りあえない人達に出会えることだ。

今迄私の中になかった新しい知識が得られることで、新鮮な毎日を送ることが出来る。この刺激のおかげで心が元気になる。そして、小さな出来事に悩まなくなつて、流せるようになってきた。相性のいい人、悪い人がいるのは当然だが、あまり区別をしなくなった。このことは、日常生活を大きく変える。世界が広がる。

劇団活動に必要なものを揃えたり、創つたりするのに時間がかかる為、毎日時間を無駄に出来ないことがいい方向に出ているのがうれしい。常に体内から沸き立つ力を感じる。この状態を私は成長としてとらえている。頭の中は何時も公演の仕方をどうするか、語り方は今のままでいいのかと自問自答している。

それにともなつて知識欲も出て来て、何でも知りたがる。そして仕切りたがる。最近はいれで本を読んで知識欲を満たしている。私はこれを、便学と称している。

そんな時、次のような詩と出会った。「女あり、二人ゆく、若きは麗わし、老いたるはなお麗わし」。この詩を読んで、心底詩人になりたいと思った。視点を少し変えるだけで物事は違つて見える。

このことをサイコロで説明を試みる。サイコロは、一方から見ると一つの数しか見えないが、少し上から見るとサイコロの全体像がわかる。世の中を美しく見る鍵を見つけた。

しかし、すぐ詩人になれるわけでもないから、感性を磨くように心掛けていく。とはいってもどう磨けばいいのかわからないが、物をよく見るようにしている。穴があくほど見つめる。見ているうちに心が少しづつ動き始める。だが芽ばえた感情の多くを風が吹き飛ばしてしまふ。今だに成果はわからない。

私はすぐにこの詩の作者をネットで検

索して、本を三冊購入した。

名前はウォルト・ホイットマン。アメリカの詩人。印刷工をしながら詩を書き始めたらしい。南北戦争の時は、南北の兵士の区別なく救護活動をした人だ。

何冊か出版しているが、詩集のタイトルがみんな「草の葉」になっている。買った本で目的の詩の部分を探しているがまだ見つけていない。

現代の詩のように短いセンテンスを連ねるような形になっていない。いわば散文のように書いてある。詩の原型といわれる所以だ。

ウォルト・ホイットマンとの出会いも劇団活動を始めから、色々な物に興味を持って接しているからと、生来の好奇心の強さのためものだろう。

新聞配達をしながらの公演活動も二年になる。多くは、各町の協働センターの実習室か老人介護施設で公演している。公演のたびに反省点が多くある。完成度を上げる為に必要な作業をくりかえしているのだが成果が上らない。私自身にプロデュース能力が欲しい。今年は、月

一回のペースで公演出来た。

劇団員は、妻、長女、その旦那と私の四人で、それぞれ仕事を持っているので、調整が必要だ。これまでなんとかやってきている。

来年は、自由律俳句界の二枚看板の一枚、尾崎放哉編をまとめて見ようと思っている。

(東区)

「入選」

愛する自転車

サルルンカムイ

私は昼間しか自転車に乗らない。

ペダルを漕いでも漕いでも灯りが点かないからだ。

加えてベルは鳴らないし、三段切り換えの変速ギアも壊れたままだ。おまけにサドルが縦にはぜていて、座るとお尻が痛い。

しかし、十五年も前に購入したこの自転車、私は粗大ゴミに出す気になれない。その理由の一つは、ブレーキがとても良く利くからだ。

ある日、古本屋で買ったミステリー本や詩集を、前のカゴに入れて走っていると、突然、制服の二人のお巡りさんが現れた。

キー、私の自転車は急ブレーキで止まった。住所と名前を聞かれた。答えると、

お巡りさんは無線機のスイッチを押し、「どこどここのだれだれ、ただいましょくしつちゅう！」と報告した。私は自転車の盗難防止登録番号を告げた。まもなく

無線機から「がいとうしゃあり、いじょう！」。どうもお巡りさんは、自転車の後ろに張ってある赤い光の反射テープを、女子高校の校章と見間違ひ盗難車と思つたらしい。私が二人の所属と名前を尋ねると、警札だけをして去って行った。

又、ある真夏の夜、私は自転車で堤防を走って自宅に向つていた。だいぶ酔っているという自覚はあつたものの、川を渡る風が昼間の暑さと酒の火照りを吹き飛ばしてくる気がして、思い切りペダルを漕いだ。

突然体が浮き、回転して投げ出された。ガーン！左の肩に激痛が走った。

頭は大丈夫らしい。左肩から腕にかけて、痛くて痛くて起きあがれない。どの位横たわっていたのだろうか。少しだけ首を捻って振り返ると、倒れた自転車の後方に、高さ五十センチ、幅一メートル程の車止めが見えた。これにぶつかつたのだ。

自転車なら三分程の夜道を、一時間半程かかって家に辿り着いた。

夜間救急病院でのレントゲンの結果、左鎖骨の複雑骨折と診断された。

「手術をすれば完治まで三か月位かな、担し夏なので化膿するかもしれないリスクがあります。手術をしないで自然に骨がつくのを待つ場合は、早くても一年はかかると思います」当直医師の説明だ。私は一寸考えて手術をしないで自然治癒を選んだ。

翌朝、娘が持ち帰ってくれた自転車は、前輪が少し歪んだだけだった。

「お父さん、お酒を飲んだら自転車で乗らないと約束してネ……」私はこの一言が身に染みた。

左肩をギブスで固めて一年半、ケガはようやく治った。

今夜も一杯やってタクシーで帰宅すると、軒下の防犯用センサーライトに、前輪が少し歪んだままで錆びついてきた自転車が、照らし出されていた。

明日もこの自転車で乗って、ラジオ体操に行こう。

(南区)

「入選」

バスに乗って

吉岡 良子

町はずれの海岸沿いに住んでいるので毎日が静かだ。全国的な少子化と重なり、ひと頃たくさん住んでいたブラジル人が景気悪化のため帰国してしまった。また東北大震災のときから海岸近くの人たちは山側へ移り住むようになってきたのだろうか。ともかく、三十年のあいだにこの地域は人口が減り続けてきているのである。今では小学校と病院がそれぞれ統合されて遠のき、何軒かあった商店もいつの間にかシャッターを降してしま

った。すっかり人影の少なくなった通りに、しかし路線バスだけはやって来る。ゴロゴロとその音だけが町内に響くようである。これが残る住民の頼みの綱だ。今のところ私は車に乗って仕事も買物もすま

せるけれど、たまにこのバスのお世話になることもある。

朝夕は通勤通学の乗客はあるだろうが日中はまばらなもの、それも中高年がほとんどである。中心街まで三十分はかかるから、乗り合せた人はそのまま話をすることもある。

先日、近くの席に座った二人連れのご婦人の会話に耳を傾けた。八十代の人たちだろう。

バス代もばかにならん、と言いつついる。往復七百六十円の距離である。

「私はね、それだけあれば三食いけるよ」「わかった、あなた五百円の宅配給食をとるんでしょう」

「そうなの。それをね、昼と夜に二度に分けて食べるのよ。朝はどうにでもなるからさ」

なるほどそういうものかと聞きながら感心する。ビールだ枝豆だと大騒ぎすることのない暮しもあるわけである。昔ハーマニカ工場に働いていたという方のおばさんはハーマニカの良さを語っている。

「いろんな童謡を吹くのよ。風流なもんだに。ボケ防止になるし安上りだし、いい気持よ。でもね……」

たまたま夕暮れどきだったりすると音色がさびしく感じられて、涙が出ちゃうんだそうである。

また別の日は同年代の人と乗り合せて。その人は老いた母親の介護で悩んでいる。老人施設にようやくはいれたのに、おばあさんは家へ帰りたいと毎日泣くのだそうである。気の毒になってしまい、いっそ自分の所で引き取るうかと思つている、と。私もちよつど認知症の母を見舞おうとバスに乗ったところだったので、身につまされた。ここはもう一番、考え直した方がよいと思う。私たちがつてすぐに七十歳なのだから介護でさる時間に限られているのだ。バスの騒音に負けまいと、二人で額をくつつけて感想や助言を交わし合う。短かい時間だったが何だか力が湧いてすっきりした気持になる。ありがとう、さよなら。

そしてまた別の日、旅先でのこと。大きな荷物を抱えたおばあさんと一緒にな

る。食料品のまとめ買いをしたらしい。まあ大体、お物業が多いけどね、と言う。

「それであんた、どう思う？ ほうれん草のお浸しを冷蔵庫に入れておくとか何日もつか。この間ためしてみたらね、一週間は大丈夫だった。ということは添加物のせいかね。よほど使つてゐること？」

「おばさん！」

私はかんかんになって怒つた。

「そんな古いもの食べちゃいけない。添加物だろうが防腐剤だろうがそんなことはどうでもいいの。賞味期限を見なさい。自分の鼻や味覚だつてあてにしてはだめ。もし病気になるたらどうするの」ときつく説教する。この人の冷蔵庫の中は一体どうなつてゐるかと、ついて行つて掃除してあげたくなるがぐつとがまんする。先を急ぐ私は、目をパチクリさせている彼女を残して止むなく下車してしまつた。

中高音の話題はユーモラスだけれど、どこか切ない。バス停でお別れしている二人が声をかけ合い、

「元気でいようね」

「もうダメよ、半分死んでるもの」と交わしているのを聞いて思わず吹き出したこともある。

旅もよいが新幹線や飛行機の中ではこんなめぐり合いはない。過疎な町に住んでいる人はバスを頼りにし、人恋しいからすぐに誰とでも話し込んでしまう。そして少し救われることもあるのだ。こんな繰り返しも悪くはないかもしれない。今日もまた路線バスは低い音をたてて、ゴロゴロとやってくるのだ。

(南区)

「入選」

母の一張羅

中津川久子

昭和三十年代、小学生だった頃のアルバムを開いてみた。じとーっと湿気を含んだ感触と、カビ臭が入り交る。

私はこのカビ臭が好きだ。実家の押し入れの匂いや、蚊帳の匂いにも似て、私を幼い日に戻してくれる。

我が家のカメラマンは、もっぱら兄だった。兄は念願のカメラを手に入れたばかりで、私をつかまえてはシャッターを切っていた。

「ひさこ、ちょっとそこへ立ってみ」

「わーい、写真だ写真だ」

「うーん。もうちょっと後へ行ってみ」
遠足の朝にパチリ、初めての浴衣にパチリ。川あそびから木登りまで、一瞬がそのまんに止まっている。

両親との写真は数少ない。まだカメラ

が普及していなかったからでもあろうが、食べていくのに必死だったと思う。

頁をめくっていくと、元旦の家族写真を一枚見つけた。たぶん、兄の強い勧めで撮ったのだろう。おもしろいことに、新品の耕耘機がでーんと主役の座にあり、私たちは主役を囲むようにしておさまっている。兄の演出だ。

百姓の跡取りにとつて、耕耘機は憧れだったはず。兄はもちろんのこと、我が家にとつても初めてやってきた「マイカー」に、みな浮き立っていた。

正月というのに、父は相変わらずのしかめっ面。母は前髪をふつくらと丸め、指先を耕耘機の頭に添えている。お気に入りの仕草か、身体をやや斜めにしてきれいに写っている。

が、足元に目をやると、穴の空いた足袋から親指がのぞいているではないか。兄の呼ぶ声に、急いで髪だけ梳いて飛び出してきたのだろうか。

そのほかは、私と母で占められている。参観日に出かける母、婦人会の旅行に発つ母。入学、卒業式当日のツーショ

ット。いまも残っているのは兄のおかけだ。

母の写真を見ていてふっと気づいた。正月の写真もそうであるが、法事から入学式まで、どの場面でも深い緑色の上っ張りを着ていることだ。もつとも、白黒写真なので真つ黒に写ってはいるが、色の記憶は定かである。

驚いたことに、中学の卒業式でも同じ格好だ。よく見ると、幾人かの母親たちも申し合わせたかのようにである。さすが、式典とあつて着物姿でおめかしをしているが、やっぱり、そろいの上っ張りである。

そうだ、鮮明に蘇ってきた。あれは婦人会で揃えたものだ。当時、どこでも婦人会が盛んで、色も統一されていた。つまり制服なのである。

制服の丈は膝まであつて、袖は大きくゆつたりとしている。着物の羽織り替わりになつたり、洋服のコート替わりにもなっていたようだ。真夏をのぞいて、年中着ていた気がする。

少なくとも母にとつては、いつでも、

どこにでも着ていける重宝な上っ張りだったにちがいない。逆に言えば、よそ行き着はこれひとつだったのかも。まさに一張羅なのだ。

無理もない。星が残っている間に野良に出、星を仰ぎながら帰る暮らしに、よそ行き着はぜいたくだったのだろう。

「俺はなあ、十円にもならん仕事を毎日やっているが、ひさこが恥づかしい思いをしないようにと願うからだよ。末は、嫁入り支度もめいっばいやってやりたいし……」

そう、つぶやいていた父はすでに五十半ば。人生五十年と言われていた時代だった。頑張り屋の父も老いが目立っていた。

「十円にもならん仕事」は、私にはまだ理解できなかった。それよりも、十円の小遣いが貰えるかどうかのほうが、ずっと大事に思えた。

「あなた、きょうは遊ばせてもらいますけに」

「ああ、遊んで来いやれ」
ときどき、こんな両親の会話を聞いた。

母は、まるで小学生が先生にいいわけをするような口調で、父の顔色をうかがっていた。

野良に出られない日を、遊ぶ、と言っていた。それが婦人会の集まりであれ、子どもの参観日であれ、公のことにまで家長や世間の目を気にしていた時代である。

遊ぶ日だからといって、一日のんきにしているわけではない。時間いっぱいまで畑仕事をしてから出かけ、用事が済めばすぐに戻るといふ具合だ。

そんなわけで、野良着の上に急いで羽織って出かけることも多かった。

「ボロ隠し、ボロかくし！」
舌をぺろっと出して、首をすくめていた姿を思い出す。

あの緑の上っ張りは、母の強い味方であったことは確かだ。

(南区)

「入選」

朝顔との葛藤

白石清亮

その年二〇一一年は、日本中が大混乱した年であった。大震災に原発事故が重なって、夏場の電力事情も懸念されていた。みんなで知恵を出し合っただけの節電が必要であった。私が居間のクーラーを止めることを考え始めたのは、そんな年の夏の初めだった。

何とかして、日射しを遮ろうと、簾から始めた。だが簾では、窓の全面を覆いきれず失敗した。次は葦簀とらじにしたが、これは風の強い日には、巻込んでおかなければならず、その上すぐに変色して、惨めな色になってしまふので早々に諦めた。残った最後の一手が朝顔だった。これに賭けようときめた。

そして、そのゴワゴワした葉っぱが、見るからにいい日陰を作りそうな琉球朝

顔に取り組み始めた。その時から、しおらしそうな姿かたちをしていながら、随分と頑固者で意地っぱりな、この花との葛藤が始まったのだ。

私は南側の窓の外に、ひとマスが三寸角くらいの網を、窓いっぱいに張って苗を植えた。数日後には、もう蔓の先が網の縦糸をとらえ、巻きついてグングン伸びた。そこまではよかったが、苗を植えた場所によって、蔓の伸び方に差が付きはじめた。網の東の端は木蓮の木陰になるため、ここでは蔓の伸びが、ほかに比べてかなり遅くなった。

朝顔を植える目的は日影を作ることなのだから、均一に伸び均一に葉を繁らせてもらわなくてはこまるのだ。そこで、私は育ちの早い網の西側の部分から、何分の一かを、東へ斜行させようとした。蔓の絡みつきをほどこき、ひとマスずつ東のマスに移動させたのだ。

その時から、朝顔はとんでもなく頑固な奴だと判った。蔓がマスの縦糸に巻きつく方向さえも自分で決めていて、他のマスに巻き付かせても、その巻き付かせ

る方向が違っていると、その上のマスに伸びた時には、ちゃんと自分で向きを直しているのだ。

「生まれた時から、蔓はこつち巻きだあ」と生まれたばかりのくせに、その態度は生意気といったらない。

朝顔の意地っぱりな面はまだある。均一に繁らすために、日の当たらないマスに蔓を集めたら、そこに移された蔓の伸びは、ピタッと止まってしまふ。まるで、行きたくない方向に手を引っ張られて、駄々をこねている子供のようになってしまうのだ。

また、こんなこともあった。網の東側半分にある、伸びの遅い蔓に手を加えて、葉っぱの数を増やそうとした。その方法というのが、蔓の先端に糸を結んで下へ引っ張り、一本の蔓を一往復半させようとしたのだ。すると朝顔は、下へ向かって伸びるなど、とんでもない事とばかりに反抗した。

下を向けておいた蔓の先がUターンして、自分自身に巻きついて登っていきうとまでし始めた。

朝顔はその蔓を上へ上へと伸ばし、太陽の光が届く所まで伸びるように運命づけられていたのだ。また蔓は微かな重力の差と温度の差を探して、成長の方向を決めていたのだ。

もう二十年以上もまえのことだが、私がインドネシアに住んでいた頃、朝顔の二つの顔を見た。その一つは、ジャワ島北海岸の漁師町に咲いた朝顔だった。我々日本人の宿舍は、その海岸沿いにある工場の敷地の中にあつたのだが、その時も窓の外に日陰が欲しくて、朝顔を植えた。

しかし、これは失敗だった。そこは日当たりが良すぎたため、朝顔はこれ以上高く背伸びをしなくても、花を咲かせるのに充分と感じたのか、地上五十センチくらい伸びただけで、それより上へ伸びるのをやめてしまった。

どの部屋の窓の朝顔も、地上五十センチくらいの狭い窮屈な空間にギューギュー詰めの状態で花を咲かせた。

聞くところによると、朝顔の葉っぱを、庇までの高さには伸ばそうとしたら、

午後からの半日は、蔓の先端を黒いシートで覆って、日射しを加減しなければならぬのだそうだ。

日射しを遮るために朝顔を植えたのに、それを繁らせるために、日陰を作らなければならぬとは、思いもよらなかった。

もう一つの朝顔は、バリ島で見た朝顔だった。バリ島は小さな島なのだが、その中心部には三千メートル級の山があるほどの高原なのだ。そしてそこには、国内でたった一軒しかないといわれている、暖炉を備えたホテルがあるほどだった。だから、雨期の夜などは、バリ島の高原の冷え込みは相当なものだった。

そんなバリ島の高原に咲く朝顔は見ものだった。なんと、十メートルを越える木のとっぺんまで、蔓が伸びて花を咲かせていた。それは、まるで電飾で飾り付けをしたクリスマスツリーのような見事な景観であった。

このように、ジャワ島の海岸近くの朝顔は、日光と暑さが充分だったので、地上たった五十センチで成長を止め、花を

咲かせた。

だが、バリ島の朝顔は、どこまで伸びても日の光と暑さが不足がちだったのでも、絡みついた樹のつぺんまでも、伸び続けなければならなかったのだ。

朝顔を纏わる思い出にひたりながら、結局インドネシアでは、朝顔を使って満足のいく日陰を作ることができずじまだったと反省した。

それにしても、ウチの朝顔の頑固さ、我が儘さと来たらどうしようもないなと、呟いたりしていた。そんな時、ふと分厚い葉っぱの向こうに、一輪の花が咲いているのに気がついた。

私はこれまで、日陰を作ることばかりを考えていたので、朝顔の葉っぱのことが気にしていなかった。だから、朝顔を葉裏からしか見ず、花のことなどすっかり忘れていたのだ。私は、すぐ庭下駄をつっかけて、陽のあたる葉の表側にまわってみた。そこには、十数個の花が、忘れられていたことを恨むでもなく、健気に咲いていた。

ここまで教えてもらったら、私にも朝

顔のまっとうな主張が読めてきた。私が、朝顔は頑固者よ、我が儘者よ、と詰ったのは、とんでもないお門違いだったと気がついた。

朝顔の、一見我が儘に見えた行動は、自分に科せられた使命を果たそうとして、必死の行動だったのだ。素早く日向を求めて蔓を伸ばしたのも、いち早く自分の小さな花を咲かせようとしたのも、次世代へと命を繋ぐ、そんな自然界の目的のために懸命だったのだ。

朝顔には、人間のために、日陰を作つてやろうなどという、そんな大それたゆとりは、なかったのだ。

朝顔はそれどころではなかったのだ。

(藤枝市)

「入選」

生きてさえいれば…

松田 健

満開の桜、そして紅葉を、この先、後、何回、眺めることが出来るのだろうか……という年齢に達し、私は永年の封印を解いた。

遠い昔、十五歳の春に、生まれ故郷を離れて以来、半世紀もの永い間、自らの意思で全くの音信不通でいた、かつての同級生たちを、五〇年振りに訪ねる気になったのだ。

私は十五歳の春、某関西地方の地元の高校受験に失敗していた。老境に入った今となつては、それも天から与えられた試験だったのだと心の整理も付いてはいるが、思春期の当時は、それが悲しい怒りと共に激しい屈辱感となつて、同級生たちの前に二度と顔を出せなくなつていたのであった。

予告無し of 突然の訪問に、彼らは一樣に仰天、驚きの表情を見せたが、それでも快く歓待してくれて本懐を果たすことが出来た。

ところがこれが、自分では予想もしていなかった事態へと展開していった。彼らと再会を果たした後、彼らから小学校の三・四年次に自分たちの担任だったA子先生が、米寿を過ぎた今でも同じ郷里に健在で、私のことも、しっかりと覚えていて懐かしがっているのです、是非、手紙を送るようにと、何度も強く請われってしまったのだ。

何故、彼らが私の訪問を、わざわざA子先生に話したのか。それならば他の元教師にはどうだったのか。その辺りの事情は知る由も無かったが、元恩師とはいえ九〇歳近い老女が、私のことなど覚えていた筈が無いと、最初はその要請を完全に反故にしていた。

しかし、暫くすると、また催促がきた。それで流石に私も、応えざるを得ない気持ちになつて、当時のことを回想してみた。すると、たしかに私には、当時、明暗そ

れぞれに強烈な出来事があった。そして、もしかすれば彼女も、その事を印象深い記憶として、未だに覚えてくれていたのかも知れないと思いつたのだ。

★

私なりに、まず「明」の場面として捉えられるのは、小学校三年生の時、初めて受けた知能検査が学年三クラスで、突出して一番の成績だったことである。また、ちよūdそその時、開校百周年の記念式典があり、前身の藩校時代から含めた母校の主な出身者の筆頭に、B女専（現大学）の元校長で、日本の女子教育界の先駆者の一人と謳われていた私の大叔母の名があった。

大叔母は生涯独身だったため、最晩年は甥に当たる私の父の家に身を寄せ、私たちと同居していた。私が小学校に入学する直前には逝去していたが、そんなことがA子先生の記憶にも残っていたのかも知れないと思つた。

だが、その一方で、私には「暗」の部分で、もっと気まづくて大きな事件があった。私は毎回、決まって学級費を滞納

する問題見だつたのだ。恩師が半世紀以上も昔の私のことを微かでも覚えてくれていたとしたら、むしろこの件の所為だったのかも知れない。

思い返すのも辛い話だが、それは私が四年生になった時のことである。父親の事業が突然、立ち行かなくなり、大きな負債を抱える生活に陥った。ある日、学校から帰ってみると家財道具の全てに赤札が貼られていた。そして翌日から、それらの物が次から次と家の中から運び出されては消えていった。逆に宅配の牛乳や新聞は一切届かなくなった。

それ以来、わが家の家計は唯一、町の保育園に保母として勤め始めた母親の給料だけに頼っていた節があり、夕刻、疲れ切った顔をして帰宅してくる、そんな母に、私は学校からの大事な連絡事項を、どうしても切り出せないのだった。父親の帰宅は毎日深夜で、私と少し歳の離れた姉、兄たちも、既に都会に出て家にはいなかった。その為、何時も夕食は、ラジオの音さえも消えてしまった暗い居間に、母と二人きりだった。

連日、粗末な夕食になってしまったが、それでも好きな母親と密度の濃い時間を過ごせるのは、末っ子の甘えん坊だった私にとっては、至福の一時でもあった。この時、何でも話せる機会があった筈なのだが……。

とうとうある日、私の滞納が発覚した。この時、好きだった母から、特段、烈火の如く激しい叱責を受けた。この日以来、私は一時期、耳が全く聞こえなくなってしまうた。

私は早速、この時のことを謝罪し、その後の半生を綴った手紙を、元恩師のA子さんの元へと送った。

★

やがて十五歳の春、郷里を追われた私は、関西某市の町工場で働きながら、夜間の定時制高校だけは、何とか卒業を果たし、その後は各地を転々とさすらう日々となった。

そして二九歳の時、縁あって東京から浜松へと移住して来て、放浪生活にピリオドを打った。こんな私でも、唯一、心の拠り所としてギターだけは得意として

いて、浜松でピアノとエレクトーンの講師をしていた現在の妻と知り合ったからである。

彼女は五つも年下だったが、まるで身元引受人みたいな形で、私を受け入れてくれることになった。また就労させてもらった事業所の理解ある経営者にも恵まれた。彼らには俗評を超越する包容力があり、私は幸い、そんな彼らに支えられながら新天地で黙してさえいれば、買われることはあっても、辛い過去を詮索されることは無かった。

現に低学歴に拘らず、当時、最先端技術だった情報処理の仕事を、社内の大卒者、工業高校出身者たちを差し置いて任され、厚遇してもらえたので、人並みに家を構え新しい家庭を築くことも出来た。

★

恩師への手紙には、私よりも更なる高齢に気遣い、返信は不要と付記していたが、短いながらも一字一句、実に丁寧に手書きされた手紙を返してくれた。そこには、——手紙をありがとう。感動しました。感激で涙が止まりませんでした

「入選」

鉄の恩義

一木 一郎

……と、書かれていた。
幸い、その後、実家の方も徐々に再興を果たし、母は何時の間にか園長にまでなっていたし、その後、考古学の研究に活路を見出していた父も、たたら（古代製鉄）の分野で、全国に名を成すまでになっていた。

更に遣伝子工学に携わっていた兄が、次々と新しい酵母や新薬の開発、研究に成果を挙げる学者になっていた。こんな父や兄の活躍は、郷里では、かなり知られる存在になっていただろうと推察できる。

その反面、地元の高校受験にさえも落第し、その後、消息を絶っていた私の末路は、あまりにも悲惨なものではないかと、A子先生や旧友たちは、永年、心の隅で心配してくれていたのかも知れないと、新たに思い至った。

また、これを機に「生きてさえいれば……」と、悩める男を慰めてくれて、私自身の再生を手助けしてくれた、浜松の懐深い人々への感謝を、改めて思うのだった。

(北区)

子犬は、捨て犬であった。

私が勤めていた職場は、河川の中州にあり、住宅地から離れているせいも、犬がよく捨てられる所であった。

腹を空かして、ふらふらと迷い込んできた子犬を学生たちが可哀そうに思い、学校側に隠れて飼っていた。学生たちは自分の食事を与えていたようである。

職場は、職務に必要な教育、訓練をする全寮制の学校であった。

校則に違反する行為のため、所属長としての私は黙認するわけにはいかなかった。

さりとて役場に連絡すれば、殺処分される運命の子犬、結局、私が家で飼うことにした。

段ボールに入った子犬を妻と二人の息子は歓迎してくれた。

その日から、茶色で脚元が白い、雑種の子犬は、家族の一員となった。

名をどうするか、家族会議で、鉄道マニアの息子が付けた鉄道の「鉄」となった。

鉄は、ご近所から「丈夫そうな名前ですな」と褒められるが、芸は何も覚えなかった。

「お手」と言うのと、中途半端に手を上げる程度であった。そんな鉄であったが、妻は、鉄を人一倍可愛がった。

家族四人と一匹の犬の平凡で、平穏な日があったが、それはいつまでも続かなかった。

妻が癌検診で、レベルⅢの癌と判った。

妻も私も青天の霹靂のようなことに動転した。そのことを境に家族は暗転した。

次ぎの日から妻の入院生活が始まり、辛い闘病生活が続いた。たまに帰ってきた妻は、具合の悪い体にも拘らず、鉄を散歩に連れていった。

妻の病状は進んだ。秋の気配が感じられる頃、妻の最後の病室となった部屋の前では、古い病棟を壊して新築する工事が行われていた。重機で壊されていく様が、妻の病状と競い合っているようで、

あまりにも残酷であった。

そんなことを鉄は知る由もなく、いつものように食べ、私や息子に散歩に連れていってもらい、退屈すると犬小屋の床をガリガリと掻きむしっていた。

妻の病状は末期状態になり、妻の希望で、一旦家に戻って来ることになった。

車から降りた妻が、待ちかねたように「鉄ちゃん」と明るい声で呼びかけると、鉄は「アウー、アウー」と前脚を妻の膝にかけ、尾を振り続けていた。

短い滞在で、妻は病院に戻ることになった。

「鉄ちゃん、元気でね」自分のことも忘れ、鉄を心配して声をかけ、鉄にとってその声が最後の別れとなってしまった。

それから辛い闘病生活が三か月続いた後、妻は終に逝ってしまった。

病院の車でお棺に入った妻が家に帰ってきた。鉄は、犬小屋の前で脚を揃え、神妙な態度で出迎えていた。一番可愛がってくれた人が亡くなったことを、鉄は鉄なりに感じたのかもしれない。

その後、鉄はいつまでも犬小屋の前で、お通夜に参列するかのようになり、暗く

なっても座り続けていた。

葬儀は終わり、また、いつもの生活に戻った。そして歳月が過ぎていった。

二人の息子は結婚し、外で世帯を持った。

初老の一人の男と一匹の雄犬の男世帯の生活が始まった。

また、歳月が過ぎていった。鉄は老衰が進み、一日中、犬小屋でうずくまる日が多くなった。

私は、隣の禅寺で早朝座禅を続けていた。

四十五分の座禅、その後の般若心経のお勤めの日課であった。

静かな禅堂に時々、何かを訴えるかのような鉄の弱弱しい声が聞こえてきた。

その日もいつものように朝の座禅会に出かけた。鉄は相変わらず犬小屋の奥に丸くうずくまっていた。

「鉄、行ってくるよ」決まり文句のように声をかけ、出かけた。

空気が凍てつき、鼻水が出るような寒い座禅会であった。一時間程の日課が終わり、家に戻って来ると、おや？ 鉄が

犬小屋の前で、寒い中、きちつと座って出迎えてくれているではないか。何か、

いつもと違う様子を感じた。

「鉄、元気になったのか」頭をなで、気にかけることもなく、そのまま家に入った。

不思議なことだと思いながら、三十分程して鉄の餌を持って外に出た。

犬小屋の前で鉄が倒れていた。体を横たえ、四本の脚を突っ張るようにし、口の周りに泡があった。

抱きかかえると体は温かく、息絶えて間もない感じであった。

「鉄、どうした」揺さぶってみたが反応はなかった。やはり死んでいた。

半月前から一日中、うずくまっていたまま、立っても腰が抜けたようによろよろと倒れてしまった鉄が、今日はどうして座って出迎えてくれたのだろう。

鉄は死期を覚り、拾ってもらい、十数年飼ってもらったことに、最後の力を必死にふり絞って立ち、お礼を言いたかったのかもしれない、今生の別れを告げたかったのかもしれない。そうとしか思えなかった。

それは、亡くなった妻や私に対する鉄の精一杯の恩義だったのかもしれない。

(北区)

「入選」

私と夫とパソコン通信

田中喜栄子

私が初めてパソコンに出会ったのは高校の数学の授業でした。パソコンはとても高価で、無理を言って学校で買って貰ったように先生はおっしゃってました。それからの数学の授業はフローチャートを書く練習でした。パソコンの本体は現在のパソコンと随分違い、ディスプレイはなく大きな電卓のように思いました。YESかNOの2進法は当時文学少女だった私には味気なく、パソコンは私の人生には関係ないもののように思われました。

それから10年以上時はたち、当時私は将来夫となる人の家業を手伝ってました。家業を手伝うも、折りしも繊維不況の為、結婚資金が貯まりませんでした。見兼ねた私の父が、結婚資金にと50万円

というまとまったお金を私にくれました。そのお金で家を借り、私と夫は籍を入れただけの結婚をしました。借りた家からスパーへと向う歩道にはつつじが植え込まれていて、散歩するのにとても気持ちいい地域でした。

ある日いつもの散歩コースを夫と歩いてみると、旧国道沿いに変った造りの白い建物が目につきました。何の店だろうと中に入ると、見た事のない画像に見入りました。テレビでもない、多くのお客がさぞあたり前の物を見るように、その画面を見つめていました。その様子を見て夫はどうしてもパソコンがほしいと思つたらしく、夫のパソコン店通いが始まりました。でもその店のパソコンはどれも一式10万円以上で、私達二人の一月の生活費以上でしたので、私達には手の届かない物のように思われ、私は夫がパソコンをあきらめると思っていました。ところが夫はあきらめきれず、パソコン店通いをしているうちに2万円代と私達にも手の届きそうなパソコンを見つけてきました。それがMSXパソコンとの

出会いでした。MSXパソコンは、低価格を売りにしていたのでディスプレイはなく、テレビ画面を使用するため安く販売されていました。MSXパソコンは低価格なのにワープロ機能はもちろんグラフィック機能、はては作曲機能まで付いているというすぐれもので、店員に教わりながら存分にMSXパソコンを堪能しました。

夫はパソコン店通いをしているうちに店員からパソコン通信のことを教わりました。この頃のパソコン通信はホスト局があつて、そこに電話回線で直接繋ぐのが一般的でした。夫は店で地元浜松に「うなぼんPC」というホスト局があることを教わり、その管理人は当時シスオペと呼ばれていました。

シスオペがパソコン通信を広める為直接家に来てくれて教えて貰えることを知りました。シスオペは33歳と、50代の夫婦から見たならまだ若く、NTTから期待されている様子でした。ホスト局に入るまではシスオペに教わったけれど、後は私達夫婦が新しい体験をしていくとい

う風で、詳しいことはネット上で教わったことの方が多かったです。ネット上の名前はハンドルネームと呼ばれ、通信をしているのが女性の方が親切にされるだろうという夫の思惑で、ハンドルネームは私が主役で、私のイニシャルのKを取ってK子と名づけ、夫はワキ役という意味でK子とワキというハンドルネームで口グインしました。最初は夫の作った俳句や文章をアップしました。夫は若い頃求められて書いた小さな話を、私にキー入力させて「うなぼん」にアップしました。主なユーザーが高校生、大学生の中で夫の文章の完成度の高さから、後でシオベに聞かされたことは、高校生がどこかの文章を無断引用したのではないかと思ひ、内心ヒヤヒヤしたとのことでした。作者が大人とわかって安心したと話されました。

呼び掛けている人の気配に気がつき始めました。どうにもこちらの様子がわかっているようなので、呼び掛けている人の言うとおりの「！」を押すと電報機能と書かれた所に行き、呼び掛けている人のIDに合わせてメッセージを送れるという仕組みを理解しました。パソコン通信の最大の楽しみはチャットにあったように思われます。高校生の説明言葉を使えば文字電話でした。話をするのに勇気のいる私にとって精神的に楽な意志伝達方法でした。思ったことを文章にする、勇気があるのは最後の決定キーを押すだけだったからです。なんとというほどよい距離間だろうと感心したものです。

当時、一部屋しかなかったチャットルームはいつも満員で2時間という時間制限がありました。私は30代だったので高校生から見ただけならおばさんだったけれど、よく高校生とチャットしました。高校生と言っても工業系の学生が多かったのでパソコンの知識は彼らの方がよく知っていました。パソコンの知識を教わろうと高校生に頼むと、「しかたないなあ」と気のない返事をしながらも何日か後には教えに家に来てくれました。昔のネットの良さは電話回線だった為、市内の人が多くすぐに会いに行けることでした。高校生たちも実生活で仲よくしている様子でした。こんな近くに住んでいたんだという人もいました。いつも買い物をしているスーパーの途中にある会社に勤めているという人もいました。近くに住んでいたその青年はパソコンの会社に勤めていただけあって、パソコンに関しての知識は豊富で大変お世話になりました。ネットの中は年功序列ではなく、パソコンの知識の多い人が立場が上でしたので、私達夫婦は高校生より知識が下の為、「しかたないなあ」と言われてもしかたない立場でした。

した。夫を画家にすることが夢であった私の夢を叶えることができました。夫は肝臓ガンで亡くなり、私は脳出血障害の為、半身不随になり、今は施設で暮しているけれど、夫と生きた人生を綴ってあげば幸せと思っています。

(浜北区)

「入選」

雀時刻 (すずめどき)

のぶ恵

「雀時刻」これは江戸末期の町人の話だと、聞いて居ります。

夕焼けで空が茜色に染まり、夕闇の近くなる前に「雀時刻」が現れると云う話で、ございます。

雀は黄色い小鳥なので空が黄色になるのでしょうか。

私たちの先祖は、なんと優雅に自然の恵みを満喫していた訳でございます。

雨の日は「良いオシメリで」と云い、快晴の日には「日本晴れ」と云う言葉がありました。

私の幼い日の唄に

「雨雨 降れ 降れ 母さんが、ジャノメでお迎え嬉しいな……」

当時、傘には、番傘、ジャノメは、細作りの骨組で女性用の傘ではなかったで

しょうか……。

赤い爪皮の下駄をはいた和服の母が浮かびます。ツマカワは 足先をぬらさなためだったのでしょうか。

何時？ 何処で？ と云われても、八十六才になりました私は、お迎え出来ないことも多くなりました。

それでいて近い日の事は忘れても、遠い日のことを不意に思い出すことができます……。

古い唄を突然、口ずさむ時もあります……。

「青い眼をしたお人形はアメリカ生れのセーロロイド……」

「赤い靴はいてた女の児、異人さんに連れられて行っちゃった……」

横浜生れの横浜育ちだった私は、港町のせいかエキゾチックな雰囲気の中で育ったのかも知れませんね。

家業は「輸出商」でした。

日本の着物や布、そして食器類を外国に出し、その代りに 外国のものが入って来ました。木製のママゴトセット、木彫りのコーヒーカーップ、テーブル、椅子、

立派なものでした。そして当時流行したのは「ママー人形」でした。横にすると、かすかに「ママ」と云う「眼を閉じる」お人形です。

これこそ「青い眼をしたお人形」でした。私の持っていたのは、金髪にお下げ髪、長いドレスを着ていました。後の話によると、私の子守役をしていた祖母がためていたお金で、私のために求めてくれたそうでした。

父は当時「出征兵士」として中国に居たそうです。私は父の顔も知りませんでした。

「日本人形」は高価だったのか 代りの人形はセルロイドのキュービーでした。

話はそれてしまいました。本来の話は、「雀時刻」でしたね。

今は窓際にベッドを置いています。横になると常に見えるのは「空」です。「庭」です。そして庭の片隅にある物置です。屋根はトタン、ベニヤ板をはり合せた私宅の唯一の主人の手作りです。

主婦であった頃の若い日は、トタン屋

根が夕焼けで茜色に染まると、慌てて買物カゴに財布を入れて近くの八百屋に走ったものでした。

当時は、小さいカゴに松茸が並んでいたのです。今夜は「松茸ごはん」の日も、しばしばありました。時と共に自然の恵みも変化したのでしょうか。今は高価な食材になってしまいました。

話はそれてしまいました。「雀色刻」でした。「ひるね」「うたたね」のせいでしょうか「雀時刻」は、見ることは出来ません。

一度ごらんになった人の感想を伺いたいものと存じます。

この世のものとも思えないくらい美しくければ、しばらくは待つことにいたします。

人は「片道切符で、往きつく所は同じ」と思いますから……」

(中区)

随筆選評

たかはたけいこ

以前、「潮目が変わった」と選評に書いたことがある。それまでの応募作品に戦争体験のものが多かったのだが、徐々に減ってきていたからだ。事実、今年六十七歳になる私には戦争体験はない。傷痍軍人、コッペパンの給食、バラック建ての風景……などの断片的な記憶があるだけだから、この市民文芸の選考で戦争体験を読むことで、ひと時「戦争」と向かい合うことができていた気がする。

その後、戦争体験記の応募作品は少数になり、今年の応募作品には一作もなかった。本当に変わってしまったと、応募作品を読了して、改めて戦後が終わったと感じた。

今回の応募作品もまた読み応えがあった。読了して感じたことは、人はいつでもその時を必死に生きているということだ。それは内なる戦争なのかもしれないと思った。

大賞

祖母と電話とカーブ

結婚して浜松に移り住んだ孫娘と広島でひとり暮らしをしている八十六歳になる祖母とのやりとりが、スマートフォンという現代の通信機器を通して、描かれている。「今」をたくましく生きていくふたり、とりわけしたたかだなやかに

描かれている筆者の祖母に拍手を送りたい。

貴い陽の下で

未熟児として産まれたわが子の小さな生命を失っていく様子が、淡々と、時に激しく描かれている。この作品を筆者に書かせるために天国に行った子供は生れてきたのかもしれないと読了後に考えた。

縁側

生きること、働くことがしっかりと描かれている。一見、平たんにみえる人生を歩むことがどれだけ大変で大切なことだったか。そうして筆者が今いるであろう縁側という、無駄とも思えるスペースの大切さを知った。

入選

覆水盆に返らず

同じ言葉でも発した人の思いが伝わるとは限らない。けれど、私たちは言葉でコミュニケーションをとるしかないという当たり前のことを改めて教えてもらった。以前、流行った映画のETのように、互いの人差し指を触れ合うだけで心が通じることがいいのか? とも思った。

二足のわらじ

毎朝、ポストに届けられることが当たり前の新聞が、このように届けられているのかを改めて知った。なにより素晴らしいのが筆者が早朝の孤独な作業の中で、新しい自分と向かい合い成長し続けていることだ。

愛する自転車

十五年前に買った自転車で乗り続けている日常のなかに、筆者の限らない優しさがある。人はもちろんモノも少しずつ壊れていくと、それが当たり前だと筆者は言う。そう言い切れることが筆者の人としての強さだ。

バスに乗って

地方の過疎と高齢化が進んでいる。筆者が乗るバスにも乗客は少ない。そこで交わされる会話は「動く井戸端」なのかもしれない。効率化の名のもとにこの路線が廃止されませんようにと祈るばかりである。

母の一張羅

四季折々に新しい服を買う時代の今、改めて昔を思い出した。子供の頃のスカートの裾は丈が伸ばせるようにへムが十センチ以上あり、身長が伸びるたびにへムの幅は狭くなり、その度にスカートの裾周りだけ色が濃いものになった。大人は毎年、同じ服を着ていたから、私は子供でよかった。来年は新しいスカートを作ってもらえると思った。

朝顔との葛藤

東日本大震災をきっかけに朝顔を育て始めた筆者は植物の生きる力を知る。たかが植物と思っていた朝顔の強さとしたたかさが素直に描かれている。言外に人も植物も、地球に生きていく生き物であるという強いメッセージを感じる。

生きてさえいれば

十五歳の春、高校受験を失敗した筆者は故郷と決別し、浜松に生活拠点を移し、生活している。ああ、自分の人生は終わりに近づいたと感じた時、捨てたはずの故郷を思い出し、訪問する。かつての同級生や恩師と再会し、新たな交流が始まる。そうして筆者はタイトルの言葉にたどり着く。人は、明日の新しい自分に出会うために今日を生きている。

鉄の恩義

ひよんなことで飼いだめた犬を軸にして、筆者とその家族の変革が描かれている。ペットはもうひとつの家族だと言われているが、本文を読んで、改めて人を裏切るのではないペットは現代の家族の重要な存在だと知った。

私と夫とパソコン通信

コンピューター草創期からパソコンに関わった筆者とご主人の奮闘ぶりが微笑ましい。現代の通信社会を誰が予測できたのだろうか。こういう風にながまったのかと、当たり前のように、スマホにタッチしている人たちに読んでもらいたい作品に仕上がった。

雀時刻（すずめどき）

八十六歳になった筆者の断片的な記憶が描かれている。優しい語り口に引き込まれていき、やがて風景がありありと浮かんでくる。読者は「雀時刻」という聞きなれない言葉を行きつ戻りつし、筆者の記憶の世界で遊ぶ。

詩

「市民文芸賞」

音連れ

竹内としみ

微かな微かな音をつれて
なにかがそつとやってくる
その姿はみえず
なれど身震いするほどの衝撃
それを「音連れ」と呼び
かつては自然にある木や岩を依代とし
見えない何かがそつと降り立つ様を
そう称した
いまでは
それは「おとづれ」という優しい言葉
衝撃よりも
安堵と喜びに包まれる様を思わせる
あるとき

世界の片すみの深い森の中
小さな小さな部族
一番最後に生まれた女の子も
それはそれは小さな体
決まって部族の行進の最後尾を歩く
小さな頭は見えない何かを探すことで一杯
小さな心は得体の知れないものに翻弄される
口を真一文字に閉じ、眼光鋭く前を見据え
暗闇の向こうの光を頼りに一人闘う

何を探しているの
何があなたを駆り立てるの
私はぬくぬくと陽ざしをまとって
ほの赤く色づく繭玉に包まれないの
私はゆらゆらと微かに揺れる
不透明のガラス玉に乗りたいの
ある夜、大きな切り株の奥に寝ていると
強く大きな光が突如女の子に向かってきた
よく見ればそれは無数の星の欠片
やがてそれらの欠片は一気に女の子の体へ
苦しいの
こんなにたくさんの星をどうしたらいいの

私はもう動けない

すると、光の中から声がして

あなたが探しているものはこの中に

ゆっくり探してごらん

まわりに寝ていたコロボツクルの大人たち

眠ったふりして女の子を見守った

君ももうすぐ僕たちの本当の仲間

深い森で起きた小さな奇跡

温かく優しい音連れは

やがて女の子を

大きなほの赤い繭でそっと包み込んだ

「市民文芸賞」

悲しみを閉じこめて

花 信 栖

子供達の列に並び風船を二つもらった

さくら色と淡い空の色の風船

なぜか幼かった頃のあなたと私みたいだと思った

花を待たずに散り急いだあなたへ

さくら色の風船に手紙をつけて届けましょう

(中区)

見えていますか

今年は暖かくなるのが遅かったけど

今日はあなたの好きな花が空を覆い

河の水面も花の色ですっかり染まり

香りがあたり一面漂っています

覚えていますか

風が吹くたびに降ってきた花びらを

「きれいだね」って言って

どちらが早く沢山集めるか競争しましたね

なのに、もう手を伸ばしても
届く距離に あなたはいません

私の時計は止まったままだというのに
時は容赦なく過ぎていきます

あの時は刺すような冷たい風が吹いていた
でも今は沢山の花が咲き

優しい風がわたっていきます
季節は悲しくとも留まることなく

約束どおり訪れてくる

悲しみも苦しみも留まることなく

いつかは優しい思い出に
変わるのだろうか……と

答えはないとわかっているでも問うてみる
空色の風船には

辛く悲しい如月を閉じ込めて飛ばします

二つの風船はサヨナラの挨拶なのか
それとも花に名残惜しんでいるのか

クルクルと私をめぐり それから

どんどん どんどん遠くなって

いつか二つの点になり消えて行きました

心の風船は

悲しみのまま残しておこうか

それとも思い出に変えて歩きだそうか
握ったまま未だ紐を離せずにいます

(中区)

〔市民文芸賞〕

貴い陽のしたで

白井聖郎

ママ ごめんね 早く出てきちゃって

ママのお腹の中 とつても気持ち良かったよ

とんとんとん お腹の外からくれる合図が

とつても とつても 好きだった

パパ ごめんね 心配させちゃって

ママのお腹の中 パパのことも知っていたよ

とんとんとん お腹の外からくれる合図が

とつても とつても 嬉しかった

ママ ごめんね 早く死んじゃって

これからたくさん 甘えたかった

ぼたぼたと 光る涙は ぼくのせい？

ぼくはどうして 産まれてきたのかな

パパ ごめんね お話できなくて

絵本や子守唄を 聞かせてくれたのに

ぶるぶると 震える体は ぼくのせい？

ぼくが子どもで 良かったのかな

ママ ありがとう ぼくを産んでくれて

ママのお腹の上 とつても気持ち良かったよ

両腕でやさしく包んでくれるのが

とつても とつても 好きだった

パパ ありがとう 毎日会いに来てくれて

パパの大きな手 とつても温かったよ

夜中に来てくれて 側で寝てくれるのが

とつても とつても 好きだった

ありがとう みんな ありがとう

おねえちゃんの絵 みんなの写真

おそろいのハンカチ おそろいのペンダント
みんなの思い出 みんなとの絆

ぼくが死んじゃっても 家族でいたいな

ぼくが死んじゃっても 忘れないでね

だけど ひとりぼっちは 寂しいな

ずっといっしょに いたかった

最期に一度だけ見られた 青い夜空と太陽を

ぼくのために みんなありがとう

ママとパパの子で ほんとに幸せだった

上手に笑えていたのかなあ

いつかまた 会えるといいな

いつかみんなに 会えるといいな

いつかみんなで 手をつなぎたいな

いつか貴い陽のしたで

(中区)

「入選」

戦国夢街道に吹く風

石黒 實

戦国夢街道（三丸コース）

家康が武田方の天野軍を攻め落とそうと犬居城に兵を率いたものの、負け戦の末に山野を敗走した道だ。

兄と一緒に僕も毎日、中学校に通った道だ。

そして村を離れ都会に働きに行く時、麓のバス停まで母が送ってくれた道だ。

いつしか都会人になり切ってしまった僕は村に残った人の事など忘れていた。

そして何年も月日が流れた。

若者は里を離れ、老いた者は亡くなり、

村に残る者はわずかとなった。

兄はこの里を守ると言って野良仕事に精を出した。

そして「村に人を呼び寄せよう」と山郷にハイキングコースを開いた。

冬がおわり、山里にも南風が届く頃

その風に乗って何処かに飛び立つように天国に行ってしまう

た兄。

茶摘みの時期も終え、村を青葉が包む晴れた日、僕はハイキング仲間とこの夢街道を歩いてみた。

おやま塚から三丸の山が村を抱くようにそびえて見えた。六月の明るい光が飛び散る山肌、緑のまばゆさに僕は目を細めた。

「ああ、初夏の大久保村の風景だ」
僕は一休みして汗を拭いた。

すると乙丸谷の林を抜ける風が

「ほおー」と笛のような音を立てて僕の頬に触れながら

三丸の林の方に吹いて行った。

そういえば兄が笑う時

「ほおー」と声を出して、

にっこりと微笑むのを思い出した。

あの爽やかな笑い顔が僕は好きだった。

あの風は兄だったのだろうか。

兄は風につれて、青い山波を駆け巡っているのだろうか。

(中区)

〔入選〕

悲しみは空に喜びは土に

遠藤 ゆき

悲しみは空に 喜びは土に
ポケットの中に悲しみを詰め込んで
ほらこの土を歩こうよ
土があなたの足の下で
あなたを支え深く踏みしめられるなら
ほらポケットの悲しみを
空へとそっと放とうよ
一羽の鳩を放つように
鳩があなたの悲しみを
空に届けるとき
あなたが踏みしめる土は
あなたを更に深く深く愛するでしょう
さあ歩こうと土は沈黙する
あなたの喜びは土の沈黙とともにある
悲しみを空に放ったら
あなたの喜びにも気づいてほしい
悲しみは空に 喜びは土に

土はいつもあなたのもとにあり
あなたの深々とした足跡を喜んでいてのです
悲しみは空に 喜びは土に
空の慈しみを知ったあなたならば
空のずっとその下にある
土のささやかな喜びも知るでしょう
さあ、悲しみは空に 喜びは土に
土は悲しみを空に放ったあなたを
ただただ感じているのです
土もあなたを静かに愛するのです
あなたがこの土の道を歩いていけるようにと
悲しみは空へと 喜びは土へと
土は沈黙するのです

(西区)

「入選」

留守番電話

大庭 拓郎

ころころ転がる旅行鞆で
大分県の竹田城址に行つて来た。
荒城の月短歌大会の
最優秀賞になったのだ。
かみさんの供養にと
投稿したので舞い上がった。

朝六時に家を出て
汽車を何回も乗り継いで
やつと、三時ごろに着いた。
駅舎に響く「荒城の月」に
へなへなの足腰が蘇った。

壇上の市長さんから
大きな表彰状を頂いた。
思わず「お母さん、もらったぞ」と
叫びそうになった。

我々の文化勲章だ。

かみさんに供えて
茶の間で一杯やっている、
副賞の牛肉が届いた。
霜降りの超高級品だ。
冷凍保存して少しずつ
酒の肴にしている。
かみさんには、
ご飯に乗せてお供えする。

いつも土産話に花が咲き、
新鮮な気力が湧き上がる。
留守電に亡妻の美声の録音が
残っておりぬ満月のよう

（南区）

「入選」

性格の分類

高柳龍夫

わからないことの多いこの世の中
棚に上げたり、さて置いたり、の
自分のことはどうなんだろう
鏡に映して確かめるように
身の程、知ってみようじゃないか
性格分類試験
試してみた次第

理念に燃える父親
世話焼きな母親
理知的で冷静な学者
感性豊かで気ままな子供
良く思われない猫かぶり

これら典型的な5人が心の中にいて
50の質問に答えることで
勤勉か怠慢か、高慢か謙虚か、

親切か冷淡か、残酷か慈愛か、
はたまた神経質か無頓着か、
内向的か外向的か、積極的か消極的か、
どっちかこっちに振り分け
性格類型243種のどれかに当てはめる
日頃の精神的緊張の原因やら
本人も知らない意外な魅力などなど
知れば今後に役立つだろう、とか

さてさて

その「結果と助言」とは

……

精力的で上昇志向、でも悪循環で葛藤状態

……

ついでながら

他の場合の回答例も参考に見てみたら
どれもこれもが

そこそこ当てはまっている、ような
まずまずそんなことはない、ような

わかりやすいレッテルを
誰も彼もにべったりと
貼ってみたいと思ったが
典型的5人どころか

もっと多くのいろんな性格が
濃淡つけてまだら模様に入り混じっている
だけじゃないか
日頃の気まぐれさ加減だって
臨機応変に生きている証拠じゃないか
そんな当然に私は
気が付いた

(西区)

天地創造主の
壮大なる神祕の贈り物

ミクロからマクロの世界まで
無限に――

何もないところから

創造されたという言葉※ぱーらー

「創られた全ての物は

極めて良かった」

と 聖書の創世記は記す

命の息を吹き入れられた人は

神に従い 神に背き

長い歴史を繋いできた

人の一生は 輝ける塵

わたしも その塵のひとつ

ときには

一枚の花びらになって

「愛」を伝えられたらと……

宇宙の完成に繋がる

かけがえのない役割だから

※ヘブル語で

「創造する」を表わす

(中区)

本のなかの本

〔入選〕

竹原孝子

たとえば

花びらや

枝の配置は 百三十七、五度の

黄金角があるという

宇宙は

数字で書かれた書物だから

解き明かしの醍醐味は

「入選」

響く

橘
すず音

垂れこめた曇空から 雨が落ちてくる

冬の近づいた日暮れどき

ぼつんと頬に雨粒が触れて

ぼかんと空を見上げてしまつて

低い空を

首を押し上げるようにして

見つめてしまう

ケガレタなにもかもを押し流してしまえばいいのに

地上も海も空も 雨までがよごれていて

やさしく響く雨音だけが

うつくしい旋律を奏でる

車を走らせ ワイパーの速度を速める

彼の瞳のなかに

深い哀しみを見つけたときみたい

激しく汗を流す熱い肌をしているのに

涙で頬を濡らしているようすが

子どものように無垢だったときみたいに

胸の奥の芯のあたりで 焔が燃える

雨の軌跡が黒い痕を残して

白い車体をよごしていく

白と黒とグレーで飾られた 高貴な猫は

金の瞳を閉じて 安らかに眠り

パソコンの機械音が 細く高く鳴る

液晶が光り スマホが呼んでいる

人工のあたたかい光

人類が初めて月面に降り立ったみたい

点滅する信号 滲むヘッドライト

その向こうに 人がいる

その、あたたかさ

——愛おしい

(浜北区)

「入選」

弟

長浜フミ子

二つ違いの弟は
短命だった

いつ頃、病気になったのか、知らない
腎臓が悪く、当時は、不治の病だった
六十年たった今も

思い出は、

十本の指で、余る程しか残っていないが

当時小学生だった頃の、弟の事は

それは、強烈で、鮮明に

脳裏にやきついている

とにかく、頭がよかった

いつも一〇〇点だった

月の半分も学校に行っていないのに

遠足は、先生におぶさされて行った

可愛かった、小柄な弟

でも、病気が悪くなる

むくんで目も開けられない程だった

しょっぱい物が食べられず

いつも一人だけ別な物を食べていた

障子の穴から覗いている様子は

特に、今でもはっきり覚えている

時たま、母は大声で弟を叱った

隠れて、しょっぱい物を食べた時だ

顔が、びっくりする位むくんだ

ある時、

父は、東京までスイカを買いに行った

当時としては、大変な事だった

それから、間もなく

弟は、天に召された

（東区）

〔入選〕

輪廻転生

早川奈美江

人間と人間の出逢いは
すつごく不思議

昨日までは全然知らない人でも
何かのきっかけで知り合いになる

偶然だと思っている

今世での出逢いのすべては
神様が秘密のお見合いを

用意してくれてるからなんだ

初めましてと挨拶をしている

私たちよりも先に

魂たちは

久しぶり、元気にしてた

握手しているんだ

そう、それはね 前世で繋がっていたからなんだって
それってすつごく素敵なことだと思いませんか？

もしも、生まれ変わりを信じるなら

今世で出逢える人・出逢えない人

そのすべてが見えない糸で

繋がっているとしたら

今世での出逢いを大切にして

来世に繋げたい

そう思いませんか？

(袋井市)

〔入選〕

綿虫

松本重延

灰色の雲が鉛のように垂れ下がるたそがれ

ふっと現れた一匹の綿虫

手をさしのべると

ためらいがちにそこに止まった

溶けそうな薄い羽を横たえて

あたりを見回すと
地から湧くのか天から降るのか
暮れなずむ宙をさ迷うように
漂っている綿虫

綿虫が出ると天気が変わるよ、と
幼き頃に聞いたのは七〇年前
空襲の恐怖から解放された初冬の空
あの時も暮色の中を
綿虫が舞っていた

眼前の綿虫は
確かにあの時の綿虫だ
いまだ安住の場所なく
さ迷える魂は綿虫となつて
七〇年の彼方から続々と集まって来る
綿虫が身に纏う純白は
不戦の白

突如、轟音とともに鉛の空を突き破つて
戦闘機が現われた
その瞬間
綿虫は消えた

(浜北区)

「入選」

SHADE (陰)

水川亜輝羅

シェイドとは異名であつて本名ではない
便宜上の呼び名としている
陰とは主体があつて存在するものだが
シェイドそのものが存在するので
説明となると難しくなる
体調が良くない時の幻影 単なる思い込み
無色無臭である 様々な批評がなされる
実体は不明であるが 存在がある
気配がするのである
音も立てずに 部屋の入口に居る
猫の様に低い位置に屈んでいる
こちらからコンタクトしても反応はない
いつの間にかその場を去っている
透明で周囲と同化しているので形としては
何も見えない 幼小の頃から感じた気もする
つい最近になって気付いた気もする
予告をして来るでもなし 何を知らせるでもなし

何か月も気配のない時もある
特に興味がある訳でもないが 多少気になる
現代の座敷童わかしの仲間であればと思っている

(南区)

小 説
児童文学
評 論
随 筆
詩
短 歌
定型俳句
自由律俳句
川 柳

詩選評

埋田昇一

今年の作品は、どの詩もそれぞれ作者の制作意図が明確で言葉もしっかり書いていました。これは詩を書く時の作者の基本的な心構えです。時に、「前衛」的な狙いをもって読者の感性を問うような作品も見受けられますが、このたびの作品にはそのような意図はなかったように思います。その意味では今年の作品は気持ちよく拝見しました。

毎回書くことですか、言葉が「詩」になるためには詩的発想がなくてはなりません。詩的発想とは、これまで見えなかったことが視えてくるということですか。あたりまえのことをあたりまえに書いても詩になりません。それは作者に事象に対する「発見」があることです。それを自分の言葉で書くことです。

市民文芸賞

第一位「音連れ」

作品は、「見えない何かがそつと降り立つ」と明確にとらえています。その初め視えない何かは「暗闇の向こうの光」であり、それは無数の星の欠片であることがわかります。詩は最後に、優しい音連れが女の子をほの赤い繭で包み込んだという美

しい言葉で終わります。この詩には展開があります。展開は思いがけない言葉でつづられて詩になりました。

第二位「悲しみを閉じて」

花を待たずに散り急いだ愛した人への晩歌。私の時計は止まったままなのに、季節は約束通りに訪れてくると詠う。展開は桜色と淡い空の色の二つの風船。この心の風船は悲しみのままに残しておこうか、それとも思い出に変えて歩きだそうか、握ったまま未だに紐を離せずにいる。終わりの四行で「詩」になりました。

第三位「貴い陽のしたで」

生まれることのなかった子から、ママやパパやお姉ちゃんへの感謝のことばが詩になった。生まれたときは生きていたのだろう。最後に青い空と太陽を見ることができたのも幸せだったという。

この他、短歌大会で最優勝になったときの喜びをうたった「留守番電話」、聖書の創生記を記した「本の中の本」、多くの人の性格を分類した「性格の分類」、ハイキング仲間と歩いた時の思い出を語る「戦国夢街道に吹く風」、両音に美しい旋律を聞く「響き」、実体はあるが気配がするという「SHADE」、宙をさ迷い漂っている「綿虫」などが印象に残った。

短歌

〔市民文芸賞〕

奥遠の森に寄せて

「天空の里」より遙か見晴るかすうねる山並み春陽に光る

谷底に残^{のこ}るクヌギは「戦争孤児」そう思いつつ夏^か溪流^わ渡る

泣き叫ぶような紅葉です高く険しい崖伝い鹿の親子がいる

風花が舞うと決^ちま^ちつて僕は白く煙った「麻布の山」を見ていた

なりわいに亡^ち父^ちの植^う樹^えたる杉苗は七十歳の物の怪と化する

中区

内山文久

午前四時坂道登るエンジン音たった一度の今日が始まる

点滴の丸きしずくを眼で追いつ透析終わる時を待ちたり

透析にガンの追い撃ち受けし身に生き抜いてやると青空見あぐ

亡き父母に迎えにくるなと祈りたる姉のおもいを病床に知る

西区

岡部政治

たぶの木 of 古根の窪に水たまり小鳥とびきて光をとばす

中区

石原新一郎

「暦還れば仇も恨みもこれつきり」とふ境遠く古稀に近づくと
黙しつつ凝視むる絵画無言とふ無限のことば胸に聴きつつ

一つずつ夫と編みたる布草履一对にして我が履きたり

中区

石井泰子

古希すぎぬまぶたのしわは父に似て口元のしわ母に似る吾
戦争を憂い泰平の世を願う父母はつけたり我が名は泰子^{たご}

珍しく予報外れて上天気洗濯物の手触りがよい

中区

高畑かづ子

悔ゆることまた浮かびきぬ仏壇を腕まくりして隅まで磨く

黄金田はこんなにきれいでありたるか年を重ねてやつと気付けり

食卓を囲む相手のない夜のポテトサラダ満点の味

中区

川島恵子

振り向いた一瞬の笑顔見るために人ごみの中改札に立つ

空耳の着信音に反応すさめたコーヒー飲み干せぬまま

「入選」

東区

飯尾八重子

施設入り温きお日様背に受けて私は歌詠む今
日も暮れゆく
亡き母の膝にもたれてたつぷりと泣きとうな
るや夕日は沈む

中区

伊ヶ崎智世枝

水ぬるむ朝をたのしむコーヒーに幸せのハー
ドルまた低くなる
来るたびに子には我が老い見ゆるらし口答え
もせず手伝いくるる

浜北区

岩城悦子

寒月の光届きし病室に夫残しつつ家路帰るは
わび助の白なる色を持ちて逝く今年もひそと
花の咲きけり

北区

鶴原伸代

雨音が染み入るような明け方にあなたの寝息
聞こえてこない
ふたりして迷い迷いて買ひし靴その店の前
立ちつくす我

南区

太田静子

転びたる夫起こさんと吾の首に掴まり立たす
阿吽の呼吸
テーブルに薬かぞえて並べいる介護の夫の今
日ははじまる

天竜区

恩田利子

先逝くと覚悟を持ちて旅立ちし三十四歳われ
の教え児
心温き君が決めたる最後の日何故なぜ馬鹿と
遺影に問ふ

小説

児童文学

評論

随筆

詩

短歌

定型俳句

自由律俳句

川柳

天竜区 恩田 恭子
 傘寿までたどりつきたる幸せよ緑の山より朝
 日がのぼる
 「熊切小」に四百人が集いた日肩くみ歌う最
 後の校歌

西区 河合 和子
 静けさの戻りし部屋に紙風船少しへこみて転
 がりており
 淡々と今日も過ぎゆく危うさを知るや知らず
 やスーパームーン

西区 柴田千賀子
 「めでたい」は芽出たしの意もあるらしき雨
 水の庭に見出す喜び
 「あいな」と関西弁の孫が来て場は和みたり
 年改まる

中区 清水紫津
 新しい墓石を洗う手の平は亡夫の背中を流す
 っぐさに
 亡夫恋えば星瞬きてたわむれの合図と思うう
 たかたの夢

中区 新谷三江子
 持物のすべてに記入しケアホームなる老人施
 設に入学せんとす
 朝光あさひにつつじ木蓮花薔薇さかりの庭に別れを
 告げて

南区 杉山勝治
 戦地へと赴く我に母上は生きて帰れと言いつ
 泣きたり
 戦場でありしことごとく浮びくる如月の夜の闇
 の深さよ

東区 鈴木 壽子
 長梅雨に籠りて風炉の灰形を作りては崩す納
 得ゆくまで
 耳飾り揺らして赤きサンダルの少女が乗り来
 るま昼のバスに

南区 鈴木 芳子
 ゆったりとお茶をすすればお茶好きの父の笑
 顔が湯のみに浮かぶ
 耳遠き嫗は孤独も同じこと淋しくなつてアル
 バムを見る

中区 高橋 絃一
 遺言とならずに済んで読み返す手術前夜に記
 した一首
 老いゆるく小さく暮らす日々ありて怒り笑い
 も共に分かちて

中区 高橋 幸
 正月の華に使いし金粉の枝から新芽ニヨッキ
 り出おり
 野面積堪えし石垣四百年浜松城の歴史偲ばゆ

北区 滝澤 幸一
 ひとつこと終えれば戻る爺の膝孫にも爺にも
 自然の仕種
 だんごむしたくさん捕つてと孫は言ふママの
 洪顔爺には見えて

浜北区 橘すず音
 古寺に時雨川面の透き通る緋色の旗の濡れ翻
 る
 金を打つ音鳴り渡る雨上がり炬燵で足に猫の
 毛触れる

「野麦峠」と同じ生活たつきの母なりきテープに残
 る声の清しさ
 射干の咲く墓への坂を登りゆく聞かずじまい
 を又思いつつ

中区 知久とみゑ

張り裂ける心の奥の慟哭を三十一文字みそひともしに託し
 弔う
 何もかも陽炎となり遠ざかり涙もかわく水無
 月炎天

中区 土屋香代子

本棚に幾春秋の十一冊「谷崎源氏」は姉の形
 見ぞ
 名園にクレーン車腕を伸ばし居り大樹三百年
 枝の手入れず

中区 寺田久子

はじめての見合いで決めて結婚す父と母との
 戦後始まる
 焼けし村の駅に降りたりとほとほと六年ぶり
 の舅の帰還よ

南区 中村淳子

一本道一本の風身に受けて濾過されて居り眼
 つぶりて
 ラッパ水仙ナースの部屋に活けてありファン
 ファール吹けよ吾退院す

中区 中村弘枝

幸せに繋がらぬ婚ありと娘は独り暮しにさは
 さはと言ふ
 子に会ひて帰途の車窓にざんばらの髪して映
 り一日を思ふ

中区 中山和

南区 堀内 独行

停止せる車の前にすずめ舞う一茶もかくやア
クセル踏めず
あゝいえばこう返されし在りし日はつらつら
思うしあわせの日と

東区 宮澤 秀子

世の中の早き流れに追ひつけず自分の歩幅探
してゐたり
露天湯に毛づくろひする猿の群見らるることに
馴らされてゆく

中区 松浦 ふみ子

勤めるし地に立つスカイツリーから見下ろさ
れない故郷に住む
めつたには泣かなくなれど不覚にも玉葱なん
かに泣かされてゐる

西区 八木 若代

古物屋の奥に鎮座の古き雛時代見て越し眼の
光る
千度超す炎に堪えて陶の雛美しく生れよと窯
の火見つむ

浜北区 松島 良一

笑ふこと忘れた君と共にする食事の味はどこ
か薄味
目が合ふも回転扉回りゆき君とは違ふ世界が
見える

中区 柳 光子

水回りみな磨き上げ梅雨晴れの空に向かい
て「チャオ」と言おうか
落とし前つけてくるよと言う如く友は入院の
手筈を語る

中区 山本勝彦
 後続のヘッドライトの上にてたバックミラー
 の中秋の月
 かわせみのダイブに賭ける一瞬に連写の音は
 一斉に鳴る

中区 米澤寿鶴子
 卒寿過ぎ縦十センチ腹切られ五臓六腑の一つ
 うしなう
 点滴棒頼りに廊下行く姿巡礼に似たり袋つり
 さげ

南区 赤堀進
 妻の目に映る私を慎重に浴衣売り場で選ぶ七
 月

西区 渥美進
 山野辺の誰が飾ったか庚申塔山百合二本香り
 高きに

北区 あひる
 盲人の手の温もりはヘルプする人の心に沁み
 込みにけり

中区 安藤圭子
 父母眠る山の墓より見はるかす御嶽煙る今朝
 は静かに

東区 飯田裕子
 思い入れのあまたの蔵書回収車へ我が身削る
 や生前整理

西区 伊藤友治
「そんなこと言っちゃいかん」と彼たたきこ
ろころ笑ってバス待つ乙女

中区 今駒隆次
グモニング大きな声に振り返る外つ国人のさ
わやかさかな

北区 伊藤美代
先端を命毛という書道筆伝わる鼓動喜寿から
の旅路たび

中区 内田一郎
幾度か電話かけくる若者の失職続き年の瀬と
なる

南区 井浪マリエ
駄菓子屋の粋な店主の逃避行いつしか戻りい
つもの椅子に

浜北区 青海まち
手術後の動き敵わぬ窓辺から遠き施設に暮ら
す母想う

西区 犬塚賢治郎
扇風機ひとりの部屋で回ってる娶らぬわが子
歳三十九

南区 太田あき子
災いを一掃するかに輝きて今宵満月見上げて
祈る

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

天竜区 太田 初恵
弾み行くラジオ体操笑ひあり「入れ歯忘れた」
「あらっわたくしも」

南区 大庭 拓郎
墓石にわが手を指を長くふれ亡妻の梅干し置
いて帰りぬ

中区 小笠原 靖子
処分する亡夫の背広のポケットに「夕鶴」チ
ケット半券のあり

東区 岡本 久栄
青竹の瑞々とした切り口に小さく飾る雛様一
つ

中区 織田 恵子
「この花はわたしや知らん」と教はりき紫蘭
の咲きて姑の声聞く

南区 加賀 の 人
人妻と呼べば刺激的ねと微笑んで三杯目の盃
そつと断る

中区 花 信 栖
可愛いねあなたの声が耳に触れそれって私そ
れともピアス

西区 河合 秀 雄
長き世を楽しみながら生きてゆく持ちつつ持た
れつ介護の部屋で

小学校子より大人の運動会町別りレーに力の
入る
中区 川上とよ

終戦後の学芸会に主役せし踏まれる「麦」を
折に想いき
西区 近藤茂樹

亡き夫の大き下駄はきカラコロと孫の歩みを
かるやかに聞く
浜北区 川島百合子

花博の屋外舞台共演は天然色の陽射し・薫風
寒風澤 毅

空襲にいのち助けし菩提寺の池の睡蓮緋の色
開く
中区 倉見藤子

白内障の術後の景色ときめきぬLEDの色に
眩しく
北区 清水孜郎

縁者絶えて高く積まれし墓石群故陸軍大尉も
空をにらむ
中区 幸田健太郎

手術室麻醉打つよな気配あり名前呼ばれて全
てが終る
南区 白井忠宏

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

二カ月で天に召されし子を思いやりきれぬ
日々やめられぬ酒
中区 白井聖郎

バアチャンと駆けくる幼抱き上げるずっしり
重く笑顔はじける
中区 鈴木和子

ひと群れの舞鶴草は首もたげ今し舞い立つ花
渡の山郷
中区 鈴木利定

こぼれ種ふわふわ育てさくら草寒波凌ぎて花
芽時待つ
中区 高山紀恵

登り来し分水嶺の水源は心もとない小さな清
水
浜北区 橘蜻蛉

こわれしか緩む取っ手の冷蔵庫夫ありし日の
家電また消ゆ
中区 手塚みよ

中天に柄のなき鎌の光るころ街の灯りの瞬き
はじむ
中区 遠山長春

自分史の講座始まるミュージアム夢職むしよくの名刺
志溢る
中区 鴫多健

中庭に今年も咲いた酔芙蓉朝あしたに白く夕べはピ
ンク
中区 戸田田鶴子

菜の花と紫蘭のコラボ鮮やかなり揺らして通
る南の風が
中区 富永さか江

葉ボタンとチンゲン菜の種をまき長く楽しむ
百円の幸
東区 長浜フミ子

死にとうない泣くかもしれぬと歌詠めば選者
はその歌即ほめたもう
中区 新田えいみ

懐かしき通いし校舎今はなく思い出の地に走
る高速路
浜北区 野中睦己

世の中は少子化なれど別世界赤子賑わう五月
の産院
南区 袴田成子

竹林の梢々に吹きよする八月の風雷雲をさそ
う
浜北区 橋本まさや

三本の苗よりトマト過去最多百二十八メモに
したたむ
中区 浜美乃里

待ち待ちし白曼珠沙華十一花芯の先まで光ゆ
れいつ
中区 坂東茂子

ゆく夏や十五の子らは魚のごと友の声援トビ
オに響き
中区 飛天女

大人びてすっかり無口な孫達とスマホのゲー
ムでやつと繋がる
北区 平井要子

隻腕に入れ墨の跡残したる翁静かに湯に浸り
たる
中区 平野旭

「平和したくてふるえる」とデモ行進する学
生ら戦後七十年
中区 福田美津子

乳母車に幼子連れてビラ配りなせる女の健気
な姿
中区 前田道夫

健常の日は懐かしき点滴を引きずり廻し二週
間過ぐ
南区 水川あきら

結婚して子ども二人生まれました今倅せで
すだのにむなしい
浜北区 峯村友香里

中区 宮本 恵司
法螺貝の響きふとぶとひろごりぬ太鼓に笛と
鳴りつづきたり

中区 吉野 正子
終活などと言はざりき何ひとつ母は余分な物
を残さず

東区 村木 幸子
冬の日にかの髪染むしばし背に触ればゆる
ゆる温みてきたり

中区 和久田 俊文
術後三年この日までこの命足して来たれど削
りても来ぬ

東区 森 安次
元日の朝に輝く太陽を八十九歳仰ぐ倅せ

北区 山田 文好
冷水を含める束の間痛み消ゆこおり惜しみて
本読み急ぐ

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

短歌選評

村木道彦

対象に向けられた作者の視線を追いかけているうちに、対象そのものよりもむしろ作者の視線の質に魅惑されるということがある。鑑賞するとは作者に誘導されながら同時に作者の立ち位置を発見するという楽しみでもあった。市民文芸賞は、「奥遠の森に寄せて」と題する作品を筆頭に次の六篇である。

奥遠の森に寄せて

内山 文久

- ・「天空の里」より遙か見晴るかすうねる山並み春陽に光る
- ・谷底に残存るクヌギは「戦争孤児」そう思いつつ夏溪流渡る
- ・泣き叫ぶような紅葉です高く険しい崖伝い鹿の親子がいる
- ・風花が舞うと決まって僕は白く煙った「麻布の山」を見ていた
- ・なりわいに亡父の植樹たる杉苗は 七十歳の物の怪と化す
- ・二首目の「戦争孤児」、三首目の「泣き叫ぶような紅葉」や五首目「七十歳の物の怪」など、人界と自然との間を融通無碍に行き来するのが、この作者の立ち位置の優れたところ。

岡部 政治

- ・午前四時坂道登るエンジン音たった一度の今日が始まる
- ・点滴の丸きしづくを眼で追いつ透析終わる時を待ちたり
- ・透析にガンの追い撃ち受けし身に生き抜いてやると青空見あぐ
- ・亡き父母に迎えにくるなど祈りたる姉のおもいを病床に知る

二首目・三首目・四首目、それぞれにバックアップされて一首目の「たった一度の今日が始まる」という緊迫が成立する。

石原新一郎

- ・たぶの木の古根の窪に水たまり小鳥とびきて光をとばす
- ・「曆還れば仇も恨みもこれつきり」とふ境遠く古稀に近づく
- ・黙しつつ凝視する絵画無言とふ無限のことは胸に聴きつつ
- ・三首目、戦没画学徒の若描きの絵が展示されているのが、信州の無言館。「無言」以上の饒舌はないのである。

石井 泰子

- ・一つずつ夫と編みたる布草履一対にして我が履きたり
- ・古希すぎぬまぶたのしわは父に似て口元のしわ母に似る吾
- ・戦争を憂い泰平の世を願い父母はつけたり我が名は泰子
- ・二首目、「古希」を過ぎて生じた「しわ」がポイント。
- ・高畑かづ子
- ・珍しく予報外れて上天気洗濯物の手触りがよい
- ・悔ゆることまた浮かびきぬ仏壇を腕まくりして隅まで磨く
- ・黄金田はこんなにきれいでありたるか年を重ねてやつと気付けり
- ・三首目、歳を重ねて初めて気づくことの重たさに心打たれる。

川島 恵子

- ・食卓を囲む相手のない夜のポテトサラダ満点の味
- ・振り向いた一瞬の笑顔見るために人ごみの中改札に立つ
- ・空耳の着信音に反応すさめたコーヒー飲み干せぬまま
- ・一首目、「ポテトサラダ満点の味」が軽妙でしかも哀切。

定型俳句

〔市民文芸賞〕

鍵掛かる冬のプールに陽の桂

南区

袴田吉一

新藁を束ねし指の濡れてをり

南区

杉本たつ子

椎の実を拾ひ昭和のよみがへる

東区

宮澤秀子

小鳥来る許せと言へり笑へと言ふ

東区

石橋朝子

ゆらゆらと観音堂へ穴まどひ

中区

吉野民子

小説

児童文学

評論

随筆

詩

短歌

定型俳句

自由律俳句

川柳

自然薯の生涯かけし曲がりやう

西区

佐藤政晴

月の客まづは野の花愛でにけり

中区

右崎容子

満月の夜は仮面をはづしをく

中区

鈴木由紀子

風鈴や百まで生きてなほ童女

中区

澤木幸子

絵手紙の色のはみ出す七変化

北区

辻村榮市

「入選」

粉を焼く引佐郡に鳶の声

南区

袴田 吉一

匂ひ立つ雨の茅の輪をくぐりけり

東区

宮澤 秀子

今切に列なす帰船鳥渡る

青空を連れて帰省の子の背丈

河原石転がすほどの野分かな

影つれて盆踊りの輪ふくらみぬ

大砂丘の草叢に鳴くきりぎりす

負けん気の瞳かがやく七五三

つくづくと父よ刈田の薬す

南区

杉本 たつ子

抱き寄せてなほ泣かれけり石路の花

東区

石橋 朝子

がうがうと黙もくと貨車師走来る

大火鉢夕方雨となりにけり

秋燕水を掴みてゆきにけり

コンパクト閉じこの紅葉しまふなり

限りなく空の続きに小豆干す

奇数とは割りきれぬもの神の留守

小説

児童文学

評論

随筆

詩

短歌

定型俳句

自由律俳句

川柳

初鼓一打響きて仕舞果つ
中区

吉野 民子

古代蓮蕾ふきあく盆の風

新しき道森閑と栗の花
中区

鈴木由紀子

木犀やさ迷ふ魂のありどころ

銀漢や力尽くして赤子泣く

秋の蚊を鬼女の手はつし打ちにけり

観音の紅うつすらと冬はじめ

佐藤 政晴

中区

澤木 幸子

十葉を軒に吊して友逝けり
西区

ほめられて鏡の中の春帽子

看護師の涼しき声に呼ばれけり

少年の一礼潔し青き踏む

曼珠沙華SLの黒迫りくる

薫風や久留米緋のワンピース

右崎 容子

北区

辻村 榮市

稜線のくつきりとして秋気満つ
中区

田水張る何処へ行くも空があり

御嶽を遠巻きにして蕎麦の花

逆上りぐいっと持ち上げ雲の峰

滔滔と四国三郎秋澄めり

風鈴売り風と音色を引きつれて

以上、市民文芸賞受賞者入選句

小
説
児童文学
評
論
随
筆
詩
短
歌
定型俳句
自由律俳句
川
柳

火の灯り華やぎてきし薪能

西区

山本ふさ子

炉開きや黄泉の国より師の声す

浜北区

岩城悦子

来し方の茫茫として四月尽

古蟪蛄斧降りかざす術もなし

日を浴びて玉虫飛ぶを未だ見ず

睡蓮や午後の眠りは赤子にも

国生みの島の金時芋うまし

天も地も白木蓮の咲く中に

蒼天の白木蓮や友来り

西区

清水よ志江

億年を思ひ浮かぶる蜥蜴の眼

中区

伊藤 斉

富士山の柄が揺れるる夏暖簾

千鳥鳴く浜辺に君を呼ぶごとき

蛇衣脱ぎまだその辺かも知れぬ

大綿の初なる白の青きこと

朝焼に戦なき世を折りけり

砂山の秋思は白き風となり

明日のことあす考えよ今年米

南区

中津川久子

柿若葉音のはづれしリコーダー

百年の農継ぐ決意雲の峰

白いもの白く干し上ぐ終戦日

西区

佐久間優子

ゆで卵くるりとむけて寒の朝

番傘の荏油匂うて梅雨に入る

生垣を見え隠れして夏帽子

冬着出す母のにほひの衣裳幽

黙禱は二つの空へ原爆忌

中区

伊藤サト江

ラグビーを真似櫓田に子ら燥ぐ

騒がしきこの星にゐて秋刀魚焼く

残菊や磨ぎ汁に色つくしをり

中区

中村瑞枝

形代の真つ新な白なほ新た

凌霄の近寄り難く捨て難し

八月六日窓全開に黙禱す

七五三巫女も宮司もカメラマン

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

風に休む間のなき風見鶏 南区

渡辺きぬ代

捧げ受く臘梅の花こぼさじと 西区

柴田ミドリ

七種の枯らびても尚香の残り

引き返すこと思ひつつ芒道

しやぼん玉無心に吹けば癒さるる

大根も並べ日曜骨董市

かくれんぼかくれて眺む秋夕焼

枯蓮の水はいつもの空映し

北区

梶村初代

中区

松本賢蔵

どの木にも人の名の札桜咲く

本流に出て大揺れの花筏

ジーンズの解るる裾や秋麗

終戦日骨折の跡七十年

コスモスや女剣士の声通り

百八の松明ともせ盆送り

洋々と刈田干さるる青天井

深秋や昨日にまさる峰の色

いつも聞くあのバリトンは牛蛙

東区

池谷俊枝

黄金虫番ひしままで木を登る

烏瓜の花は天使の髪飾り

初物を頂き今日は鴟日和

中区

伴周子

山立ちの朔旦冬至森を伐る

九条も安保も虚し破れ傘

たそがれどき赤子泣いてる網鬼灯

屏風絵の風神雷神無邪気なり

横笛の余韻のありぬ後の月

天竜区

鈴木利久

まだ青き水害の稲刈りてをり

四阿の辺りの十賊刈られをり

鬼の子や小さき庇の提示板

茗荷の子シフォンの花を持ちたるよ

中区

安立由美子

街角の観音堂の草紅葉

石路の花絹の風呂敷抱へ来ぬ

青田風モデルウォークの白き二羽

西区

池田智子

七十路来ぬ尚秘め事の終戦日

爆音に普天間思ふ月涼し

西区

除夜の鐘谷間の街を流れゆく

池谷和廣

南区

落葉舞ふ後を追ふかにまた一葉

伊藤久子

菜の花や見事に富士と対峙する

夏館大きな石のモニュメント

草陰の青より青き雨蛙

鼯鼠チーム負けて卯の花腐しかな

西区

父在はし多くは言はず花八手

石川 染

東区

日本海の沖より立ちぬ冬の虹

岩崎陽子

花枇杷やあれこれ思ふ一日かな

横走る冬の稲妻沖暗し

石路の花星へひたすら祈りをり

冬努漣遠くに聞いて寝落ちけり

東区

朝市の客を掠めし初燕

伊藤 倭夫

西区

甘酒の湯気を挟んで御慶かな

岩崎 芳子

浴衣着て落研生の初舞台

園丁の帽子に若葉影著し

秋蝶の四羽に囲まる耕運機

葛原の風の重たくあらしめき

咲き満ちて風を育てて百日紅

中区

梅原栄子

茅の家に絵本の集ひ竹の春

煌煌と河口ふくらむ望の潮

南区

大田勝子

囀りの空を転がす大鳥居

寒暁の星の降りたる軒端かな

鶏頭の傾ぐ辻堂華やぎぬ

西区

太田沙知子

大木を一回りして椎拾う

晩秋や布を裂く音のやさしさよ

紺青の機影目で追ふ冬に入る

水滴たし瑞穂の国の青田かな

中区

大村千鶴子

産着より大気を掴む涼新た

遠州の空つ風借り大根干す

東区

岡本久栄

春寒や曾祖父残こし和讃よむ

風光り下校の子らのつつ走る

我が前を急旋回の初燕

中区

小川恵子

黄八丈機織る音の春浅し

秋風に誘はれしか旅鞆

パズル解くなほ冴え冴えと長き夜

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

初詣父に習って小さな手

中区

小楠恵津子

授かりし小春の風の岬かな

南区

金田みき

ぼんぼりを兄が灯して雛祭り

崙山といふ親しさに訪ふ神無月

バス待ちの列に新顔風光る

幽居跡熟柿ぼとりと落ちにけり

西区

刑部末松

中区

金取ミチ子

夕闇の湖沼震はす牛蛙

あの山に今も茂るか夏あざみ

炎昼や鉄路の揺らぐ駅ホーム

冷奴ばかりに箸がゆく夕餉

電飾の馬も駆ける師走かな

春暁や読みかけ本のあけしまゝ

西区

加藤新恵

南区

神谷知恵子

春耕の黒土光る棚田かな

砂踏めば秋の音する万歩計

冴ゆる空はやぶさ二号宇宙へと

秋日和かなの渴筆生き生きと

教会の壁一面に蔦紅葉

櫓田に涌くかのごとく鳥数多

豊漁の続く浜辺や鯛雲

北区

加茂桂一

茶の花の白き五弁や金の芯

綿虫を捕へる子らにうす日射し

中区

川島泰子

泥濘の重き一步に早苗束

夏めくや絵画教室開け放ち

上枝刈る腕に伝いし青しぐれ

西区

川瀬慶子

丁寧に畳む野良着や終戦日

銘仙の赤い着物や一葉忌

深秋や着丈短かき母の衣

子らの打つ点字暦や冬はじめ

中区

倉見藤子

お点前は南部鉄瓶実むらさき

白桔梗はく磁に活けて師の忌日

中区

斉藤三重子

松茸の一瞬の香を惜しみけり

見上ぐれど見下ろせど古都秋の色

夜半の冬糸の通らぬ針見つめ

西区

坂田松枝

濯ぎ物乾せば聞こゆる朝雲雀

諳んずる九九の声かな菖蒲の湯

目高にも個性ありけり餌をやりぬ

秋の夜一本のフルート堂満たす

中区

佐野朋旦

初空に日の丸の旗翻り

西区

新村ふみ子

颯颯と良き人逝けり秋の朝

古日記拾ひ読みする春日かな

灯を消して暫し月見の館とす

笛太鼓浄めて祭はじまりぬ

南区

佐原智洲子

西区

新村 幸

三島忌の見果てぬ夢や冬銀河

手筒持つ裸若衆に火の粉振る

残る世は浮世ばなれの浮寝鳥

老鷺の待てども次の声聞けぬ

神無月睨みさかせる阿修羅像

赤手蟹鉢振りつつ急ぎゆく

中区

白井宜子

東区

鈴木節子

夏燕白昼の街つらぬけり

一望の京都の靄や春深し

遠州の大地たたへて稲の花

木の芽和え語りつきぬ輪島箸

吹奏のタクト大きく夏果つる

団栗を一つ拾って友を待つ

落款のほどよき余白小鳥来る

東区

鈴木千寿

七十年不戦の空に赤トンボ

中区

高橋紘一

首すじにポニーの吐息天高し

秋日和無沙汰を詫びて墓洗う

虎落笛母若かりしわれもまた

爽やかなノーベル賞の笑顔かな

西区

鈴木智子

西区

竹内定八

若芝に紙飛行機の不時着す

境内の蛇の脱殻濡れてをり

父の日や絵文字の並ぶスマホかな

まほろばの沼に群れるし夏茜

灯台や灘の潮受け新松子

大空へ飛んで行きたしはじき豆

北区

曾布川石木

中区

竹田たみ子

病窓の灯を揺らしるる緑樹かな

落葉掃く作務衣の僧の遠会釈

訃を胸に葉桜の径たどりけり

豆撒きの豆翌朝の床に踏む

涼新た銀河の端にひとりゐて

風鈴や程良き音色隣家より

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

沢蟹の大挙横断しばし待つ

西区

竹平和枝

桐の花空家となりし家守る

西区

田中ハツエ

豪快にアオサギ脱糞し翔べり

芍薬の振り返り見る色香かな

黒雲の湧きて一声鷺の鳴く

山里の軒に余さず吊し柿

東区

たけや

東区

田中美保子

天を突くメタセコイアの若葉かな

山あひのボンネットバス木の実落つ

あじさいの色とりどりが人を呼ぶ

歳古りて夜長嫌ひとなりにけり

くちなしの白きを己がこゝろとも

ぜんまいの玩具くるくる秋祭

西区

竹山すず子

西区

田中安夫

風涼し正座崩さぬ写経の子

菩提寺や読経の木霊敗戦忌

逝きし子の祥月命日蚯蚓鳴く

一駅を乗越して遭ふ遠花火

磨かれて石みな丸し秋の川

立冬の夕餉は母と差向ひ

はたた神ごろつと鳴りて慈雨となる

中区

土屋香代子

ほととぎす時折鳴きて空気裂く

炎天や水なき鳥の砂遊び

南区

坪井いち子

陽を溜めて音無く崩る水柱かな

葉牡丹の渦へこぼしぬ愚痴ひとつ

連発の花火夜空を占領す

北区

鶴見佳子

卓袱台や戦後も遠き芋の飯

五月晴良きことあれと靴をはく

細やかな手話の指先風光る

白南風や明治の電車チンと鳴る

中区

寺田久子

水中花あの頃のこと今のこと

忘れたき事もあるなり花茗荷

東区

天竜子

蚯蚓鳴く映画帰りの田んぼ道

爽かにブラックコーヒー呑む漢

自然薯は特別な味母の味

西区

徳増貴子

春嵐森が大きく波打てり

花虻の羽音の唸る昼下り

春燈の灯りし街の活気かな

誰も来ない此の径落葉だけ動く

中区

戸田田鶴子

雲間より日矢の降り来る冬の海

西区

西尾わさ

大寒や一つの石が貌を持つ

打てば寄る鯉が動かす春の水

菜種梅雨指一本でピアノ弾く

新涼の音を掃きゆく竹箒

中区

鳥井美代子

中区

二橋記久

せみしぐれ遠ざかり行く傘二つ

鳶の笛青田の風を存分に

心受け心でつなく暑気見舞

風花のふわりと消ゆるアスファルト

魚はねて大き水輪や今朝の秋

椋鳥むくの巣や軒塞いでも塞いでも

中区

中村弘枝

西区

野嶋 薫子

ムスカリや弛む靴紐しめなおす

ボート部の掛声ぬける初夏の空

葉の筋のまだ口にあるさくら餅

みすずの詩心ゆさぶる夜寒かな

猛暑日のTシャツを脱ぐキシキシと

春隣艶めく少女の村芝居

春風やバケツ持ち合ふ兄弟 東区

能勢亜沙里

三寒の閲覧室のひとりかな 東区

平野道子

草深き虫袋の停留所

帰り来し児の眼に緑あふれしめ

母想ふ時は甘めの葛湯かな

夜想曲鶴の眠りを深くして

中区

浜美乃里

南区

藤田節子

嬰兒のはじける笑顔牡丹咲く

囀といふ福音のありにけり

愛よりも自由選びし古稀の春

曇天のしづしづ降りぬ紫木蓮

高音の千春のテープ聴く晩夏

犇めける味蕾に春をのせにけり

(★松山千春)

中区

林田昭子

中区

藤本幸子

茶文字浮く茶草場の萱茂りをり

待ちぼうけらしき少年秋の雨

尺八の奏者は米寿豊の秋

花嫁に母と呼ばれて煮大根

寒き日の一服の茶にほぐれけり

夏帽子振りて電車に乗る子かな

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

紅梅やいのちは天に捧げたる

南区

堀川千代子

枯るる土手芽生ゆるものありにけり

南区

水川放鮎

愛おしきものよ夜濯ぎの日々も

手袋を糸が擦り切る喧嘩風

実ざくろやだれより優しかりし母

残る蟬短かく鳴きて止みにけり

西区

松本憲資郎

南区

森明子

菰巻や長寿を願ふ松並木

白木蓮戴帽式の決意の眼

ちよい疵の新海苔二枚昼餉かな

鯉跳ねて水面に映る新樹光

しぐるるや木立の周りまだ濡れず

在りし日の兄と来た道彼岸花

西区

松本みつ子

西区

山口久江

夕暮れの虹棒立ちのオホーツク

信号を待つ兎にさくらはらはらと

おにやんま昔のままに庭で会ふ

酸漿草の花の空き地となりけり

金木犀こぼれて井戸の桶にあり

日溜りの老のにぎはひ日脚伸ぶ

路味噌の棧微をめである齢かな

西区

山崎 暁子

木犀や埴輪にとほき火の記憶

春吹雪かもめは風に向かひ立つ

中区

横田 照

水仙は風になびかず揺るるのみ

暮れてなほ菜の花畑あかるみて

冬すだれ窓に下げあり京町家

中区

山田 知明

西区

和久田 雅広

春暁の微かに聞こゆ庭の雨

焼玉のぼんぼん今も沙魚日和

柿若葉主無き家に陽をこぼし

稲刈るや地名となりし長者池

秋めくやワイングラスの向こう側

子猫の眼きちきち追うて一直線

西区

山本 晏規子

西区

和久田 りつ子

アルバムの薄き戦後に卒業す

穴を出づ蟻の律義に学ぶべし

豆撒きの声大にして老ふたり

社会鍋ことりことりと幸の音

蓑虫の糸の長さに躑きをる

臘梅や行方知れずの友想ふ

水鳥の脚まに覗く日和かな

中区

和田有彦

風吹けば棚田も光る稲穂かな

西区

渥美進

一樹にて人引き寄する臥龍桜

手を挙げてランドセルだけ踊りだす

神体は滝に在すと詣でけり

北区

あひる

落葉散る踊る子猫の手の先に

南区

赤堀進

大寒や手のぬくもりを届けたり

音という音ぶつかりて磯残暑

北区

安間あい子

下駄箱の紐靴外に出たがらず

最北端宗谷岬に夏ひかる

見覚えの場所に今年も女郎花

西区

浅井裕子

夜間飛行仲秋の月横切れり

東区

飯尾八重子

木の実時雨くんまの里の二人づれ

人生の最晩年や小正月

來たる日を待つる事あり炎暑かな

大早豪快に泣く初曾孫

東区

飯田裕子

ちんどんのずんどこ節や春の空

筆書きの心の込もった賀状かな

西区

石塚茂雄

啓蟄に地虫顔出し穴の中

中区

伊熊保子

縁側でうちわ手に持ち将棋さす

北区

伊藤アツ子

水仙も狭庭に一つ凜と咲く

梅雨晴れや牧草延びて牛肥ゆる

中区

池谷静子

西区

伊藤しずゑ

三才児忍者を真似し子供の日

ごぼごほと流れの音やちろ鳴く

三才児はじめてつかむ蟬のはね

雲間よりい出つ隠れつ十三夜

中区

石井泰子

中区

伊藤清太郎

編み上げし布草履はく夏至の朝

紅を刷く祇園まつりの村芝居

よきことの起る予感や更衣

岨道も過ぐれば楽し老いの春

小
説
児童文学
評
論
随
筆
詩
短
歌
定型俳句
自由律俳句
川
柳

四万個花抱き育つ野菜王フロッコリ 北区

伊藤美代

今年また幸せ運ぶ軒つばめ 北区

大木たけの

明日という日の無きことの吾亦紅

渡り鳥小枝くわえて波の上

南区

井浪マリエ

南区

太田静子

一輪の白百合凜と夕庭に

美人妻浮びくるよな案山子かな

山寺の長き説法夏座敷

夕暮れの夕顔開く一瞬間

中区

今駒隆次

中区

大屋智代

薄氷を鳴らして渡る幼なき子

紅白の睡蓮咲くや散歩道

砂浜の赤海亀とたわむるる

去年今年喜びの文また拵げ

西区

岩崎良一

中区

岡本蓉子

安保法成立秋の空けはし

紫陽花の色しつとりと雨の中

大吉の神籤は秋の出雲殿

迎え火の煙の中に笑顔見ゆ

紫陽花や乙女が母になりて笑み

中区

小楠達司

寒椿ボタリと落ちて床に咲き

秋風や箆食壺漿たんしこじょうで一人旅

中区

加藤鎮毅

掛け流す菖蒲湯溢るるばかりなり

中区

小野田みさ子

夕日あび十葉の花ただ白し

花の下家族の絆垣間見る

中区

加藤政子

青じその眞白き花をつみにけり

南区

影山ふみ

父の忌やくちなしの香のみちみちて

一台の田植機巡り風清し

浜北区

金子眞美子

おはようと呼びかけてくる吊し柿

中区

勝田洋子

次郎柿皮ごとかじる草の上

急ぐとも私は私カタツムリ

西区

河合秀雄

敬老日百を夢見る心意気

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

春の雨天水桶に輪の生る 中区

川合 泰子

水温む川辺の鯉もはしゃぎいる 中区

北村 友秀

春うらら寄り添い眠る猫二匹

彼岸来て水掛地藏喜びて

中区

川上 とよ

東区

切島 正子

子供より大人の多し体操祭

暁の川面に遊ぶ鴨親子

遠州の大念佛来姉新盆

初蛙水面に波紋広げけり

浜北区

川島 百合子

北区

久野 悦郎

初風炉に自作の茶碗お薄たて

里芋のひとひらの葉に水ひかる

秋暑し祭り太鼓の音聞こゆ

風吹いて忘れないでとラベンダー

東区

河村 あさゑ

中区

畔柳 晴康

雑草といふ名で呼ばれ草生ひぬ

風紋に足跡残す初日の出

一粒が萬倍となり小豆摘む

緑陰の笥は音を伝へけり

牛の茄子心細そに帰るかな
南区

コ
ル
プ
ス

路地裏で飛ばされそうな北風かぜにあう
南区

白
井
忠
宏

青田さんそろそろ別れの季節かな

ひらひらと夜明けの前の花吹雪

軒先の風鈴の音が涼ねとなり
南区

小
百
合

原爆の二都を巡りて暑さ夏
中区

不
知
火

新春に夢を語りて友と沸く

夜更しの裸電球黄金虫

秋惜しむ能楽堂の朽ち木目
北区

清
水
孜
郎

ランドセル少し汚れて二年生
西区

新
村
八
千
代

蟻地獄巣を繕うも「安保法」

カラフルな傘の行列梅雨の朝

柵を門に飾りて福は内
西区

清
水
康
成

国訛ぼろりこぼれて夜半の春
北区

鈴
木
章
子

初風や五月の空の競いあい

赤い羽根回覧板と共に来て

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

二個と二個円な果実さくらんぼ

西区

鈴木きぬえ

風ひとつとらえて涼し鈴の音

西区

鈴木嘉子

我声の目覚めし朝の時雨寒

キャンパスに咲き乱れたる彼岸花

東区

鈴木恵子

西区

平幸子

剪定を黙し手伝ふ一歳児

憂きことの無量無辺や原爆忌

小さき手で植うる花苗秋うらら

一徹に播鉢で播る山の芋

浜北区

鈴木彦次郎

西区

高橋久子

あらたなる頭布かぶりし地藏盆

車椅子押さるる人の涼しさよ

蛸の一声聞けり介護室

日溜りの猫ながたと日脚伸ぶ

北区

鈴木まさ美

南区

高林佑治

いちよう燃ゆ犬連れ歩く夫婦道

遅々として進まぬ読書目借時

今ひとり踏みしめ歩く落ち葉かな

原爆忌平和を倫す地獄の絵

梅一片明日は咲くよと風の云ふ

東区

高林よ志子

枯れ草のきはまる所過疎部落

半丁づつ冷奴食む昼餉かな

浜北区

竹内オリエ

秋蛍胸に染み入るサキソフォン

青き味少し残して豆の飯

西区

高柳とき子

絵馬涼し井伊谷宮の雨上り

中区

竹下勝子

朝食はみそ汁と決め文化の日

待宵や庇寄せ合ふ京暮らし

帰省先孫等が賑わふ夏休み

中区

高山紀恵

筆走る十七文字の春隣

中区

竹田道廣

人逝きてあわれ伝ふる蟬時雨

敗戦日辞書引き裂みてタバコ巻く

草よりも幼蝻螂草のいろ

北区

滝澤幸一

コスモスの一輪なぜか妻のいる

中区

田中貞夫

曼珠沙華頰のまあるい亡き妹

園児らの甲高き声夏の午後

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

霜焼けの耳擦り行くゴミ当番

中区

手塚みよ

赤とんぼ寂しくないか一人旅

南区

利徳春花

思ひ出の密か根付けり杜鵑草

名月や星を残して今は何所

中区

鴫多健

中区

戸田幸良

秋深し断崖絶壁幾度も

青墨で春と言う字が書いてあり

金木犀季節知らせる隣保まで

新茶濃く入れて今日また始め

東区

時久シヅ子

東区

鳥羽山すみゑ

新茶会どちらを見ても笑顔かな

帰省子をふつくら布団で待ちにけり

道ばたに季節を知らす彼岸花

誕生日二人で祝ふ冬至粥

西区

徳田五男

東区

内藤雅子

花びらの積もる大樹の根本まで

陽だまりを探して今日も日が暮れる

清貧のくらしの幸よ懐手

米寿なり新米も一合あれば良い

見上げれば空を彩る大花火

南区

永井眞澄

紅葉も花に劣らぬ人集い

東区

名倉太郎

秋祭り太鼓笛の音人を呼ぶ

猫柳ぎ岸辺で揺れる川面かな

中区

永田恵子

北区

名倉みつゑ

駐車場スギナとたんぽぽ鬩ぎあい

目覚めれば短かき命蝉しぐれ

富士の野に寄せては返すすすき原

鰯雲大漁旗の港町

東区

長浜フミ子

北区

西尾虹之助

読み終える「はだしのゲン」の原爆忌

祭笛そろいて楽し子供連

国産のにんにく植える大き粒

祭笛たかが竹笛音高し

北区

中村 寿

北区

西尾淳子

一文字轍割り行く初氷

堂堂と首の耀く雄鴨かな

御降の舞ひ立つ内に合掌

かいつぶり双眼鏡の外に浮き

訳もなくどんぐり踏めば土の音

中区

西村充雄

木曾三川水満々と梅雨晴間

西区

野中美美子

快晴に稲妻二筋天を裂く

ひつそりと法師蝉鳴く日暮かな

藤の花いにしえ語る人の波

北区

野末法子

鳴袋精いつばいの雨蛙

浜北区

橋本まさや

大広間風をさえぎる夏衣

春セーター胸に金糸の刺繍あり

冬めきて猫のしぐさの鈍さかな

北区

野末初江

極楽の端つこに居て日向ぼこ

中区

長谷川絹代

毛糸編む母のまなざし平和かな

万両の隠れ上手な実のたわわ

早生まれ立ちて吉日札納め

南区

野田眞弓

車イス一列並び花見かな

東区

原田かつゑ

箒持つ手に触れ落ちる銀杏かな

里帰りおせちも変わる世代かな

幼子と見る朝焼けぞ秋あかね

中区

飛 天 女

満月を黙して見あげ平和知る

中区

平 野 旭

S Lの煙新芽を覆いたる

蜘蛛の糸通り抜けたる秋の風

東区

藤 田 八 重 子

鱚雲丹田定め瞑想す

秋落暉その上もなく大きくて

中区

松 本 緑

花吹雪掌にひとひらの重さかな

しあわせに氣づく幸せ萩の風

背な丸め集いし子等の息白し

北区

馬 淵 文 夫

とげとげの間でもがく栗の顔

南区

美 智 子

かたつむり来し道残す軒の下

野牡丹や紫紺の色に魅せられて

中区

宮 本 恵 司

人界はをみな姦し虫の声

自転車の走りすぎるよ蝶の原

南区

八 木 裕 子

町の名と同じ川の名土筆生ふ

思ひがけなき一言やサングラス

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

秋立ちてなみなみ注ぐ熱きお茶

西区

八木若代

柿実り枝一杯の力瘤

中区

山下宏

無為のまま釣瓶落しの今日が暮れ

稲穂垂れ小さき水に魚のゐる

西区

谷野重夫

西区

山下昌代

川根路のSLの旅蟬しぐれ

母の日や思い出多き母子手帳

恋文を持って渡れぬ天の川

雨上り虹のアーチに見とれます

中区

山上アサ子

西区

山下美恵子

足止めてオカリナ聞きぬ春隣

虹の橋渡って行きたい夢の国

残雪の山のふもとの道祖神

どこからか木犀香る日暮れ道

北区

山口英男

東区

山田眞二

他人めく妻の粧ひ小正月

マネキンの西日曝しや空き店舗

打水のやさしき風を貰ひけり

吹かれるる熊野の御前の藤の花

雨あがり知らせるごとく虫が鳴き

中区

山中伸夫

珍らしや池の水面の薄ごおり

西区

横井弥一郎

寒明けて地下茎ことに動きだす

朝焼の色に染まりしケアホーム

西区

和久田しづ江

菜の花や辛せおくる黄色かな

雨上がり一輪二輪と落ち椿

中区

和久田俊文

縁側にひとり佇む宵の月

春の日の夕陽に捕まるかくれんぼ

白檀の香降り籠めし春の雨

中区

荒石由記美

子供の日感じる旨さ大人になり

中区

カナユ一

紅葉映え不動明王の赤い簾

中区

錦織祥山

梅花藻を見詰めて居たり中山道

西区

浜名湖人

笹舟の童子の歓声秋の川

中区

山下静子

九鬼あきゑ

本年度の応募者は二一名。多少減となったが質の高い作品が多く見られ嬉しい限りである。最終的には、次の十句を第六十一集の市民文芸賞に推薦することにした。

・鍵掛かる冬のプールに陽の柱

袴田 吉一

鍵の掛けられたプールに、冬の太陽が柱のように突き刺さっている。まず、この絶景に圧倒された。円筒状の光りの束が見えて来る。俳句の言語空間の広さ大きさとも言えよう。作者はどんな位置に立って見たのだろうか。想像するだけで楽しい一句。

・新蕨を束ねし指の濡れてをり

杉本たつ子

この句から、ある神社での光景が甦ってきた。青々とした新蕨を境内の柵に干して、その匂いの清々しかったこと。掲句は注連縄用の新蕨を準備しているところか。「束ねし指の濡れてをり」が実にリアル。この人の確かな写生の眼を感じる。

・椎の実を拾ひ昭和のよみがへる

宮澤 秀子

「椎」は照葉樹林帯を代表する樹木で、沢山のどんぐりを地上に降らせる。この句、どんぐりを拾った一瞬、幼かった時代のことなどが、甦ってきたのに違いない。「昭和のよみがへる」により、時空の拡がりのある一句となった。

・小鳥来る許せと言へり笑へと言へ

石橋 朝子

これは「二句一章」、取り合わせの句である。「小鳥来る」と下のフレーズが全然異質なものののに、微妙に響きあってることに注目したい。「許せと言へり笑へと言へ」とは何と大胆な。悲劇の世界が喜劇の世界へ展開する。俳諧ここに

あり。

・ゆらゆらと観音堂へ穴まどひ

吉野 民子

秋の蛇が水面を「ゆらゆら」と進んでゆく。身を光らせながら。観音堂を目指しているようだ。心経が聞こえて来たのだろうか。おだやかな安心な世界がそこにはある。

・自然薯の生涯かけし曲りやう

佐藤 政晴

一メートルは優に越す取れ立ての「自然薯」を頂いたことがある。この自然薯も相当立派なものらしい。「生涯かけし曲りやう」には只ただ敬服するのみ。ここがこの句の眼目。佳き出会いに感謝。

・月の客まづは野の花愛でにけり

右崎 容子

月見の宴の光景が広がる。どの客からも感嘆しきりの声がかかる。その一角には、芒・女郎花、吾亦紅・藤袴等の野の花が溢れているではないか。やはり野の花はいい。

・満月の夜は仮面をはづしをく

鈴木由紀子

あまりに美しい「満月の夜」だから仮面を外したともとれる。普段は仮面のある生活をしているのか。憧れているのか。現実の世界が不条理であればあるほどこんな心理も働くのだろう。

・風鈴や百まで生きてなほ童女

澤木 幸子

天真爛漫な女人を想像する。願わくば人は皆こうありたいと思うもの。まことに目出度い一句である。

・絵手紙の色のはみ出す七変化

辻村 榮一

「色のはみ出す」が眼目。勢い余って描かれた七変化が鮮やかに見えて来る。一気に詠むということも大切なこと。

本年度も胸を打たれる作品に出会えたことに感謝である。俳句は短い詩型だが、それを生かして更なる挑戦を期待したい。

自由律俳句

〔市民文芸賞〕

ここだよとはにかみ手招く水引の赤

中区

佐藤悦子

独りごと答のない道をいそぐ

東区

周東利信

下にい下にえのころ草を風が渡っていく

天竜区

伊藤有美

「入選」

東区
百舌の呼ぶ声に誘われ顔を出す三日月
生田基行

上弦鏡水に映え静夜の更けゆく

木枯らしのなか月蒼し急ぐ家路

暗い玄関に眠る冬ざれた月

中区
声立てて笑う事も少ない二人暮し
伊藤千代子

雨遠い日の赤い靴が踊ってる

外灯の明りにボチボチ生きる

夜の静寂に漂う一つの哀しみ

中区
何を拗ねてか秋風鈴の鳴り止まず
藤本ち江子

無人駅のコスモスに見送られ独り旅路へ

スプーンが夕陽に煌く午後のコーヒー

冬至の朝の茶柱に心弾ませ

中区
下駄の音だけが響いて朝靄の温泉街を歩く
伊藤重雄

旅終えて身の丈の独り食安心と云う旨さ

又ぞろ旅への虫が騒いでチラシ抜く朝刊

天竜区

かき氷の音空がたちあがっていく

伊藤 有美

日差し斜めに紅葉は表も赤裏も赤

君逝きし夜を春がより添っている

浜北区

窓と玄関秋の顔している家

木俣とき子

コップきちきち洗い心の汚れ落す

疲れた人生乗せて終電の明るさが行く

中区

私は春風お花とすこうし遊んでいくの

河合 文子

頬染めて通り過ぎた紫陽花の本当のシナリオ

うつむいてた黒いTシャツ秋の風が触れていく

北区

かくれんぼした路地点描の夕焼

鈴木 章子

歩く歩道つづく虹の橋よんでる

ハープの曲は真珠とり海の底のためいき

浜北区

蛍の里が暮れてきた棚田の水音

木俣 史朗

地球儀の一人旅争いもなく日が陰る

旅慣れぬ高層へ都会の夜景窓におく

中区

冬の燈は白く見え白い道一直線孤独

戸田 幸良

曼珠沙華だけ残して寺昏れはじめ

底冷えの膝抱いて観る今宵流れ星一つ

浜北区 外山喜代子

カーナビに廻り道おしえられ咲きほこるカンナ

ふる里旧姓で呼ばれ振り向けば山紅葉

ついてゆけない話の輪にいてつまむ梨一片

中区 中谷則子

白い服に触れて蝶々一瞬にして舞いあがる

外灯の光を映すさざ波にも漂う秋

夜更けの満月くまなく光注いで屋根も眠る

南区 中村淳子

ほたるほたるやわらかな光掌の中に

おはぎ作って食べる家族に平和あり

スーパームーン見上げる空の広さ

東区 宮本卓郎

大空とおく雲ちぎれそれぞれの秋

ウラとオモテの人生じゃメビウスの帯

星降る夜に肩寄せあつて庭のサフラン

南区 中津川久子

夜勤帰りの月がごろ寝してる電柱のてっぺん

花火に起こされた夕日の大あくび

グラスの氷ちさくちいさく恋を畳んでく

東区 飯田邦弘

落日の空燃えて火の粉のごとき赤トンボ

翅キラキラとアキアカネ微風に浮かぶ

宿題の疲れ目が時々金魚鉢泳ぐ

東区

飯田裕子

迎え火も送り火も老一人

夕映え流れの水面に見ている

天竜区

岩本多津子

山の端に陽は落ち束の間迫る闇

吊り橋を渡って夕立が追ってくる

湖西市

石田珠柳

一輪差しの桔梗絵手紙に添えてみる

北区

大道邦夫

江ノ電の先頭車両カーブの先で海光る

徘徊のみ、ずひからびてここに居る

しがみつく草の実はどこかへ遠く旅したい

東区

井手賀代子

久しぶりに約束した友は来ない夕焼けに居る

中区

小笠原靖子

淡々と日が過ぎてかたわらに秋がいる

思い描いた七十五今現実の七十五才吾亦紅

おぼろなる瞳の先の冬銀河に姉るるやも

浜北区

岩城悦子

あざみ凜と立つ赤い枕木のすきま

中区

嘉山春夫

何もない祭りなのよと昔話ポツポツ

マムシ草したくさにぬきんでて霖雨

すすき野をゆく風が唄うよ黒人ブルース
中区 河村かずみ

人の世の儂さ解いているつげの櫛
浜北区 竹内オリエ

実石榴みざくらの弾ける痴情エロス今宵大満月スーパームーン

薄目開けて夜の行方風に聞いている

中区 倉見藤子

中区 戸田田鶴子

月のささやき落葉からから笑う

飛行雲山の頂きまですすき原

蓑虫の半身出して世相観る

何処からか来て香を残し春風のゆく

中区 畔柳晴康

東区 内藤雅子

緑陰の鹿威し音も楽しむお茶の席

初顔合わせのお羽黒トンボに今日とは挨拶

日が落ちて涼しさ呼んでる風鈴かな

ためらいつつ購いし十年日記まだ書けない

中区 鈴木好

中区 錦織祥山

一人旅黄昏の道の蛙の合唱

木片こっばの天使そのまゝの人形がいい

神様と継ること多くなる老の日々

風の音に昔をしのぶ笛太鼓

浜北区

カンナの緋暑中見舞いに尚燃える

橋本まさや

中区

絵日記に花火の歓声描きたい

宮司もと

コスモス畑に思案の風が通り過ぐ

吉野の桜は乙女の寄り合い

中区

戦争以外はもっと平和だったあゝ昭和

浜 美乃里

愛知県新城市

ゆつくりのんびり食べようよ喋ろうよ

石塚自森

鯛雲お地藏さんの肩に赤トンボ

南区

夜道を歩けば虫の先触れ

水川 彰

南区

無音なる落し物には気がつきぬ

太田静子

南区

夕日の逸れとんぼ一匹

こうこうと陣立て直しゆらゆらと雁の群れ

大庭拓郎

中区

夕闇にボアーツと浮かぶ夕顔の花

宮川 淑恵

中区

瓶の中終わった恋とさくら貝

花 信 栖

カラス鳴く乾いた空気震わせて

晩年は自尊好縁で生きてゆく

中区

加藤 鎮毅

羯諦羯諦吼える一基の五輪塔

中区

竹田 道廣

色とりどりの一日夕陽は赤

中区

佐藤 悦子

年賀状書き終えて去年の想いを思う

東区

手塚 全代

友來る話題は専ら互の病自慢

南区

白井 忠宏

ミシンの音も追いかけて師走

中区

寺澤 純

カラオケは女の情を唄い苦い酒

西区

鈴木 あい子

陽暮れ早や今年も歳の瀬手帳買う

中区

鴫 多健

山茶花の花びらのかずは希望のはじまり

東区

周東 利信

雷鳴つてスイカ割れた

東区

長浜 フミ子

週末は山梨にいます 賢治バリの手紙を受く

中区

高鳥 謙三

あれやこれ動き重ねかさねて古稀となる

西区

浜名 湖人

謹賀新年とだけ書いておしまい

北区

原川 泰弘

富士を背に咲き乱れたるは尾花かな

南区

美 智 子

聖夜ことしも独りのグラス傾ける

中区

山内久美子

運動会のこだまして山茶花静かに聞いている

東区

山下 好子

山頭火の道はひとすじ夕焼ける

中区

渡 辺 憲 三

鶴田育久

本年の応募者数は六十四名。昨年より少し増えましたが、内容的には今回の方が低調のように思いました。

予選句として次の二十句を採りました。(○印二次予選句)

○人の世の儂さ解いているつげの櫛
かくれんぼした路地点描の夕焼

地球儀の一人旅争いもなく日が陰る

○下にい下にえのころ草を風が渡っていく

あざみ凜と立つ赤い枕木のすきま

絵日記に花火の歓声描きたい

○類染めて通り過ぎた紫陽花の本当のシナリオ

○独りごと答のない道をいそぐ

旅終えて身の丈の独り食安心と云う旨さ

戦争以外はもつと平和だったあ、昭和

翅キラキラとアキアカネ微風に浮かぶ

百舌の呼ぶ声に誘われ顔を出す三日月

○スプーンが夕陽に煌く午後のコーヒ

○グラスの水ちさくちいさく恋を畳んでく

○吊り橋を渡って夕立が追ってくる

夜更けの満月くまなく光注いで屋根も眠る

○ここだよとはにかみ手招く水引の赤

大空とおく雲ちぎれそれぞれ秋

実石榴の弾ける痴情今宵大満月

○雨遠い日の赤い靴が踊っている

慎重熟慮の結果、次の三句を市民文芸賞に推しました。

ここだよとはにかみ手招く水引の赤

この句の水引は、慶事の品などの包みを結ぶ紐なのか、それともここだよと手招くところから、水引草をさすのかと迷いましたが、やはりこは、祝い事の方をとることにしました。すると、このはにかみは、婚姻事の密事を暗示するもので、解かれる水引の赤と相俟って、とても意味深な美しい表現になります。この様な深読みも又一興、俳句の面白さです。

独りごと答のない道をいそぐ

答のない道とは、考えさせられる問いかけです。上句が独りごとですから、自分の生きることへの茫漠たる想いなのかも知れません。人生は所詮片道切符の一人旅であるのに、何故にいそぐのでしょうか。その答は知る由もありません。

下にい下にえのころ草を風が渡っていく

夏の風が偉そうな顔してえのころ草を下にして渡っています。句材の狗尾草で生きました。つまり犬ころだから面白いのです。特に下にい下にと戯画化した作り方はまさに自由律ならではのものです。作者の愉しんでいる顔の表情まで眼に浮かびます。

次位として四句

吊り橋を渡って夕立が追ってくる

一見変哲もない平凡な写生句のようですが、夕立が細い吊り橋を渡って追ってくるという景に強い緊迫と迫力を感じます。

かくれんぼした路地点描の夕焼

点描の夕焼けで、昔かくれんぼした路地裏の空が印象深く想い出されました。

雨遠い日の赤い靴が踊っている

思い出の色はやはり赤い色。雨に少女の靴が踊っています。グラスの水ちさくちいさく恋を畳んでく
ちさくちいさくのリフレインが利いています。

川柳

〔市民文芸賞〕

堰切つて戦争語る目が赤い

西区

山田とく子

短冊に願う余命の一しづく

東区

堀内まさ江

倒れ咲く小菊花瓶で背を伸ばし

中区

伊熊保子

母の手がおでこで熱を確かめる

中区

伊熊靖子

「入選」

蘇るふる里母の子守唄

中区

浅井常義

階段のひとつひとつに染みる汗

南区

鈴木千代見

温もりに応えて咲かす母子草

無限の風信じて送る母の駅

陽が昇るピエロが探す夢芝居

年金の夢が膨らむ花の種

夢を追い心さまよう風見鶏

私を奮い立たせる赤い靴

ときめきの心を包む影法師

美術館心の襷を埋めにゆく

東区

木村民江

こつこつと時を刻んだ古時計

中区

有本千明

ライバルの生きる力に歩み寄る

しあわせであなたの寝顔眺めてる

絵本読むママのお膝は夢の国

嫉妬する心切り裂く懺悔の日

精一杯生きて父母への恩返し

恋の予感ザワザワと寄せてくる

秋深く心のひだを揺すられる

小説

児童文学

評論

随筆

詩

短歌

定型俳句

自由律俳句

川柳

キャンバスの空へ雲描く風の筆

中区

伊熊靖子

皆勤賞母の弁当子を支え

里帰り心の重荷置いて来る

勝利者の幸運配るハイタッチ

空の蒼窓をすかして眼鏡拭く

中区

戸田田鶴子

八十路でもぎつしり詰る予定表

耐ゆること生きる道なり冬木立

空白の日記をとじる歳の暮

妹の背に百万回のありがとう

中区

高橋博

諍いは時に流して共白髪

戦争に抗う声の渦にいる

老いてなお夢風船に託す明日

方言が脚光浴びて全国区

中区

馬渕征稍

言い過ぎて眠れぬ夜の走馬灯

病身にやけに大きな初日の出

航跡を追って未来に夢を乗せ

一列に向日葵咲きて通学路

中区

伊熊保子

血圧を計って今日の始めかな

中区

岡本蓉子

ビルの窓鏡の如く反射して

曾孫^{ひこ}も居て楽しい食事四世代

芽を出した野菜を虫に食べられる
野菊咲き亡き妹のことよみがえる

湖西市

石田珠柳

中区

畔柳晴康

溜息で酸欠気味のお詫び状

褒められて歩幅広がる老いの足

歳忘れ今日もやるぞと腕まくる
急ぐ程路線のバスは遅れ来る

拝啓で始まる祖母の走り書き

躓いた小石に明日を教えられ

南区

大庭拓郎

中区

小島松太

休肝日なんだかんだとコップ酒

農に生きた大きな義母の手にふれる

洗車して磨いて寝れば鳥の糞

やさしさに本心をまた言いそびれ

花植えて水蒔き寝れば土砂降りに

凧の海あきらめない恋かくす

中区

自販機にお礼を言われふり返り

斉藤三重子

杖ほどに頼る子はなき八十路坂

切り捨てた積りの過去に縛られる

東区

竹山恵一郎

足腰を庇い八十路の坂を行く

迷惑な噂がまいていく火種

東区

鈴木すみ子

エンピツをなめると母の字に出合う

小さな傘役に立たぬが踊ってる

北区

田中恵子

構えずに生きて候父の墓

ひと言が小さな瞳輝かせ

見えますか四季歳歳の風の彩

つい本音吐いてしまった夢の中

浜北区

竹内オリエ

上棟式空へ舞う餅拾いけり

褒め言葉葉になって伸びてゆく

中区

鶴見芙佐子

世の中の石橋叩いて強く生き

占いは相性悪い人と添う

鏡台はいつも美人を演じさせ

お隣と笑いがずれる落語会

断捨離にひとつとつとつとく恋の種

南区

中津川久子

耕して旨い大根届けたい

東区

馬塚五朗

掌に昨日のヒミツ来て踊る

だんまりの夫婦肅々新茶汲む

親切を受けて心の窓開く

彼女去りうつろな心深いきず

中区

中村禎次

マイナンバー付けられ名前無き思ひ

東区

宮澤秀子

不覚にも揺れる心を見すかされ

胸の中のぞかれたかなあの事で

風の方きたしかめてから歩き出す
まだ出来ると気持ちばかりが先に行く

中区

沼田壽美

西区

山田とく子

カマキリの子も色をかえ生きる知恵

堂々と甘えず生きる白い杖

不用意な言葉に酔いが覚めていく
転んでもおまけ一つを持ち帰る

喜びが漂う空に天守閣

七十年平和を抱いて折り返す

浜北区

天井と思ひ出語る夜長かな

金子眞美子

西区

長旅の足の疲れは心地よし

高柳龍夫

奇抜なる衣裳華やか披露宴

薔薇色の夢は叶わず今無職

東区

遊ばせた釦一つが氣にかかる

河村 幸

中区

尺の玉ドーンと響く腹の底

高山紀恵

正直に生きて最後に神の声

言霊を信じて明日も前を向く
ことだま

西区

はにかんで席譲る子の愛らしさ

佐野つとめ

北区

ああ言えばこう言う妻と五十年

滝澤幸一

川の字に並んで眠る子の平和

詐欺犯も年金を待つ十五日

浜北区

一段と暑さ膨らむ蟬時雨

鈴木 覚

西区

勝つ者が正義となつてゆく歴史

竹平和枝

稲実る黄金の波に浮かぶ笑み

朝日浴び瞬時に解けてゆく魔法

いい夢を見てるか妻のいい寝息

西区

為永義郎

鉛筆を削って呉れたお下げ髪

中区

戸塚忠道

メルヘンへ子らをいざなう読み聞かせ

おかずより菓の種類多くなり

南区

寺田喜代子

中区

仲川昌一

北風と戦う孫が涙目に

色欲は妄想に閉じ込めておく

ゴミ置場人とカラスの知恵比べ

孫の手に引かれて登る八十路坂

中区

寺田久子

東区

長浜フミ子

補助器具のある世の中で今日を生き

車椅子押しつつ歌う赤とんぼ

自分史に花丸つけて閉ざしたい

ガラス掃き心も晴れて笑顔でる

中区

戸田幸良

東区

中村雅俊

受診して待つ忍耐を教はりぬ

ありがとう感謝の中にある温み

物忘れ二人で笑う小春日和

一歩前踏み出し見える別世界

蜃気楼愛と言う名が揺れ動き

中区

平野 旭

桜宴我れ感せずと犬眠る

東区

堀内まさ江

星の下路上ライブのジャズに酔う

夕焼けに茜の鷺が群れてゆく

中区

馬淵よし子

切り捨てたつもりの過去と夢で会い

遠い日の景色小川に魚棲む

中区

宮崎 和子

雨だれが眠れぬ夜に添い寝する

守備範囲嫁と姑で線を引き

無花果の熟れてもぎ取り蟻がいる

西区

渥美 進

止めてくれ利殖の勧め金が無い

中区

荒沢 博

袱台が有れば団欒出来る筈

東区

飯田 裕子

青鷺の一人舞台の用水路

浜北区

岩城 悦子

他人は人割り切ることで自画自賛

北区

鵜原 伸代

老体に励みの言葉どっこいしょ

南区

太田 静子

定年が息子の顔を髭面に
天竜区

太田初恵

土器見つめ時間が止まる蜷塚
北区

加藤典男

こたつより出られぬ八十路窓の雪
天竜区

恩田利子

カレンダー月日の早さめぐりけり
中区

金取ミチ子

息子から電話がきても多分サギ
東区

影山京一

なけなしのヤル気あつめて動き出す
東区

河島いずみ

眼鏡かけ眼鏡を探すおじいちゃん
中区

花信栖

かくれんぼここに居ると指さす児
中区

北村友秀

怒っても許しあつてる親子です
中区

加藤貴代美

逢いたくて胸のもやもやくすぐる夜
西区

恭子

家建てて蔵書の整理四苦八苦
中区

加藤鎮毅

種播きを終えて平和を噛みしめる
南区

久保静子

孫の口寡黙になつて離れ行く

東区

柴田良治

画仙紙に音の記憶をたらしこむ

中区

竹田道廣

愚痴一つ言わぬが花の老夫婦

南区

白井忠宏

ひたすらに花に誘われ万歩計

北区

辻村榮市

ハンドルを切り過ぎてから向い風

西区

鈴木均

高く鳴き冬の雲雀が春を待つ

中区

土屋香代子

旬のモノ生のままがいい美味しんぼ

中区

高橋絃一

独り居の頼る目覚まし旅支度

中区

手塚美誉

同じこと嫁に言われりや素直なり

中区

高山功

親の言葉還暦過ぎて身に浸みる

中区

鴫多健

混み合うを承知で出向く行楽地

西区

竹川美智子

憩いの場噂話の集積場

東区

内藤雅子

夏が去りピーチクリーンボランティア 南区 永井眞澄
無駄だとは知って青春追っ掛ける 中区 山下 宏

肌きれい言われ化粧に自信もつ 中区 中村弘枝
同窓会友の顔見て老い悟り 中区 和久田俊文

旬秋刀魚夕餉笑顔で舌鼓み 東区 名倉太郎

そぞろ寒肩をすぼめて寒暖計 北区 野末法子

コスモスのようにゆらゆら人生を 浜北区 橋本まさや

黄金色田に立つ案山子誇らしげ 中区 浜 美乃里

川柳選評

今田久帆

今年には昨年より応募者が一名増え、八九名の四三二句の中から熟の心を捉えた二十句を市民文芸賞予選句として候補に挙げ、熟考した上で、四句を市民文芸賞とさせていただきました。

川柳は余分なものを削ぎ落とし、省略したり、省略したりして五七五の一七音字に凝縮すること、もつと広い世界を描き出します。ただ、省略し過ぎると自分しか理解できない独り善がりの句になってしまいます。どこまで削って自分の世界を理解し、共感してもらえるかが一つの勝負になります。一方たつた一七音字の世界ですので、あれもこれもと詰め込み過ぎると思いが余って何を主題にしているのか相手に伝わりませんので、シンプルに捉えて、それを深く表現してみましよう。本質を捉えたところが川柳の三要素の一つである穿ちにつながり、なる程と思わせる句になっていきます。まずは五七五のリズムに乗せて音読することで、その句が響き心に突き刺さる句かわかります。句ができたら声に出して読んでみましょう。良い句はすつと心に染みてきます。

市民文芸賞予選句

夢を追い心さまよう風見鶏

褒められて歩幅広がる老いの足

ひと言が小さな瞳輝かせ

車椅子押しつつ歌う赤とんぼ

不用意に持って行かれた独り言

ハンドルを切り過ぎてから向い風

まだ出来ると気持ちばかりが先に行く

階段のひとつひとつに染みる汗
掌に昨日のヒミツ来て踊る

雨だれが眠れぬ夜に添い寝する
航跡を追って未来に夢を乗せ

絵本読むママのお膝は夢の国
杖ほどに頼る子はなき八十路坂

戦争に抗う声の渦にいる
切り捨てたつもりの過去と夢で会い

恋の子感ザワザワと寄せてくる
市民文芸賞

堰切って戦争語る目が赤い

戦後七十年、戦争へ荷担したという思いや、戦友の死や非人間的で壮絶な体験をしてきたことから逃れようと、これらを心に封印してきたが、戦争の狂気を今、後世に伝えようと、その実体験をつぶさに語り始めた。

短冊に願う余命のししずく

年齢とともに体のいろいろな所に不具合が生じ、通院する日が増えてきただけに、ただ健康でつつがなく生活できることを願い、感謝しながら一日を送っている。

倒れ咲く小菊花瓶で背を伸ばし

強風に煽られたり、動物に踏みつけられていた小菊ではあるが、今は家の花瓶で背を伸ばし誇らしげに家を飾っている。同じ小菊でも姿勢を変えるだけで印象が大きく違ってくる。

母の手がおでこで熱を確かめる

子どもは体が小さいだけに、風邪を引いて熱でも出たりすると、あつという間に高温になる。母親は子どもを心配して事あるごとに子どものおでこに手を置いて注意を払っている。

浜松市芸術祭

『浜松市民文芸』 第62集作品募集要項

一 趣 旨

市民の文芸活動の向上と普及を図るため、創作された文芸作品(未発表)を募集して、「浜松市民文芸」第62集を編集・発行します。

二 発 行

浜松市

三 編 集

公益財団法人浜松市文化振興財団 浜松文芸館

四 応募資格

浜松市内に在住・在勤・在学されている人(ただし、中学生以下は除く)

五 募集部門及び応募原稿

部 門	枚数等(一人)	部 門	枚数等(一人)
小説(戯曲を含む)	50枚以内(一編)	児童文学	30枚以内(一編)
評論	25枚以内(一編)	随筆	7枚以内(一編)
詩(漢詩を除く)	50行以内(一編)	短歌	5首以内
定型俳句	5句以内	自由律俳句	5句以内
川柳	5句以内		

※ 原稿用紙はB4判(四〇〇字詰め、縦書き)を使用してください。

※ ワープロ・パソコン原稿(二〇字×二〇行・縦書き)A4判でも結構です。

六 選 者 七 募集期間

選者の氏名は、平成二十八年七月配布(予定)の「浜松市民文芸」第62集の作品募集要項に記載します。
平成二十八年九月一日(木)から十一月二十一日(月)まで。(必着)

八 応募上の注意

- ① 応募作品は、本人の創作で**未発表**のものに限ります。他のコンクール及び同人誌・結社等へ投稿した作品は応募できません。
 - ② 部門ごとに、規定の**応募票(コピー可)**を必ず添付してください。応募票付き募集要項は、浜松文芸館、浜松市文化振興財団、市役所文化政策課、市内の協働センター・図書館等の公共施設で入手できます。浜松文芸館ホームページからも印刷できます。
 - ③ 応募原稿の書き方については、募集要項の「応募原稿の書き方」をご覧ください。
 - ④ 応募時に、選考結果通知のための**返信用の定形封筒に自分の住所・氏名を書き、82円切手を貼って**、作品に添えて出してください。
 - ⑤ 難読の語、特殊な語、地名・人名などの固有名詞、歴史的な事柄などにはふりがなを付けてください。
 - ⑥ 応募原稿は必ず**清書したものを提出**してください。
 - ⑦ 作品掲載にあたって、清書原稿を活字にします。文字遣い・句読点・ルビ・符号など表記に関わることについては、「浜松市民文芸」として一部統一させていただくことがあります。
 - ⑧ 右記の規定や注意に反する作品・判読しにくい作品は、失格になることがあります。
 - ⑨ 応募原稿は、返却いたしません。(必要な方は事前にコピーをおとり願います)
- 選考結果は、応募時に提出された返信用封筒で平成二十九年二月初旬までにお知らせします。
- 市民文芸賞及び入選の作品は、平成二十九年三月発行予定の第62集に掲載いたします。
- 市民文芸賞の方には、平成二十九年三月の表彰式で賞状と記念品を贈ります。
- 市民文芸賞及び入選の方には、「浜松市民文芸」第62集を一部贈呈いたします。
- 購入される場合は、一部五〇〇円です。

九 発表

十 表彰

十一 その他

〈提出及びお問い合わせ先〉

浜松文芸館

〒四三〇一〇九一六

浜松市中区早馬町二一

クリエイト浜松内 ☎〇五三一四五三一三九三三

「浜松市民文芸」第62 集応募票

(短歌・定型俳句の場合は、部門欄の《旧かな・新かな》のいずれかに◎を)

部門	小説・児童文学・評論・随筆・詩・短歌・定型俳句《旧かな・新かな》・自由律俳句・川柳	小説・児童文学・評論・随筆・詩を投稿される方は記入してください 題名は、原稿用紙1枚目の右欄外にも、同じように記入してください	原稿枚数 (ページ数)	枚
	(部門に1箇所○をお付けください)			
ふりがな				
氏名		年齢	歳	男・女
ふりがな		(平成28年11月21日現在)		
発表名 ペンネーム		名称 所在地		
住所	〒	電話番号		
文芸館使用欄	受付月日	受付番号		

編集後記

今年も多くのの方々のお熱意に支えられ、「浜松市民文芸」第六十一集が発刊の運びに至りましたことをまずもってお礼申し上げます。

浜松文芸館の展示室前に、昭和三十一年発行の「浜松市民文芸」第一集から、昨年発行した第六十集までを展示しています。表紙を眺めるだけでも、浜松市民文芸の歴史とその重みを感じることができます。

さて、今回投稿いただいた作品総数は、二、三七六点、投稿者数は延べ五五五人でした。自由律俳句、川柳への投稿は少し増えていますが、全体的には、投稿者数・作品数ともに昨年を若干下回る数字でした。また、投稿者の年齢は、最も若い投稿者が十五歳、最高齢は九十九歳でした。ご高齢の方々の投稿数の多さと、内容の充実ぶりに頭が下がります。

今年度の特徴として、長年投稿を続けてくださっている方が新しいジャンルに挑戦をされたこと、複数のジャンルに応募された方が多く見られたことが挙げられます。表現方法を工夫しながら、自分の思いを様々な形で発表することで、「表現することの楽しさ」を味わうことができる「文

芸」のもつ楽しさ、素晴らしさを編集作業の中で改めて感じました。

今後ともこの「浜松市民文芸」が、市民の皆様のお品発表の場として活用され、充実・発展していくことを願っております。

最後に、「浜松市民文芸」の発行にあたりまして、投稿者・選者・関係機関の皆様方の御理解、御協力に厚くお礼申し上げます。

浜松文芸館 館長 溝口 玄

浜松市民文芸 第61集

平成二十八年三月十九日 発行

発行 浜松市

編集 (公財)浜松市文化振興財団

浜松文芸館

〒四三〇一〇九一六

浜松市中区早馬町二一

☎〇五三一四五三―三九三三

印刷 杉森印刷株式会社



浜松市楽器博物館



浜松市楽器博物館は、平成7年に開館した日本唯一の公立楽器博物館です。世界の楽器1300点を常時展示し、楽器をみる・ヘッドフォンで音をきく・体験ルームで楽器にふれるという、子供も大人も楽しめる博物館です。長年の活動に対して、平成26年度には国際的権威のある小泉文夫音楽賞を受賞し、名実ともに世界の博物館になりました。毎日行っているギャラリートークは人気です。また、レクチャーコンサートでは、素晴らしい演奏を聴いていただけます。現在、音響・映像機器の新設工事をしており、4月からは展示室情報からの音声や大型画面による映像、端末モニタによる楽器の紹介などを楽しんでいただけるようになります。

お知らせ - 入館料が改訂されます -

条例改正により、平成28年4月1日より入館料が下記のとおり改訂されます。

入館料 Admission Fee	個人 Individual	団体 (20名以上) Group(Over 20)	団体 (80名以上) Group(Over 80)
大人 (大学生以上) Adults	800 円	640 円	480 円
中人 (高校生) Students (Senior High School)	400 円	320 円	240 円
中学生以下、70歳以上、障害者 Elementary and Junior high school students, Persons over 70 years old, Disabled persons	無料 Free		

- 開館 9:30 ~ 17:00
- 休館 毎月第2・4水曜日 (祝日の場合は翌日、8月は無休)、12/29 ~ 1/3、臨時休館日
- 〒430-7790 浜松市中区中央 3-9-1
- TEL 053-451-1128
- URL <http://www.gakkihaku.jp>